女學世界

第二巻第十號

口繪

- 避暑（武内桂舟）
- 誕生（泰西名画）
- 日光陽明門
- 名古屋城
- 泰西風景
- 濱田港の全景
- 扇城女學校
- 錫蘭島の漁舟
- 支那風俗
- 北海道風景
- 其他




東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局 特五二五、一二一七 一八六〇、三三三三
大阪電話東 特四七三 一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休息室をも取設け候間ゆる〱御遊覧奉願上
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

女學世界第貳卷第十號目次



二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり
登録商標
本品縮圖
12
Nihachi Water.
中瓶一本拾五錢
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舖（電話特浪花九二三）長瀨富郎

避暑



小川一眞製

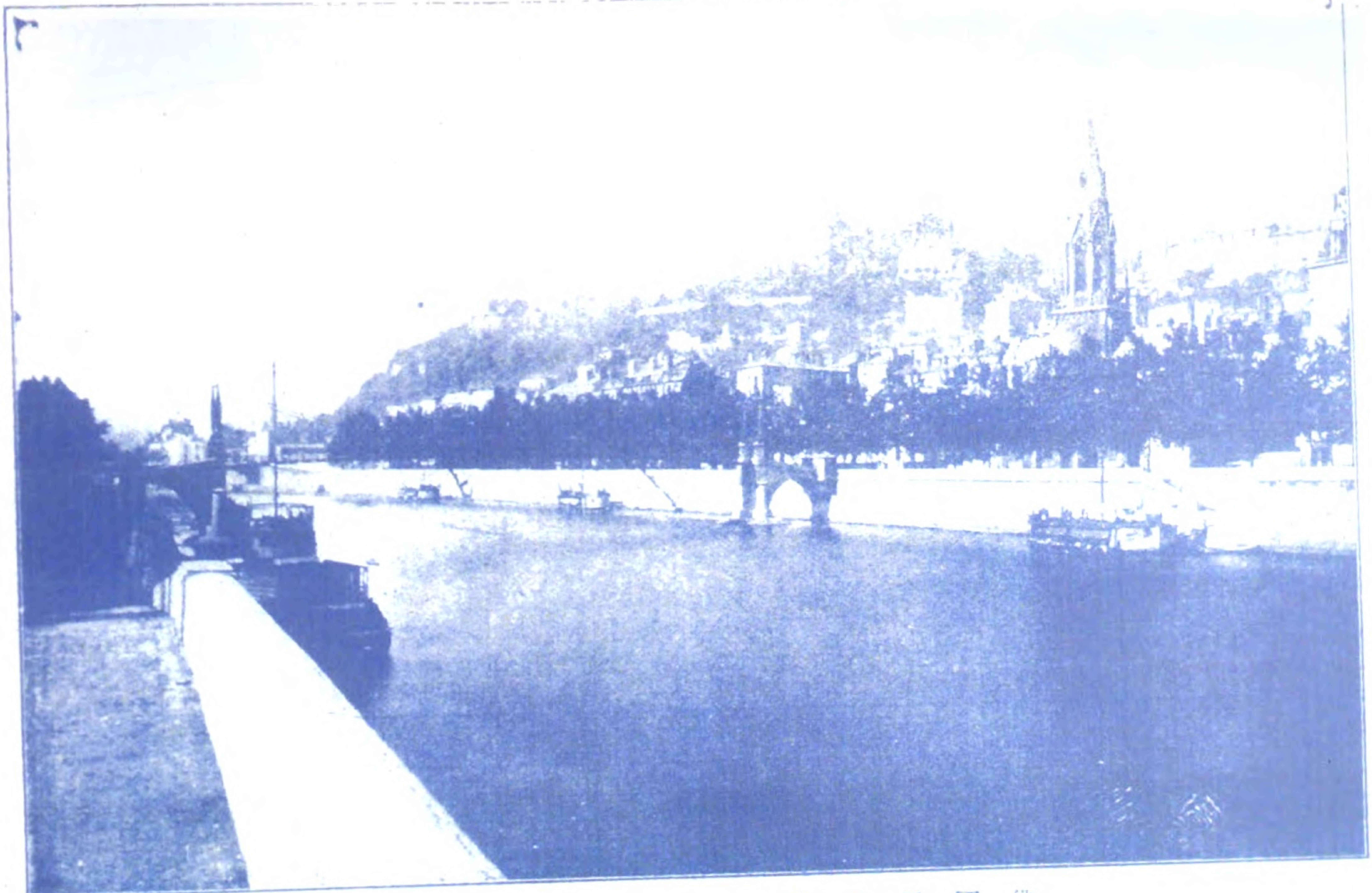
（武内桂舟氏筆）

泰西名畫



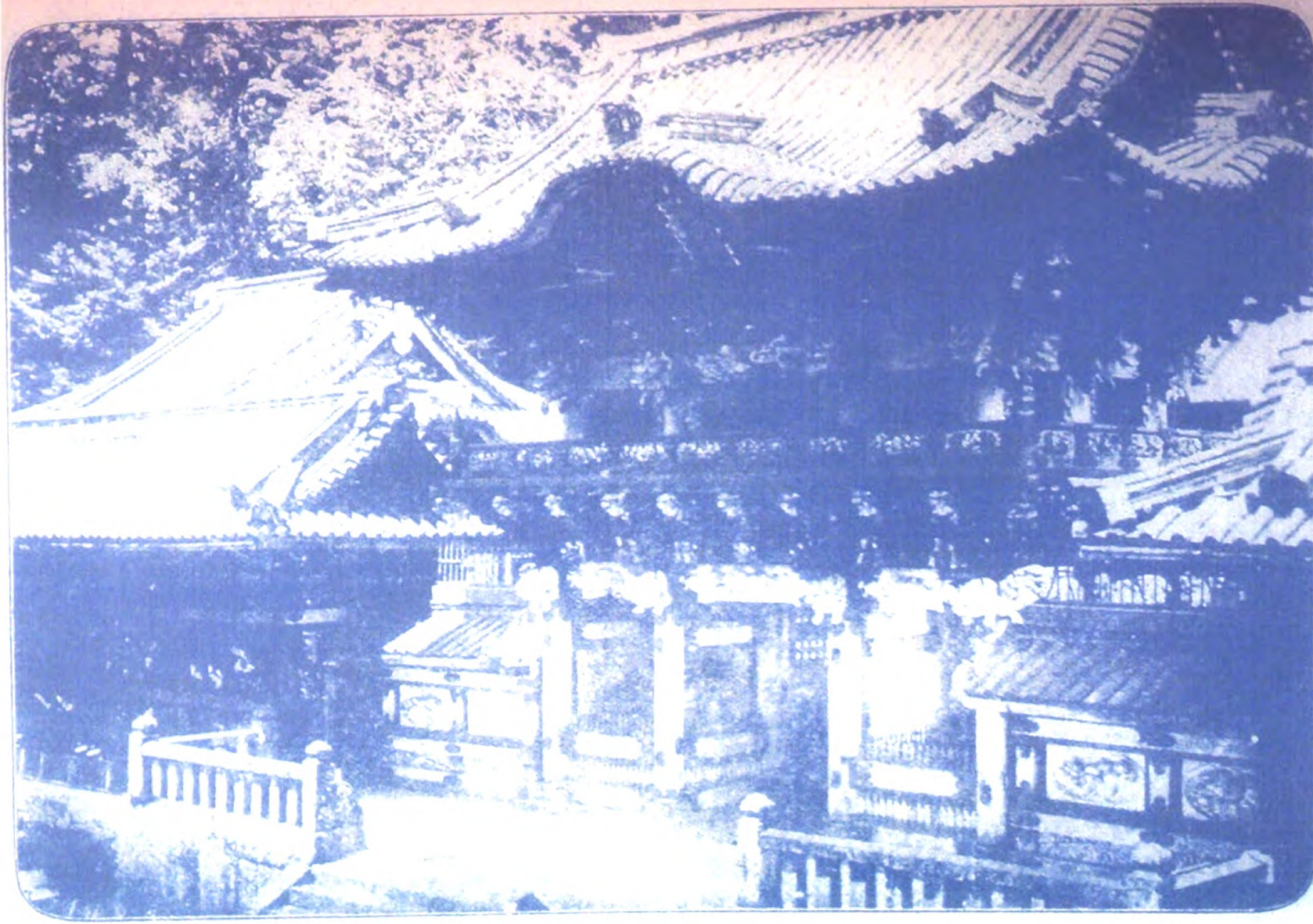
（チ、アン畫伯筆）

泰西風景



佛國里昂府シヤンヂヨル寺院

日光陽明門



（記事参照）

日本鐵道株式會社編纂

日本鐵道線路案内記

（近刊）

全壹册洋裝
並製四六版
紙數四百頁
正價郵稅未定

寫眞

●甲子温泉●甲子大熊女瀧●小山思川亭●伊香保温泉及木暮武太夫氏邸●龍崎の瀧●白川の南湖●福島全景●清戸濱金華山公園●雨引観音仁王門●水戸公園の梅林●盛岡公園招魂社●鮫港全景●笠間桃下稲荷●青根温泉●霞浦土浦の景●土浦眞鍋公園●鎌先温泉●岩切青麻神社●材木巖●日光陽明門●兩議院●足利學校●其他各地絶勝古蹟の寫眞數十頁何れも活躍として見る者をして其の境にわるの思あらしむ

一區線●自上野至高崎
二區線●自大宮至白河
三區線●自白河至仙臺
四區線●自仙臺至盛岡
五區線●自盛岡至青森

山手線●自品川至赤羽
海岸線●自田端至岩沼
海岸線●自友部至小山
日光線●自宇都宮至日光
兩毛線●自小山（前橋ヲ經由シテ一區線ニ接續ス）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の一）

共立女子職業學校教員　井上善兵衛述

割烹科教授用　惣菜三百種

本書は著者が共立女子職業學校割烹科に於て傳授したる實習筆記より最も適切なるもの三百三十九種を選び講習及び日用の食料を作る便に供せんとて編述せられたるものなり而して家庭日用の總菜を主とし取合又は献立の事に及ぼす又魚類少なき地方に於ても其便を多からしめん爲に野菜、豆腐、玉子等を特に多く記述せられたり著者の實驗に據れば本書に收むる所を以て畧々一年間日々の講習に充つるを得べく又家庭日用の總菜も亦之に依りて器用に調理するを得べしといふ學校にも家庭にも必讀を要すべき珍書なり

全壹册　定價金四拾五錢　郵税金六錢

發行所

東京市京橋區銀座壹丁目二十一番地　大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番地　大日本圖書株式會社支社

我國青年大團結

世十　毎號　皇太子殿下　上覽ヲ賜

總裁二條公爵　編輯長中村文學士

議長本多男爵　會務長篠田法學士

青年議會

議員七萬餘人支部百九十ヶ所七月十日第五期一號發行一す入會金十錢會費一ヶ月九錢六ヶ月五拾送●見本郵券十發●規則書進呈

東京神田千代田町　電話本局二五七一　青年議會

萬籟

毎月一回定期發行

一部金參錢

壬寅第七號

要目

「萬籟」「秋水」合同の辭（兩代表者）戀愛原論（活水生）無意味の生活（笑山生）萬籟颯々は湘楓生及穫村生の局人例の寸鐵人を殺すの概あり其他詩歌俳句及寄書に從て材料豊富にして讀者を悦ばしむ

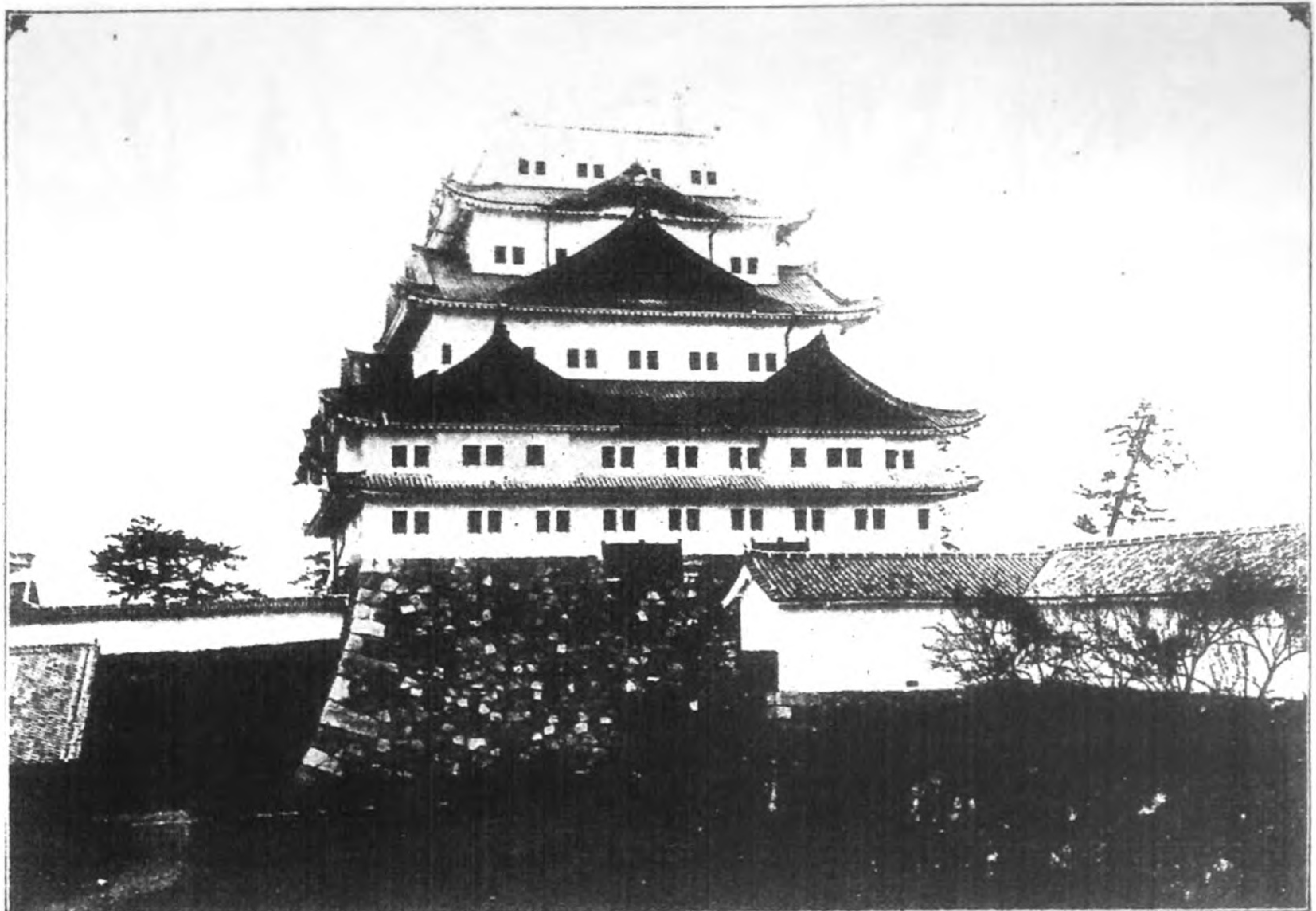
本誌は文壇の社會黨也

本誌は文壇の虛無黨也

發行所　芝區今入町十六番地　萬籟社

（甲の三）

名古屋城



（記事參照）



中津扇城女學校卒業生



佛國ミユーズ河の大鉄橋



石見濱田港

明治法律學校長 岸本辰雄先生序文
リサンシエー、アン、ドロワ－東京帝國大學法科大學教授五大法律學校刑法講師、法學博士 岡田朝太郎先生校閱
明法學士 山口慶一君編纂

（近刊）

新舊對照 刑法蒐論

總則之部
全壹冊洋裝並製 紙數千頁
正價郵稅金共未定

刑法改正案第十五議會に提出せられてより端なく世論の沸騰を招き賛否騒然二期の議會を經て未だ決せず此時に當り新舊二案を比較し現行刑法との利害得失を參照して立法の精神を明にするは目下法曹社會の急務たらずんば非らず而して其是非得喪を論ぜんと欲せば傍ら先輩大家の學說を對照して以て法理の存する處を闡明せざる可からず然りと雖も刑法に關する著書少からざるのみならず多くは浩瀚にして一々渉獵するも亦容易の業にあらず

本書は編者が玆に見る處ありて多年研學の餘暇刑法上主要の問題に付き目下法曹界に參考資料として最も多く用ひらるゝ所の我國刑法學者の意見を或は著書或は講義錄或は大學等筆記に附りて蒐め第一第二の改正案と現行刑法とを對照して其理由を擧げ各條の下亦大審院判決例を插入して其適用を示したれば恰も各大家の一室に會して談論討議せらるゝの感ありて而して特に我國斯學界の泰斗たる岡田法學博士の校閱を經たるものなれば普く講法家研讃の好資料たるのみならず高等文官判檢事辨護士等の試驗に應ぜんとする者の爲めには金科玉條實に無比の一大良書と謂ふべき也

博文館編輯局編纂 改正增補 帝國六法全書（第十一版） 全一冊洋裝上製紙數五百頁 正價金九拾錢郵稅金十四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

筆戰之員友

秀才文壇

毎月一回十日發行

●毎號名家の雄篇と青年文士の奮鬪見るべきもの多し

●毎號寫眞口繪數葉入

定價 一冊拾錢六冊前金五拾七錢外に郵送料一冊毎錢宛（郵券代用必一割增）

東京小石川區指ケ谷町百卅三

發行所 文光堂

賣捌 東京堂外全國書店

FLASHES FROM THE FAREAST

BY PROF HOWARD SWAN OF THE TOKYO HIGHER COMMERCIAL COLLEGE.

東京高等商業學校雇教師 ハワード、スワン氏著（全部二冊 下卷續刊）

英文 極東の光

卷之一 洋裝上製美本 正價五十五錢 郵稅金六錢

●第一章 英國より米國に至る

●第二章 加奈陀を經て

●第三章 ロッキー山を論へて

●第四章 ブリチシコロンビヤ

●第五章 太平洋橫斷

●第六章 極東問題

●第七章 日本に於ける初感

本書は著者が昨秋始めて渡來せし時の著作にして日本の現狀及び氏が初度の渡來に付き得ふの才筆を揮て叙述せられたるものなり其倫敦より加奈陀を經て横濱に至る迄の紀行は周匝詳密殊に大英國版圖中最も日本に近邇せる英領コロンビヤの現狀に關し所見を述べ進で將來太平洋に於て主權を握るものは果して誰ぞやてふ問題を論じて之が解答を試み特に日本に關する其所感は最も快活に忌憚なく之を指摘して外人の眼に初めて映ずる所の日本の狀態を有の儘に記述せるは本書特色也且**日本學生**の爲めに力めて日用必須の俗語諺語等をも用ひたれば英語修學上亦有益なり英語を解する諸君は必ず一本を購讀せらるべし

發兌元 東京本町 博文館

（乙の二）

（乙の三）

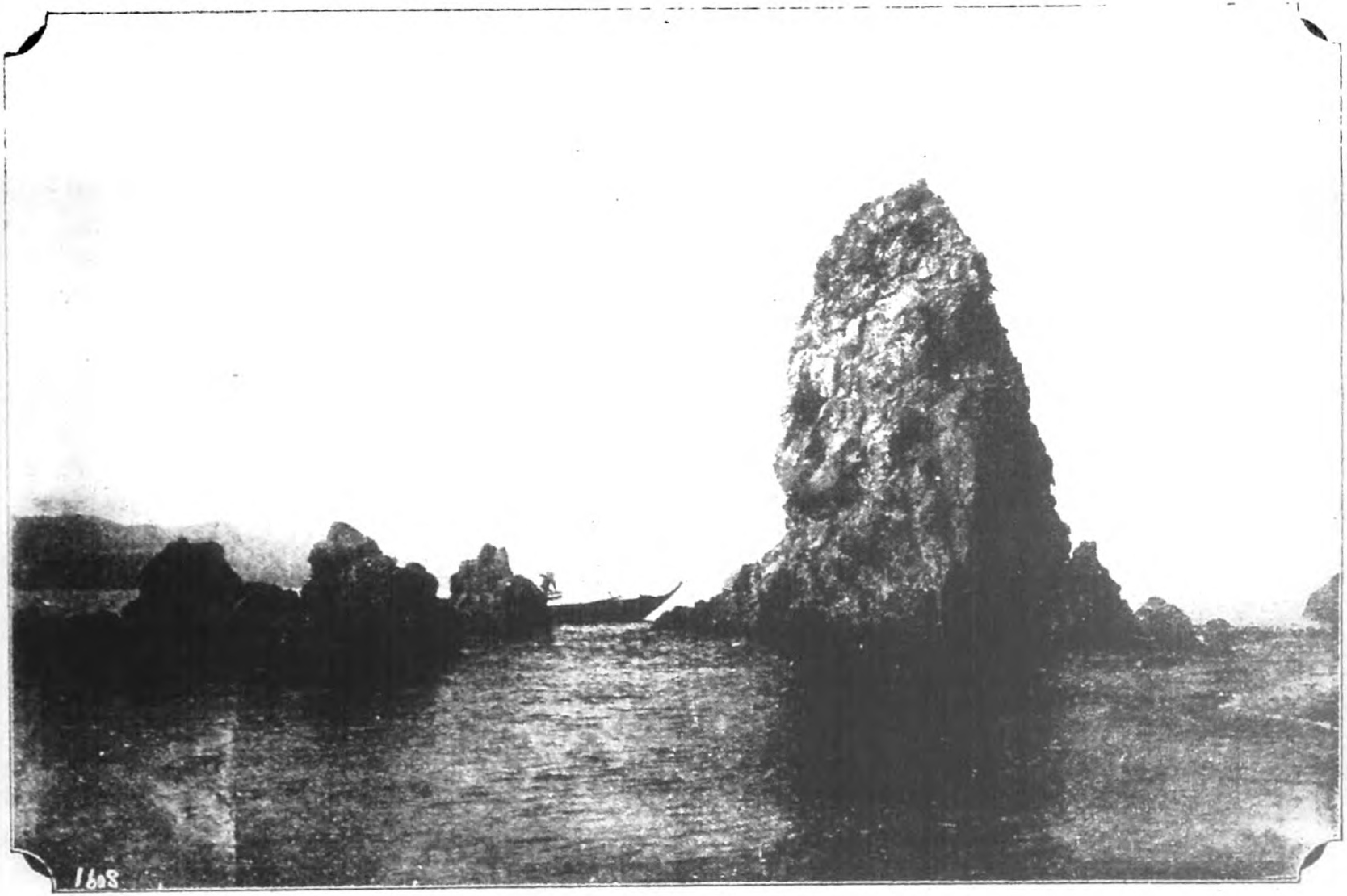
乙の四

印度風景



錫蘭シロン島漁村

北海風景



日高國襟裳岬頭烏帽子岩

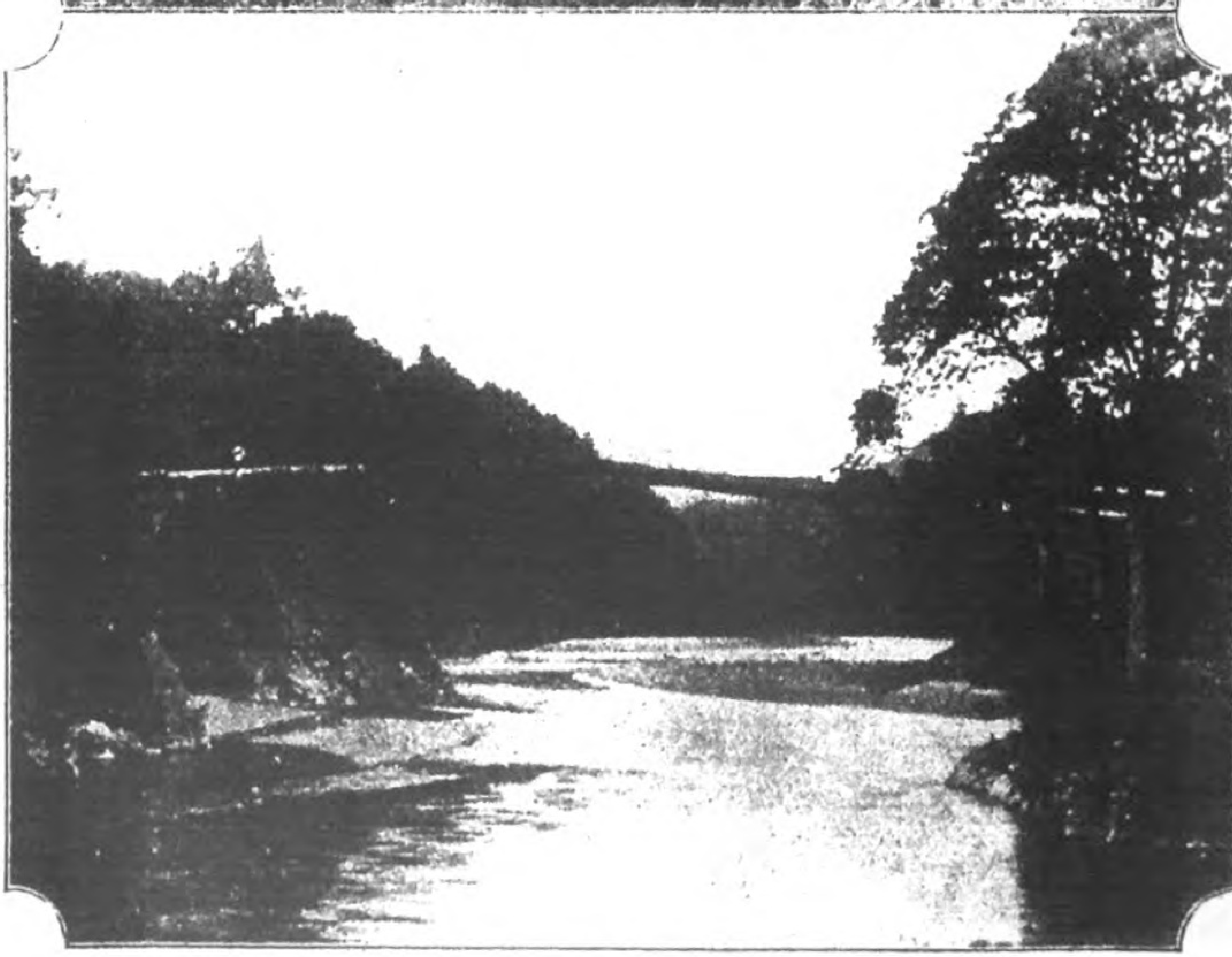
支那風俗一斑



（阿片の害記事參照）

陸前氣仙郡高田町海岸





武州玉川上流萬年橋

文學士久保天隨君述　四書

四書新釋　大學

全壹冊和裝

先秦時代の聖經賢傳古今の註疏紛々雜出その多きに堪へざるは何故ぞ中外學者の短見なるや絕て當時の社會狀態を詳にせず今を以て古を律し遂に原始の意義を失ふを悟らず私見を逞ふし新說を出さんを力む而も馬を指して鹿となすの愚に陷りしを知らざるのみ解義箋釋之を一に歸するは學者の重任にして現時の急務なり天隨氏之を以て世に稱せらるゝと雖其の本領は更に支那古文學の硏究にあり本書は氏が如上の見を以て聖門第一の敎科たる四書に就て新釋を試みられし者にして一々據る處あり引證該博議論周匝其要を提げ其玄を鉤し麻姑を倩ふて痒を搔くに似たるあり其業勉めたりといふべく其勞多しといふべし

正價拾五錢郵稅四錢

四書新釋　中庸

全壹冊和裝

四書新釋曩に大學を出し續て中庸を刊す著者には該博の學殖と高邁の識力とあり故を以て漢唐の古義に僻せず宋明の新註に偏せず又必ずしも近清學者の考證を師表せず期する所は註疏の周匝と論斷の正確とにあり加ふるに本篇以下字解章意批判餘論の數者を分說し殊に明晰簡淨を極め譬へば庖丁牛を解くに似たる者あり讀者をして詳細相因り巨細畢く擧げ脈絡貫通曲暢旁通麻姑を倩ふゝ痒きに搔く如くならしむ古今の箋疏紛然雜出多きに堪へずと雖も集めて之を大成したるは實に本書にあり誠に近時の稀著といふべし

正價貳拾錢郵稅六錢

發兌元　東京日本橋區

(丙の二)

世界冒險譚

櫻井鷗村君譯●【文武堂藏版】口繪寫眞版挿入

第壹編 金堀少年

少年の一團隊が險を冒し難を衝いて砂金採取に出掛けた。[illegible]だ金堀少年は數十年前米國大陸を旅行する時の困難な狀態を勇ましく述べたものである。

第貳編 遠征奇談

英國の二少年が商船に投じ世界巡航の途、原野に海島に歷遊し暴風巨濤を凌ぎ猛獸を獵し山賊と戰ふ等勇烈以て少年子弟の志氣を興奮躍起せん。

第參編 二勇少年

二百年の昔、愛蘭土と英吉利との戰爭に敵と味方の勇少年が親友の義を結び戰亂なるに互に助け助けられ萬死の中に一生を完ふした美くしい物語。

第四編 續遠征奇談

遠征奇談の快絕なる續編に入り、二少年が太平洋の航海に熊海狩獸珊瑚島あらゆる危險を冒して遂に目出度世界一周の大航海を了はる奇談壯話。

第五編 決志少年

剛膽なる田舍少年、志を決し大都會に出て奇貨を施し競走財界に功名を博し遂に亡父の仇を報じ曩に奪はれたる家產を復す立志的大冒險譚なり。

第六編 漂流少年

歸省途中の二少年圖らざる船一難に遭ひ辛くも生命を拾ひ荒野に漂着して徒步故鄉に急く間種々雜多の冒險の末父母に相見るを得たる壯快な物語。

第七編 殖民少年

濠洲無人の原野を開き大財產を造らうと遙々英國から出かけ意外の變事で目的破れ幾度も死にかけたを天運にて遂に大財產家となる壯快な物語。

第八編 航海少年

北は寒帶氷山の海南は熱帶蠻人の地に少年と船長とが海賊海豹氷塊暴風難船等に出逢ふ冒險事實は千變萬化思はず快哉を絕叫するは此航海少年。

第九編 不撓少年

悲慘の爲めに乞食の群に入り不撓不屈の精神を以て艱難を凌ぎ人を救ふて其恩顧を受け難題を倒し遂に先祖の財產を恢復したる教訓的の冒險譚。

第拾編 朽木の舟

野蠻未開のオリノコ河の洪水て船を失つた一行朽木を拾ひ船となしまた筏に乘つて漸く上流に至り新に船を造つて歸帆したる艱難辛苦の物語り。

第拾壹編 俠勇少年

兄弟の少年アラスカに叔父を穿鑿せん爲め深山に彷徨ひ意外にも王城あり叔父は其大臣たり恰も亂あり太子を伴ひ共に故鄉に逃走する珍事異聞。

第拾貳編 絕島奇談

英米に評判高きマリヤット船長の冒險小說なり老船頭の俠一家族の厄難を救ひ無人島に漂流蠻奴との苦戰、老船頭の經歷談悲壯痛快を極む。

壹册正價金參拾錢郵稅六錢

發兌元 東京 博文館

（四の四）

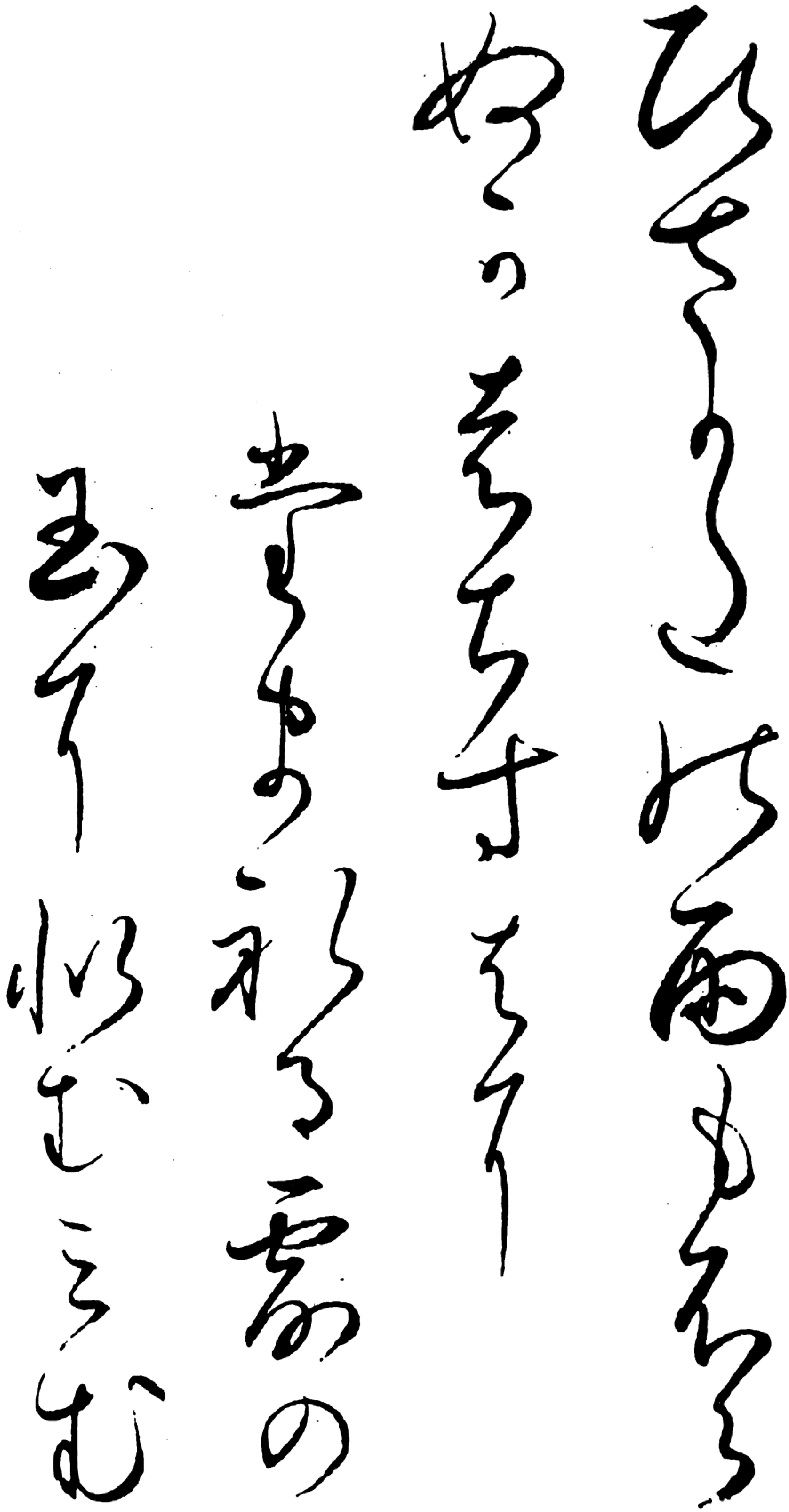
多田親愛先生筆

遊覧のこゝに箱根湯
泉へ入浴して彼所を
たゞ一見せし清見の極
みしと何としても生れね
こうのとしく存分に被成仕

ハ親王之前も奏し今宮
存のうちハ御案内以之候
つきとめ候様何も御返事
弟へ相成り候事ニ

坂正臣先生筆

紂羅河瀬を尋ね
おもへ我眉子八鵜川
たゝよふ心なるらし



阪正臣先生筆

萩と尾花



野口小蘋女史筆

水邊晚色

野口小蘋女史筆



黄蜀葵に野菊



女郎花

野口小蘋女史筆



工業叢書

工學士 君島八郎君著

道路學一斑

全壹冊洋裝上製
總クロース金字入
正價金六拾錢
郵稅金六錢

本書は吾國道路改善の端を開き交通機關の發達に資せん爲めに叙述せられたるものにして其總論に於ては道路敷設の觀念商業と道路道路と文化道路と鐵道及道路史一斑を述へ夫れより推輓の抵抗舗道舗道築造の材料石道木道アスファルト道破風道碎石道雜舗道基礎地方道路の測設土工排水コルベルト橋梁擁壁隧道街路等之に付屬する工事法等悉く之を網羅し百餘の插圖を加へて懇切に指導せり付錄には內務省の訓令を掲載せり

既刊目次

●水及油　工學士 市川俊雄君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金五十錢　郵稅金六錢

●陶器製造化學　尾張瀨戶陶器學校長 黑田政憲君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金六十錢　郵稅金六錢

●機關車　工學士 糸山孝吉君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金六十錢　郵稅金六錢

●構造强弱學　工學士 村瀨英一君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金六十錢　郵稅金六錢

●工場管理法　工學士 重宗彥熊君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金八十錢　郵稅金十錢

●電氣工學一斑　工學士 大熊辰之助君著　全壹冊（洋裝上製金文字入）　正價金六十五錢　郵稅金八錢

（丁の一）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の二）

營業科目

◎學校用品、學生用品
●家庭用品●農家用品
●遊戲器具●小兒翫弄品
●和漢洋書籍●諸雜誌

注意
●御注文ハ必ズ前金ニ限ル
●代金引替小包郵便ニテモ御申越次第御送達可仕候

東京神田錦町三丁目廿一番地
奇敏堂

進呈

如何なる重症にても必ず根切保證の
實地經驗 **リウマチス必治法**
右同病者に限 **無代**送呈す御望の人は**葉書**にて申込あれ

京都 藪屋町 蛸藥師
實業新聞社

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一
(電話本局一三二五九番)
藥學得業士 **金澤巖**

本舖 **內外藥舖販賣品一式貿易商**

何でも安くて

◎**目錄進呈** 遠路の方は往復端書にて申込あれ即送す

◎**藥種** 醫療用化學用工業用香料用其外藥品一式

◎**滋養品** 藥用酒ミルク肝油其外強壯滋養品一式

◎**賣藥** 奏効確實著大なる內外有名賣藥一式

藥業界の大王 **博愛堂**
東京日本橋大通り本石町角
(電話本局二一八六)

◎**薰物** 麝香沈香線香燒香煉香其外薰物一式

◎**化粧品** 香水白粉石鹼齒磨毛生藥其他化粧品一式

◎**器械** 醫療用化學用調劑用寫眞用其他附屬品一式

◎**新規開店** 及び御製品弘賣御依賴の節は懇篤相談ず

何でも有ます

全國一般卸小賣薄利大勉強

(丁の三)

（丁の四）



婦人の嗜好

農學博士　横井時敬

人文の進みたる國土に於ては人間の嗜好は頗る高尚である、野卑なる嗜好は斥けられて居る、別けて女子は高尚なる上に加ふるに優美である、如何なる嗜好か高尚で志かも優美であらうか、詩文や、小說や、書畫や、音樂や、茶の湯や、活花や、是等が世のいふ所の高尚にして優美なる嗜好である、不幸にして我國の詩歌音樂には高尚を以て目すべからざるもの丶少からぬ、別けて小說には男子と雖ども、卷を捲かさるべからざるもの丶多く、畢竟家庭に於て團欒の遊に持ち込むべきものは、寥々として曉天の星の如きに過ぎないが、是等の樂は先つ以て高尚優美となしてよからう、併し是等は皆室內

の樂であつて、室内の樂はかりては、衛生上からいふても甚だ好ましからぬ事で、婦人の樂も男子と齊しく、室外にもあらんとを望ましい、室外の樂には如何なる事があるか、

室外の樂には勿論種々の遊戯があるが、其他山水の奇勝を探り、山野の動植物を調へて樂むなども、高尙でしかも優美なる嗜好なるに相違ない、而して又た果樹を育て、野菜を栽ゑ、花卉を作るなどは、殊更有益にして又た面白き事業である、英國の一園藝學に於ては、男子部と女子部との兩部があるが、其設立の當初には男子が多數つた、然るに今日ては女子の數が遙かに多くなつた、男子も女子も各一小區地を受持ちて、之に花壇を作つて居るが、男子のは大抵無作法で殆んど見るべきものも、なかつたが、女子のは大抵優美に出來て居て、別けて一等二等などの品評を得たものなどは、其趣向から花の取り合せまで、中々よく出來て居た、是れ余が先年觀察した所の談である、

園藝は實の處、女子の仕事に最も適して居て、之れが樂は高尙で優美てしかも、衛生に宜しく、人の氣品を高むるに適して居る、されば歐米にても女子に適當なる娛樂の一に數へられて、婦人用の器械なども、特に製造せられて居る、花卉樹菜を仕立つるは、宛も子供を育つると同樣であつて、育つるものゝ丹精の効は速かに顯はるゝ、蒔きたる種子は生えて、生長する、花を開く、實を結ぶ、其間寒暖の變あり、乾濕の差ありて、喜ぶべきと、氣遣ふべき事、笑ふべき事、惜むべき事、千變萬化の出來事、是れが甚だ樂い事である、種々の出來事ある場合に於て、之に對する處作か不適當なれば、報酬は直に不結果となつて來り、之に反して其事甘く當れば良き結果となりて顯はるゝ、而して相手は腐敗せる厭ふべき人間の徒であつて、淸淨にして無心になる草木である、我彼を欺くべからず、彼又我を欺くべからさる潔白な

る良友である、友が是れである、之に接せるものが爭てか其感化を受けて、氣品高らずしてあるべきであらうか、園內に身を入れて居る間は、浮世を離れて人間の煩なく、陶然として其樂や窮まる所がない。

單に經驗的に之を行ふてさへ此の如きである、況んや少しく學理的の頭腦を以て之に處するときは、興味は一層加はつて來る之を研究するの方面は甚だ廣い、之を植物學的に研究せんか、種子を選擇するの結果として種々の變化が草木の形態性質の上に顯はれて來る、赤い花も白くするとか出來、一重の花も八重にするとか出來る、葉に於ても莖に於ても、種々の變化を誘ひ致すとが出來る、彼菊などに彼が如き多くの名品を出だせるは決して偶然の事ではなく、全く人工の陶冶し得たる所である、此方面よりの研究も甚だ面白くして、且つ有益である、土壤の方面に於ける研究も同樣である彼の土壤といふものは日常人の目擊し、蹈て通ふる所であつて、何でもないものゝやうに思て居る、しかし之れが研究は甚だ面白い、土壤は如何にして出來たものであるか、試みに墓地に行きて、古き墓碑を見たならば之に苔が生えて居るであらう、此苔を剝ぎ取つたならば必ず多少の土があるを見るであらう、是れが即ち明かに土壤の成立を示して居るものである、其初は、雨や露に濕ふて、空氣が又た之を浸す故に、次第に其質が變じて來て、其面少しく碎けて粗雜になる、之に極めて小き下等植物が生える、之れが死して腐れる、植物質か出來て尙ほ更ら常に濕ふ、そこで石面が益〻空氣の作用を受くるとが多くなる、植物の種類が益〻上に進みて上等となり大きくなる、之れが腐れて益〻有機質が加はり、此の如くにして石面は漸く磨滅して、土壤は漸く多きを加へ行く、直接に降雨の爲めに洗はるゝ所にては、土壤が出來ても直に洗ひ流かさるゝが故に、其面上に殘るとか出來ぬ、而して雨降らさるときは乾きて

居る故に、かゝる處にては石面の磨滅するとも著しくないが木蔭なとて雨に遮ぎられ、日もよく當らぬ所では、殊に明かに以上の事實が著れて居る、かく石の碎けて變化するには、植物根も亦た其作用を助くるとが多い、植物根は酸氣を有し、自ら石を溶かすとが出來る、而して又た炭酸を排泄する、炭酸と又た其死躰の腐敗するときは、更に多く之を生ずる、此炭酸は多少水に溶解して含まるゝ其水は乃ち其溶解力が本來よりも強くなる、水が石を濕ほすときは、少しづゝ之を溶解する、種々の物質がそこて水に溶解する、然るときは、水の溶解力は益々加はり、土壤は此の如くにして出來る、林間の岩石の上には、同樣に蘚苔か蒸して居る、一年間に生ずる土壤の分量は眞に僅少である、が十年、百年幾百年の星霜を經る間には、厚さ寸尺の土壤が出來、之れが河水に洗ひ去られ、河岸や海邊に堆積するに至れば、其厚さが數尺にもなる、そこで喬木も生し、蔬菜などさへ栽うるとが出來るとになる。

土壤は此の如く岩岩の崩壞して出來たるものである、而して大抵多少の養分を含有し居りて、植物を養ふとが出來る、軟きものもあれば硬きものもある、鬆なるものもあれば密なるものもある、砂もあれば粘土もある、其性質には種々あるが、良き性質にして養分を含むとが多ければ肥沃であり、之に反すれば瘠薄である、新開の土地は往々極めて肥沃である、現に北海道にも此の如き肥沃なる土壤がある、されば開墾の當初には、唯た器械的に之を耕すのみにて、直に多く生産を擧ぐるとが出來るか、此の如き沃土でも之に耕作するとも數年に及へは、次第に養分か吸ひ耗らされて、瘠せて來る、遂には此養分を補はざるを得ざるとになる、かく施して補ふ所の養分が即ち肥料である、此肥料の事に付きても、研究すれば面白き事が多へ、其他園藝界に於て研究すべき事は其範圍甚だ廣く、事

物も隨つて甚だ多い、此研究其自身が已に甚だ面白いが此研究を應用して實地に躬ら手を下す、其樂も甚だ深く、高尚で且つ優美である、躬ら手を下して地を耕したり、苗を植ゑたり、水を灌いたりするとは、甚だ下品なる事のやうに思ふは、從來の習であるが、是れは野蠻社會の遺俗であつて、永く之を保存するは、甚だ恥づべき事といわねばならぬ、手足が粗らびるなどの非難もあらう、筋肉が太りて姿が下品になるなどの苦情も起らう、然れども彼の小町樣なる細き腰を愛し、大名などの御臺所などは肥滿を恐れて食事をも加減されたとの事であるが、是れは畢竟婦人女子を玩弄物視したる當時の醜俗である、身體强健にして能く勇壯なる子孫を多く殖すは大和女子の責務である、抑も大和民族を四界に擴げ、以て四海を統一するとが、今後我日本人の唯一の目的でなければならぬ、何時までも病人じみた瘠せ躰を以てそれて、美人の標本だと心得るはいつも困つた事といはねばならぬ、佛國は一子の國といはれて人々一子より外持たぬといふ方針そこで、人口すこしも殖えぬゆゑに、今では人口の上からいふても、獨乙と戰ふて勝つ見込がなくなつた、若し此方針の實行さるゝとすれば、段々人口が減じて行き、計算上佛國は久しからずして、滅亡せざるを得ずと慨歎するものさへ同國人中にあり、其然る所以には種々あるか、細腰の瘠姿を愛する、其嗜好も亦た關係あるとの事である、勇壯なる大和民族の母たるべきもの、之を見倣ふてよからうか。

婦人の愛慾は夏日の暴風雨の如し烈しきも短かし　ツロアンベリー
婦人は益々其の顏を注意するに隨ツて其家を等閑にす。　ベンヂヨンソン
嫁資を有せざる嫁は發育の自由を有せす　ユーリピデス

◎名古屋城　名古屋城は大阪、姫路と併せて日本三名城と稱す、規模の雄大、結構の壯麗誠に封建時代の一偉物なり、同城は慶長十五年徳川家康新興の威を以て其の第七子義直を尾張六十一萬石に封じ清洲を改めて名古屋と稱し新たに城、池を此所に經營し天下の大諸侯に命じてその工事を課す、信濃、伊勢、美濃、大和、紀伊、近江、伊豆、阿波の諸國より大石巨材を運搬し二年にしてその工事成る城壁の高さ七十尺、牙城の高百五十尺に上り、所謂五層の天主閣と稱するものなり是れ加藤清正自から乞ふてその一手を以て築造せしもの巍然として雲表に聳へ雄大の觀實に海内第一と稱す、殊に閣上一雙の金鯱此城の美名を添ふる所以にして高さ八尺五寸、胴の周圍七尺三寸に及び黄金一千九百四十枚を溶鑄して鑄造せしものなりといふ、明治四年廢藩の際、舊藩主徳川慶勝金鯱を宮中に獻納し後墺太利萬國大博覧會に出品し芳名を世界に轟かしたることあり、後市民の請願によりて閣上に復し、金鱗天邊に輝くに至れり、此城今は陸軍省の所轄に屬し第三師團司令部の所在地たり又その一部を帝室御料地に編入せられ名古屋離宮と改稱せり

◎日光陽明門　日光を觀ざれば結構といふ勿れとの諺あり、實に日光廟は日本建築物中比類なき壯觀なり。廟社は贈正一位太政大臣徳川家康を祭祀し別格官幣社にして元和三年の創建なり、後寛永十三年に至り天下の良工名匠を集めて大に社殿を改築し、諸侯の材料を獻ずるもの多く三年にして工を竣へ神靈を此に徙す即ち今の日光廟社なり。廟社は凡て銅瓦緑朱にして花鳥を彫り表門の石華表には後水尾帝の宸筆「東照大權現」の一扁額を掲ぐ表門を過ぎ石階を登り瑞籬の内に鐘樓鼓樓あり、左右相對し朝鮮國より納めし山吹燈、琉球より獻ぜし蓮燈籠、阿蘭陀國より贈りし廻燈籠等いづれも天下の珍什、眼を驚かすに足るべし、正面に向つて陽明門あり、日本美術の粹を悉く此の門に聚めたるが如く、終日之を觀るも飽くことを知らずとし俗に之を日暮門といふ、門に櫓あり、覆ふに銅瓦を以てし竪四間横二間、棟桁梁柱皆彩し細かに人物、鳥獸、花卉を彫せり檐に金鈴を懸け天井には昇降二龍を畫く狩野守信の筆なり、其左右に廻廊あり、悉く花鳥を刻し精緻巧麗洵に人目を眩す陽明門を距る數十歩にして唐門あり唐木を以て造る、屋上に銅製の蒸虫を繋ぎ外柱には登降二龍を彫り内柱の周圍に錦鏡獅子を備し欄間に孔子十哲并に七福神、七賢人を刻み天井に天女の彫像あり、いづれも天下名工の彫刻にして精巧緻密眼を驚かさゝるはなし



登山のはなし

英國ケンブリッヂ女子師範學校長　ミス、ヒユース

一體日本では昔しから山に登る事を大層恐れて居りました、殊に婦人は近世まで山に登る事を許されませんかツたが。併しながら此の日本と云ふ國は天然上非常に、愛すべき所の多い國であつて、私は斯う云ふ樣な問題に付て、度々各國で御話を致しましたけれども、この日本の樣な愛すべき御國に遇つた事は澤山ありません。日本では美術及び文學に於ても非常に發達して居りますが、又此天然の山の多いのは非常に幸福な御國と言はなければなりませぬ、私は瑞西に旅行した事があります。此所も隨分山の多い所であつて、度々山に登りましたが、此の登山と云ふ事は非常に善い事て御座いますから、御國の樣に四方が山で圍遶て居る御國に住つて、お在になる方は。どうぞ度々御試み下さる樣に願いたい。乃で此の登山の効能はどう云ふ事であるかと一寸かいつまんで申しあげますと。

▲第一の効能は　まづ山に登ると大變に骨が折れる。之が即ち、體のために、非常に好いので御座います。或人々は過度に體を使ふのは善くないと申しますが、成程あまり使い過ぎるのはよくありません。けれども、若しも善い衛生法を定めて、その衛生法に從つて運動したならば決して恐るには足りません。そこで私は御婦人方に對して御すゝめ申しますが中にも上流の生活さるゝ貴婦人方は山に御登りになる事は非常の御藥てあります。何故かと申せば婦人は男子に比較すると、どうしても骨を折つて仕事する機會が乏しいと思います。夫れから又生理學者の說にも、一ツの仕事に智を聚めて

一生懸命に仕たならば今度は其反對に、身體を休める事が必要だと申します。斯う云ふ塲合には山に登る事が極適當な方法でありませう私共が今日斯く複雜した世の中に住んで居つて些細な事にも氣を揉む事が澤山あるのでせう、隨分過激に腦を使いませう。斯う云ふ塲合には是非身體の運動を充分にして其の精神即ち腦髓の過勞を癒すのが一番善いやうに思ひます。一体世の中の婦人方が、兎角つまらぬ事に神經を使ッて物事にこせ〳〵なさる癖の去せないのは平素あまり身體を動かさないで、兎角家内にばかり蟄居して居らるゝ所爲かと存じます。即ち生理的から來る處ろの一の病弊であらうと言はなければなりません。されば此の際夏季の好時節を利用して高山へでも登ッて身體を十分に疲らし且つは晴れ〳〵とした天地の大觀を眺めて精神を壯快にし新鮮にして塵のまざらない空氣を呼吸したならば、心身兩方の爲めにどれだけの功能があるか知れません、斯うして平常腦髓ばかりを過勞せしめた身体を回復させるのであります、一口に申さば一時世の中のごたくさを忘れて仕舞ッて生理上身体の機能を一新するのであります、これがどの位壽命の藥になるか知れません。俗に申す生命の洗濯をするのでありませう。

▲第二の効能　には曠漠とした郊外の地に出て新鮮な空氣を吸ふ事が最も善ので御座います。何れの國でも、最も多くの婦人方の主なる職業は、家を治めると云ふ事で御座います、それゆゑ郊外に出て充分新しい空氣を吸ふと云ふ事がきはめて乏しい樣に思ひます。從つて生理學者や、心理學者は婦人の能力智力が、男子に劣るのであると申してをります、歷史的に考へても、婦人は男子よりも神經質で、感情の强いものが多いやうで御座います。故に之を抑へるには、どうしたら善いかと云ふと、曠漠とした郊外の地に出て日がな一日太陽に晒されたり、又四面開かつた處で新鮮なる空氣を吸ふたりする事が必要で御座います、近世の樣に複雜した世の中では、段々人間の神經が過敏に成つて來ますからして、斯う云ふ世に處するには猶更郊外に出る事が必要で御座います。

▲第三の効能は　前に申上た樣な事計りでなしに、山の上にある空氣は誠に淸潔で、其上に高處に至に從つて空氣の壓力が尠くなりますから、何とも言はれない樣な壯快な心持を感じます。其れから山の上にある空氣は、下界にあるものと比較すると、一種の含有物を持つて居ります。即ち夫は人の顏面其他皮膚に觸れると淸潔な活々した感を與へるもので御座います。若しも皆樣が山の上に登つて新鮮な空氣中に御休みになると、今迄の疲勞は悉皆忘却て仕舞つて非常に愉快に感ずる。夫れのみならず今迄世の中に居つて、生活の困難やら、職務上の難義やらで腦を使つたのも山に登ると皆一時にそれを忘て仕舞ひます。恰も世の中のごた〳〵を下界へ擲つて仕舞つたやうな感じになる實に精神も身體も一變した樣に思はれる。併も之れは其時一時丈てなく、將來



に向つても非常に効能があります。現に私共は非常の境遇に處して不快の念を起した時には、何時でも登山した時の事を考へます。爾うすると、其時に非常に困難した事を追想出しますから、斯る些細な事は比較に成りはしないと思つて自然と心が快濶に成つて參ります。

▲第四の効能　登山すると平常に倍して勇氣を生ずる、一體婦人は男子に比して危險な塲所に身を置く事が尠ない、男子は航海もする、旅行もするし或は、鑛山に往て金堀をしたり、探險をしたり其他種々の危險の塲所に出遇ふ事が御座いますけれ共、女子は比較的に爾う云ふ事が尠ない夫れ故にどうしても、女子は男子よりも勇氣に乏しい、尤も女子と云ふものは、形態的人に依頼する樣に出來て居るからでもありませうが、併しな

がち、今日の如く世の中が段々進歩して來ると、矢張婦人にも相應の勇氣がなければならぬのです。其勇氣を養成するのには、登山が最も善いので御座います、始めの時は隨分困難なもので御座いますけれども、其代りには此の困難を凌いで其目的を逹すると、今迄は出來ないと思つて居つた事でも仕遂げる事が出來る樣になります。之れは即ち登山が他の事に向ても勇氣を與へる證據で御座います。併しながら私は世の中に差出るやうな婦人は大嫌いで御座います。世間では稍ともすると、出過ぎるものと勇氣のあるものとを間違ひる事がありますから、一寸御辨解を致して置きます。此差出者は女子已而ならず男子でも私は大嫌ひで御座います。夫れから又登山は勇氣を養ふ計りでなく、忍耐の力を養ふ事が出來ます。何故なれば、長時間山に登つて歩いて其間疲勞をも見せず莞爾として踏るのには非常な忍耐をしなければならぬ。夫故登山は勇氣と忍耐と二ツの力を養ふに足ると思ひます。

▲第五の効能　は非常な快樂を與へる。吾人は例へばどんな事を見ても幾分か幸福を與へると云ふ事でなければならぬ。夫は前に申し上げた樣に忍耐、勇氣と云ふ樣な事に由て愉快を取るのではない、天然の美の景色によつて夫を得る事が出來る。即ち雪の上に輝いて居る麗わしき所の日光、氷の原の樣な場所、或は雪の中に巍然として、聳へたる山の景色などと云ふものは實に言語には盡されぬ樣な美を顯はして居る、夫を見た時の愉快と云ふものは實に何とも譬ひ樣は無い位であります。今の樣な複雜な世の中に居つては精神の快樂と云ふものを得る事が非常に必要だと思ひます。其れを得るには此登山は最も善い事であります。

▲第六の効能　は過度の勞働を醫する事が出來る。吾々の脳は常に活動に滿ちて居るからで、登山などをして、萬事世の中を忘却すると云ふ事は最も脳の爲に善い事であつて、單り脳ばかりでは無く、身體も常に勞動して居る、殊に登山の際は、非常なる困難をして登つて行くのであるから身體は非常に疲れますけれども登り詰めた時には、恰も一の仕事を仕上げたと云ふ樣な感

情が起つて身体と脳の疲労が一時に去つて仕舞ふのであります。

登山の功能はこれだけには止まりません、まだこの外にいろ〳〵と説明し難い點は種々とありますが、大躰を言へばまづこんなものでありませう。どうか、日本の御婦人方わけても、中等以上に御生活をなさる婦人方は、此の一年中の好時節を利用なされて、登山を企てらるゝやうに希望いたします。學生の修學旅行は實物教育に至大の益がありますが。登山は家庭の主宰者たる婦人の修學旅行であります。

機に投じて射れば悪魔をも殺すべし　英國俚諺

富者を健康ならしむるは唯運動と節制とを行ふて恰も貧者の如き生活せしむるに在り　ウヰリアムテンプル

膽略と決心とは積徳の精髓なり　英國俚諺



家庭時言

文學士　大町桂月

●一家の經濟

一家の經濟は、一口に云へば、儉約の一語につくれども、年が年中、澤庵ばかりかじりても居られず。義理も立てねばならず、夫の顏も立てねばならず、寄附もせねばならず、親類の世話もせねばならず、客が來れば、いつも澁茶でおッ返へすわけに行かず、それ相當に御馳走もせねばならず。さればとて、おいそれと御馳走ばかりもして居られず、多くの親類にうまい汁ばかり吸はれても居られず。お人好しても立ちゆかねば、目をつぶるべき處はつぶらざるべからず。要するに、入るをはかりて、出す算用すべし。

家族の多少、厄介の有無もあれば、一概に言ふを能は

されども、普通の場合にありて、五十圓の收入あるものは、到底百圓の收入あるものとは、一所になれざる也。收入少なき癖に、生意氣に見えを張らむとし、衣服其他の點に於てひけをとらじと氣張るより、散財多くなる也。一家の經濟を維持する第一の覺悟は、身分相應と云ふことを忘るべからず。勅任官の妻君が、三度芝居見物にゆく處は、奏任官の妻君は一度にて我慢せざるべからず、奏任官の妻君が絹物を着る處は、判任官の妻君は紬ぐらゐにて辛抱せざるべからず。妄りに他をうらやんで、妄りに良人にねだるは、一家の爲めにならざる妻君なりと知るべし。

人或は以爲へらく、しわん坊、けちん坊にて、つきあひをよそにし、義理を欠ぐにあらざれば、金はたまらずと。これ或は一理あらむ。一攫千金の商業にて身代をこしらへたるものは知らず、貯蓄して、漸々に身代をこしらへたるものを見るに、多くは慾張りの似たもの夫婦也。夫は酒を飲まず、つき合ひをせず、宴會はいつも用事に托してことわり、車にも乘らずしててく／＼歩いて歸り來り、今日目をつぶつて宴會へ行かざるにより三圓まうかれりと、細君に語ればいつもながら、御心掛けのよき事也。宴會に行かれたるものと思うて、今日は久しぶりにて肴買はむと喜ぶ。かゝる夫婦、世間の榮辱も、義理も、噂も、糸瓜もあつたものに非ず、一錢でも多く金のたまるが何よりの快樂。客が長坐すれば、また飯を出さねばならぬかと、いやな顔付をなし、飯の時刻すぎて、客かへるも、とめむともせず、まづよかりしと胸なで下す。情冷かにして意志ばかり強く、我損得のみを考へて、人はどうならうと、思ひやりといふものは微塵もなく、下女は遣はぬが損と、朝早くより夜おそくまでやすむひまなくてきつかひ、人に對しても面白き話はせず。いつも金が足らぬ／＼とは、借金を申込まれぬやうにとの豫防線なるべし。かばかりつめて／＼つめあぐれば、成程金は溜まるべし。こゝに不思議なるは、このやうな鬼のやうな夫婦にても、人にこそ冷淡なれ、我身は可愛きもの也。我身の生んだ子には目のなきもの也。慾張りのけちん坊にも似合はず、我娘をは

れと着せ飾りて人中に出して、親馬鹿ちやんりんと冷かさるゝをも知らず。あとにもさきにも男はたゞ一粒の息子、言ひなり放題に甘やかしたるあげくは、あつぱれ薄志弱行の若様ならで馬鹿様、遊ぶことがすきて、勉強か嫌ひ、誰れ數へねど、放蕩の道に博士となりて、金ある間の好男子、父母が數十年間血の汗をながし、幾十人の恨にかへて仕上げし身代を、たゞ一夜の春の夢になげうちつくすこそ氣の毒なれ。

はきだめと金は、きたなくならざれば溜まらずとは一理ある言なれど、人は元來金を溜める爲めに生れたるものに非ず。餘りお人好なるは、賢とは云ふべからざるも、餘りに慾張り一方の義理知らずなるも、ほめたはなしに非ず。正當なる手段を以て、入るの多からむことを圖るべし。而して入ることに應じて、國民として、朋友として、親戚として、それ相當の義理をつくし、出入相つぐなひて、常に剩餘あらむことを期すべし。月に五十圓とりて足らぬ人は、百圓とりても足らざらむ、二百圓とりても足らざらむ。取れば取るほど、氣張る處、義理張る處が多くなれば也。

一家の經濟は、心のしまり方、ひとつに在り。金のなき時は、入らむ時の事を思ふて、心を慰むべし。金多く入りたる時は、困りし時の事を思うて、心をしまるべし。かくすれば、世間に義理をかゝずとも、財政自からゆたかにならむ也。

借家ほど不經濟なるものなし。一地方に永住するものは、馬小屋の如き家なりとも、我家をたてむことを心掛くべし。一口に入るを圖りて出せと云へば、造作もなきことのやうなれど、實際は都合よく行かぬもの也。月初には、餘ると思ひし金、月末に至りて足らず。あゝあれも買はず、これも買はずに濟ませば、よかりしをと後悔臍を噬むも、まだ何ぞ及はむや。月に五六百圓以上の收入ある家は可成り贅澤してもよけれど、二百圓以下の收入では、少しも油斷が出來ず。一個月の出入は豫算たちかたきものなれば、家賃、米代、その他定まり居るものは、除きて、その餘の費用は毎日何程と定め置き之を越さぬやうにし、餘れば別に貯へ、以て不意に多

くいる時に備へかくて、月末に至りて餘りたるものを貯金にすべし。帳面拂ひは、成るべく之を避くべし。何物もすべて現金拂ひにすべし。殊に呉服類を帳面拂とすべからず。帳面なれば、買ひやすき故、つひ買ひ過ぎて、月末に苦しむとあるべし。月給にて衣食するものその月の末に入る月給にて、その月の初よりの費用に充つるが常なれども、かくては到底貯金する能はざるべく、剩餘を精算すると出來ざるへし、今月の末に入る月給は、來月使用するととし、月末に餘りたるものは、悉く之を別に貯へ、今月の月給をば、來月の一日より使用すべしこの順をくるはさずにやれば、財政自から、らくにならむ。月の初めに、金多くありと油斷すれば、その月の費用をその月末にわたる月給にて辨ずるやうになりて、またあとの如く苦しむに至るべき也。これ月給取りの身分には、第一に覺悟して着手すべきこと也。

かくの如く說き來れば、如何にも世帶もちのよきもののやうに見ゆべけれど、言に敏なるもの、必ずしも行に敏ならず。金のなき事がさほど苦にもならねど、財布は常に空しきを訴ふる貧書生の身の上、國許の姪病死せりとの電報に、取敢へずあらひざらへの金あつめて、電報爲替にて送り、明日は如何にして小遣の金を得むかと考へつゝ、此文を草するもはづかし也。

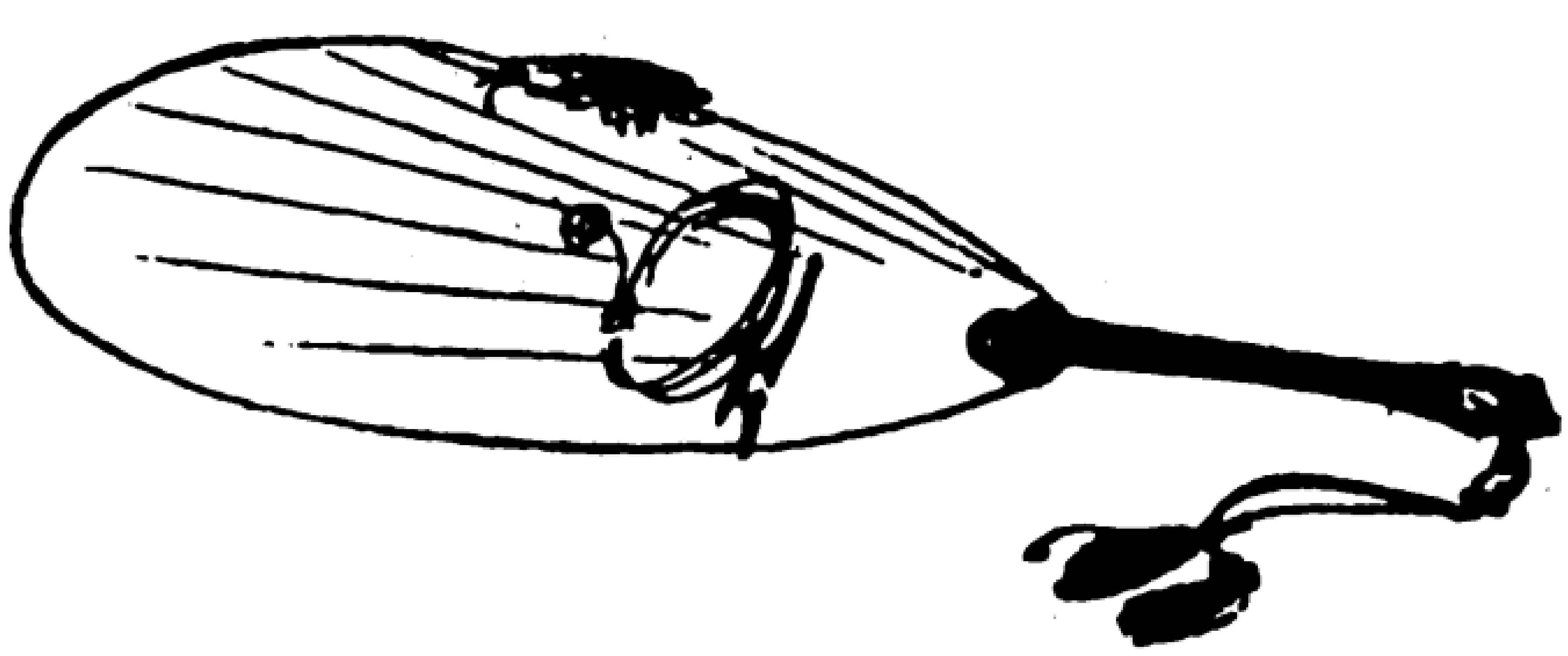
一錢を儉約したる人は一錢を儲けたるなり

夏季の衛生

ドクトル　川瀬元九郎

夏期は冬期に比すれば毎年一般に病氣が多くありますが、殊に疾病の中でも夏期に於ては傳染病の流行が一番恐ろしくあります、外國の人は夏期には多く避暑に參りまして傳染病の流行なぞは罕れてありますから、醫師も夏の間は極めて樂であります、然るに日本に於ては是れに反して醫師の顏色と蜜柑の色とは氣候によりて反對して來るとか申して、夏が年中にて最も多忙なる時候て且收入も最も多き時てあります、是れは全

我日本に於ては、上水、下水、芥溜の掃除及び清潔方法等の不完全なるのと、人民の衛生思想の不足に歸因するものであると思はれます、獨逸の伯林府は下水道が最も完備して居りまするが水道の出來ぬ以前に於ては千人の死亡者中傳染病の死亡者が三十六人乃至四十二人ありました、然るに水道の完成してから年々に減少して來て千八百九十年には千人の死亡中傳染病の死亡は僅かに四人になりました、日本に於ては明治十九年頃迄は長崎市には疫病が度々流行しましたが、明治廿二年に水道が敷設せられてからは全く疫病の流行が跡を斷つたのであります、又大阪に於ても上水の改良前は傳染病の死亡報は年に平均三千五百八十六人でありましたが、上水の改良後は年に平均六百六十一人に減少しました是れ等の例に依て衛生上の設備と傳染病の流行と密着



なる關係のあることは明かであります。

本年は氣候が不順で雨が多いから傳染病が流行するに最も適當なる年であると思ふて、其筋の人々を始め一般のものが心配して居りました、然るに不幸にして數旬前に於て佐賀縣唐津に虎列剌病が發生して數十の人命を奪ひ去りました、それから長崎及び壹岐にも現はれました東京に於ては六月二十三日に疑似虎列剌患者が發生したるのを始めとして今日に至るまで二三の眞性虎列剌及び十數名の疑似虎列剌が出て來ました、實に險呑なことであります、虎列剌のみでなく赤痢なぞも仲々勢強く侵襲して來る樣であります。

人間に取りて最も貴重なるものは生命であります、俗にも命ありての物種とか申しまする、通り生命が人生の基礎であります、人間

として生命を愛しないものはありません、地震、雷、暴風雨及び火災等は人の最も恐るゝ敵でありまするが、是等の天災よりも傳染病の方が遙かに猛烈であります假りに明治廿八年の統計を擧げて見ますれば、洪水、海嘯、難船及び火災等に因由する死亡者の數が千六百三十六人で、諸種の傳染病に因由する死亡數は實に五萬百七十八人即ち三十倍以上となります。傳染病に因由する死亡數は多くの人の預想外であると思ひます。明治廿七八年の日清戰役に於て大島混成旅團の死亡數を見るに傳染病及び平生病者は二十八萬三千三百五十三人で、戰死及び負傷者は僅かに七千八百十六人即ち前者は後者の三十六倍強となります山根醫學士は、日清戰爭は戰勝病敗であると評せられました、實に其の通りであると思ひます。

次に經費の點から見ても實に注意せねばならぬ、明治卅一年度第二豫備金支出は傳染病豫防費として拾四萬二千餘圓にして臺灣匪徒鎭定費が三萬二千五百餘圓で衛生に比ふれば僅かなる高であります、此外豫防の爲に個人の消費する金高中豫防上交通及び商工業に及ぼす損失を計算すれば莫大の金高であります、若し吾々人民が平常衛生思想を以て注意すれば是等の莫大なる浪費を省くことが出來まして年々數萬噸の軍艦を容易に製造購入することが出來ます。又一國の躰面上からも考へて見なければならぬ、日本が疾病流行地と外國の政府が認定するときは、船舶は外國の制裁を受けなければならぬ樣な次第になりこれて實に一國の恥辱であります、一國に傳染病が猖獗を極めて居るといふことは其國の衛生的設備の不完全なることを表記するものであります、故に吾々國を愛する國民は各自に是等の點に注意しなければならぬ、而して是れ等の注意は男子よりも婦人の方に責任があります、實に國民の健康は全く婦人の掌中にあるといふても宜しいのでありますから婦人方に一層研究を願たいのであります。

▲住居の清掃

扨て傳染病其他各種の疾病の原因となるべき幺微なる

黴菌は吾々が日常呼吸する空氣や飲食物等に混和又は付着し或は外皮の損傷せる部分からして吾々の躰内へ侵入する者であります、然るに吾々の身躰の營養が可良で抵抗力が強大てあれば、外來の病菌は却て撲滅せられて身躰を損害することが出來ません、丁度弱小なる國が強大なる國を侵襲して敗を取ると同じことであります、是れに反して若し吾々の身躰の營養が不良にして抵抗力も微弱である場合に病菌が侵入すれば、病菌は勝利を占めて遂に所謂病氣といへる現象を發現するものであります故に吾々は健康を保持するには平常衛生の法律を遵守して抵抗力を強大ならしめ以て敵兵をして侵擊する機會を得せしめざるにあるのであります、此の注意は四期共に同じく守らなければならぬが殊に夏期は疾病の起り易き時期であるから一層注意しなければならぬのてあります、傳染病の流行の兆ある場合には吾々は同心協力して警戒しなければならぬのであります。

日光、低溫及び乾燥は黴菌の發生及び繁殖に對して不利なる條件で日陰、高溫及び濕氣は病菌の最も好む所てありますから此の夏の樣に雨の多き時節は病菌に取りては好時節であります、故に吾々は敵の發生及び繁殖を妨げ且是れを撲殺せんとするには先づ溝渠及び下水を掃除し、芥溜の始末をなし牀下其他家屋の周圍を清潔にして石灰を散布し土地を可及的乾かす工夫をしなければなりませぬ、家の周圍が不潔であると吾々が呼吸する空氣も不潔となります、空氣は吾々に取りて

は飲食物よりも大切なものでありますから不潔なる空氣を呼吸することは吾々に取りて最も不利益なことであります、

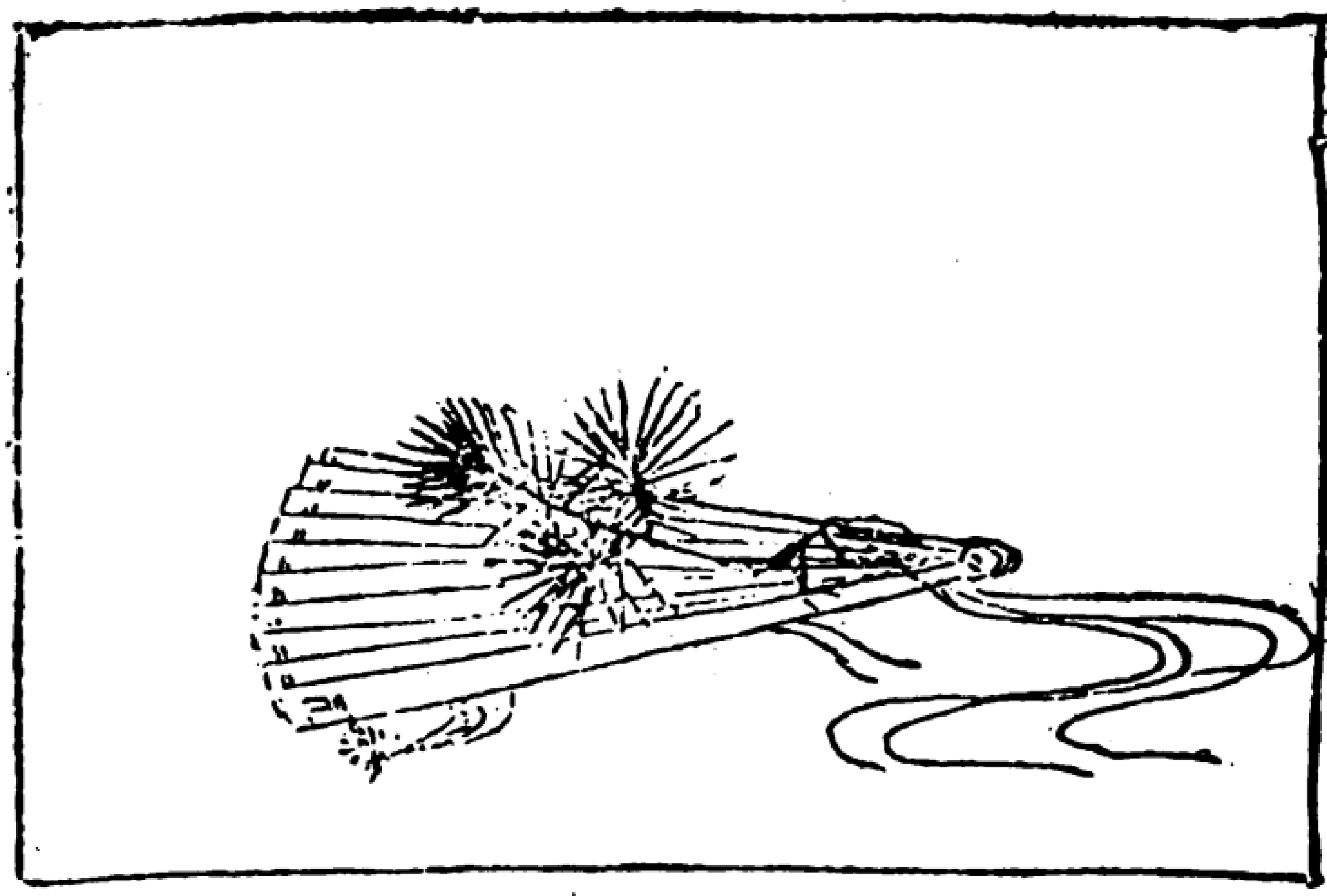
瓦斯はすべて溫度が昇れば昇るほど膨脹するものでありますから例せば零度の空氣一立方尺も百度の空氣一立方尺も其容積に於ては同じでありますが其實質の量に於ては、大に異なつて居ります、即ち同じ容積とすれば溫度の昇るに應じて實質量が減じて來ます、空氣の中にある酸素といへる瓦斯が吾々の身体に必要なのでありますそれで、比較的高溫なる夏の空氣を呼吸する場合には低溫なる冬の空氣を呼吸する時よりも攝取する酸素の量が少くなる譯であります、酸素は体內に於て發起する酸化作用に要用なるものであります、而して酸化作用なるものは吾々に活動力を與へる原因であるから夏は冬に比較すれば吾々が不活潑となる次第であります、故に吾々は可及的多く酸素を吸入するが爲に勉めて深呼吸をしなければなりませぬ、夏期中深强なる呼吸をすることに注意すれば炎暑の候と雖も嚴寒の候と同じく業務を執ることが出來て午睡を催すやうなことはない、又一般に晝間は戶障子を開け放ちて空氣の流通を謀るけれとも夜中は多くは雨戶を閉め切りて空氣の交換を怠るから充分に睡眠を得ることが出來ません從て翌日になつても身体精力が充分に恢復しませぬ、故に春夏秋冬の區別なく夜中と雖も空氣の流通に留意しなければなりませぬが殊に夏は一層然かしなければなりませぬ、夜の空氣は濕氣を含んで居るから却て危險であるなぞと言ふものがあるが理由のなきことどあります、室外の空氣が夜の空氣であるならば室內の空氣もやはり夜の空氣であるに相違ない密閉せる室內の空氣は室外の空氣よりも數層不潔となるから却て有害であります。

▲皮膚の淸潔法

次に皮膚の淸潔に注意しなければなりませぬ、毎朝冷水摩擦を行ひて皮膚の血液循環を旺盛にし且抵抗力を增進するのであります、其外時々溫浴を行ひて皮膚

を清潔するも必要なことであります、温浴を取ることは我が國民一般の特點であるから說法するに及びませぬ、汗などが出たならば時々衣服を交換して清潔に洗濯したるものを着用しなければなりませぬ、小兒をもてる母親などは屋外にて遊んで歸て來たらば必す一日衣服を交換して遣るが宜しい。

又衣服や皮膚を清潔にするの外皮膚が不潔とならぬ樣注意しなければなりませぬ是れは日本人の最も忽て居るところであります、日本服は室内に在て遊逸に生活するには適當して居るが屋外に出つるには吾々衛生家の眼から見ては極めて不完全であると思ひます、夏は此の不完全なる單衣一枚を着用して居るものが多い兩足及び兩臂兩脚の大部、及び胸部等は全然露出して居るから實際被包されて居るのは僅か幹軀の一部と股の上部丈けであります、故に日本人は半裸体であると言つても宜しいと思ひます、田舎へ行くと湯衣や褌だけて夏を過ごすものが多い、田舎へ行かなくとも大都會にても澤山あります、夏は始終多少皮膚からして汗か分泌しつゝあるから半裸体的服裝をして一歩でも外出すれば臭いものに蠅が群集するやうに塵芥が露出せる局部へ付着して皮膚の氣孔を閉鎖します、皮膚に体内にて發生する有害なる物質を体外に排除する役目を持て居る大切な器械の一てあります塵芥を以て皮膚を包むときは自然に毒物が体内に蓄積して少からぬ損害を身体に及ぼすものであります、それて足袋、股引及び「シャツ」を常に着用する樣に致すが宜しいと思ひます、殊に外出して歩行するときには必ず相當の保護を與へなければなりませぬ、風儀上から見ても半裸体的の單衣一枚の服裝は半野蠻的であると言ひたい、女



子には洋服を着用させるか山根氏の改良服でも着用する樣にしたらば宜しいと思ふ、然し西洋服と申しても「コルセット」を用ひて腹部を壓迫したり、地を率く程の長き袴を着用するのを賛成するのではありませぬ、又襯衣は夏期に於ては時々交換して清潔に洗濯しなければならぬことは申すに及びませぬことであります。

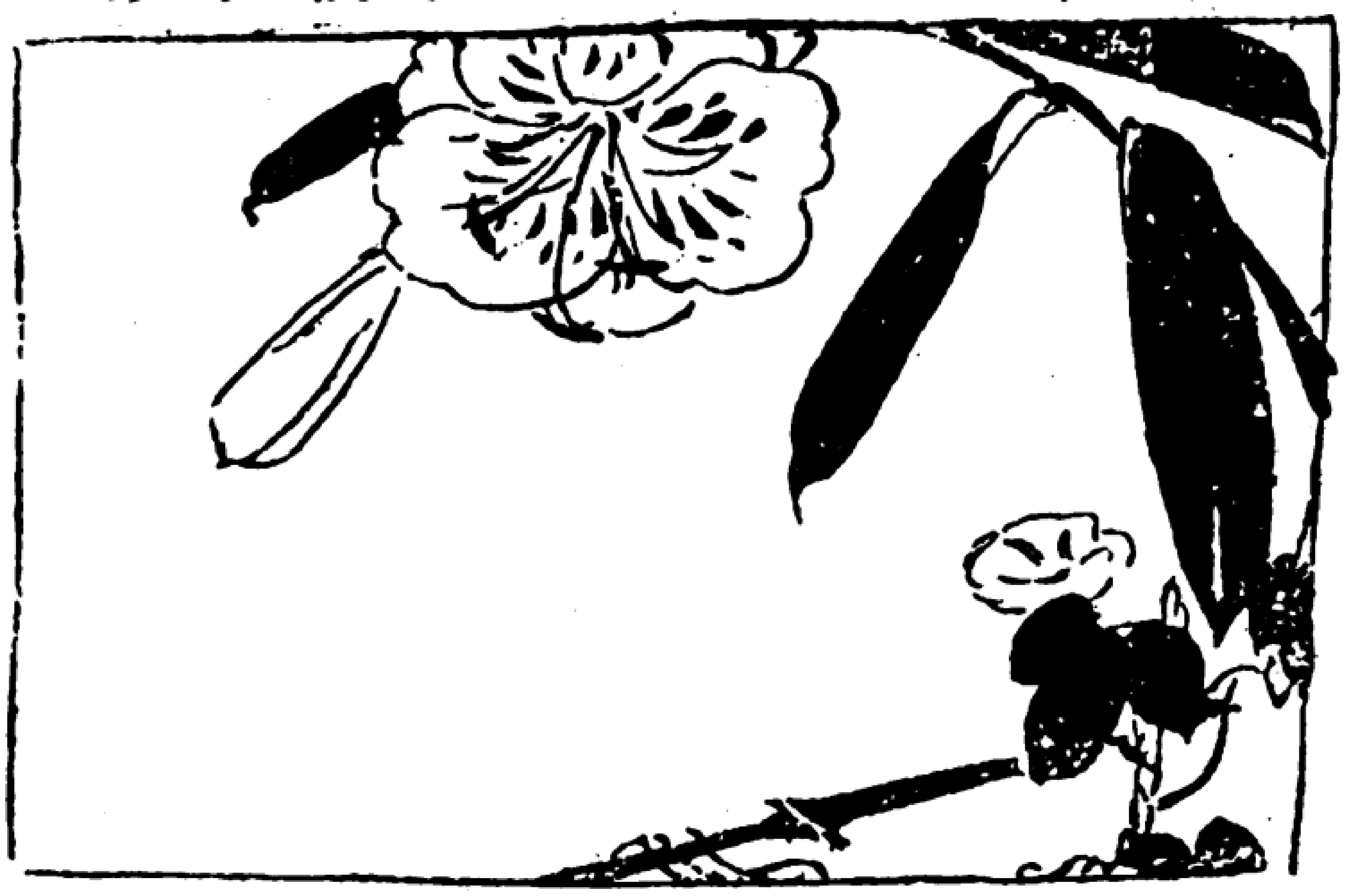
口は禍の門と申しまするが病毒も多く口から入るものであります、口に關係あるものは手、食器及び飲食物であります、手は一寸體裁の宜いものでありますが、實際は不潔なものであります、先きに述べた如く塵芥で包まれたる足を以て踏み付けた疊の上に手を日々幾度も擦り付けたり、手を以て靴や草履を取扱ふたり、又手は吾々の眼には見ることの出來ない不潔物が付着して居る器具などに接することもあり、衣服は清潔の樣ではあるが例の不潔な疊に接觸するは勿論其他穢物又は不潔物が付着して居ることがある、その衣服には手を何度も觸れなければならぬ、小兒は清潔も不潔も辨別しないから特別に小兒の手は不潔になり易い、此の不潔なる手を以て食物を攝り或は食器を取扱ふのでありますから不潔物が吾々の口へ入るのであります、小兒は無意識に不潔なる手や玩具や其他手當り次第に何でも口へ入れる惡僻があるから最も危險であります、斯樣に手が媒介となつて色々の病氣を引起すことが多くあります、それで幼少の頃から手を洗ふ習慣を付ける樣に注意致さねばなりませぬ、食前には必ず手を清洗して後食卓に着く規約を立てるが宜い、又小兒に在ては始終監督者は手を口へ入れない樣に注意しなければなりませぬ、それから女中の監督者も食器を取扱ふたり食事の準備に取懸る前には必ず手を清潔に洗はせるやうにしなければなりませぬ、又時々爪を剪除させなければなりませぬ、爪を長くして居ると不潔物が爪の下に滯積して疾病の媒介となります。

先づ手を清潔にしてから食器を取扱ひ、清潔なる水で食物を洗ひ、且清潔にして乾いて居る拭布で食器を洗ふとすれば食器は清潔であります、夏は生水は危險であるから一度沸騰した水でなければならぬことは知て

居るが茶碗や「コップ」を生水て洗つて不清潔なる布で拭ふたりするものが多くあります、容れる器が不潔ならば水が如何に殺菌して無毒であつても何の益にも立ちませぬ、水もやはり不潔となるのてあります東京大阪等の如く改良水道の設けてある都會に於ては下等貧民は飲み水だけは上水を用ひ食器を洗ふたりするには堀井の不潔なる水を用ゐるものが多い、大なる誤りてあります。

▲飲食物の用心

夏は可成一度沸騰したる水を用ひる様に致すが宜い、暑さの爲めに無暗に水を飲みまするど胃腸加答兒の誘因となります運か惡いと赤痢や虎列刺にも罹るのてありますから充分に愼むが宜しいと思ひます、何人も暑さが嚴しいと氷水や「ラム子」等の飲料水を渇望しまするが炎天中を歩行した後又は勞働して發汗して居る時は最も危險であります、何でも一度習慣が付くと容易に矯正することが出來ないものでありますから夏の始めに當りて氷を用ひる習慣を付けない決心さへすれば氷がなくても夏を過ごすことが出來ます、氷、「ラム子」及び「アイスクリーム」等は可及的用ひない樣にするが安全であります。



果物と言ふと胃腸病を必ず誘因する恐ろしきものゝやうに思つて居るものが澤山あります、何んなものでも注意を怠れば身躰を害するものであります、果物は純粹なる水を多量に含み且多少の酸類、及び糖類から主として成つて居りますから、食慾を増進し神經を興奮し且含有して居る酸類の爲めに胃腸内にある黴菌を撲滅し胃腸の消化力を旺盛にするものであるから夏期に最も適した食物の一てあります、其上果物は極めて消化し易いものであ

ります。然し果物を用ひるに當りては注意すべき條件があります、第一果物は充分成熟したものでなければなりませぬ、第二果物は容易に腐敗するものであるから、外皮に損傷があつたり、壓迫等の爲めに內部が變色したり、又は香氣の變化したものは腐敗しつゝあるものであるから決して食してはなりませぬ、第三新鮮にして完全なものでなければなりませぬ、第四外皮を損傷又は取除きたるもの及び切りたるものは殊に腐敗し易いから店頭や街路に見切り賣りの西瓜や瓜の類を食してはなりませぬ、西瓜など一度切つて數時間も蓄へて置て食するなぞは最も危險であります、第五間食といふことは胃腸を害するから何の時候にあつても宜しいことはないけれども、夏は殊に胃腸の健康に注意しなければならぬ時節であります、故に夏は過食や間食を愼まねばなりませぬ、果物も間食とすればやはり害になります、多くの人の實行するやうに午睡後の所謂目醒しに冷やしたる西瓜なぞを食することは嚴禁であります、第六多量の肉類、脂肪其他不消化物を食したる前後に果物を食すると醱酵する恐れがありますから避くるが宜い。是れ等の諸點に注意すれば果物は決して恐るべきものではありませぬ、却て夏は多量に用ゆれば用ゆる程身体の爲に宜い、朝とか夕方は多量に果物を用ひて肉類なぞは晝食に食する樣に致すが宜い、全体夏は肉類なぞを過用することは宜しくありません、又果物は小兒にも大人にも老人にも適當して居ります小兒には果物を食させてはならぬ樣に思つて居る方が多い、然し上述の注意を怠らなければ澤山に食すれば食する程小兒は元氣で無病で且速に發育するものであります、夏期に於て旅行する時には「レモン」又は「レモン」汁を携帶するが宜い、「レモン」の汁は强勢なる殺菌力を持て居りますから水を飮むときに必ず其少量を加ふれば全く安全となります、旅行者なぞの注意すべきことであります、夏の間は過食や間食を愼み、夜晩く食したり、食後直に睡に就くことなぞは避くるが宜い。

午睡を催すのは、ツマリ夜の睡眠時間の不足とか、晝食

の過食、又は精神或は身體の過勞から來るものであるから是れ等の點に心掛ければ午睡を避けることが出來ます、午睡を催したらば日陰に出て深呼吸法を行ひ且冷水にて全身を摩擦するが宜い。

▲避暑地の用心

夏は箱根輕井澤日光の如き山中、又は草津熱海の如き溫泉場や、又大磯鎌倉及び明石須磨の如き海濱は避暑に赴くことが大に流行になつて來ました、實に結構なことであります、然し玆に注意すべきことがあります、多くの避暑地へは肺病、梅毒、癩病及び各種の皮膚病等の如く感染性を有する病人が群集します、それで共用する金鉢、手拭、夜具、浴衣、茶器、食器及び浴室等の媒介によりて健康者に傳染することがあります、神經衰弱の爲めに或る地へ休養して居て其の土產として肺病を持て歸るといふやうな實例は幾何もあります、旅人宿や料理店の主人を始め番頭及び下女に至るまで衛生思想などは毛頭ないから客人に傳染すべき病人があることを知て居ても一向平氣であり、病客も公德を重んずる人でなければ自分が肺病であることを知りながら咳をば無暗に各所に略出するといふ次第であり、又健全なる客人の中にも一向無頓着な人が隨分澤山あります、且又西洋では料理屋や旅人宿に於て食器を洗ふには沸騰せる水と石鹼を用ゐて消毒しますが、日本では冷水又は微溫湯で洗ふ丈けであるから消毒の効はない、又西洋では手拭敷布なぞを洗濯するにも一々一度釜に入れて沸騰するから誰れが用ひても安全となるのであります、是れ等の理由で病氣が傳染し易いから其覺悟で注意しなければなりませぬ、可成夜具に用ゆる敷布、手拭、浴衣等は自ら携帶するが安全であると考へます。

夏の間は夜十二時又は一時頃迄も寢に就かないものが澤山あります、可成冬の間と同じく九時又は十時に就床して七八時間は睡眠する樣にしないと身體に疲れが來て夏を過ごし難くなるのであります。

夏は筋が弛んで自然に運動を怠る樣になりまするが冬

と同じく適當の運動を行ふが宜い、水泳は實川上及び體育上結構な運動でありまするが水泳時間を過度にしないやうに致さねばなりませぬ、又子供などが三十分乃至一時間も炎天に露されつゝ歩行して水泳場に達し而して直に水中へ飛び込むやうなことがある　これも二三十分間も休憩した後に水泳を行ふ様に致したいものであります　又余り身體が疲勞して居る時には水中へ入てはなりませぬ意外の災難に遭遇することがあります。

身に健康を所持せざる人は何も所持せざる人なり

家庭雜話

羽仁もと子

○柳澤伯爵(保惠氏)は此頃客に向つて「避暑に就ては毎年考へるとてすが、何うもよい工夫がないのです、箱根も大磯も大人には宜いてせうが、此様な所では自然人間が自墮落になる傾きがありますから、子供連れなどに不適當で御座います。私は大勢の弟妹を連れるのでありますから、今年は滊船で日本の沿岸を一廻して見ようと、郵船會社に問合せ中です。所が目下西海岸の滊船には乘客を扱ふために充分の設備がないさうで、困つて居るのですが……」とのお話があつたさうです。遊覽船を持つて居る西洋人には珍しくないかも知れませぬが、我國ではまだ聞かぬお企であると思ひます、殊に貴族のお方で、御自身斯くまでに子弟の教養に考へて居らるゝ向は稀れであらうかと存じます。なほ伯爵の御豫定に依れば日本沿岸を一週するのに凡そ廿四日を要するさうで御座います。

○棚橋絢子刀自は、八歳の孫女君をお連れになつて、隱居して居られますが、隱宅に數名の學生(婦人)を世話して居られます。此頃御訪問申しましたところ、四方山のお話の序に「後々の爲にと思ふて、私は宅に居る人達に何でも家事をいたさせます、連れて來て居る孫の世話も、學生達に出來る丈は賴みますので、夫に就て平生斯う申して居ります——子供があなた方に何かして

下さいと云つた時、若しも用事があるとか、また出來にくいとか、あなた方の嫌なことであつたなら、忙しいとか不可ないとか遠慮なしにある通りを云つて下さい、世間では子供が母親にア、して コーして と云ふときに、今して上げるとか、モー少しお待ちなど、イ、加減の返事をして置いていつまで經つてもその約束を果さないといふやうなことはよくある例ぢやが、子供の爲にこれほど惡いことはないのだから――との御話がありました。

○松波法學博士(仁一郎氏)を御訪問申ました折、矢張他のお話の序に「私は二人の女の子と一人の男の子を持つて居りますが、私は男の子にも女の子にも坐るなといふ主義で御座います。腰を懸けるやうに家内の設備が出來て居ると世話がないのですけれど、普通の家ではなか／＼ソーは參りませんからねえ……夫に女の子のまだ自分自身に男女の區別の分つて居らぬ時代には……汝は女だからコーしてはいけないとか、アゝするのではないとかいふことはよくないと思ひます。自身に女といふ觀念が萌した時に、はじめて夫相應の覺悟がいるので、大人からヤイ／＼といふことはいらぬと思ふです。また私は子供の泣くのをなだめ賺して無理にとめるのは惡いと思ふ、昔の牢屋では一日に一度づゝ時を限つてときのこゑとか何とか云つて大聲を立てさせる習慣があつた。是が非常に囚人の氣を引立てゝまた身體のためにもなつたさうで、凡て內にある勢力を出さずに置くのはよくないことです、子供の泣かうとするのを止めるなども矢張同じ道理に於て惡いと思ふのです」云々。

○米國に永く行つて居られて、此頃歸朝したる某夫人米國では諸種の會合でも、社交場裏でもまだ場なれぬらしい新顏の人と見れば、實に親切にもてなして吳れるのです。然るに日本では、私のやうな位地のないものが、或る場合から二三の貴婦人方と御交際を願ひまして、一人々々の場合にはへだてなき御待遇をうけて居ると假定します。そして或時歷々の方々の澤山に出られます、公會の席などに、前の貴婦人方に落ち合ひま

するど、引合わして他の方に御紹介して下さいますところが殆ど打解けたお辭義すらなすつては下さらぬほどて、私は此間から、數度一人でションボリと間のまるい目を經驗しました。私前にはどの會に上りましても殆ど同じやうなお顔揃で御座いますのを拜見しまして日本には外にお出にならうと思召す御婦人は、まだ幾人もないのかと思つて居りましたが、一つには出て見ようかと思立ち遊ばして、一二度お顔出しをなさつた方にも、矢張私のやうな目にお合ひ遊ばして、それなり懲りてお仕舞になるのではないかと思ひます」とお云ひになりました。夫人の御批評は極端にすぎるやうに思はれますが、米國婦人の巧みなる交際振りを御覧になりました御目には、日本婦人中の所謂交際家と云はるゝ程の方々でも、時として斯うまでに見ゆるかも知れぬといふとは、私供の参考とすべきものかと存じます。

○阿部泰藏氏の夫人を御訪問申しましたところ、お坐敷に、故稅所敦子刀自御自筆のお歌で一双の屛風が出來て居りました。折にふれて阿部夫人につくられました數百首をおあつめになりましたもので御座います。て、中に珍奇の御題も澤山ありました。夫人のお許しを得て寫して歸りましたのは次の數首で御座います。

布袋河わたり

みな人の世わたる道のしるべにと
　神も重荷をおひてゆくらむ

寫眞

子を思ふこゝろもそへて殘さばや
　わがおもかげの忘れかたみに

義務

ねざめして門もる犬の聲きけば
　人はつとめにたゆみけるかな

孔明城門を開てことをひくうた

うち波のよするさゝ葉はしづまりて
　渚に高し松風のこゑ

地方官

みめぐみのふかきを民にくますするや

あがたの井戸の心なるらむ

心

空たかく思ひたちても白雲の
あとはかなさは心なりけり

手なが鏡

身のほどを思はざるよの人なみに
うらの月をもねがひそめけむ

鏡

よしあしのかげをとゞめぬます鏡
わかこゝろにもうつしてしかな

蝙蝠傘

雨に日にかけをたのまぬ人もなし
ひらけ行世のきぬがさのやま

衛生家の門戸には病魔入らず

夏季の注意

醫學士　山根正次

諸嬢、私は過般婦人の健康と云ふことをお話いたしましたが、其時に料理の事を申上げて置きました、一体此の料理と云ふことは、我國では卑しい事の様になつて、少し身分のある人達ちになると、料理の世話などをしない事が常で、只お料理と云ふ物は、喰べる事を知つてさへ居れば宜い様に見做されて居りまするが、是は家庭の經濟の上から云つても、又一身の衛生の上から申しても甚だ宜しくありません事て御座ります、西洋では大体の人が料理を知つて居る、そうして上等の人程料理のこしらへ方を知て居りまして、下等社會は却つて知りません、是は下等の人は自分で料理をすると、却つて費用や時間を費すからであります。

上流の人々では客人などがあると自宅で料理をして是をお客に出す、手料理を出すのが一番の御馳走であります、是は丁度我國は昔のお茶の手前の様なもので、主客共に料理を賞味して一層好意を厚くすることになります、然るに我國ではお客があると直ぐさま料理屋から料理を取寄せるものでありますから、家庭の中で御料理に巧みの人出來ぬので御座りませう。

それでこのお料理の事は平日の朝夕のお菜に至るまで家庭の主婦たる方が自身に是をこしらへる人は少ない大體はおさんに申付けて料理をさせるのでありますが是からいろ〱間違の起ることがあります。

それて此の御料理の仕末につきまして婦人方によくある癖が一つあります、それはどう云ふ事かと申しますると、所謂「もつたいない」と申すことてあります「もつたいない」と云ふことの起るのは多くは食事の仕末てあります、お菜を澤山にこしらへると餘ることがある、さうすると是は捨ては勿體ないから喰うて仕舞はうと云のであります、此のお菜の殘りを勿體ないからと云つては戸棚の中に仕舞つて置く、そうしてそれを翌朝になると、昨夜の遺りのお菜だから捨てれば勿體ないから喰ふて仕舞はうこう云ふ事は澤山ありますが此れは實にあぶない事であります、昨夜のお菜を一夜置くと、此節の樣に氣候の暑い時は腐敗する者があるがそれても、捨てゝは勿體ないからと云つて之を喰べると、忽ちピー〱ガラーの大騒動がお腹の中に始まります、それからとう〱大切な病氣に罹る樣の事があります、時とすると其爲に若い人などが死てしまつて、本統に一生の生命を勿體ない事にして仕舞ふことが屢ゝあります、是等は兎角目前の僅の物を吝む情から大切なる身體の攝生を忘れて仕舞ふからてあります斯ふ云ふ事は必ず廢めなければいけません、お菜が殘つた時は、必す勿體ないと云ふ感情を去つて速に其處分を致さないといけません、併し下婢などと云ふものは、何事もよく氣を注けてやりませぬとよく間違へるものてありますから其わけをよくさとさないといけません、私が知合ひの某家の奥さんに私が此のお話を致して置きました、所が或日の事其家から急の使が參りましてすぐ來て診察してくれとの事てあるから取あへず參つて見ますると、其家の女中が今朝から大下痢に罹つて臥蓐て居りまして大層苦しんて居のでありますそれで私は一通り其仔細を尋ねますると、實は昨晩の事、晩餐のお菜に茄子の味噌あえ物を拵らへた所、が其家では御主人に夫人と子供が一人と女中きりの小人數

であリましたので、其御料理が喰べ切れないで澤山殘りましたそうです、そうすると女中が豫て夫人の言葉に今晩の物を明朝まで圍ひてたべると、身體に障はるからそうしてはいけないと承つて居るけれども、こんなに澤山殘つて居るのを明朝まで置かないで捨てるのは勿體ない、それてあるから是れは一層今夜皆喰べて仕舞はう、そうすれは明朝に殘さないで好いと思案をして其おあえ物を一人で皆喰べて仕舞つたので御座ります、それから夜分にお腹が痛んで暁方から瀉の樣な病氣が始まつたと云ふ次第であります、今夜の物を明朝に廻はさないで勿體ないからと云つて喰べたところは、働きの樣にありますが、其爲に病氣に掛つては倘ほ勿體ない次第て御座ります、まして翌朝まで殘いて腐れかゝつた物なとを勿體ないからと云つて喰べるのは甚た不都合の事であります、是れてありますから、婦人方でお料理や勝手元の事を扱ふものは、此の勿體ないと云ふて大切な身體を腐敗物の捨場にする習慣を廢なければなりません、時分柄食物には殊に注意をすべき時てありますから、此の「勿體ない」を流行らせない樣に致したい事と考へます、「勿體ない」が流行ると、從つてよくない病氣が流行り出す原因となりますから、食物の取扱ひには必ず身體の養生と云ふことを忘れない樣に致さなければならぬ次第てあります。

海水浴のはなし

一風ふ惜んで百錢を毀ふ

糸左近

蒸籠てむさるゝやうな時節も愈迫つて來た、書物を讀むにも倦み易く、仕事するにも懶い、偖何うしたら可からうと、熟々考へて見ますに、恐らく海水浴に勝るものはありますまい、浩渺たる水に垢を落し、萬里の風に肺を滌め、日頃の苦しみを遠く潮に流しやることの樂しさは云ふも更なり、其の衛生上に偉功あることは、又格別であるいでや、其の理由を手短に述べて見ませう。

海水は一種の鑛泉　即ち鹽類泉と看做すべきもので、百分中二分半乃至三分の鹽類を含んでゐる、さうして

其の鹽類は重に食鹽で、格魯兒加兒叟母・格魯兒麻倔湼叟母・硫酸硫逹・曹酸加兒基及び沃度抱合物なども含んてゐる、であるから、これに浴すれば、胃腸病・肝臟病・子宮病・皮膚病等に善いのてある、殊に海氣は酸素を含める量が多くて、炭酸を含むことが少く、其の外瘴氣有害の瓦斯及び有機物の浮んでゐる者も甚だ少ないから、肺臟に功あることはいふまでも無い、故に人躰の酸化作用を進め、食欲を興發し、躰重が増し、精神が爽快となつて、四肢が活潑となる、海水は又其の波動あるが故に筋肉及び神經にも興奮を與へ、ために歇私的里性の婦人などには至極宜しいものてある。

海水浴には冷浴と温浴とあるが、冷浴は大抵一般の人に善く、温浴は冷浴に堪へられぬ人即ち至極弱い者及び老人小兒などには善い。

海水浴は陸地の海邊よりも、孤島の海濱が善い、孤島は氣候も朝夕均しくて、而も波動は孤島の方が強いから、筋力を强め、神經を興奮させる、又一般に、風景に富んだ所は固より心を樂ましむるから、尚一層に宜しい、緑も溢れさうな松が、波に届きさうになつてゐる間から、白帆の往來する樣など眺めながら、親しき友と共に海水浴を行うてゐたならば、仙境に遊ぶの思をなすてあらう。

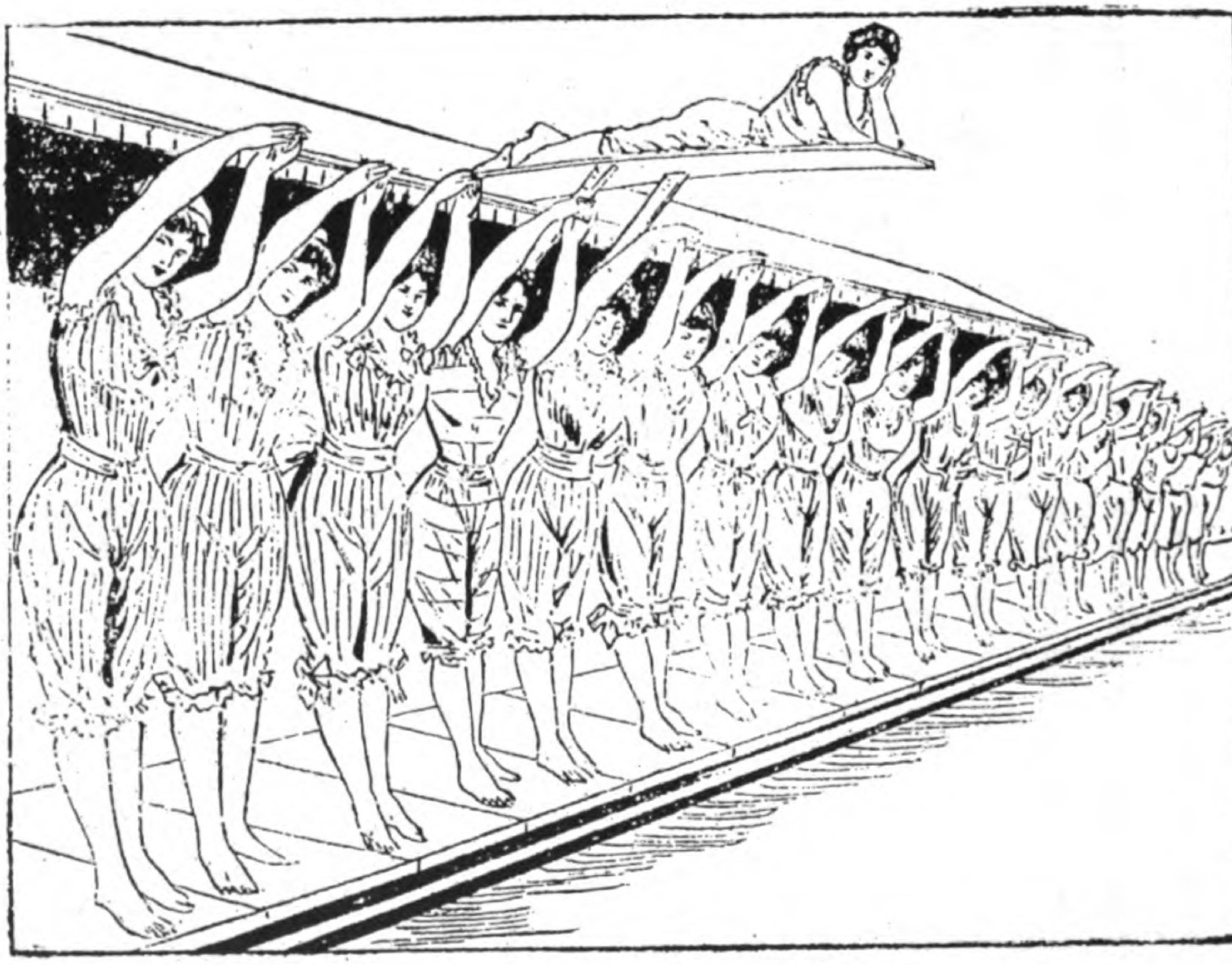
海水浴を行ふ時期は、七八九の三箇月が至極良い、浴地に赴く途中は、可成精神と身躰の疲れぬ樣にせねばならぬ。

浴する日數は之を一定することが出來ぬ、けれども大概二十五日乃至三十日位が通例てある、一日に行ふ時間は、初は一日一回、午前八時から十一時までの間に、五分間乃至十分間位が丁度良い、慣るれば一日二回位にして時間も二十分程にして午後に一回入浴するも差支は無い。

浴を出た後は、疎い木綿を以て全身を摩擦することを忘れてはならぬ、斯樣にすれば皮膚の抵抗力を増し、血液の循環を盛にし、容易に感冒をひかぬやうになる、これは海水浴ばかりでなく、平素夏冬に拘らず、冷水で身躰を洗ひ、乾いたもので擦ることは、年中無病に暮す

唯一の法である。
海水浴を始むるには、常に酒を嗜む人は禁ぜねばならぬ、これは婦人方には餘り無いことなれど、若しも嗜て止められぬ方があるならば、至極少量に善い酒を用ゐねばならぬ、凡て神經系を刺戟することは、非常に宜しく無い。
衣服は餘分に着て居ねばならぬ、海邊は水蒸氣が多いから、日暮から外に出ては甚だ宜しくない、夜は八時半頃に寢て、朝は早く起ることが至極必要である。

開[illegible]女學生海水浴の練習



晝間睡つては非常に宜しくない、晝寢する位ならば、海水浴に行かぬがましであらう。
食物は朝は米飯、麵包一二合の牛乳位とし、午には新鮮なる海魚少量の鳥獸肉、芋類、能く煮たる菜などが可い、晩には成丈淡白な食物即ち數半熟卵などの類が適當である
浴場に在ては適宜の運動及び遊戲は仲々必要なことである、されど徒らに憐な小說など讀んで、涙を溢してゐるやうなことは、感情の强き婦人方には、殊けて宜しくない、返

すく〱も、善く氣の合つた友達と、琴など彈じて、濱の松風と習々颯々、天然人工の美音をたゝかはしたならば、聞くもの琴か松か將波かと疑ふてあらう、兎に角平生の活計上のことなどは打ち忘れ、無邪氣に日を送つたならば、是れだけでも命の洗濯が十分できるであらう。

今一つ申し上げておきたいのは、道理の分らぬ頑固輩は、婦人が海水浴をするのは優美てないとか、或はお轉婆然としてゐるとか、或は又色が黑くなるとかいふてとてある、今一々之を辨駁しておくことも、必要てあらうと思ふ。

若しも海水浴が優美を欠きお轉婆然としてゐるならば、普通の入浴は尙更卑しいものであらう、して見ると、垢を附けて、桶の女然としてゐるのが、優美といふものであらうか、取るにも足らぬ論である、鹽水は色が黑くなる、とはこれ又何の依り處もない說である、成程深窓の下に閉ち籠つて、穢い炭酸瓦斯はかり吸つて居らば、段々顏色が蒼白くなつて、胃病や肺結核の苦しみは受けらるゝであらう、けれども花々とした顏色は、能く大空に觸れて、皮膚の丈夫な人てなくては、望まれぬことてある。

兵庫神戸の海岸は、北方に山を負うて、寒氣を防ぎ、白砂廣く平斜面をなし、岩石の危險も少ないから波動は大洋中の如くには強く無い、けれども其の外萬事善い處と余は鑑定してゐるのである。

化粧の話

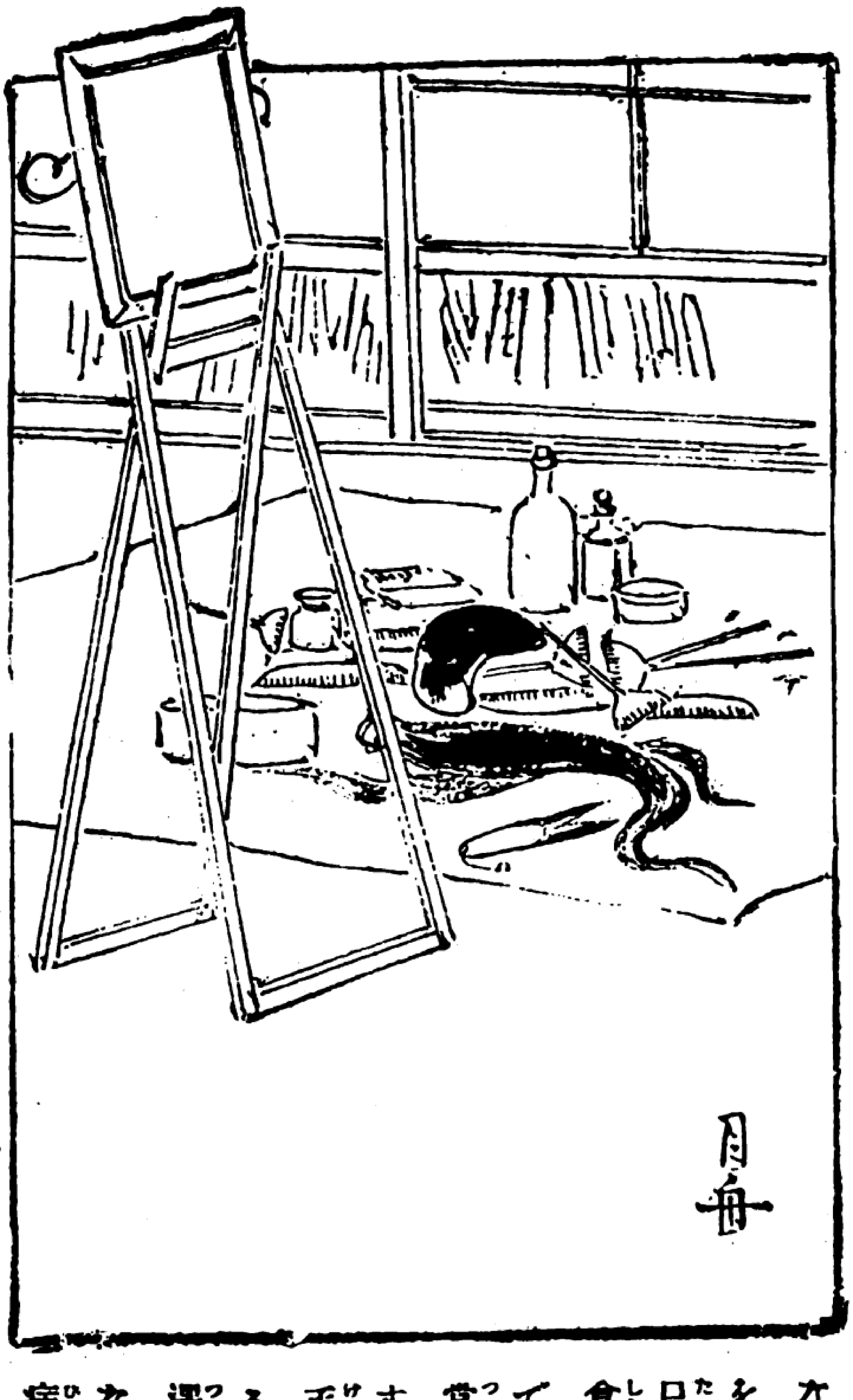
天は萬物を人に與へずして其個に與ふ

藥劑師　清水如水

▲髮毛のと

前日の紙上に於て皮膚を美麗ならしむることに付て、聊か心得となるべき節々を手短かに述べたのであるが、今回は髮毛の話を少こし致して見よふ、髮毛も婦人に取りては唯一の寶で、小說やなどにも能く綠の髮に雪の膚などゝ謂つて、美人と云へは必す其髮毛は奇麗な

者としてある、のであるがまことに、婦人は髮形で總々く
としたる黒髮の長く匂ひやかなほど凛々しき者はない
處で此髮毛と云ふものは何んな者であるかと云ふに、
區分て見ると丁度
植木の樣なもので
毛囊と云ふ根に依
つて生て居るので
ある、それで髮毛
から云へば頭地は
畑で此畑に肥料が
足りなくなつたり
荒れたりすれば直
に色澤を失ひ、或
は灰白色となり、
或は棕櫚の樣にな
り、終には枯野の薄其儘の見難ひ髮毛となる
イヤ是はまだしものと頭髮から眉毛、睫毛、腋窩陰毛ま
て全部脱落するとさへある



▲髮毛に光澤を保たしむる法

前にも述べたるが如く、髮毛は植木の樣な者で、頭地は畑の如き者であるから、充分其畑に肥料を施こさねばならぬ、此肥料を施こすの法は只常に滋養物を食すれば宜ひので常に滋養物を食すれば、從つて毛の養も良くなるから、毛に色澤が出て奇麗になる、夫れは肺病患者の如き常に滋養分の不足する人の頭髮に、色澤のないのを見ても明かである、又熱病、難産、梅毒「シラクモ」「タムシ」等の爲めに脱落るとがあるけれとも

▲熱病、難產等の爲めに拔けたる頭毛

これは多く打捨て置ても、體力の違者になるに付けて再び發生するものである、此場合に用ひる藥品は多く刺戟劑て、ヒロカルピン、泄淸丁幾、番椒丁幾、山椒油、芥子油等て初めは生毛の樣な軟かき毛を發生し、漸次に太とき毛を發生して一二年位もかゝらねば舊の如くにはならぬとがある。又髮毛は常に加里石鹸にて洗滌せねばならぬ

▲髮毛の洗滌

婦人の髮毛には常に油を附けるから、垢が付き易くて掃除がし難ひから「フケ」や垢が腐敗れて粘液性なり能く一種の忌やらしき臭氣を放つ者てあるが是を能く掃除をせぬと毛が拔ける樣になり色澤も惡しくなる、殊に小供の時分には能く頭部に「シジクモ」「タムシ」などが出來る者てあるから、始終加里石鹸の如き者て洗はねばならぬ、是等の病は多くは毛が脫落ちて禿てしまはねば治らぬから恐ろしいのてある、そして洗つた後には椿油の如き者を塗布て、毛を軟かに保たせねばならぬ椿油は八丈が島の名產て、頭毛には屈强の養となる樣てある、此油を始終に塗布すれば只髮毛を美麗ならしむるばかりてなく、非常に長く延ばしめるものて、八丈ヶ島の婦人などに往々髮毛の地を延くものあるは、此油を常に用ゆるに依るとのとてある、此油は大概壹升が七八十錢から一圓迄位のものであるけれ共、眞の椿油は素人ては、見分けが付かぬから姦商の輩は種々な油を椿油と云つて販賣して居るのてある

髮毛の取扱を丁寧にせねはならぬ

日本の髮の結ひ方は、その取扱が酷ごたらしくて、頭髮の養生には甚だ宜ろしくない、即ち余り嚴しく締める爲めに中央の部分は必ず脫落ちて禿となつて居る、仲居藝人などに殊更ら多ひと云ふのは素人よりも髮を結ふ事が多ひからであらふ、けれ共當今は昔に比らぶれは何程か進步したので、以前ヤッコ―、とか、兩輪などの流行した時分には後ろに高髷と云ふ髻刎の面の樣な者を容れて居つたので、後頭部の兩方まで禿となつて居たのてある、近頃上卷とか、夜會髷とか云ふ者が流行する樣になつたのは、誠に婦女子の爲めに悦ぶべきよ

で、私などは或る可く此髪を流行させたいと思ふ、此髪は實に雜作もない結ひ方で、何んな無器用な人でも少こし手徹るれば一人手に結ひ得るから、第一髪毛の衞生に宜ろしきばかりでなく、經濟で、掃除も仕易ひのである、

▲髪結道具

の如きも必ず常に掃除して成る可くなれは、石炭酸水の如き者を以て消毒し、油を塗りて何時にても使用し得べく用意し置き、苟めにも髪結女の道具を以て結はしむる者ではない、櫛の如きは猶更ら用心しなければ、若し(カサ)や(タムシ)などの頭髪を櫛りて其儘ならんには、之が病毒の媒介になるのである、一旦頭部の如き掃除のし惡ひところに斯る病毒を傳染すれは、之を全治させるとが中々出來難ひのである

▲ちゞれ毛を治す法

これは美男蔓又は桐の葉の莖を五六分位に切りて溫湯に浸し置き其汁を以て髪を洗ふ度に付くればよしと云へり、毛のちゞれたる人は試みるもよからん、市中にある性の知れぬ素人の調製たる香油白髪染などを用ゆるは、只毛を傷けて脆ろからしむるとあるばかりでなく、頭の地を害ひ脱毛せしむるとあれば、注意を要せねばならぬ。

土用ぼしと洗濯

婦人の美貌は大なる財産なり

黄菜女史

●衣服の貯藏法

長持の底に鼠の巣を拵え、簞笥の抽出に黴を生ぜしむるが如きは家婦の不注意と言はさるべからず、既に一通りの簞笥あり長持あり押入れありて、其上に納むべき幾襲の衣服ある以上は、衣類の仕舞方即ち貯藏の方法につき、一家の主婦たるものゝ委しく心得へ置くべきの責任なり、おい〳〵夏も三伏の暑に向ひたれば、玆にて貯藏の方法に關して最も大切なる事項をを述べん、元來衣服に每年二度づゝは必す土用乾と寒乾とをなすべき事、又衣類は每月兩三回畳み直すの必要ある

事、且つ着物の疊み目には綿を挾み置くべき事、その次は簞笥の内に虫除を施さゞる可からざる事等。注意の件々なり。

（第一）土用乾の必要なるは世間既に之を知れり、然れ共未だ寒乾に至りては其有益なるを知らざるもの多く之を行ふもの誠に少なし、暑中土用の風に當て丶大氣に曝すは、能く濕氣を除きて虫喰みの害を防ぐが故なり、然れども土用乾を行ひたるのみにては、決して滿足すべからず尙又寒中嚴冷の氣に當て丶充分に乾燥せしむべし、是れ又濕氣と汚氣を取く除くの効用あると共に、土用乾の殘餘、及び其の以後發生せし食衣虫といへども皆悉く驅逐し終る可し、故に少位の手數を要するも毎年土用乾と寒乾の二つは忘るべからず。

（第二）土用乾をなしたる上に寒乾までなさばそれにて手入れには遺憾なき樣なれど、尙ほ充分とは言へざるなり一ヶ月に二三回簞笥又は長持より貯藏の衣類を取り出し之を疊みなをすの面倒を見ざるべからず、こは實に馬鹿らしきよの樣なれど能く其の理由を察する時は、二個の大なる特効あり、一は其の折々の空氣を吸はせて簞笥内の蒸氣を散すると、一は疊み直す毎に幾らか折り目を違へ行くべければ、永く一所のみ壓搾するより起るところの折れ目切れ目又は仕舞ひ擦れ等の憂を來すことなし、かるが故に特に大切なる晴衣等の爲には是非とも疊み直しの、面倒を見て置くを得策とす、然れど之を行ふには好き天氣を撰むが肝要なり、曇天、雨天は、勿論殊に霧摸樣などの日には却て衣類に濕氣を與ふるやうなるものなれば、成るべく外氣に觸れぬ樣心掛けて仕舞置くべし、この事は木綿物にても、毛織物にても、皆同樣なれば、決して疊の上に直接に擲げ置きたり、又たは衣紋竹に掛け置きたり、などなすべからず、濕氣は織物類に大毒にして遂には黴を生やし食衣虫を醸す等の事屢ゝあればなり。

（第三）着物の折切れを防ぐには、前の方法を行ひて疊を直す時に、尙又た新らしく柔かき木綿を着物の疊み目の間に挾みおくを良とす、此の道理は解り切つたることにて別段說明するの要はあらねば、唯だ世の貯藏

家に對しこれが實行を庶幾ひ置くの外なし。

(第四)以上の方法を實行すると共に尙ほ必要を感ずるは、簞笥及び長持内に豫め蟲除を爲し置く方法なり、されども是は別に六ヶ敷ことにあらず旣に汎く世に行はれつゝある香料(樟腦の如きを)衣類の中に添へ置くこととなれば今更改めて喋々するに及ばねど、その香料を用ゆるにつきての注意を少しく述べざれは折角の說明も無益となるべし一体絹物に樟腦を用ゆるは甚だ惡るし其の故は樟腦は餘りに香氣の性質激烈に過ぐれば、却つて衣服の質を痛めその色合を變色せしむる恐れあれば樟腦の代りに麝香か(これも强過ぎては不可)丁子を用ゆるを最も安全の方法とす、然れども毛織物又は毛皮類に至つては樟腦を第一とす、次に最も利目ある方法として近來多く行はるゝは松の靑葉を取り、それを水一升に炭酸曹達四合を溶解したる鍋の中に入れて沸騰せしめ、よく煮え立ち泡立つ頃を見て、その汁を適宜の器に移し、而してそれを平に振りかけ置く仕方なり此の法は一度澤山のものを貯藏し置くには最も便利なる仕方にて、それが爲め惡臭を帶び又は地質を痛むる等の憂少しも無しといへば、貯藏に心を煩はす方々は速かに實行されん事を望む

●洗濯物の心得

大勢の家族を持たるゝ家の主婦は洗濯に就て一應の心得あるべき事なり洗濯をなすには一週間の中土曜日なり日曜日なり定めて每週なすをよしとす此日には一切の汚れたるものを一度になす樣定むべし、斯くする時は時間をはぶき石鹼桶盥の類にも利益多し、勿論小兒のある家にては時々汚れ物あれば定まり通りに行かざるも先づ大概の洗濯物は斯くあることと家の爲め婦人の便利宜しかるべし又洗ひ物多き夏日にありては主婦自ら每朝起き出で二三枚づゝの洗濯をなす事と定め置き之れを每日實行いたす時は身体の運動となり健康上大に利益あり且つ一日の手廻しよく下婢の手助となるなり。垢つきたる着物を着くるは外見宜しからざるのみならず大に健康に害あるものなれば婦人たるものは能

く精を出してなすべし、されば家内に若し垢染みたるものを着るときは其家の婦人の恥辱と知るべし。それより少しく洗濯に就ての順序仕方を述ぶべし。

▲洗濯の順序心得　先づ洗物を採り揃へてソーダ或はしやぼんの用意をなし粗惡の着物を着け、毛織物や絹の類は別に洗ひ白きもの黒きものとを別に洗ふべし、然らざれば黒き水が白きものに着て清くならざるべし而して石鹸を用ゆるには先づ盥に程能く溶解して置き此水にて洗物を能く洗ひ倘ほ斑のある處に又再び石鹸をつけて洗ふべし、斯くすれば、しやぼん少しにて宜しく又着物に洗ひ斑の生ずる事なし、洗ひたる後は三四回清水にて灑き出し日光のわたる處のさほにかけて干すべし。絹布其他は別に記さん

▲垢の取方　垢の固着したる者を洗ふには熱灰汁最も好しと雖も地質を損ずる故大抵の者は冷水灰汁、或は微温灰汁にてなすべし、衣類の襟垢を除くには軟き餅を少し煖め、又は焼立のパンの軟かき所にて拭ふべし揮發油を用ゐし時は後微温湯にて濯ぐべし、衣服にろうのつきたるは熱灰を紙に包みて脱くるまで上よりおすべし灰の熱氣去れば取更ておすべし。

▲油垢の取樣　油垢のつきたるを落すには熱湯に鹽一握りを入れ能く振りて少しさめたる時に洗ふべし。又うどんの湯にても宜し、

血の付きたるは清水を口にふくみて濺ぎかけへ洗ふべし又少し計りは唾を關心にうるをしてこするもよし。

墨は飯粒をもみつけて洗ひ落すべし。ベンキ類はテンピン湯を布に浸して拭ふべし洋墨は水一合の中に醋酸兩三滴をたらしたるにて洗ふべし。

醋又は梅酢にてもおちるなり、但し醋酸多き時は布の質を損する故に注意すべし。

汗のつきたるは清水にてはたく／＼とふりそゝぐべし、東京にては大概石鹸のみを用ゆるが石鹸に廉價なりと雖も一個にて四五枚の衣を洗ふに足るのみ用ゐ方により二三枚にても消費すべし、されど灰汁ならば別に費用を要せずして無盡藏なるべし、殊に夏季洗濯の多き時には經濟を思はゝ灰汁桶を備ふべし。

▲灰汁桶の拵へ方　は酒か醤油の樽の鏡を抜き去り底より二寸許りの處に實を拵へ(木二本を渡して其上に割竹を打付る也米とき籠又は笊などの損じたるを切つてならべるもすし)其上へ棕櫚の毛(箒の古く損じたるをくずしてもよし)を敷詰其上へ灰を入れ下の空虚なる處に口を設て何にてもすき程の臺に乘せ向へ少し木切れるかひて前方へ傾かす、口の下に盥を受て洗物を入れ置き灰の處へ水を汲込め　は棕櫚にこされて、清みたる茶褐色の汁垂るゝなり、茶灰汁に漬置く事一夜すれば血の付きたるなど勞せずして脱去るなり三度斗りもせば上皮の灰を取捨て新に加ふべし日々竈及び火鉢の灰をふるひたる糟にて澤山なり甚だしく汚垢付たる物はたて灰汁と爲す其法木綿の布にて袋を拵へ灰を入れて口を括り熱湯を盥に汲て袋を漬けて振れば細き灰粉出るを搔き廻して洗物を漬浸して何成共蓋して暫經て手の漬けらるゝ程に湯のさめたる時洗ふなり、但し此立灰汁は殊の外手の荒る物なればあれ性の人は手をふれずして棒にて突洗ひとすべし、油手ならば揉みても別條なし、扨清水にて二三度濯洗するなり。雨水は洗濯に功能ある物なれば梅雨などの時必す空しくせずして大盥を庭に出して受けて蓄へ置べき也、

▲色物の洗濯　は熱湯を用ふべかず、米水、豆の煮汁等より汚垢は卵の黄味にて洗ひ清水に浸して最終に水二升五合に綠礬の澄液四十滴斗を和して暫く浸し置て絞て表裏反して風に乾すべし(大陽にあつれば色かわる事あり)

▲乾もの注意　惣て何にても乾物は速に取入決して長く干置べからず夏日は凡そ二時間餘にて乾く物なり雇人などはとかく面倒がりて日暮迄も捨てをき甚敷は取入れずして夜干する事あり、日中長く干たに宜からぬを増てや夜露に曝すは地を損じ弱らす事甚し夕方に乾かずは一先づ取入れ明朝改めて乾すべし、竿竹も無用の時には成るべく取入る事を忘るべからず東京の家屋は軒短くして竿竹など入るゝ所なき儘に物乾場に其儘掛置習慣と成り取入らるゝ家にても捨おくが故に日光に燒かれ雨風にさらされて破損速やかなり

狹き家はいかにもせん、少し手廣き家ならば工夫せば取入場なきには限らず乾物を取入るゝと共に竿をも片付ければ其儘にして一年にて朽る竹も三年四年と保つ事受合なり。

室内山水避暑のしをり

千山萬水樓主人

黄梅連旬の雨霽れて爍天熱地の炎帝は來れり、如何にして暑を凌がんか、温泉か、海水浴か、登山か旅行か、滿天下の學生は夏季三ヶ月の休暇を利用して各々その志す所ろに向ッて行かんされど、高山に登り、大海に航し、深谿幽谷を跋渉して肉體を練り、精神を鍛へ、以て雄大壯烈の氣象を養成するの必要は必らずしも靑春の學生のみに限らざるなり、西洋諸國の家庭は夏季に至れば各自相合同し、團躰を結び以て一年一度名山大澤を遍遊跋渉するの壯擧ありと聞く、冀くは我が國民我が家庭に於ても又此の如く旅行的國民とならん事を是に於てか千山萬岳を紹介するの必要あり、天下の著名の温泉場海水浴、若しくは風景の絶群にして避暑納涼の好適地を撰びて聊か夏日壯遊の栞となさん。篇中温泉場あり、海水浴場あり、山嶽あり、瀑布あり、神社佛閣あり。各々その撰ぶ處ろに任せて出遊を試みんか、夏日の快樂又少からざるべし。

▲金澤八景(武藏)

武州は勝概の地少なからず、金澤は其冠たるものなり地は横濱の南四里久良岐郡の南端にあり、三面丘陵を負ひ東方江灣に臨みて、一碧滄溟に連り、千里の風光網りなし、小丘あり金龍山と云ふ。其巓上に小亭あり名けて九覧亭と稱す、以て金澤の八景を一眸に斂めしむ、其所謂八景は、洲崎の晴嵐なり、野島の夕照なり、稱名寺の晩鐘なり、平潟の落雁なり、乙艫の歸帆なり、小泉の夜の雨なり、瀬戸の秋月なり、内川の暮雪なり、亦江口に烏帽子、夏島の兩島あり、八景と共に合せて眸中に入る、此地往昔は能見堂を以て八景全望の所とせしと、今は廢れて古昔の觀なし、灣水深く浸入して江を爲

す、之を内川と云ふ、江口の左方に小丘あり野島と云ふ、小島にして陸地と相連續す、夕照明滅の景眞に賞すべきの觀なり、其左方海邊に打つゞく松林一帶の邊、樹間に青波を認め、蒼空の相蘸くるの所、帆風を孕める片帆の走るを見る、若し夫れ、仲秋月明なるの夜、扁舟に掉して江中を上下し、若しくわ三伏炎暑の日、海中浴し來つて朝暮に此絶勝を見る、蓋し爽神快魂の極なるべし、京客にして此地に遊ぶものは鎌倉より約一里半にして達す。横須賀より舟行すれば二里餘、旅亭、清潔にして京客を迎ふるに適せり

▲四萬温泉(上野)

上毛の地幽山深谿多し、随つて冷泉温浴の湧出するもの又多し、其名聲は元より草津、伊香保と駢び對する能わずと雖も近來避暑の地として稍々將に俗唱に上らんとするは、上州四萬温泉なり、温泉場は前橋を距る西北十二里に在り、吾妻川を渡りて數丁峯巒の奇躰を現はす處、緑松欝茂して心氣頗むる爽快を覺ゆ、稍く山峽に入つて地増々幽邃、勾配緩く上りて四萬の地に到れば、四方繞らすに高山峻嶺を以てし、水色澄明、岩石潔美、旅亭數宇あり宿料極めて廉、温泉は主治消化機の諸病によし就中鹽の湯、岩根の湯、明治の湯、等最も奇効あり又東北二三丁の所に日向見の温泉あり、水質透明浴槽中一纎の塵なし、又湯瀧數ヶ所あり、傍に日向見の古堂あり、螺石山、水晶山、小倉瀧、等風景の美云ふべからず。

順路は前橋より澁川町まで、鐵道馬車あり、賃錢十五錢を以て通ず、澁川より中の條町へ五里中の條より四萬温泉場まで四里十七町、澁川にて人力車を傭へば、一圓餘にて往くべし、道路は山に沿ひ、川に跨り、其間青田桑圃幾回、轉じて景色漸く幽邃、眼界漸く峽窄して、一歩一歩に仙郷に入るの思ひあり。

▲磯部の鑛泉(同上)

中仙道を磯部の停車場に下れば字鹽の窪と云ふ處に鑛泉の湧き出づるものあり、頻年繁榮して人家既に數十戸磯部の温泉宿是なり、地勢稍く北に向つて低下し稻田桑圃其周圍を擁して宛も甕底にあるがごとし、而し

て北方一帶碓水の溪流に瀕して清溪掬すべし、浴舘の大なるは共壽館と爲し鳳來館、山城軒是れに次ぐ、何れも新築にして清潔喜ぶべし、景色は淺間山の噴煙、妙義山の奇巖削峯の散策によく浴後の賞翫に妙なり

▲板鼻鷹巢山（同上）

上毛の地、名山勝地枚擧に遑あらず、中に鷹巢山を稱す、地は高崎の北二里に在り、山高からずと雖ども、風景に富む事近郊に冠たり、直立數百丈、半腹にして上毛の平野を眼下に俯瞰すべし、前橋の市街は前にあり、後ろは名に負ふ伊香保にして連山綿々として榛名に接す、頂上に琴平神社あり、朱樓紫殿の裝ひ壯嚴端麗なり、山麓に碓氷川あり、屈曲透迤として長蛇の如く、水清くして多く鮎を產す、旅亭に片本陣朝日樓等ありて料理巧みにしてよく京客の口に叶ふ。

▲房州舘山

この地海水浴は北條にあり、東南北に山を負ひ、西相模灘に面し、海風爽にして暑熱烈しからず、海は一帶遠淺にして波穩かなれば婦人小兒を携ふによし、午前六時東京靈岸島よりの小蒸氣船に乘れば、海上穩かにして正午北條へ着す、朝暮の景色に富士を望み、海岸の賞遊尤もよし、船を傭ふて沖の島鷹の島へ渡れば、奇介異草手に任せて拾ふべし。

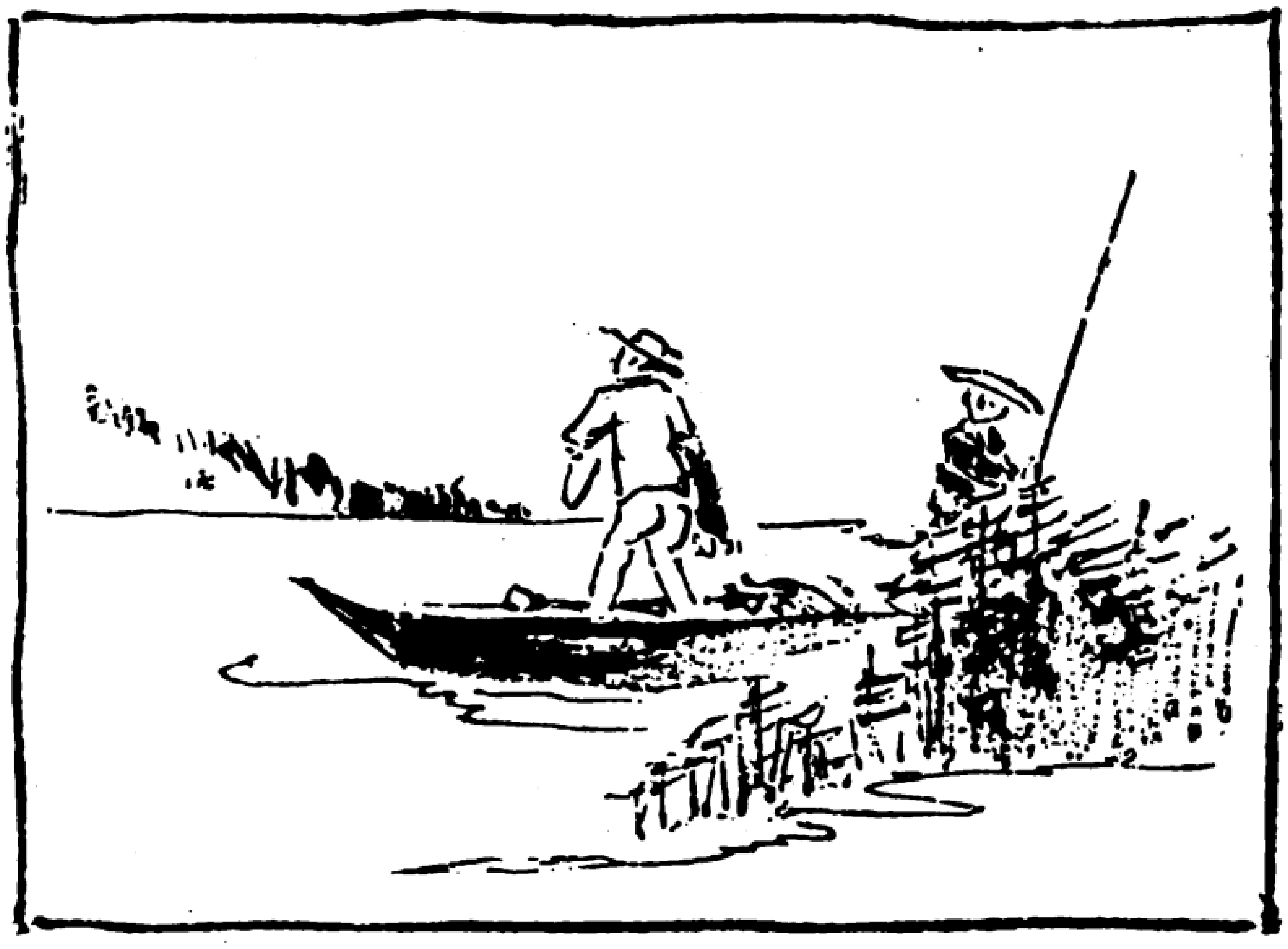
▲鵠沼の海水浴

鵠沼の海水浴は東海道線藤澤を下車し海岸へ下る事一里に足らず、南方相模灘に面して眼界濶く、西、函根の山嶺を控へて青巒疊々翠黛眉間に迫る。海濱の白砂銀の如く、一望數里に亘り、其間青松綠陰の涼味掬すべく更に眸を轉ずれば東方砂洲の盡くる處に江の島あり、白帆點々として其周圍を旋ぐる風景の絕美關左第一と稱す、此地海濱遠淺にして波靜かに海水浴場として好適の地といふべし浴館を鵠沼館といふ夏日の鮮味食ふべし。

▲銚子の海水浴

銚子の町を距る南方里餘、奇岩怪石海中に露出し、巨松崔嵬風致の掬すべき處にあり、東南太平洋を控へて一

眸千里涯際見ざるの處、遙に汽船の航行するを見る、西方は煙霞糢糊の間に九十九里の瀕頭、房州の諸山を望み、颯々たる清風洋面より襲ひ來て心身の爽快殆ど人をして三伏の苦熱を忘れしむ、浴舍に曉鷄館、洪洋館、水明樓あり、元より大厦高樓の構なしと雖も、清潔にして客に適す。此地海濱に一大凹岩あり、滿潮の時浸入せる潮水の退潮の後猶其內に殘留せしもの日光に熱せられて忽ち天然の溫湯となり、遊客其中に入て沐浴遊泳し、且つ手づから章魚を捕獲し以て食膳に上す事を得べし、名に高き犬吠岬の燈明臺此處にあり、水面を抜く事數十丈其他、犬若、海馬島の風景あり、燕岩、帆掛岩、等の名勝天工の妙を極めて人をして轉た駭愧せしむるものあり。



▲九十九里濱(上總)

渺茫たる蒼海、轟々たる怒濤、漁船集まつて相呼應し、銀鱗網中に潑剌し、白沙帶上帆片、五六是れを九十九里濱の光景とす、海水浴の好適地、納涼避暑に最もよし、東京本所停車場より汽車にて行けば、僅かに三時間にして大網に至るべく、大網より四里、腕車あり徒歩も又よし。

▲福渡戶溫泉(下野)

鹽原溫泉八個所の內、最も有名なるものを福渡戶と云ふ、溫泉は村の入口畑中にあり、川を隔てゝ岩窟より湧出せるを岩の湯と云ふ、冷溫一浴あり、客舍は皆二層樓にして、橫野屋、吉野屋、磯屋、山形屋玉屋、和泉屋、松屋、叶屋、丸屋の十一戶盛夏の頃に至れば何れも浴客百人以上を塡充す、鹽原山中の溫泉は、客室每に戶棚、俎板、庖丁、其他世帶道具、一切を備へて自炊者に貸與

するの便を設く、故に近隣の村民皆米糰を携へて來り入浴するもの多し、尤も客舍の上等室には花氈敷皮其他の裝飾品の備へ附けあり、浴客の群來するは夏秋の二季にして、酒を飲み、餅を啖ひ各自歡を盡して笑聲喧語、加ふるに絃妓の興を助くる者あり、爲めに樓上樓下熱鬧湧くが如し。此地以前は交通の不便なるを以て、物價非常に貴かりしも、近今道路の開鑿されし以來、貨物輻輳して客の需用に不足せず、泊價亦低廉にして山中と雖も海の鮮鱗を食ふべし。

▲日光の山中

瀑布の幅員二丈餘、直下七十丈、斷崖皆老いて水煙半空に舞ひ、岩燕群り飛びて銀河の九天より落つるが如きもの、是を華嚴の瀧とす、霧降りの瀧、裏見の瀧、幸の湖男體山、女體山の如き、山光水色、行くとして奇ならざるなきもの、是を日光山中の光景とす。若し夫れ、廟觀金碧の麗且美なるに至りては是に說く事を要せず。上野停車場より東北鐵道に乘ぜば四時間にして達すべし。

▲伊香保（上野）

高崎より小道四里半、群馬郡の西北連山の嶮しき中腹にあり、南は山を負ひ北は谷に臨み温泉場の人家三百餘棟、皆半腹より側壁によりて市街をなし、崖を削り石を疊み家屋は層一層より高く其樣梯梯の如し、町は湯坑を距る十町の山背にあり、一大筧を以て是を導き、縱横市街に曳き以て各々浴槽を設く、地盤は海面より高き事二千六百尺、山間青嵐の間にありて雲氣常に滿ち三伏の暑日と雖も朝夕の嵐氣鋭くして寒冷肌に徹す、病軀保養の地としては元より、夏日避暑の地として近縣其比を見ず、此地温泉の開闢最も古くして浴客群集四時絕へず殊に夏季三ヶ月間の浴客二萬人と稱す浴館三層四層の高樓あり、翠碧の間に聳峙して常に雲氣を擁す、街に飲食店あり料理屋あり揚弓店あり玉突場あり倶樂部あり新聞縱覽所あり幽邃の裡亦自から熱鬧の市を造る。

▲高崎觀音山（上野）

上野國高崎を西へ距る二十餘町、北方妙義山脈に連亘

して松檜鬱蒼たる處、之を觀音山となす、往昔田村將軍の建設に係る、千有餘年の古刹にして千手觀音を安置し、清水寺と云ふ、山上の眺望は北に榛名を望み、東は赤城山に對して兩毛の野を下瞰すれば、眼界頗る雄大にして絶景言わん方なし、境内樹林多く地は幽靜にして翠緑滴るが如く、三伏の候と雖ども、暑熱を知らざるの仙郷なり。道路は高崎停車塲より觀音山の麓まで人力車を通ず寺院は三町三十間の高所にありて、皆石階なり。山内大門敷石五十間、左に寳篋卵塔あり是より石階百六十五段登りて仁王門あり、尚百十六段登りて馬頭觀音あり、亦た二百八十三段登りて左に御手洗ひあり、重ねて三十二段登りて樓門あり（土人呼んで舞臺と云ふ）是より二十九段登れば本尊千手觀音の御堂に至る。右に開基田村堂あり左に青銅丈六の正觀音の立像を安置す、次に客殿庫裏あり、石階總計六百二十五段、幅員九尺、山頂は即ち遊園の地にして、遠く四邊を瞰望すれば山水明媚眞に天然の畫圖を爲す



▲妙義山（上野）

妙義山は赤城榛名と併せて上毛三山の一なり。峻阪崎嶇、危巖落々、棧道を辿り鐵鎖を攀ぢ、穹々たる石門を過ぎて絶頂に達せば、千仭の巨巖崔嵬として霄漢に入り、百丈の斷岸奔湍を曳ひて深々たり、山頂に小祠あり、古苔斕斑、風餐し雨虐して幾春秋を經たるを知らず、落葉を蓐として祠傍に坐せば、山嵐淅瀝として滿山爲めに震ひ、時に猿猴幽谷に響きて帛を劈くが如し、山麓に遊雲閣あり、白雲深く鎖して塵寰の外に屹立す、食ふに山菜あり、溪鱗あり、味ひ甚だ淡泊なり

英語實習

江口操舟 (會話)

SAMMER VACATION.

A. Have you now sammer vacation?

B. Yes, Miss A, from the fifteenth of last month.

A. When will school be open again?

B. From the eleventh, next month.

A. What are you doing now?

B. Nothing particular. I expected to read some books, but I could not.

A. But I heard that you are always very diligent.

B. No, not at all. I am always lazy. Are you stadying anything Miss A?

A. Not lessons exactly, but I am practicing on the Koto, or sometimes taking a sea-bath.

B. It is the best way to improve the health during the vacation, I suppose, isn't it?

A. Yes indeed, Miss B.

B. I am intending to travel during the vacation.

暑中休暇

甲. 只今はお休みで御座り升か。

乙. はい。あと月の十五日からお休みで御座ります。

甲. いつから又始まりますか。

乙. 來月の十一日から始まり升。

甲. 唯今何をなさつて被入升か。

乙. 別段何も致して居ません。なにか本でも讀みたいと存して居ますけれどさつぱりできません

甲. それでもあなたは大變御勉強家との事を兼て聞て居ましたか

乙. いーゑどう致しましていつも遊んで許り居ます貴女は何かお稽古でもなさつていらつしやい升か

甲. 學課の方は格別致しませんが琴をさらつたり又時々海へはいつたり致して居ます。

乙. 何でもお休みの間は身體を壯健に致しますのが一番宜しう御座りますねー。

甲. ほんとうに左樣でござります

乙. 私は休暇の間旅行しようと存して居ます。

英語實習（學校用語）

Reading.	讀方	Examination.	試驗
Meaning.	譯解	Annual examination.	學年試驗
Translation.	翻譯	Mark.	點數
Spelling.	綴字	Full mark.	滿點
Pronunciation.	發音	Zero.	零點
Dictation.	書取	Pass.	及第
Conversation.	會話	Fail.	落第
Composition.	作文	Graduation ceremony.	卒業式
Grammar.	文法	Reward.	褒賞
Writing.	習字	Daily lesson.	日課
Geography.	地理	Map.	地圖
History.	歷史	Dictionary.	字書
Arithmetic.	算術	Reader.	讀本
Physics.	物理	Text-book.	教科書
Natural history.	博物	Novel.	小說
Drawing.	圖畫	Poem.	詩
Singing.	唱歌	Note-book.	筆記帳
Music.	音樂	Penmanship.	習字帖
Cookery.	料理	Principal.	校長
Sewing.	裁縫	Teacher.	教師
Gymnastic.	體操	Student.	學生
Play-ground.	運動場	Graduator.	卒業生
Library.	圖書館	Guardian.	保證人
Hall.	講堂	Tuition fie.	授業料
Lecture.	講義	Roll.	出席簿
Class-room.	教場	Present.	出席
Black-board.	黑板	Absent.	欠席

世帯のしをり

▲雷漬の法　大き大根を薄く丸切にし日に干し生姜、蕃椒を中に入れて巻き蕃椒の大さきものを小口切として其を帯となし三杯酢に漬るなり

▲百味漬の法　生姜、蕃椒、紫蘇、山椒、茗荷、白瓜、其他とりまぜ鹽壓として貯ふべし

▲鼈甲漬の法　鹽漬の茄子を丸にて鹽出して能く絞り小口切りに薄く切りて味淋酒へ凡そ一ヶ月程漬け茄子透となる程に成る時用ゆべし

▲梅汁漬蕃の黴ぬ法　蕃の水氣を能く去りて梅汁に漬け後芥子を絹布に包み器の底に入れ置くべし

▲栗子の粕漬　栗子の疵なきものを撰び桶に酒の粕を充分入て栗子と栗子とあたらぬ樣にして漬くべし

▲蕗の水漬　蕗の葉を取て莖を生にて皮を剝ぎ鹽漬となし葉ばかりを擂盆に入れて擂にて揉み青き汁を取り其汁を莖の鹽漬の中に注ぎ入れて重き石を置き壓すなり用ゆる時は鹽出しすべし生蕗に異なる事なし

▲捨小舟の漬法　白瓜を二ツに割り中實を取りて鹽を入れ日に干しあげ水をこぼさず五六日干乾して壺へ重れ積るなり用ゆる時は適宜に切て味淋酒に漬けて出すべし

▲生姜味噌漬　秋の季生姜の根ばかり能く洗ひ生姜一貫目に鹽五合程の割合にて鹽壓と爲し水あがりたる時一日程日に干して乾かし後味噌に粕を一割程混ぜて生姜を漬るなり

▲青梅漬の法　青梅を一夜水に漬けてにがみを取り翌日水より取りて洗ひ青梅一升に鹽三合を入れ輕く壓して漬け水揚りたれば其水を捨て洗ひ乾かして水氣を去りふり鹽にて漬くべし

▲瓜の雷漬　白瓜の中實を拔き長く剝て一夜鹽に押し梅酢に漬て赤くなる時用ゆべし

▲柿の粕漬　柿の未だ青きものを取りてへたを離し其を酒の粕に漬るなり澁氣自然に取れて甚た味よし

▲酒毒を消す法、黑大豆の煮汁か又はケンポ梨の絞り汁を飲むべし

▲酒の酔を醒す法　一杯の水に（アンモニヤ）を二三滴加へて飲むべし

▲酢の黴ぬ法　炒鹽を酢の中へ少し許り入れ置けば黴出る事なし

▲硝子壜を洗ふ法　石灰を大豆程に碎き硝子壜の中に入れて洗ふべし

▲火傷の即治法　饂飩粉を火傷の上に厚く塗り其上を木綿切にて包みおくべし

▲鍋釜の腥氣を去る法　鍋釜の中にて茶を焚き灰と爲して冷し置き後ち灰を取り鍋釜の中へ油を塗りて竈下に緩火を置て油氣を乾かすべし

▲虫歯即治法　銀杏を生にて一ツ二ツ食後に嚙てよし又ヒ子茄子を黑燒として疼む歯に附てよし

▲衣服に着きたる油を落す法　大根擦を以て油のつきたる部分へ付け置き而る後熱湯にて洗へばよし

▲疊の墨を落す法　疊へ墨の付きたるとき水氣布を以て拭へば益々廣墨に汚るゝ故之を落さんと欲せば墨の付きたる儘に乾かし置き草履にて摩擦するときは奇麗に落るなり

▲鼠を去る法　椽の下の土を取り水にてやわらげ鼠の通ふ穴を塞げば百日の間に悉く去るなり

▲蠅を去る法　古茶の粉をいぶすべし

▲板に書きたる文字を消す法　食鹽を指にて摺付くれば奇麗に落つるもの也

▲洋燈つぎの糊を製する法　上等のアラビヤゴムを一夜水につけ置き鍋に入れ之れによき程水を入れて充分溶解するまでたき硫酸カリを加へて掻き交ぜるなり其接力は能く硝子又は金具の油氣を拭取りて右糊にて接き合はすなり

史傳

マーガレット、ローパー夫人

文學士　中内蝶二

今を距ること四百年の昔、英吉利の國王、ヘンリー七世、八世の兩朝に仕へて、清廉潔白の聞こえ高く、一方には大政治家として、上下の信任一身に集まりしと共に、また一方には、大著述家として、文名天下に轟きし偉人ありき。一たびこの國の歴史を繙きたまひし人は、サー、トーマス、モーアの名を忘れたまはざるべし。

わがこゝに語らむとする希代の孝女は、この偉人の女にして、幼き時より、父が厳しき監督の下に、完全なる教育を受けたりしかば、學識に於ては、希臘、羅甸の語學に通じ、哲學、天文學、物理學、算術、論理學、美辭學音樂の蘊奥をきはめ、婦徳に於ては、溫順を本とし、剛毅の性を養ひ、妻としては良人に事ふるの道、母としては、子女を教育するの法、學びて到らざる所とてはなく、わけて文かくこと巧に、手跡いと美事にて、見る人、舌を捲きて感ぜざるはなかりけるとぞ。

されば、父の慈しみはたとふるにものなく、こなたの父に孝養をつくすことも、また一方ならざりき。人並すぐれし勉强の結果は、いつしか身體の健康を損ひ、重き病ひに冒されて、空しく蕾の花を散らさむとせしことも度々なりしも、至孝の徳、幸に九死に一生を得て、心をつくしゝ養生と運動とによりてやうやく健康を回復し、二十歳の時、ケント州エルサム府の准男爵士、ヰリアム、ローパーと、芽出たく結婚の式を擧たりけり。

親へ事へて至孝なりしマーガレットは、今や良人に事へて貞節の夫人となりぬ。鴛鴦の契いと濃かにして、樂しき春の光りはこの一家に充ち〳〵たりしを、花にのみかは、無情の嵐はこゝにも襲ひ來て、忽ち人生の幸福を吹き掃ひ、この孝女を苦しむるに至りしぞ是非も

なき。

當時マーガレツトの父モアーは、總理大臣として天下の政事を攝し、輿望を身一つに聚めて、國王の御覺え殊にめでたく、王は時々氏の邸に幸して、相携いて庭園の内を逍遙せらるゝこともありき。會ま、皇后キヤセリンの位を廢し、更にアン、ブツリンを皇后に立てむとして、王はひそかに思ふやう、モーアは、我が恩願によりて要職に在ることなれば、立后の議に左袒すべきは必定なりと、この事を首相にはかりぬ。モーアもとより、聖意に背かば、違勅を以て罪せられむことを知るものから、己を枉げて王に非を遂げしむるに忍びず。よしや此身は重罰を蒙りて、身首處を異にすればとて、いかでか、臣民たるの義務を盡さでゐるべきと、斷然意を決して諫諍せしに、果して王の逆鱗甚しく、モーアは捕へられて獄に下されぬ。

マーガレツトは、かくと聞くより驚くこと大かたならず、知己の方に馳けまはりて、父が罪の宥されむことをはかり、寢食を忘れて心を砕きしかど、寸毫もその効なく、モーアは終に死罪と事きまりてけり。

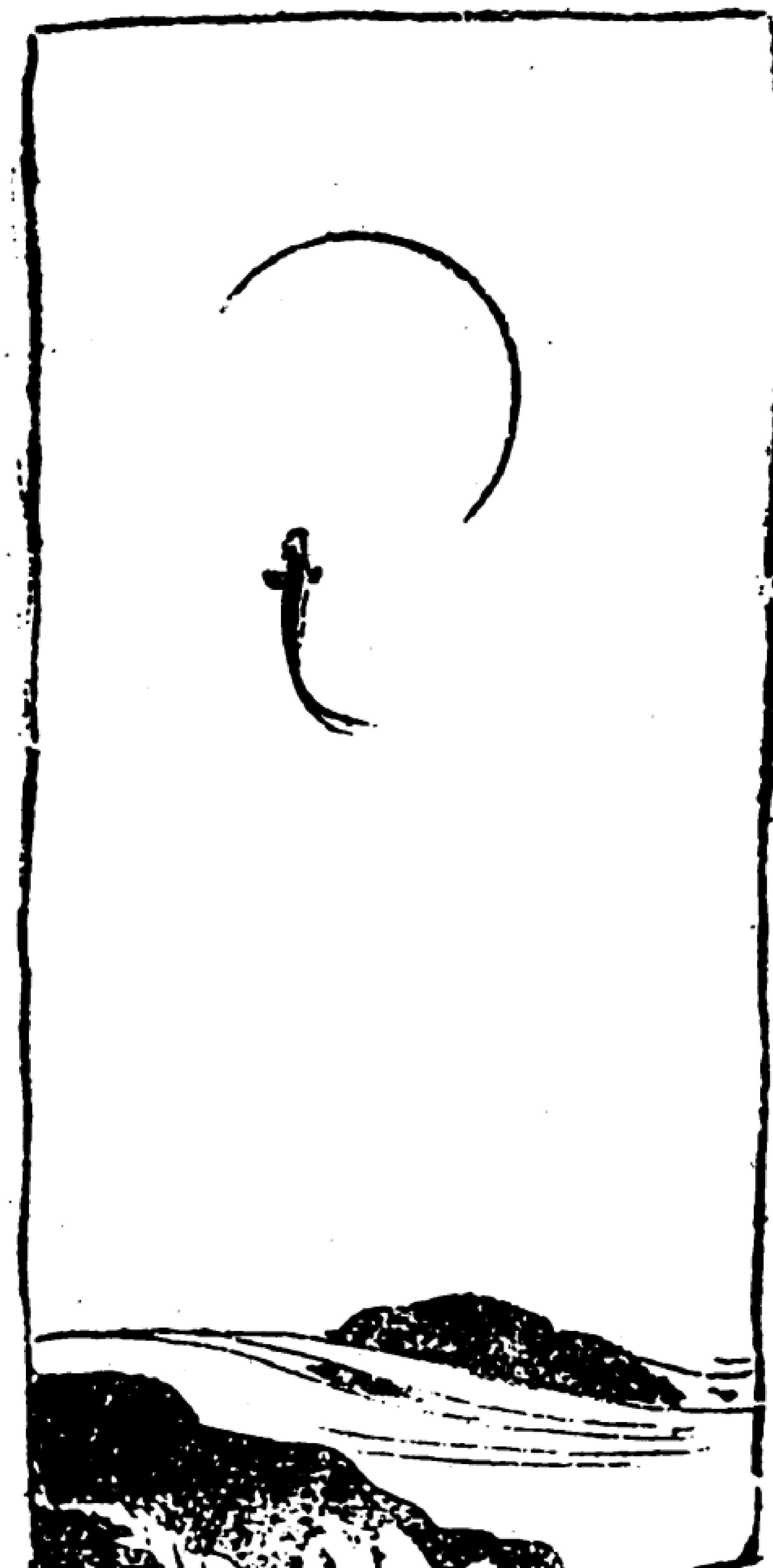
聖意にそむき奉りしとは云へ、もとより犯せる罪もなき身の、違勅に問はれて、囹圄の裡に投ぜられしは是非もなきことながら、死刑とは思ひかけざりしを、あまりに無慈悲なる王の處置かなと、恨みつ、泣きつ、マーガレツトは、悲嘆の涙に暮れたりしが、モーアは、宣告を受けたる後、一先づ獄舍へ歸らむとする由を聞きたりしかば、この世の別れ、今一たび父が顏を拜まばやと、群集を押し分け、獄卒の間に轉び入りて、ひしとばかり父の軀に取りすがりぬ。哀れを知らぬ獄卒どもゝ、これには流石心をや動かしけむ、二人が別れを惜しむを見て、敢て止めむともせざりけり。

マーガレツトは、言ひたき事、聞きたきこと、濱の眞砂子の數へつくせぬばかりにありながら、胸せまりて一語をも發すること能はず、たゞ父の顏を仰ぎ見て、さめ〴〵と涙をこぼすのみ。モーアは最早この世にては、まのあたり娘に逢はむことはかなふまじとあきらめたりしを、ゆくりなく、今こゝにマーガレツトと言葉を交

はす機會を得たるを喜びて、涙ながらに語りけるやう、さな悲しみそ、いとしの娘よ、わが斯くなるも、天命なれば是非もなし。何事も約束ごとゝあきらめよかしと、やがて告別の脗吻して、さらばとばかり、立ち別れぬ。

マーガレットは、獄卒どもに隔てられて、二足三足退きしも、心殘りて去るに忍びず、また立ちかへりて父の傍に寄り添ひぬ。モーアも今は堪りかね、互に見かはす眼の中より迸りて出づる涙は瀧の如く、兩人が頬を傳はりて地に落つるに、見るもの手拭を絞らぬはなかりき。

モーアは直に斬に處せられぬ。其遺骸は、哀願にまかせて下げ渡されしも、首は其頭の釁風として、倫敦橋上



に梟されけるも、たゞさへ孝心深きマーガレットは、父の首級の永く公衆の前に曝らさるゝを憂きことに思ひ、女の身の大膽にも、我が身の危難を慮るに遑もなく、闇夜に乘じて、ひそかに家に竊みかへりぬ。その雄々しき擧動、世のつねの婦女子の、もとより企て及ぶところにあらざるなり。

この事忽ち政府に聽こえしかば、刑吏はマーガレットを呼び出だして、嚴しく之を糺問し、闇夜に乘じて首級を盜み去りしものは、汝ならで他にあるべきや。若し速に其首級を返さずは、汝の生命を斷つべしとまでに嚇したれども、マーガレットは、かねてより、斯かるべしとは心に期したることゝて、毫も臆する色もなく、仰せの如く、妾は父の首級を竊みたるに紛れなし。永く之を公衆の前に

曝らして、死したる後までも父を辱しめむは、子として忍びぬことなれば、罪せらるゝを覺悟しながら盜み侍りぬ。よしや如何なる呵責に逢ばとて、これはかりは返納しがたしと、思ひ切つて答へたりしほどに、さしも殘忍なりける國王ヘンリトも、これを聞くよりマーガレットが至孝の情に感じ、其罪を許して、改めてモーアの首級を與へてけり。

マーガレットは、父の首級を家に祭りて、日夜これに事ふること、生きたる人に事ふるが如く、また良人に事へては、貞操の道をあやまることなく、ひたすら、孝道と婦德とをつくしけるほど、三十六歲を一期として其世を逝りぬ。父の首級は、遺言によりて、懷き抱へたるまゝに葬られたりとかや。あはれ、この父ありて、この子あり。ローパー夫人の如きは、まことに、希代の孝女と云ふべきなり。

（をはり）

幼少の時あまり律儀なるは　その身の爲めに善き事にあらず

七代將軍家繼の母（三位月光院の傳）

須藤求馬

月光院尼公名は輝子、喜代方また左京方と稱し、德川家宣の側室にして、勝田玄勝の女なり、人と爲り敏捷にして、學才ありて和歌を善くせり、父は加賀の人、初め佐藤次郎左衞門といひ、漂泊して僧となり、江戸に出て淺草唯念寺塔中の林昌軒に住し、夫妻並に佛を信じ敬ひ、子を得んとを祈りて、一女子を擧く、即ち尼公なり、尼公幼少の時より諸家に仕へ、初め京極家は仕へ、次て戸澤家の御奧に仕へ、その後矢島次大夫と云へる者の猶子となり、德川將軍櫻田邸第に仕へ、後閣に入りて、喜代方と稱し、頗る寵用せらる、寶永六年七月七代將軍家繼公を西の丸に生む、即ち家宣の第四子なり、因りて名を左京方と改む、父を勸めて還俗せしめ、月俸を賜ひ、姓を勝田と稱し、玄勝（一に玄哲）と名け、支族も盡く改めて勝田姓を用ひ、次太夫の養子典愛、また姓を改めて帶刀と稱し、召されて祿を賜はり、累りに進みて三千

石に加賜せられ、叙爵に預り、備後守と稱し、子孫世々、幕府に仕ふ、尼公おもへるやう、幼稚の時より文學を習はざるときは、ゆく／＼政務を輔益し給ふ基立つべからず、上の文學を導き奉らんには、自ら學はずしては、その功成りがたしと、因りて家繼公を生み給ひし後は、内政の暇、常に學の窓に螢雪を集め、和漢の典籍を繙き、傍ら和歌の道にも心を寄せられ、御側に在りて家繼公御遊の折に觸れ、文讀み聞かせ參らせしとぞ、かく内外とりどり輔導の道をも盡したりしかは、後にはいかばかりの明君にも生立せ給はんと、世の人皆望を屬したり、



かくて正德二年十月家宣公病篤く、家繼を立てゝ世子と爲す、時に年僅に四歳なり、側用人間部詮房遺囑を受けて、之を扶戴せり、而して家宣公は幾ばくもなく薨したまふ、十二月十八日、諸大名の賀を受け、二十五日詔あり、従二位に叙せられ、權大納言に任せらる、三年正月、家繼公年五歳となるを以て、袴着の式を擧け、三月に至りて元服の禮を行ひ、四月征夷大將軍に拜し、正二位に叙し、内大臣に任せられ、右近衛大將右馬寮監を兼ね、淳和弉學別當源氏長者と爲る。

かくて尼公の生父勝田玄勝は、帶刀典愛が方に同居せしが、家宣公薨去の後、尼公曰く、今より後は、いかほど知識を求むる人ありとも、わらはの身の上よかれと思ひ給はゞ、かまへて交際したまふな、然りながら、今まで親み昵びし者を、今更疎みたまへといふにはあらず、すべて新知を求め求ふまじとなり、また典愛が加秩ありしとき、松平兵部大輔清武、己のが家に典愛を

招きて、さま〴〵諫應せり、このよし尼公聞きて、内々使を以て將武が方へ申遣はされしは、御身は先代の近親におはせば當代に於ておもたゝしくあれかしとてそ思はゆれ、わらはが弟なればとて、俄に典愛を寵待し給ふこと、世の人の聞き思はんこと何如なり、そのうへ典愛も若年にて、思慮も定まらぬものなれば、若しわらはがことと挾みて、驕傲の擧動などありなば、わらははいふまでもなし、典愛が身に取りて、最も許らぬ事に侍りぬとありしかば、將武承りて一言の答へもなかりしとぞ、さもあるべし、こは家宣公在世の砌、常に外戚を抑損すべきこととの旨を、御側近く聞き置かせ給ひければ、後に至りても尙ほその遺令を守り、深く制馭を加へたまへば、親族等敢て威福を弄するものなきのみか、典愛が如きも、加秩敍爵はありしかど、職掌に與るよしなく、尼公に仕へる女房などの、庇蔭もて召出されしもの一人もなかりしとなり。

尼公の方に仕へし老女にて、繪島といへる者あり、正德四年正月に至りて、淫事露顯に及はれて、糺し問はんとせし時、老臣等うちうち尼公の御氣色取りしに、聊か忌み憚る所なく、嚴しく正すべきよし仰せられしかば、府廳に於きても、少しも避くる所なく、その罪の輕重大小を明に沙汰し、三月五日を以て繪島を信州高遠に謫して幽囚せり、繪島年三十餘歲、みめかたちは美はしかりしかど、心のさまはいと醜くかりしとなん。

是れより先正月十二日、上野東叡山及び芝三緣山に詣つとて、途よりかたらひ合せ、同じ老女宮路等をともなひ、木挽町の劇場に赴き、黃昏に及びて歸りぬ、二人ともに年寄をもつとめながら、かうやうのふるまひせしを以て、嚴しく咎めらるべけれど、寛宥せらるゝより、かたく愼みあるべしとて、二月二日、繪島宮路ともに、親戚の家に預けらる、同じ事により、梅山、吉川等の女房七人禁錮せらる。

三月五日、悉く皆罪科定まり、諸士以下死刑に處せらるるもあり、流罪に行はるゝもあり、そも繪島宮路等は御奥にておもたゝしき職を奉じながら、身の行ひ正しからず、奥山喜内といへるが導きもて遊樂に耽り、御使承

けたまはり他に出づる次て、また暇休給はりし折から、ゆかりもなき家に宿泊し、その品をも撰ばず、猥りに人を近け、あるは劇場に俳優と狎れ昵み、あるは旗亭に遊ぎりて娼婦をむかへ、酒宴を開きし事などしば〳〵なりき、然かのみならず、同じ女房を遊興に伴ひし事ども、その罪多しといへども、當時のおきてより觀れば、寛宥もて死一等を減じ、かくは處せられぬ、此の事に連座して、兄小普請白井平右衛門勝昌は死刑に處し、弟新番豊島平八郎某は追放はれ、留主居番平田伊右衛門某、その子彦四郎某、奥醫奥山文竹院某、小普請方金井六右衛門某は、共に遠流せられ、勘定方西興一右衛門某は士籍を削られ、徒士松山平四郎は追放され、水藩の士奥山喜内は、その罪を定められ藩に送られ、六右衛門某が子六助某は、追放はれ、平右衛門勝昌が長男伊織某、次男平七郎某は、父の罪により、流刑に處せられしかど、年幼きをもて、十五歳まで親戚のもとに預けられ、小普請疋田吉十郎正言、



實は豊島平八郎某が子なれども、他家を繼ぎしにより、遠慮を命ぜらる、また呉服店後藤縫殿助は門閉さゝしめられ、其手代清助は遠流、次郎兵衛は追放、木挽町雜劇の座元長太夫、その俳優新五郎は、ともに流刑、竹之丞座の俳優半四郎は追放、商人善六は島に流さる、その他連及して、親戚に預けらるゝ女房六十七人あり、

さてまた日光准后公辨法親王は、常憲院即ち五代將軍綱吉公の時に於きて、松平美濃守吉保が扱にて、將軍家にも殊に親しく侍ちたりける、綱吉公の世子、六代將軍家宣公の代となりては、何となくさまかはりてあり

つるが、家宣公の薨ぜし後、尼公の許へ、天台の秘密の祈禱侍り、前代の御惱の折、修し度は侍りしが、さる仰せこともなかりし故、空しく過ぎ侍りぬ、當代行末の御祟を祈らせられんには、この法に過ぎたるはあらじ、親ら修し侍らんと申されしかば、尼公の御答に、先代治世久しからず、當代は幼稚にて大職を繼ぐに至りしは、いと不幸の事にてこそ思ひ侍れ、しかるに、先代惱の折から、修し給はぬものを、當代に至りて行はれんと思ひ立れしは、何如なるゆゑにか、いと心得がたくこそ覺ゆれ、且つ一宗の座主として、專ら國家の鎭護を旨とし祈らせたまふ御身のよしとだにおぼしなば、これより頼ませられずとも、などよろづ捨て置かれて、御修行はしたまはざる、これよりの御願はあるまじければ、とかう親王の思召にまかせらるゝへしと仰せ參らせられしとぞ。

かくて家繼公には、後には何ばかりの賢君明主ともならせ給ふべきに、天齡を假さずして、五年三月まだ春寒も去わえぬ頃、能の會あり、尼公間部詮房と、家繼公を擁して、内園に遊びしが、公不斗感冒に罹り給ひ、遂に疾と成り、四月に至りて薨じ玉へり、時に年八歳なり、大猷院の血統は、この時に絶せたまへり、

是れより先尼公正德二年、家宣公薨じ玉ひしによりて、佛道に歸依し、御髮をおろさせ給ひ、月光院と號し、三年十一月、從三位に敍せられ、寶曆二年九月十九日に薨し玉ふ、法名は理譽院殿淸玉智天大姉、文政十一年從二位を追贈せらる。

尼公もとより和歌を善くし給ひ、常に冷泉爲久、爲村兩卿の點削を乞給ひ、世移り時易りて後、老後述懷といふ題にて詠み出てける、

かくはかり老となるまでうき度に
　いけらん身とは思はざりしを

さしもいみじき幸おはしけれど、前代にも當代にも、しばしが内に後れ給ひ、かひなき身の程を述させ給ふことこそあはれなれ。

みまかり給ひて後、遺命によりて、年頃よみ置きし詠草ともを、中納言爲村卿の許に送りしかば、卿そのうち殊

に調たかく趣わらたなるもの、三百首ばかり撰出でゝ、車玉集と名つけ、家の文庫に秘め置きける、内々やんことなき九重の奥ふかき御前わたりにも聞えありけしかば、もし後々撰集の沙汰もあらば、三位尼とてこそ入らるべけれと仰せありしとこそ。

尼公廣く和漢の書に涉り給ひしうちにも、くりかへし見給ひしは、徒然草、吉野拾遺、六百番歌合、常に口すさみられしは、淸少納言か枕草紙、漢籍は、四書、古文眞寶前後集なり、また眞言奥秘の敎をもきゝ明らめ、梵文をもみづから書き給ひしとなん。

尼公言寡き御本性にて、大故に逢ひたまひし後は、前代の事など、口を絕ていひ出給ふとなし、たゞ家繼公の事のみ、時にふれ折により思召出して、新井(白石)とかいふ者を召して、文讀ませ給ひしなどのたまふことを、侍女とも承り傳へし、また侍女等がものいひうちふるまふさまの、都人の眞似するをきらはせられ、宮人のかゝるくせあるは、いとうるさけれと仰せられ、よくこの御方の女房は、言語のとりかざりなく、かほつるにもいと淡粧にて、他の御前とは異なりしとぞ。

そもそも和漢古今の先蹤を案するに、主幼く國危きときは、必ず宰臣の政權を弄するか、あるは女主の威焰を恣にする例いと多かりき、家繼統を承くる初、井伊直該大老と爲り、土屋政直、秋元喬知、大久保忠增、井上正岑、阿部正喬、老中と爲り、久世重之、水野忠之、鳥居忠敎、大久保敎重、若年寄となり、これ等老臣の輩、先づ將軍の遺令を守り、數々善政を施し行はれ、内にはかゝる賢母ありて、宮闕の間も整肅にして、敢て女謁の行はれざりしは、遠く古今に超越せり、且つ家繼の夙に智慧すくれたまひしは、全く生母の淑明なるに出でしとて、當時皆之を揚稱せぬものなかりしとぞ、才學あり淑德あり、げに賢妻善母とや言はまし。

誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり

日本閨秀美談

鹽井福子

▲皇后狹穗姫の事

女子は小人か、女子みな小人の徒か、人を省みずして、たゞ己れを利せんと欲する利己主義の小人か、とかく女子は私欲のつよきもの、强欲の深きもの、己れ立てば、他の作るゝも省みず、己れ時を得れば、人の世を失ふも思はぬものと、見下ぐるもの多けれど、他國の婦人はいざ知らず、我が國の女子ばかり、情こまやかに、あはれのつゆのたわゝにおぼゆるはなかるべし。かけまくもかしこけれど、垂仁天皇の皇后狹穗姫と申し奉るを誰れも聞き奉りてならん。其の兄狹穗彦王、叛をはかり、皇后に問ひて曰く、汝は夫と兄と何れか愛くしきといふに、兄ぞ愛くしきと答へ玉ふ。まことに吾れを愛くしく思はゞ、吾と汝と二人して天の下を知らん、汝、天皇の御寐たまはん時に殺ろし奉れとて、匕首を授けられぬ。

天皇、久米の高宮におはしまし、皇后の御膝を枕として寢ねたまへるに、皇后、匕首をとり出し、刺しまつらんとして、いとかなしくなりて、ほろ／＼とこぼるゝ涙御面にかゝりければ、天皇おどろきてのたまへるは、吾あやしき夢を見たり、狹穗のかたより暴雨ふりきて、吾が面をぬらし、錦色なる小蛇吾くびにまとひかゝらんと見たり、こはいかなる兆にやのとたまふに、皇后え爭そはじとおもほしめし、兄狹穗彦の事をつげ、その錦色の小蛇と見玉へるは兄のさづけし匕首にて、ぬらしまゐらしゝ狹穗路の雨は妾が泣きし涙なりとの玉ひもあへず、泣き伏し玉ひしかば、天皇おどろかせたまひ、こは汝の罪にあらずとの玉ひて、兵を起して、八綱田をして狹穗彦をうたしめ玉ひぬ。狹穗彦もはやく稻城を築きてありけるが、皇后、御兄の攻めらるゝを見そなはし、え忍ばせ玉はず、ひそかに後門よりのがれ出てゝその稻城に入りたまひつ。時に皇后はらみ玉へりしかば、天皇なげかせ玉ひて、軍をとゞめて、とく攻めさせ玉はず。かゝるほどに、皇后、御子をうませ給ひたれば、そ

の御子を稻城の外に出させ奉りぬ。天皇、なほ皇后をいつくしくおぼし、共にとり玉はんとて、軍士の中の力士を撰び、御子を取らん時、御母の手とも髪ともとり得るにまかせて、掴みてひき出せよとのり玉へば、力士かしこみてとり奉らんとす。

皇后、あらかじめその情を知ろしめし、乃ち御髪を悉く剃り、そのみ頭に覆はせ玉ひ、また玉の緒三重の纒手を腐らし、酒を以て御衣をも腐らし、全き衣服の如くして、御子を抱きて城外にさし出し玉ひしに、力士等その御子を取り、御母をも共にとり奉らんとて、御髪をとらふれば、御髪おのづからぬけておち、御手を握れば、玉の緒かつ絶え、御衣を握れば、御衣すなはち破れて、遂に奪ひ奉る事能はず、皇后は遂に兄と共に火の中にとび入りて死に玉ひぬ。　君がなさけをかねて知ろしめして、かやうに用意周到の皇后、兄の叛逆、止めんも止むべきにあらざるをはやく知ろしめし、え争はずして、兄の意に從ひ、遂に誠を以て、天皇に報じ、一死を以て兄に報ず、如何にかなしき妹の情ぞ、やさしくもかなしくも忍ばれ奉るなり。

▲蘇我の造姫の事

とゝにまたかなしきは蘇我造姫なり。夫も尊く、親も尊く、いづれにそむかんやうもなけれど、罪ならぬ罪に殺されし親の恨みも、夫の尊さに、流石に口には云はて、我が身ひとり泣き死にし造姫の昔ぞあはれなりけるよ。　その媛は、蘇我石川麿の女にして、大兄の皇子の夫人なりけり。同じ蘇我を名告りけるものに、身判と云ふものありけるが、石川麿をいたく恨む事ありて、皇子に讒しまつりしに、皇子之れを信じ玉ひ、二田鹽と云ふものをして、石川麿を討たしめ、之れを殺ろし玉ひぬ。　造媛、これを聞こしめすや、いたう悲しみ玉ひて、その殺しけるものさへうたてくおぼし、鹽の字をその玉はず、左右のものも、また辛しとのみ云ひて、鹽と云ふもの一人もなく、たゞいつかは忘れさせ玉はんやうにと、ひたすらに思ひかくれども、媛はなか〳〵に悲しさのみふりまさりて、はては鹽を御口に入れさせ玉はぬに、つからうまつるもの憂ひて、強ひてすゝめまつれ

ど、姫はその辛きあぢはいさへうたてくおぼされ、強ひても咽喉に通はず、遂にそのまゝ食を断ちて空しくなりはて玉ひければ、皇子いたくあはれみて、先日の御罪を大に悔み玉ひけりとぞ。

▲足利義晴の簾中

足利義晴將軍の御臺所は、近衛關白尚通公の御むすめにて、新將軍義輝公の母君なり、義晴公失せ玉ひて尼となり、慶壽院殿と申されけるが、元祿八年、三好左京太夫義繼、その家人松永彈正が子右衛門佐久通と共に將軍家を傾けにはかに、兵を出して攻めよせけるに、義輝をはじめみな出でゝ戰ひふせぎしかど、遂に叶はずして、義輝公は、城に火をかけて討死し玉ひたり。御所の女房たち、尼公の御手を引き、急ぎたちのかせ玉へとすゝめ申けるに、尼上の曰く、近きあたりに罷出で來たれるをだに、行きて助くる道あらずや、まして一家の人みなうち死して亡びたるに我れひとりのみつらくも殘るべきかとて、火中にとび入りて空しくなり玉ひけり。世にながらへておはしますとも御心やすくてこそわたらせ玉ふべきに、將軍うたれ玉ひて、久しき家の亡びぬる御悲しみの堪へがたさに、みづから火に入り玉ふ、骨肉を殺ろして、我身生きざる、これ日本女子が特性ならずや。

山城のつゞきの宮にもの申す
　我がせを見れば涙ぐましも

▲仁徳天皇皇后の御事

仁徳天皇の皇后磐の姫かつて、天皇を恨み玉ふ事ありて、山城のつゞきの宮に居らせ玉ひて、歸へらせ玉はぬを、天皇、口持の臣を御使として、皇后を迎へさせ玉ひぬれど、皇后御いきどほり甚しく、御返答をもせさせ玉はぬを、口持の臣、ひたすらに御答へをまち、お庭にひれふし奉りぬ。折りしも神無月、時雨ふり、あられたばしり、山おろしはだへを通しぬれど、口持朝臣はつゆいとふけしきなく、朝日にてられ、夕日にさゝれ、時雨にうちぬれ、嵐にまかれ、晝も夜も御庭にひれふして、御答へをかしこみ乞ひけるに、着けたりける衣の青ずりの色も、いつしか水色になり、結びたる冠の紅き紐も、

水潦に浸りてまくろになりけるに、妹、國依姫、見るから悲しく覺え、先きの歌をうちよみ、よゝと泣き入りければ、皇后わやしみ問はせ玉ふに、彼の御庭にぬれ侍る御使は、我が兄にて侍り、あまりのしほたれ方に、思はず涙こぼれ侍りぬとけいし奉りけるに、流石に皇后もあはれにおぼし玉ひ、御怒りやゝとけ、御返答はかりはありけるに、口持朝臣はやうく御使の事をとげて歸へりけりとぞ。一首のうた、よく皇后の御心を動かし奉りしも、誠に兄を思ひしあつきなさけの



あふれ出でたればにやあらん。

語りつぐ
　からにもこゝた
　　戀ひしきを
　たゞ目に見けん
　　いにしへ男

▲萬葉集に顯はれし奇特の婦人

萬葉九の卷に、葦屋處女の墓を過ぎてよめる歌の反歌にして、實に手弱女と美稱せられたる日本婦人、あはれを千歳のゝちにとゞめたるもの多きが中に、此の葦屋處女と云ふは、そのむかし津の國に住みける手弱

女にして、そのころ二人のますら男同じやうに處女を思ひ、同じやうになさけをはこびけるを、其の母何れへか身をよせよと云ひけるを、處女もしか思へど、二人の心の同じやうに、何れの情けも深くして、淺き方もなきに、娘いたく住みわび、いつまでいやしき身故に、ますら男を爭はせんやとて、

住みわびぬ我が身なげてん津の國の
　生田の川は名のみなりけり

とうたひて、遂に生田の川に身を投じて失せにけり。

かつしかの眞間の井見れば立ちならし
　水くましけんてごなし思ほゆ

これも同じ集の同じ巻に眞間の手兒奈をよみたる歌のかへし歌にて、これもまたやさしき手弱女が、もろ人に云ひよられ、何れに立てんなさけを知らず、とても世に幾ばくもあらぬ身、ながらへて人を煩らはさんよりはとて、遂に眞間の井の庭のみくづとなりはてにたりとなり。これを以ても、日本女子が情けのこまやかにして、人の好意に感ずるの深さをぞ知らる。

嗚呼、女子を何とてなさけなきものとすらん、私慾のつよきものとするや、日本の女子はただ、その身を忘れて善をなすもの多し。元祿のむかし、江戸の士に稻生恒軒と云ふものゝ妻に、波留と云へるがありけるが、幼くして、生みの母を失なひ、まゝ母にかしづきてやさしく、弟妹を撫育する事深く、嫁して夫によくかしづき、舅姑によくつかへ、親族としたしみ、婢僕をいたはり、大に人々の歡心を得けるが、其の人つねに云ひけるやう、たとへ人我れをよんで愚人とするとも、妾は中々に甘んじよろこぶのみと云ひけるが、これ日本の處女を代表したる言にして、すべて、日本の婦人は、己れをつゝしみて、父母長者にはよくかしづきけり。

▲農夫義八が妻の事

享保のころ、備後の國、世良郡、甲山市に義八と云ふ百姓ありたり。其の妻をひめと云へるが、二八にして義八に嫁してより、ひとへに夫妻の道を以て夫と舅姑とにかしづき、飮食なども、己れは、奴婢たちと菜根殘漿を共にして、夫と舅姑には別に精飯醇羹をとゝのへて

すゝめ、己れは勤倹をむねとして、舅姑には財を惜します、奴婢をもいつくしみければ、波風もたゝず、一家よく治まりたり。さるほどに義八三十餘歳に及びけるほどに、ふと疾にかゝり、性すこぶる急暴となり、すこしにても心に叶はざる事あれば、怒りて食をも廢しなどするに、おひめは大に憂ひ、心をつくして慰めいたはり、その好む所を求めて攝養怠らず、戰々兢々深淵にのぞむ如く、氣をはかり、色を見、薄氷をふむ思ひして、介抱する事はや五六年に及びぬ。然るに夫の疾はます〱重くなりて、性いよ〱急になり行くに、おひめはいとゞ憫れかなしみ、心をつくして日夜看護したれど、藥石遂に功を奏せず、のち二年ばかりありて、夫はあのよの人となりはてけるに、おひめがかなしみは一方ならねど、あとには老いたる舅姑あり、をさなき子女あり、己れ心よわくて、玉の緒の絶えもせば、老い玉ひし父母を誰がかへりみん、親に先きだちたる夫の不孝をつくなふは、自からのつとめなりとて、みづから心をひきかへり、野邊の送りもかたの如くすましぬ。

義人いたつきに就きてより八年、醫藥の奉、薪水の費に、家産は空しくなりはてければ、是非なく奴婢を出し、躬から紡績して舅姑を養ひぬ。ある日、姑、茶を喫せん事をもとめけるが、折りしも茶つきて、嚢中一錢もなし、おひめは、茲にひそかに己れが衣を貿りて、茶を買ひ、菓子をさへそへて進めしとぞ。其の他歳時のもの、また日來好むものは、力のかぎりをつくしてすゝめ、孝養怠りなかりければ、此の事やがて官に聞え、郡吏來りて、其の舅姑につきて孝狀を問ひしに、我が子不孝にして早く死す、たゞ此の婦ある故に、足らはぬふしもなく世を安く送れり、誠にこの婦や、天資順善孝謹、己れをすてゝ、たゞ我れに衣せ、我れに食はせ、我れを安んず、我れ等貧窶中にありとも、つゆ憂きめを見ず、十八年一日の如くくらしゝは、偏に婦の力なりとて、涙にまことをあらはして語りけるに、郡吏かへりて官に報じければ、國主も大いに感じて、粟五石を賜ひしとぞかゝる女子またあげて數ふべからず。實に我が日本國はことあげせぬ國と、萬葉のひぢりの云ひし如く、父

母に孝、長者に悌、敢へて義を云はず、理をのべずして、みなよくおのづからにつくしたり。

▲松風村雨の事

父母己れを愛すれば、よろこびて忘れず、父母己れを悄くめば、恐れて恨まず、我が國の貞女に至りては、その身たとへ罪ならぬ罪を蒙ぶり、なさけなくふるまはるゝも、父母長者にはさからはず、恨まざるものさへあり。讃州鹽飽の城主時國の女に松風村雨と云ふ姉妹ありけり。生みの母世を早うして、後の母にやしなはれけるが、まゝ母なさけなくて、二人の容姿の世にすぐれ、心ばえのやさしきに、世の人ほめたゝふるを、まゝ母まがりたる心に、いたくそねみ、遂に二人を時國に讒したれば、時國之れを信じて、二人の娘を殺ろさんとしたり。たま〳〵つきそふ傅母之を知りて、早く罪なき事をわかし玉へと二人にすゝめけれど、妾等もと不德にして母君の御心に叶はず、てゝに此の罪を蒙りぬ。今誠を以て父に云はゞ、妾が命はのがるゝとも、母はために罪を得玉はん、しからば、不孝に不孝をかさぬるの道なり、たゞ此のまゝに死なんこそ、先きだつ不孝はありとも、罪はかろく、妾も願ふ所、かまへて捨ておきてよと云ひければ、傅母二人が心をいたく感じ、二人を携へて、己が夫なる牟禮兵衛の所へ行きたりしに、時國ます〳〵恐りて、人をして之を追はしめぬ。牟禮兵衛もと義理を知りたる男、徒らに罪なきひめを殺して、毒婦の刃の錆となさんやとて、固く二人をかくまひ、捕手と戰かいて遂に仆れぬ。姉妹は我れ故にかゝる憂きめを見する事のいとゞかなしく、自から捕らはれんとしたれど、身を殺ろしてまでに助けんとする人の情けもまた捨てがたければ、わづかに身を逃れて船にのり、船子に賃をわかせしに、船子もこれをあはれみ、帆をはせて攝州須磨の浦につけ、漁者の長なる者の家に託しければ、長も二人が容姿のいやしからぬを見、事のよしなどうち聞きて、憐れむ事大方ならず、長く己が家に止めて養育したり。そりしも中納言行平卿、罪ありて須磨に謫せられけるが、二人の容貌風姿のいやしからぬを見、たゞならず思ひて、何處の如何なるものゝ娘ぞと問ひし

かど、二人は涙ぐみて答へず、二度三度とひ重ねられしに、姉の松風、料紙を長に乞ひて、

白浪のよするなぎさの世をすです
　あまの子なれば宿もさだめず

と一首の和歌を書きつけて見せけるに、行平卿もそゞろに袂をしぼられたりとなり。これまた手弱女のはてにして、外つ國にはまた見ざる所なるべし。

立身出世の道は人をして我身の重きを確認せしむるにあり

津田梅子女史

（月旦）

苫米地奥南

華族女學校教授として、女子英學塾長として、英學新報の主筆として、其名の聞え頗る高く、從て又た世人より頗る重きを置かれつゝある津田梅子氏は、如何なる人物ぞ、乞ふ吾人をして少しく語らしめよ

* * *

津田梅子女史は、現今我國の女流社會に於ける英學者中の先進にして且つ泰斗なり、之れを男子社會に其比を求めむか、其れ彼の神田乃武氏の如き人乎、されば所智識者としても亦當代女學者界の第一流たるを失はざるべきを信ず、而して是れ決して臆測的に稱贊するものにはあらず、何んとなれば、其閲歴に徵する事實之れを證して餘りあるものあればなり、何を以て之を言ふや、其れ當代の女流にして智識を海外に求めたるもの多々ならむ、されども、女史の如く前後十數年の長日月間、最低乃至最高の學問を修むるに直接に外國の地に於てし、而かも幼少の時より根本的に泰西の思想、及び生活風俗慣習等に涵養せられて人となりしもの、他に其比を見ざるにあらずや、されば女史の外國語及び外國の學問は、言はゞ根抵的に播種せられ、正則的に發育せられて、今や將に美花を開き良果を結ばんとするものといふべし、此の一事既に女史の外國學に深くして新智識に富むを信用するに足るものあり、況んや其歸朝後に於ける功績は、たとへ花々しき觀なしとするも、彼の歐米人の秩序を重んじ事業に忠實なるが如く、所謂規律的に着實的に公私の教育上に盡瘁し、以て

過渡時代に於ける我國の女界に貢獻する所多かりしものあるをや、而して近時は又た、有益にして而かも有力なる英學專門の雜誌を發刊して、一般社會に對する斯學教育の普及を計られつゝあり、吾人を以て之れを見れば、斯の一雜誌を創刊せるは、是れ女子が學校教育外の事業に手を着けたるの初めにして、之れより漸次に其志望に伴ふ他の事業にも腕を伸ばさむとするものにあらずやと想はる、果して然りとせば前途多望といふべし

要するに、女史は當今の女流界に於ける唯一の英學者なり、有數の新智識者なり、されば、北歐米の學殖の深廣なる點に於て、正式的に外國語に熟達し、殊に英語を操つるの絶妙なる點に於ては、滔々たる天下の女學者能く之れに及ぶものなけん、否之れを彼の有名なる下田歌子女史の輩に比するも、恐らくは、敢て遜色なきのみか、其外國に於ける素養の多き點に於ては遙かに之れに勝るものあらん、是を以て單に外國の學問上より見れば、女史は現代の我國女學界に殆んど比敵を見ざる所の強敵たらむ、たゞ女史は所謂學者風の人なれば、冷靜なる理想と進歩せる思想をば有するならむも、圓滿熟達の世才に乏しく、俗人者流と交りて交際場裡に奔走し社會に活働するが如きは、最も其好まざる所なるが如し、されば、女史が外國より歸朝以來は、殆んど身を教育界に隱くして育英の道を樂しみ、更らに其他の社會及び事業に關係したることなし、願ふに女史が新智識を齎らして海外より歸るや、我國の女界は過渡の時代に屬して極めて多事多忙の時なりしにも拘らず彼れは超然として靜かに教養の職に在り、他人の顰にならひて功名心を起せしこともなく、毫も他事を顧みずに終始一貫して教育の道に盡くし來れるもの、此れ女史が天分の高きを示すに足るといへども、是れ又た、比較的に女史が社會に其名を現すこと遲く、一般社會より甚だ重きを置かれざる所以ならむ、故に社交の才、企業の能力、處世の術等に於ては、到底下田女史一流の才女には遠く及ばざるなり、蓋し女史が之れ專門的學識に於ては彼等を壓するにも拘らず、其れに相應する

名聲と勢力をつくる能はずして當世風の才氣ある女流輩をして獨り令名と勢威とを縦にせしめたる所以なりさりながら、人には皆それ〳〵能不能のあるものなれば、一人にて何事も能くし能はざるは是非なき事なりといふべし、津田梅子女史の如きは、先天的に冷靜篤實なる性格を具え、且つ牢乎として拔く可らざる志操を有するの人なれば、たとへ比較的に、名聲の嘖々たるなきも勢力の隆々たるなきも、其の自ら樂しむ所あり。又た自ら堅く信んじて疑はざるものもあるべく、彼の虛名虛勢に勝ること萬々なる榮譽を荷ふるを見る、故に女史の如きは、所謂學者風——敎育家風の敬重すべき女流人物なりと云ふ可し。

* * *

津田梅子女史は、農事改良家として有名なる津田仙氏の娘にして、元治元年十二月三日を以て東京に生る、良き家庭に育ち且つ天性聰敏なりしを以て、極めて幼き時より或る家塾に通ひて、讀書習字等を學びしが、其發達頗る敏速なりしといふ、明治四年十一月(九歲の頃)開拓使の命を奉じて米國へ留學することゝ爲り、其發するに臨み、皇后陛下へ拜謁仰せ付けられ、紋縮緬壹疋と左の御書付を下賜せられぬ。

其方女子にして洋學修行の志 誠に神妙の事に候
追々女學御取建の儀に候へば成業歸朝の上は婦女の
模範とも相成候樣心掛日夜勉勵可致事
辛未十一月

已にして特命全權大使岩倉右大臣の一行と同船し、又た米國公使デロンク氏の夫人に保護せられて、海路遙々遂に米國華盛頓府に到着しぬ、而して彼國に留學中は、大抵華盛頓府に居住して同府に在る諸學校に通學しぬ、いま同地に於て其履修せる次第を記せば、明治五年一月よりチャレス、ランマン氏に寄寓して、同人夫婦より家庭に於て薫陶を受け、且つショーシ、トウン小學校に通學せしが、同十一年九月よりは、矢張り華盛頓府に在るミシス、ユム、エル、アーチャル氏の中學校に轉學して、同十五年六月其全科を卒業しぬ、又た同府に在

留中チヤレス、ランマン氏に隨て、修學の傍ら、米國夫人の風俗、交際の方法、及び家政上の事等を研究せり、斯の如くして米國に在ること凡そ十年、大いに得る所ありて明治十五年十一月歸朝しぬ、聞說其歸朝しける時、實父母なる仙氏及び夫人之れを新橋驛に迎ひたるに久しく海外に在り、殊には幼少の時より彼地に行きて、恰かも外國の地に生ひ育ちしが如きものなれば、幼時の面影殆んと消え失せて、言語といひ、風采といひ、あたかも外國人に等しきを見て、實父母は愕然として吾子にあらずやの感に打たれしと、實に左もありしなるべし、斯くの如く多年海外に在りて純粹の外國人と等しく凡ての敎育を受けたれば、其歸朝したる時には、泰西文明的の新智識をば充分に具えたるも、自己の本國たる日本の學問及び生活風俗人情等には却て疎迷となりしを見たり、然るに凡ての學問は自國を基礎とせざれば完全に修得し難きものなれば、之れよりは日本國の學問及び實際に就て少しく素養を爲さんとて、其歸朝後は、實父津田仙氏の邸に在りて私立桃夭學校に通ひ、下田歌子より讀書習字等の傳習を受け、傍ら同校生徒へ英語を敎授し居りぬ。

其後明治十八年九月廿一日、宮內省御用掛を仰せ付られ、奏任官(年俸金四百二十圓)に准せられ、同日又た華族女學校敎授補勤務を命ぜらる、已にして同十九年二月七日、都合に依りて宮內省御用掛及び華族女學校敎授補勤務を免ぜられたりしが、同月十日更らに華族女學校より欧語學講師を囑托せられ取扱敎授となりたり同年十一月廿日またも華族女學校敎授に任ぜられ、年俸金五百圓下賜せられしが、翌年三月廿五日を以て正八位に敍せられ、同年十二月廿四日年俸金六百圓に增給せられたり。

既にして同廿二年五月十日、願ひの上女子敎育取調の爲め、在職の儘二ヶ年間米國留學を許可せられしが、更に乞ふて一ヶ年を延期せられ、同廿四年二月に至るまて、米國ペンシルヴエニア州のブリンマー大學に通學して、敎育學に關する科目即ち心理倫理博物及び生物學を專修し、同年三月より九月迄は、ニユーヨーク州オ

スイーゴー女子師範學校に於て、特別免許を得て教授法を研究し、又たボストン府及びニューヨーク、ビルドルヒヤ府等の諸女學校及小學校を巡觀し、同年十月再びブリンマー大學に入りて、凡そ一ヶ年間生理學及び生物學を專攻し、其研究中發見せしものをば、同廿六年五月英國のJournal of migrospical Scienceに出版せしといふ。

同廿五年八月歸朝して復職を命ぜられ、幾許もなく累進して、勳六等正七位と爲り、年俸金七百圓を給せらるゝに至る。同卅一年五月十日女子高等師範學校教授を兼任せしめられ、高等官六等に叙せらる、同年五月卅日又たも願之上、北米コロラド州デンベーに於て開會するゼネラル、フエデレーション、オブ、ウイメンスクラブス總會出席の爲め請暇許可せられしが、同年同月米國旅行の序を以て米國女子教育に關する事項取調を囑托せられ、同年六月又た米國旅行中女子高等普通教育上の取調を命せらる、而して其歸朝するや、皇后陛下へ拜謁仰せ付られ、白縮緬一匹を下賜せられ、其後益々昇進して從六位に叙せられ、年俸八百圓を給與せられたるに至る。

以上の如く女史が官邊の經歷は歷々として昇進し來れり、頗る高き地位を占むるに至れりといへども、長く官立學校に奉職するは其本志と副はざりしと見へ、遂に卅三年七月を以て、斷然として華族女學校並に高等師範學校の兩教職を退きたると共に、同年九月を以て、麴町區元園町一丁目に女子英學塾(私立)を設立し爾來自ら該塾管理の任にあたり、塾舍を家庭的に組織し數多の女學生を集めて英語を教授し、以て米國風の獨立自營主義を以て女性の薫陶につとめつゝあり、是に於てか官立學校の教員より轉んじて民間に獨立自營の教育家となり、女史が教育家としての境遇に著しき變化を來たせるを見るなり、是れ最も喜ぶべしとなす、但し、其の官仕の教育家としてよりも民間の教育家として成功するや否や之れを女史の前途に徵せざる可からず。

文苑

泉（竹柏歌會兼題）

松かげの岩井の清水凉しさに
結ばで過る人なかりけり　久我建通

賤のをも夏の山路のくるしさに
車とゞめて汲む清水かな　萬里小路通房

むすぶ手に杜の下風かよひ來て
夏もさら／＼わすれ井の水　津輕承昭

岩間ゆく清水の音のすゞしさに
さら／＼夏と覺えざりけり　諏訪忠元

あきつ飛ぶいその白洲の松ばやし
ところ／＼に清水流るゝ　小出粲

湧出づる谷のしみづを懸樋にて
さよくもすめる山かげの菴　相澤朴

青銅の龍の噴き出すまし水に
二人の狂女髮ひたしつゝ　上眞行

負ひし荷を清水のもとに換へあひて
賤は別れぬ西と東に　山崎房吉

山に生ふる老木の松の影そひて
綠も深しやまの井の水　又原保行

さと人はあしさへこゝにすゝげども
濁るべくもあらぬ岩清水哉　石榑千亦

法の師のつきし杖の跡ゆ湧してふ
泉のほとり病人集ふ　關屋祐之

風わたる谷關の清水凉しさに
休らひ居れば日は傾きぬ　諏訪賴固

あつけさになやむ都の我友に
この巖清水くませてしがな　澤式

木がくれの岩間の清水わきてしも　湯川貫一

涼しき名をば世に流すらん

新しく又新しくわきいでゝ
言葉の泉つきんともせず　萬木敬二

千萬の人し汲めども言の葉の
泉の水はつきんともせぬ　龜山新一

いく度も結びゝゝて涼しさに
猶さりやらずまし水のもと　水野清名

旅にして木蔭の清水見るごとに
からの大野の夏ししばゆ　松守久雄

わきいづる清き泉に口そゝぎ
我ふく息に松が枝うごく　落合源次

我二人甘露ゝゝの歌ひごゑ
清水流るゝ岩かげにして　波多江彦助

いづくよりわきかいづらむ松影に
流れてやまぬこけ清水哉　樋口貞二郎

ちいさなるいはつぼいでゝ岩清水
山田なゝむら流れ沾はす　高石直廣

庭の面の小さゝかくれをゆく水は
音きくだにも夏を忘るゝ　樺山常子

なく蟬の聲暑けれど日ざかりも
山下水のほとり涼しき　増山深雪子

山道になやにし人はかろゝゝと
谷をつたひて清水汲みくる　板倉止子

あへぎゝゝ登りこし山の松かげに
湧出る水や神のま清水　板倉藤子

かぜわたる柳がもとのま清水は
夏の住ゑぬところなりけり　松本信子

岩ほよりわき出る水は細けれど
涼しさあまる松の下影　安東梨子

さよふけて木間もりくる月影に
語らふ如く清水湧出る　頭本春子

都にて夢に結びし夏山の
清水のもとに今日は來にけり　大竹いせ子

とかけ一つ水をわたりて草に入りぬ
泉もぬるむ夏の日ざかり　有賀晴子

塵多き世の中さけて人めなき　加藤雄子

清水流るゝもとにすまばや

右ひだりたゞ青くして流れゆく　岡屋愛子
清水聲細し山深きところ

思ふかな夏くるごとに思ふかな　中村文子
昔の家のにはのま清水

負笈を岩におろして巡禮の　市川とよ子
妹せともく〳〵くむ清水哉

くみなれしかの山かげの苔しみづ　宮本野子
今年は誰か汲はやすらん

湧出る清水のもとに宿ねして　窪野雅子
夏をもしらぬ旅の僧かな

たちよれば夏もわするゝ岩清水　松本文子
わかでもけふは一日くらしつ

鹿島のや神のみたらし水清し　佐々木信綱
神代其清水今もすむらむ

富士

ますらをのたけき心にたぐへまし　萬里小路通房
不二の高ねの姿をは

新高の山高けれどかたちよき　諏訪忠元
不二には遠く及ばざりけり

動きなき國の姿をあらはして　相澤尨
雲井に高しふしの大嶽

強力の助もからでいさましの　上眞行
西のをみな子不二のぼりする

白雲を八重ふみさくみのぼし來し　石榑千亦
不二の高ねに天つ風ふく

富士のねの高嶺にたちて夏の夜の　山崎房吉
さやけき月の影あふぐ哉

天雲の宿の上に神さびて　深　弌
そゝりたゝせり富士の神山

ふじのねにのぼり見れども大空は　龜山新一
もとのまゝなる大空にして

朝まだき晴れし雲間に聳出てゝ　諏訪賴固
さやかに見ゆる不二の神山

心をも身をもかゝれと思ふかな　又原保行

雲より高きふじの柴山

雲にかなり雨にかはりて不二のねは
見るが中にも姿かはりゆく　水野浜名

天空もいゆきはゞかるふじがねは
やまの位の高きなりけり　湯川貫一

海を抜く一萬尺の上ゆ見れば
人のすむあたり雲たち迷ふ　松本久雄

契りにし友は病のいえやらで
我ひとりのぼる富士詣哉　樺山つね子

水無月の暑さにいつか雪消て
あらはになりて富士の姿は　板倉止子

青だたみしけるが如き海原に
しろくもうつる富士の大嶽　板倉勝子

いひしらぬ富士の高根を朝夕に
打仰ぐべきわが宿もかな　松平岳子

かよわなるおみななりとも一度は
のぼり見まほしふしの神山　頭本春子

ならびなき國のみいづと仰ぐかな
かけずくづれず不二の神山　大竹いせ子

息杖に岩ふみならし修行者の
足なみ早くお山登りゆく　市田敏子

一なつをさ森まほしき浦わ哉
磯松青し遠不二のやさ〵　有賀晴子

をみなわれのぼらん望み思ひたえつ
麓に仰くふじのかみやま　關屋愛子

天つ少女まそてふりけんそのかみの
かたみぞのこる不二の白雪　藤平露子

をのこならば登り見ましを足元に
雲のわくてふ富士の神山　廣野静子

清見がた消さ濱邊にさまよひて
あかずながむる富士の神山　松本文子

○雨中松　古賀玉子

時雨にはつれなく見えし山松の
風のまに〱うちむせひつゝ

車の直路

本居豊穎

ことしの春熱佐ぬしとゝもにそゝろあるきせし道すからのことゝもかいしむるさむとふところ紙にもこころの中にもかつ／＼とめおきたりしをここにかへりて後えさらぬ事とものさしつとへるまゝにさなから月日を過しつるほとに今は忘れたる節も多けれといたつらにやみなんもさすかにて思ひ出るまゝかいつけんとすされはあるはくはしくあるはあらく本末あひかなはさるふしもありぬへしまた去年の夏木村ぬしか旅の日記ありて播磨の濱つとゝいへるにその道すからの事ともくはしくしるされたるともはらおなしところ／＼のこともありまたさらぬも大和伊勢なとは殊に人々のゆきかふ道にしてめつらしけにしるすへきにもあられはすへてそのところ／＼のありさまゆゑよしなとはいはすたゝそのなりにふれてをかしともめつらしとも心うこきておほえし事のかきりをしるすなり

伊勢國飯高郡松坂の里なる山室山神社はわが家のおや櫻根大人の靈をいはひまた伊吹舍翁の靈をも合せまつれるにて去年の秋神殿つくりをへて遷座のかへまつりし時おのれも　うつへくかしこの人々にも契りおきたりしをそのをりしもこの東京をはなれがたきゆゑありてつひにえゆかすなりしかば今年はかならずと心に思ひわたれるが上に神戸なる田所千秋ぬし播磨なる上月豊陰ぬしには年ごろ契りおきたるよしもあれば去年木村ぬしかものせられたる播磨の濱つとのあとをとめて久しくかへり見ざる故郷の紀伊國かけてこの春の旅の衣手ふりはへ立いてんとすそもこゝろのとかにもゝのせまはしきを四月十日の後にはこの東京にえさらぬ事どもありてゆきかひの日數を二十日あまりと定めたればしばしのほどながら人々に別れをつげなどす和田雅造ぬしのもとよりせうそこのはしに

道すがら日ならへてさけさくらはな
　　たひゆく君がこゝろなぐさに

わかくさのはつかばかりのわかれ路も
　　なほ置あまる袖の上の露

などありければ

たひころも匂ひをおくる言の葉の
　　はなのおひ風まつぞ身にしむ

君かそでつゆおかん日はおもひやれ
　　ぬれて宿とふ雨のゆふべを

とそのかへりことにかきそへやるあす出たゝんとすれ

はかりそめのやうなからさすかに内外の事ともしげからざるにしもあらずしきりにとかくしつゝ夜更てふしどに入ぬみじかき春の夜のならひにてやがて家人ら起いてゝさわぐに夢さめてきけば雨の音するに風さへ少したちそひてしづ心なき曉の空なりけりふしも立出んはわびしとは思へどかねて此日東京を出でいくかはいづこにいたらんといふことを其ところ〳〵の人の許へもいひやりてあるに靜岡にては人々をつとへてまとゐする契さへあるよしを大井重古ぬしよりつけおこせられたれば

はなの紐とくらん雨とおもふにも
　　ぬれてはふべき旅衣ころもかな

と口すさびつゝ三月十六日の夜をこめて新橋なる停車場にいたりて魚住ぬしとゝもに滊車にのる夜明　やう〳〵日かげのさし昇るまに〳〵雨もはれさまになりたるいとうれし横濱までの道はそり〳〵ゆきかひなれたるをてゝよりさきの滊車はこたひはしめてのれるなればめつらしきに東海道のゆきかひせしも既に三十年のむかしなれは藤澤大磯なとのうまや〳〵を車の中よりはるかに見やるもなつかしきことゝちす國府津よりやう〳〵のぼりゆく山道も車のすゝみのしづかなるのみにてなほ平らかなる道をゆくが如し谷川の流れをいくたびともしらずこえて水のたきち左にあるかと思へば右にあり右に流ると見ればたちまちまた左にあり大きちひさき巖とも横ほりふせる中をくだけつゝおち下る水のけしきいとおもしろくてむかし木曾の山路をすぎつるほどの事ども思ひいづ隧道いと多くして夜半さだめなきさゝなるに播磨の濱つとなる伊藤のからうた思ひいでゝうちすしなどすされとけふは空曇りてなほ折々は小雨もうちしふけば不盡の嶺は見ゆべくもなし佐野を過てはまたやう〳〵下りゆく山路もしるく車の進みいと早くして吹はなつ烟の窓の外を過るも殊にはげしくおぼゆ

天かける龍にやわれはのりつらん
　　はやさめ競ひくもいふくなり

岩淵の停車場を過て薩埵山のほとりを過るほど田子の

雄の海つらひろく見わたさるゝに三穗の松原の遠く引はへたるけしきは昔この道をゆきかひし時もいとおもしろしとこそ思ひしがそも今は夢こゝちして

うちわたす三穗の松はらつら〳〵に
思ふも遠き身のむかしかな

靜岡にいたれば大井重古ぬし藤井眞壽ぬしをはじめて人々まちむかへて靑葉館といふにしるへせらるかくするほどに空はまたく晴わたりていとうらゝなる日となれりしはしいこひて後こゝの公園賤機山なる淺間神社にまうでまたその攝社なる玉鉾神社にまうつこの玉鉾神社としもいふは去し明治九年に今の井伊谷宮の宮司大井菅麻呂ぬしこゝの淺間神社の祠官にてありしころ眞心にいたつきて古事學の祖なる四大人の靈を齋へるにてはやくよりまうでまほしく思ひわたりしをこたひ山宮山神社にものする道の便りにまつ拜みまつるも本意あり公園の櫻を見れば既に盛ともいふべきほどにして思ひがけざりし事なればそゞろに心うごきておぼゆ東京にてはきのふけふ上野の櫻かつ〳〵色めきそめたりとこそ聞しが例よりは十日ばかりも早く咲たるよし人々のかたらるゝものから東京にくらへてはいたく早かりけり山にのぼれば安部川遠しろく流れ海つらは廣くしづかなるに伊豆の山々はるかに見わたされてあかぬ隈なき處のさまなりかくて靑葉館といふ樓に人々つどへて重古ぬし眞壽ぬしなどしるへせらるゝまゝにその樓にのぼりて見れば公園の木立しみ榮えたる中に花は錦のとばりをなして軒端をめぐり池水はますみの鏡のごとくにておはしまにかゝれるなどまたいとおもしろくて盃かきりもしらすうちめぐらす程に長き春の日もやゝかたふかんとす醉ひすゝみてたけなはなるほど長澤雄楯ぬしたちて演說すそのこゝろ詞ともにいと雄々しくねもころなり次に岡部譲ぬしも今日のまとゐを歡ふこゝろを詞ずくなにかろくのへられたるよ此ぬしの年ころかゝるわざにはいとよくなれて我物と得られたるたゝかりそめのやうなる一言はためてたし眞壽ぬしはもと美濃國人にして又年若かりし比紀伊國に者せられし時はしめて逢て後もろともになから川の鵜

かひ見に行し事もありつる昔の友なるを年經てけふあへる事を喜びあひつゝ

ゆくりなくあひにける哉されは世の
定めなきはた嬉しかりけり

と眞壽ぬしのよみて出されたるには

契らてそまたも逢見むさためなく
事はなかく／＼たかふ世なれば

ともひふへかりしをそのをりには既に老ひしれてかへしもえせずありしまたおなしぬし

これ人のひかりをそへてさくら花
あめにもあはせぬ今日の夕はえ

小川清齋ぬしは

君かこむことをそしりてか山さくら
常よりことにさきいそきけむ

三浦弘夫ぬし

うへしこそ今年は花の急きつれ
おくれはかゝる今日にあはしを

などゝりく／＼にをかしき言の葉とも多かりきおのれもゑひ泣に

めくりあひてかたる言葉のとも垣に
そへてうれしきはな盛かな

春かせのしつはた山のはなかけに
あそへる今日そ旅としもなき

とひとりごちてあるほどうたけはいよゝさかりにして人々の面わのにほひ花やかなるに夕日はすでに入ぬればさゝはふたゝび岡山にのぼりて夜の花見んといざなはるゝまにまに高どのを下りぬこよい月夜ならましかはとこれのみこそくちをしかりしがあかすつきせぬと今はとて静榮館のやどりにかへれば大井藤井長澤のぬしだちまたこゝに來てくさ／＼かたらうほどに夜も更ぬ眞壽ぬしついに家にかへらずしてともに此家にさへやどられたり

（つゞく）

梅の實

有賀晴子

入梅といふ日よ。重ねて母君かみ文とゞきつ。例のこ

まやかなるが中に、この三日の程ぞ、かの梅の實のまじない忘るなと、しるさせたまへり。さるは、そと年の夏、ふと足のけ覺えそめて、いといとう胸苦しかりしが、入梅の初めの日、三日、梅の實すりて忘らず、塗れと、人に敎へられつとて、なおとしめそ。若き人々は笑へど、あながちに云ひおとすべきものにもあらず。かに角に試みよとこそ、去年の此頃のみ文には、しるされたりしか。醫師の君のいましめを、つゆたがへず守り居たりければ、まじなひのしるしか何かは知らず、其夏は相摸路の旅にも、更に足たゆしとだに思はざりき。あやしうも驗ありし哉。誰にもわれ、なやめる人には告げやるべきとぞと、常にそういひ玉ふ事にて、

今朝しも、青葉になりし庭を、ながむるともなく眺め居つゝ、さみどりの葉かげに、小さくひそめる梅の實を見いでたる時、こを思ひうかばざりしにもあらざりしがと、みをやうなき物に、ふと思ひなりたるこの頃、一日長らへて、世にあらば影の如く、そがひに親しき悶えの、また一日つきそひて、悶えしむるものをと、いひしらず胸の苦しう、たゞに其苦しみの手、悶えの手より、のがれ出てむとのみにて、母君の世におはする事は、おほけなけれど、おほけ無けれど、忘れ居たりき。

かく、うさをわびつゝも、幾度か思ひかへして、猶世にあるも、唯この一人の御爲にて、かく、人々しう世にましらへるも、たゞ此一人のみ惠ぞかし。かしこしともかしこし。いでや、かうしめりたる雨氣の風は、肌へにふれしみじ、窓をとざしてなやましきまゝに、五日六日忘り居し、返り言聞えむよ。

小鳥

森　雅子

妹の晴着縫はゞやと、椽先に針箱持ち出でつ。一人しづかに針運ばしむる折から、何處よりかまよひ來にけん。一羽の目白、さゝやかなる足かろげに、わが側ちかくはねまはる、いと愛らしくて、しばし打まもられぬ。今宵は客人おはする筈なれば、母君はや臺所に出て給ひて、何くれとさしづし給ふも、せはしげなるに、すけ參らせんと、早めに仕事片づくとて、なれ／＼しげ

なる小鳥をも、おひかへしつ。またの日、またわが側ちかく來て、つゆおちたるけはひなく、躍ねまはるさま、昨日にかはらねば、こはわが家に飼はるべきなめりと、弟の玩具の網とりよせて、そとふせたるに、いと容易く捕へ得つ。さて籠に入れて、水と餌とを與ふるに、嬉しげに啄み食ひて、歌ふもいと樂しげなり。弟も妹もよき、遊びがたき得て、例のあさいもせず、われ餌をやりてん。われ水かへてんと、互に爭ふあり。朝まだきより、清く涼しくうたふ聲に、家の中一しほ賑ふ。小鳥はかはぬものよ、廣き天地にかけり遊び居るものを、小き獄に捕へて、苦しむるは罪なる業よなど、常に訓しめつるも、今度のは自らわが家族に、加はらばやとて、來りつるなれば、いと〳〵よろこびて飼ひやるなりけり。椽先の無花果のかけに懸けおきて、白よ〳〵と皆々愛てかしづく。さるに三日四日前より、此白の友なるか、はた兄弟なるか、籠ちかく飛び來て、とまりつさりつ、物思はしげなり。試みに批把の實一つひきて、籠の上にのせたるに、初のほどは人のけはひにやおちけん、無花果の葉かくれはひそみつ。やがて一躍二躍して、籠の上に移りぬ。しづかに打まもれば、内なる目白は、味ひ給へと促すか如く、しきりにぴよ〳〵と鳴きて、己れまづ逆しまになりて、下よりつゝき初むるに、外なる目白も、今ははばかるさまなく、愛らしき嘴のべて、睦しげにつゝく。父君に此さま見せまつるに、よろこび給ひて、それよりはいとまの折々に、書齋を出で給ひて、甘きものの籠の上にのせやり給ふ。内なるはいつも清らなる水、新らしきゑさまを賜はりて、日々樂しげにうたへど、外なるは處何にねぐら定めおくらん。朝夕は見えずして、ひる過ぐる頃來ては、一時、二時かたりもしつ、遊びもしつ。また處何にかとびさる。今日は父君いでましつるに、愛らしき客人來るべき時にて、弟妹も今に歸り來べけきば、例の批把の實一つ供しおかんかな。

夏のしらべ

○夏のうた　宮澤すみ子

春の鶯を、樂にたとふれば夏の蛙もうたならずや、珠

簾風にひゞく夜、香なきの螢、また無言の詩なるらん、さても高き〳〵梢よりおつる蟬のこゑ〳〵、捕へんとして捕ふる能はず、緑葉老い、紅花ちりて、鳥うれひ蝶うらむの時にいたり、孫木に居をしめて、秋をまねくや叢竹の中より遠々相つゞきて音を惜しまねど、果敢なきことの代名詞なる空蟬、餘命ながゝらじな、さても雲ひくう天いとくらき夜の、雨の音ぞ寂しかりける、春といはず夏といはず、秋もまた冬も。

○皇次孫御降誕

かけまくもあやにかしこし、一天萬乘の天子が御孫、六月廿五日を以て呱々のこゑをたかく、九重の雲ふかうあげさせ給ひしより、我等民草つたへきゝ奉りてよろこび奉ることいとふかし。

御名は雍仁と命ぜられ、淳宮とよばせ給ふよし。

嘗て史にこれをよむ、建禮門院のいまだ中宮とよばせ給ひしころ、御産いと重うましまして、京中ひしめきわへ、六波羅池殿も法皇も御幸ありて、卿相雲客伺候神官皆御安産の祈禱たゞならざりしに、とほき〳〵孤島にのろふ人ありてか、難産にておはしゝ也、御産の卷しに悉くしるせり。今や天下泰平、聖天子、上にましまして民の恨み奉るなく、かゞやく御光のあまねきまゝ、かく安々と生れさせ給ひけんと、何のいひがひなき賤が身も治まる御代をことほぎまつりて、黄金時代もかくてなやどゆめみぬ、而もこれより海外その交通益々多事、つぎ〳〵かしこき皇子のあれまして、東洋の花まこと實あるものとなさしめ給はんを、遠く祈り奉る。

○紫蘇

ひろき前の畑、ところ〳〵に紫蘇おのづから生ひて、ふるればたかし其香、ましてや葉の濃紫なるが凝しく、幾日の雨にかをりもうせて、露重たげなるはいぢらし。女子にたとへていはゞ、せまき裏家に、美色を埋めて前垂掛の朝夕くらめしとおもはず、もてる男を命とたのみてあたしの世をおもはず、さらば花のいつ咲きいでん望もなけれど、分に安んじたる決心の面する如く、高き香をしたひてよりくる野心家をものゝ美事にしりぞけて、凛平と保つ操うれしからずや。

志士よ憂る勿れ、日本の裏家には此の如きが多からめ、しかも上流の貴婦人令嬢よ、卿等夫れ慮る處あれ。



夏の一晝夜

女子高等師範教授 藤堂忠次郎

頃はハヤ八月となつた。真盛りの夏も、次第に下向になつて來て、朝夕は幾分づゝ、涼さを覺えるようです。けれど、それも僅の間のみて、金を熔かし石を燬くような暑さの魔神は、猶も去らないで、矢張り我等を苦しめつゝあるのです。とはいふものの、我等が毎々主張する如く、人間が物の研究に凝り固まると、暑さ寒さも感じるものでない、今此の炎熱の候に、我等が自然の研究をなすならば、涼風さつと襟を洗ふよりも、胸の裏を爽かにするてあらうと思ふ。サアこれから、朝夕、日夜の自然を取り調べるとしましようヨ。

▲夏の朝

我等此の盛夏に朝寢坊をして御覧、屹度、赫々と照らす日輪に襲はれて、暑苦しさは固より、終日心弛み氣倦んて、何事も仕事を滿足に果たすことは出來ぬてしよう。それよりも、若し朝暾の上らぬ先に起き出でゝ、庭の露を拂ふようなことがあつたとすれば、一日の愉快は實

學問は常識を養ふ捷徑
常識は世に處する最好方便
人生禍福の岐るゝ處一
に處世の如何に存す

に名狀が出來ぬ程です。前日の熱が一夜の中に拭はれて、空氣が極めて清く爽かになつた頃、徐かに家の後、庭の面に出たときの心地が、誰れに不愉快でしよう。

さて何故、斯のように露が結ばるのでしようか。これは日中に蒸發した水氣が、夜間空氣の冷かになるに連れて復び元の水に立ち返つて、地上の諸物に附着くのだといひます。地上の諸物は、夜に至ると、空氣よりも速く、冷めますから、空氣中の水蒸氣がこれに觸れて、先づ水に固まるのだといふのです。しかし、こゝに一つの疑問が起らねばなりません。何故、石よりも、金よりも、植物の葉、殊に草の葉に限つて、露が多いのであるか。それには理由があります。植物の葉は、根から吸ひ上げた水を、絶えず其の面より蒸發させて居るので、夏の日中のように、甚く照りつけると、それだけ蒸發が烈しいから、それを補ふために、根より水を吸ひ上げることも烈しくある。そこで夜になると、假に空氣が涼しく成るから、それで蒸發しかけた水は、葉の面に溜まつて、そこで以て、露の珠となるのです。それが、草に著しいといふは、草は木よりも柔かで、水分を根より引き上げることが、活潑であるからでもあり、又其の葉の縁には、往々特別の穴を具へて、それから盛んに水を吹き出して、大きな珠を結ぶものがあるからであります。

兎に角、清い空氣の中で、麗しい露の珠を履む、朝景色は、格別なもので、我等の一日の生活、否、一生の生活を、幸福にするものであります。殊に、それが、此の頃のように、處々牽牛花の、時を得顏に咲き揃うて居るに於ては、其の興味は一段であらう。ドレ牽牛花の研究をするも、時に取つて亦面白いてありましよう。

牽牛花を見る者は、先づ其の花の形の面白いに、注意するであらう。喇叭形で、而かも中々大きなものがあります。元來五枚づゝの花瓣があるのですが、全く其れが合はされて了つたので、其の中に五本の雄蕊と一本の雌蕊とを隱して居る。そうして其の色に紅、白、紫、青、等様々ありて、美しいものだから、專門にこれを培養して、樂しむ人が隨分多くあります。其の培養の法が段々進んで來て、今では其の色に追々珍奇な品が出來ます。例

へば、鐵色、利休色、更紗色など、丸で牽牛花らしくない品がある、それに、形にも、樣々化けた物が出來て、五瓣の合されて居つたのが全く離れて了つたり、又それが段々縮れて裂けて、丁度牡丹ゝ花見たようになつて居るのがあります。此のような珍品になると、一株幾十幾百圓の價がするとか、實に驚いたものではないか。斯うなつては、贅澤の沙汰であるが、兎も角も、富んで樂に暮して、此れぞといふ仕事のない隱居樣には、誠に毒のない、寧ろ結構な課業であらうと思ひます。何ぜなれば、毎朝空氣の淸く、麗しい露の結んで居る頃に、庭で働いたり詠めたりするものだから、どうしても、躰が丈夫になつて、必ず長命をするであらう。折角老人を御持ちの人は、斯んな道樂を勸めて、餘り費用のかゝらないように、そうして樂しみの多いように、世話燒をなされては、どうであるか。老人の健康と安樂とを觀るに付けては、若い者の悦はどれ程でしよう。

▲夏の日中

牽牛花も、朝こそは、時を得顏に咲いて居るが、日が漸く高く、暑さ次第に加はるに從つては、段々萎れて、此に旋花の花が、代つて來ます。すると總ての景色が一變して、今は夏の日中となるのです。旋花には、二三種あつて、通常は、牽牛花よりも、花がズット小くて、淡紅色をして居る。それから藤長苗とて、花も葉も餘程大きいのがある。又海邊にははまひるがほといつて、葉の圓く厚いのがあります。何れも多少の詠めになるが、しかし態々培養するほどの物ではありません。夏の日中に咲く者は、決して此等の花には止らないで、他にも樣々の花があつて、此に一々擧るも煩さに堪へられません。それよりも、こゝに動物に付いて、甚だ面白い話がありますす。我々は何よりも先づ、蟻の話を持ち出して見たいのです。蟻は躰こそ甚だ小いが、下等の動物にしては、恐らく これ程に賢なものは、あるまいと思ひます。第一、彼れの生活法を御覽なさい。此の暑い夏の炎天をも厭はずに稼ぎ廻る樣は、實に感心なもので、セッセと

餌を索めて家に持ち歸へる所なんぞ、どうかすると、此の人間さへも劣る所があるまいかとも思はれます。それに中々智惠のあるもので、一頭で運ばれない程の大きな餌であれば、必ず朋を呼んで來たり、又二頭が運んで居る中に、何か木の枝片等に妨げられて行かれないと、色々に工夫して、一頭は先に廻り拔けて餌を引き出し、他の一頭は後からそれを壓し出したり、又或る時に、人が、故と食物を、長い絲で、天井から吊り下げて、大方床に達するまでに至らしめて置いたが、蟻は様々にして、これに取り着かんと急つたが及ばない所から、到頭近い柱を見出して、其れから其れへと路を付けたといふ話などが澤山にあります。



蟻の餌は決して、其處此處に落ち溢れて居るものに限らない、或は花の蜜を求めたり、又蚜虫といふ極小い、言はば植物の蝨とでもいふような昆虫や、又カヒガラムシとて貝殻のような形をして樹の肌に密着して居る昆虫の軆から屁り出す甘汁を漁つて食するのです。隨分蚜虫の如きは、これを我が巣に連れて歸つて、長く畜つて置いて、冬でも食物の得られ

るようにすることがあります。なるて人間が牛や山羊を飼つて、年中常に乳を得るためにするようです子。てゝ此チヨツト斷つて置くことがありますのは、蟻が夏日忙しく餌を巣に運ぶは、冬の用意にするのだといふことです。これは間違つた考で、大抵の蟻は冬になれば、眠つて了つて、一切食物を採らないのが本當で、極めて少數の最も高等なるものが、右のように蚜虫を畜ふのであります。さすれば、彼の蟻が、あのように、多くの餌を運んで、何の爲にするのであらうかといふ疑が起りましよう。それは子を養ふために、持ち歸るのです。そうして此の任は、或る蟻に限りて引き受けるので、それ／＼役割があります。他の蟻は專ら巣を造り、又他の蟻は巣を守り敵と戰ふて其の躰格が凡て屈強に出來て居ります。時々敵を破つては、其の巣へ乗り込んで、數多の子供や卵を運び歸つて、後に、これを奴隷として使用するのです。其の樣は、殆んど、昔しの人間が、國々に於て行つたのと同じようであります。右に述べたような働をなすものは、これを職蟻といふ

て、雄と雌と似付かぬ間の子であるが、實は雌の出來損ひものであります。雄蟻、雌蟻は躰が遙か太くて、四枚の翅を持つて居つて、夏の日中に、空中に飛びながら交接ひます。すると雄は、其の後でそれ／＼死んで了ふが、雌のみは地に下りて、古巣に歸るか、若しくは手下の職蟻を伴ふて他の場所に新たに巣を造ることがある。すると、其の翅は拔け落ちて了ひます。翌年の春になると卵を産んで、それが孵れば小さな蛆の姿をして、專ら職蟻に養はれ、それから、繭を結びて其の中に隠れ、軈て其の中から眠を覺まして顯はれて來る、それに又職蟻 雄蟻、雌蟻の區別があるのです。蟻の巣は、通例、土の中にあつて、隧道が網のように、縦横樣々に穿たれてあり、外の口は處々に開いて居ります。だから、蟻の巣の口を、一個所塞いだ所が、蟻は決して困りはしないで、平氣に働いて居ります。此の頃、チヨツト、其の穴から探つて、巣を掘り出して御覽、どうかすると長さ二分ばかりの白い卵のようなものを見るでしよう。それが即ち其の繭なのですヨ。（術前淵を注意

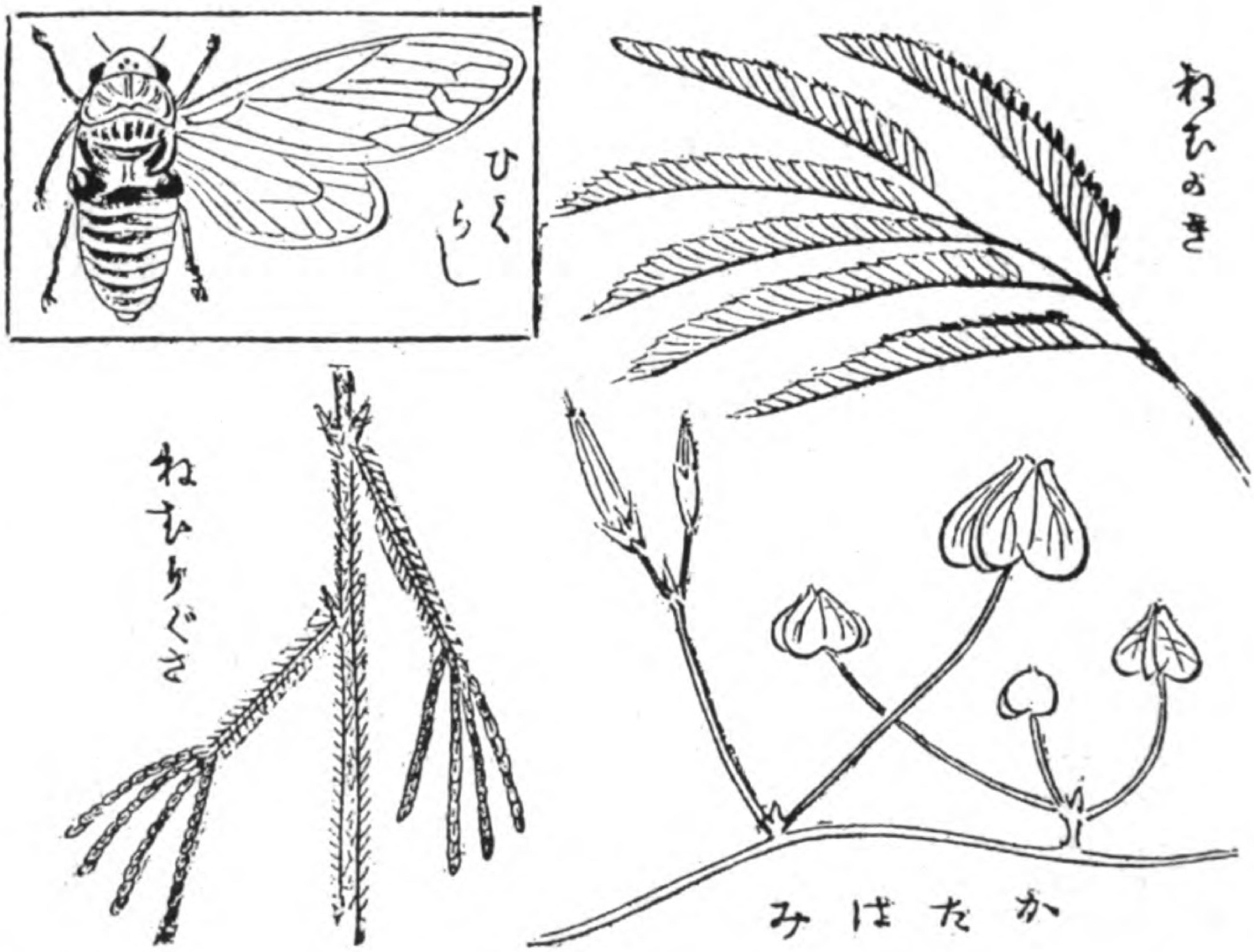
して見られよ)巣は又樹の洞に造られるのもあり、又土の上へ高く盛り上げて謂はゆる蟻の塔なるものを造るもあります。蟻はこのように、土を掘りますから、農家では、作物の根を荒らすといふて、これを嫌ひます、矢張り害虫の仲間入りにせられて居るのです。しかし、地上に落ち溢れて居る腐敗物や、動物の屍骸を運び去つて與れる所から見ると、又幾分か人間のために掃除人の役目を取つて居るものと看做されるでしよう。

▲夏の夕暮

蟻の研究は、思の外、面白くなつたから、此の暑さをも知らずに過したが、フト耳に留めたは、何か我々に心急しく夕仕前をせよと、勸めて居るかの如く聞えた。それは、此の邊りの森から響く、日暮の聲であります。日暮といふのは蟬の類て、毎も夕暮に限つて、涼しい物寂しい聲て、カランカランカラカラ……と鳴きます。我々は、通常、蟬の鳴聲を、甚だ騒しいものとして、煩く思ふのですが、日暮は決して、そんなことはないのです。此の喧しく鳴くものは、鳴蜩というて、翅が透明つて居ません。殊に蚱蟬といふのは最も高い聲で、躰も大きくて黒くあります。それからミーンミーンミンシンというて鳴くのと、ツクツクボーシツクツクボーシというて鳴くのと、ニ――ニ――ニ――、又チッチ、チッチ、チッチというて鳴く蟬のあるを聞いて居るてしよう。随分鳴音には、様々あるもので、それに、其の名もそれに因つて命けられて居ます。即ち蛁蟟や寒蟬、蟪蛄やちつちぜみなどの名があるのです。其の中で蟪蛄は小形で、翅が白くて、黒の斑があつて、チョット愛らしいものです、又ちつちは最も小くて、虻程の大さて、躰が黒くて黄緑色の斑があります。總じて蟬は、どんなにして鳴くのであるか。それは、腹の元の所に、大きな發音器を持つて居つて、腹から吹き出す空氣が、其の膜を振動させるからであります。人間や鳥のように、口で以て鳴くのではありません。そうして蟬には、鳴くものと鳴かぬものとがあつて、世間の子供は、啞の蟬だとかいふて居るが、それは啞てもない、即ち皆、雌の蟬て、只雄の蟬に

限つて鳴くのです。丁度、鷄が雄のみ鳴くのと同じようです。

全體、蟬は何を食べて生活して居るでしようか。それは、彼れの口の構造を見て、考へられる、細い長い管のようで、先が尖つて居る所を見ると、物を噛まないで、汁を吸ふべきものであることは、分かるであらう。即ち樹の皮を透して汁を吸ひ取るのです、だから多少、害虫の中に數へられます。殊にそれが、幼虫であるときには、一層甚いので、地中にはかゝり居つて、畑の作物などの根から無暗に吸ひ枯らし



て了ひます。幼虫は、後に、地中から顯はれて、樹や草の莖に昇つて來て、その皮を脫いで、始めて成虫の姿になつて、飛び行きます。世に蟬の脫殼といふのは、即ち其の取り殘された皮であるのです。此のように成虫となつて了へば、皆其の年の内に死ますが、幼虫の間は、長い壽命を保つて、隨分、中には十七個年も存へて居るものがあります。人間とは反對て、人間は子供の間が先づ二十年までて、それから後は成人てある、長命の人は、二十年以後に五十年も七十年も存へま

す。

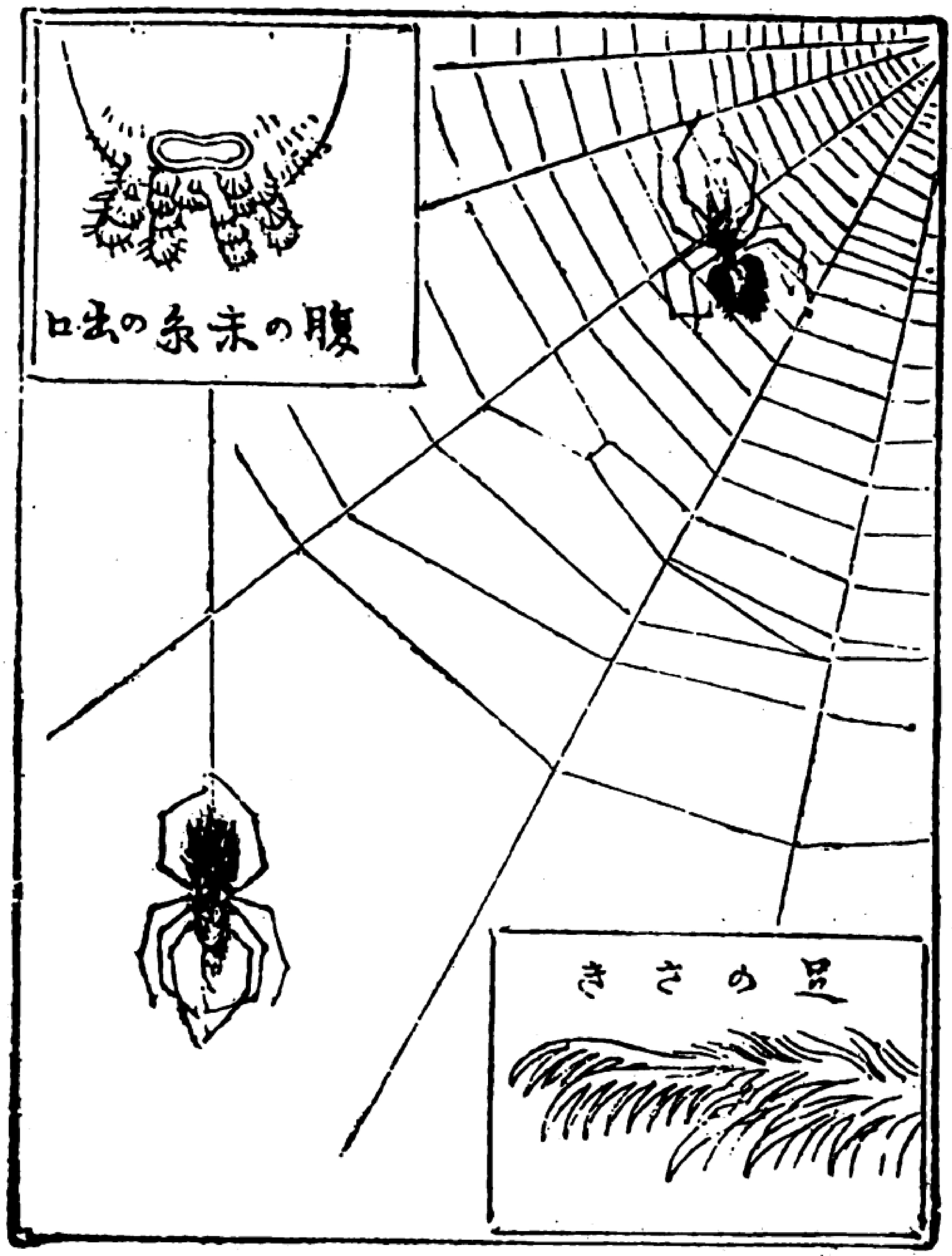
動物のみが、夕暮に忙しいのではない、植物とても亦、彿々と身終をなすものがある。皆さんは酢漿草といふのを知つて居るでしよう、これは夕方になると皆、其の葉が閉ぢて了ひます。又含羞草といふのもそうであり、樹では合歡木といふのも、皆そうであります。何故に此れ等の植物が、そのようなことをするかといふに世人は徒に眠に就くのだと說くが、決してそんなことはないので、即ちこれ等の植物に限つては、夜間空氣が冷えて、葉の面に露や霜を結ぶようになれば、生活が出來ないから、これを閉ぢて、精々其の冷氣に觸れるを避けるがためであります。我々が、夏といへども、夜間眠に就く間には、謹んで、衾を被らなければならぬのと同じような理窟です。

ところで、動物の蜘蛛になると、此れから大に働こうといふ考をもつて、身終どころか、却つて大に支度をいたします。マア、軒端を透かして御覽なさい。彼れが、如何に忙しく網を張りつゝあります。實に彼は夜間にこそ、他の虫を網に引懸けて餌にせんと考へて居るのです。だから此の夕暮が、殊に彼れに取つて、忙しく支度にかゝつて置かねばならぬのであります。

先づ蜘蛛の姿を見ると、種類によりては様々ではあるが、大躰からいへば、皆躰が二つに括れて、頭と胸とが一つになり、腹が別に大きく膨れて離れて居ります。其の胸の所に八本の足があつて、それで巧に網の絲の上を渡ります。人が無難に生活して行くことを、巧に世渡をするといふのも、矢張り此の意味からよりも考へられるでしよう。實に彼れの足の先には櫛のような爪が二本づゝあつて、それで以て自在に細い絲を渡り行くのです。されども亦別に尖つて居る爪があつて、地上を歩くには、それを用ひます。卽ち彼れには二様の爪があつて、渡るときと、歩くとき、其の用ふる爪を異にするのであります。ナント重寶なものですネ。

それから、其の網の絲は極めて細いもので、絹糸のどんな細いのも、これには及びません。ところが、其の一條は、決して眞の一條ではなくて、幾百千の更に細い條の

集め綯へられて出來て居るのです。即ち蜘蛛の腹の末尾に、チヨツトした瘤が見えるでしよう。それを虫眼鏡て以て、篤と見ると、多くは六本の突起が出て居つて、其の各々に、多くの短い毛を生じて居ります。其の毛は實は、細い管で、それから一本づゝの絲が出るのであります。即ち此の毛のあるだけの數が、極細い糸の數を示して居るので、これを出すときに、後足で巧に綯るのであります。したが、此の絲は元來、蜘蛛の腹から出るとすれば、腹の中には、其の絲が、どんなになつて居るかを見たいものである。しかしその腹を割つて見るに、何も絲らしいもののあるを見出さない、それは軀内では只々粘液であるに過ぎないのです。それが軀から出て空氣に觸れゝば、それて固まつて絲となるのです。だから、それを綯つても、全く單一の一條のやうに見えるのであります。そうして腹の中では、其の粘液の泌み出る器械は嚢形で、それから管で以て瘤に續いて居るのです、瘤が六個あるだけ、其の嚢も六個ある譯です。



さて、其の網を張るといふ仕事は、中々容易ならぬことです。彼のような小い軀をして居つて、人の脊もつかぬ

高い處や、廣い間に、どうして絲を亘すてしようか。そこが苦心する所です。しかし其の苦心する所が、中々旨いので、どうして、あんな小な動物が、人を驚かすほどの手際を顯ずのであらうか。それは彼れの天性で、何ともいへない所であります。先づ第一に、根本になるべき一本の絲を亘すのが工夫物で、それには、多く風の力に依るのです。即ち高い所に、糸の一端を尻り着けて、身を倒に吊り下げて長く絲を引き出し、頓て風の吹き來るのを待つて居る。すると、絲が充分長くなつて居れば、風のそれに當る力が強くなるから、一方へ吹き付けられて、それて自分の体が、何物にかに取り付くことが出來る。そこで、絲の他の一端を其の所に附着けて、これを引き張ることが出來る。又他の方法は、自分が或る所に身を寄せて、尻尾から、絲ばかりを長く引き出せば、風が其の絲を散らして、他の所にこれを附着ける、すると、これを引き張つて、土臺の一線とするのです。
右のようにして根本の一線が出來れば、其の中央にまて溯つて行つて、其の一點から諸方へ經線を引張り亘して丁度車の輪のようにして了ひます。そうなると、今度は其の中央から緯線を亘して行きます。しかし其の緯線は假りのもので、更めて外の方から、中央へ向つて、粘り氣のある緯線を、綿密に目を揃へて掛け亘します。其のときには、假りの緯線を足場に遣つて、其の用が濟めば、直ちにこれを手繰りて、口で丸めて、吐き棄てゝ了ひます。どうも巧妙とは、此の事でしようか。こうして、中央にまで緯線を掛け亘し終れば、小しばかりの明地の殘して、其の處に自分の體を倒さに、懸けて居るのであります。工事もこれで完く成就したので、夜が全く暮れ果てても、少しも差支はないのです。何故といふに、若し闇黑に餌が罹れば、必ず搖り動くから、其の響を頼りて、そこへ辿り行き、難なく餌を捕へるのであります。しかし其の餌を捕へる場合には、先づ別に絲を出して遠みから段々に、纏ひ付けて、更に近寄りて、口から毒汁を出して刺し込むのです。其の毒汁とても、モルヒネのように眠らせるに止まるもので、其の餌が最早身動きもしないようになれば、そこで緩々と其の

體から血液を吸ひ枯らして了ふのであります。蜘蛛の餌にせられた、虫の屍體を御覧なさい、現に皆輕い藻拔けのようになつて居ります。蜘蛛の御話に付いて未々あるが、限りある時間では、迚も長くは許されないです。

▲夏の夜

夕暮の景も、段々と日が沈むに連れて、陽氣も次第に薄いで、今は漸く淩ぎよくなりました。草陰にすだく虫の音も 晩涼を迎へるらしく、漠暗い茂み、叉叢の間に、處々花の閃くは、暮るゝ闇を待ちて、一廉の仕事をなさんとてであらう。虫のすだく様、叉其の虫の、どんなてあるかは、我々は、こゝに述べるも蛇足でしようから、省くとして、夜間に開く花に就いては、特に一言しなければなりますまい。



夜間に限りて開く花には、種々あるが、つき見草、まつよひ草などは、人のよく知つて居るものであります。此の花は黄色で、四枚の瓣をもつて居る。夜、此のように開くのは、其の黄色が、晝よりも却つて、夜に於て、昆虫の眼に留まり易いからであります。總て黄色、白色の花は、夜に著しく、紅色紫色は晝に明かなのであるか

ら、夜間に開く花は、何れも黄色か白色である。それに、花に著しい香を有つて居るものも、多くは夜の花であります。何でも蟲は光明によりてするから、色さへが引き立てばよろしいのです。

そこで、此れ等の花が夜になつて開くは、恰も酢漿草や含羞草などの葉が、段々に閉ぢると全く反對であります。否、花に於ても、夜になると閉ぢて、又翌る朝、開くものがある。例へば木芙蓉等の美しい花が、その通りであります。實に植物の世界も亦樣々ではある。

ところで、こゝに蚯蚓に就いて御話することがあります。蚯蚓といへば、世の孃樣達は、不快な感を起されるかも知れないが、決して不快なるものではありません。我々に對して大切の働をして居る愛すべきものであるのです。成る程、其の姿が醜いから嫌はれるのでしようが、總て物は外貌ばかりて、其の性質の判斷されないことは、矢張り人間と同じことで、蚯蚓も見かけによらず、忠實なものであります。それは段々と御話申さう。

蚯蚓は、夏の夜になると、地の上に出て遊びます。それて晝間は地中に潜んで、日に遭ふのを嫌ひます。夜は彼れが活潑に働くときて、別段に手足もなく、眼もなく、鼻もなく、又耳もありませんが、只々彼の柔かな皮膚でばかり感覺し、厚く發達せる筋肉のみで運動するのです。皮膚てばかり感ずるから、皮膚の働きは鋭敏になるが、使用しない眼や耳鼻は全く不用であるから、段々と消滅したのである、又手足のないのも、これがなくても、體の筋肉で充分用をなすからであります。我々も若し右の手ばかりを働せば、左の手は追々と無くなるかも知れません、學者のように心ばかりを働せば、頭ばかりになつて了ひ、力士のように、體の力のみを働せば、心の力は皆無になつて了ふかも知れません。

此のような不具同然の蚯蚓が、大切なる仕事として居るといふことは、人の耕しもしない山や野原を代りて耕して與れることてす。マサカ、故意に耕す譯でもないが、彼れが地中の固い土や、腐つて居る葉や莖などを食べて、これを細かな土の糞として、穴から上へ出て屁り出します。それで蚯蚓の體が、篩のような働をするて

とが分かるでしよう。荒地の上に、細かい且つ肥料の多くある土を運んで、元の上にあつた石塊などを悉く自然に埋めて了ひます。山林などが、別段人の手を入れなくて、繁茂するのは多く此の恩澤によります。しかし高が小さな體をして居るものが、どうして此んな大事業を果すことが出來ようかとの疑も起りましよう。ところが、幾等、體が小くても、數の多いければ、其の結果は矢張り大した物になります。或人は其の數を調べたことがある、即ち畑地には千坪に付き、凡そ二萬以上も居り、庭園には四萬五千以上も居るそうであります。そこて又ダルヰン氏は、此ういふことを調べた、即ち蚯蚓が地上へ運び出す土の粉を、一面に平布すとすれば、場所によりて、一年間に一寸弱の十分の二の厚さとなる、これから積れば十年間には二寸弱となり、六十年間に殆んど一尺となる割合であります。何と驚くべきことてしよう。

（完）

労作は身体を教養し
學問は心を教養す

夏時の魚介

日本女子大學校
講師治庖會幹事　赤堀峯吉

●膳部に供すべき夏の魚類

魚類の中で鯛は好味のものでありますから、先づ其發育の名稱より申しますれば、其最初は「ぺん」と謂ひ、それから「かすご」と成りまして、それから「ぶら」となり、それらか三歳となりまして、「こめ」となり、「大め」となり、「くち」となり、「なが」となり、それから鯛となります、鯛となりまするときには、目の下が一尺位になります、鯛になりまする間には、それ丈位の名稱の變はるものであります、それから中鯛となり、大鯛となります。

鯛の甘いものは、關東地方では、先づ、上總の萩生村、大久保村あたりで漁れるものであります、此所で以て「カツラ」網といふものを引きまする、此職に居るものは、皆此の小鯛の中の名前を別々に申して居ります、普通

ては唯小鯛と一口に謂ってしまいます。

それて、其味は、赤いのは甘くて、黒いのは、雄の鯛て、少々赤いよりも安い、赤ろ方は雌鯛です、其赤と黒とに依て價が變つて赤の方が高い、詰まり皮の黒いのが雄鯛てあります。

鯛の卵より蕃殖するのは鮭抔と同じやうの工合であります、此料理のことに就きましては、後に述べることに致しませう。

それから、生貝ては、即ち鮑です、鮑の漁れる場所及び其善惡を申しますれば、鮑は矢張房州の方て漁れるのが宜しうございます、伊豆の方の貝は、餘り甘くはありませぬ、其中にも雄あり、雌あり、それは、其肉の艶を見るといふと、解りますることとて、表面の白いのが雌て、青黑いのが雄てあります、是れから鮑を食べる好い時節てあります、青貝の方は生て食べると宜い、調理しまして煮て食べる貝は雌の貝てある、白い肉の方てあります、何となれば、青ろ方のものは、其肉が堅いから、水貝、即ち鹽水の中に、四角樣に切つたものを入れて食べたり又は、酢貝にして、食べます、さうすればコチ〳〵して甘いものです、此の方を煮ますると、分量も減りますし、且つ堅くて好美でありませぬ、それから雌の方は煮ると柔かて、俗にいふ「ふくらに」抔に用ひて食べます。

漁夫の漁り方は昔も今も大變の違いはありませぬ、蜑女が漁つて居る、蜑女と謂へば、一口に女のやうてあるが、男子も實際漁ります、此人等は腰に網袋を附けて、手に鑿を取つて、暗礁に附いて居るものを漁ります、それを鑿て剝かして、腰の網の袋に入れる、餘り多く漁ると、身體の目方も增して浮ぶに困る故に大抵は、五つか、六つ位漁つて、海上に浮いて來る、能く繪に書いてあるものは、女許りてありまするが實際は男子も行ることは人の能く知るところであります、此節は、水を潜ぐる器械が出來て居りまして、是に依てやりまするから、何程ても漁れまする、大きくなる迄には、漁り盡すといふことになりがちになります、どうしても、大きい貝はありませぬ、甘い貝の大きく育つ迄はありませぬ。

此實貝は二三年前迄は、市場でも、合せと申して、二つ合せて一圓とか、七十五錢とか謂つて、居りましたが、此節は、貝も目方で以て賣るやうになりました、何百目が何程といふやうになつた、先づ大抵は潮の干ましたときに漁ります、水が多いと海水を潜るに骨が折れまするから、さう致します。

比目魚は、釣りでとるものと、網でとるものと、二通りあります、釣りて漁りましたもの丶方が、食べると宜い比目魚は昔から人も謂ひます通り、三月比目魚は犬も、食べないと謂つて三月頃には餘り好味でありませぬ、六月頃でも、ごく小さい比目魚を用ひますれば、甘いのでございます、最も寒いときが甘いのであります、網でとれましたものと、釣りでとりましたものでは、釣の方が甘いのであります、網で漁るには「なまめ」といふ網を使ひまする、之を張つて置きまするると、比目魚は泳いで行つて首が其網の目に這入りましても、後に退くといふことを知りませぬ、其首の引き掛つても先きに許り出やうとするものでありまするから、それで漁られてしまうのであります、是は夜分に網を張るもので夜の明方に之を上げるのであります。

甘いのは此東京近在では、房州であります、それで此等を池養に入れて岡漉を懸けまするには、成るべく鹽の安排を強らくした方が宜いのであります、鹽の安排が薄いと甘味が下ります、鯛でも、比目魚でも、池留は強らい方が宜いのであります、しかし、能く生きた所が、三日です、長く生きて居りましたにしても、他に留めましたものは、味が甘くありませぬ、同じながら釣りて漁つたもの丶方が甘い、詰り網に懸つたものは、夜中心配をして居りまして、魚も自由になれず、痩せまするから不味である、さういふ中にも、比目魚は目を大切に致しまする、目の所に何にか來るといふと、恐しく怖わがる、他の中に置きまして、他の魚を一緒にして置きましても、比目魚が下に居りまして、他の魚か上に泳いて居りまするると上の魚に氣を揉んで、大變に弱はるのです、鯛も矢張さういふ傾きがあります。

淺草の水族館にありまする鯛は、生きて居つても、目は

眞白であります、水族館のは、同じ水飼にいたしましても、水が宜しうございます、且つ水も澤山變はりまして、器械も宜しくあり充分に岡流があり、水も海の水を取り寄せて、居りまして水が充分に運動しまする、且つ惡い水は捨てるといふことでありますから、どうしても、宜しうございます、鯛に蝦類抔は、何時でも食べて甘いものであります。

●「ぼら」は、最初は、「をぼこ」から、一年に「いな」となり「いな」から「はねかいり」となり、それから「ぼら」となる、三年目から「ぼら」になります、この「ぼら」は五六月頃は甘くない十月夷比須講の頃から好味となります、此頃になりますると、脂肪質が澤山になつて來る、料理に使つて、お芽出度い所にも能く用ゐる、又滋養分もあります、此れは燒物などにして、使います、出世魚といつて、芽出度ときに用ゐます、「ぼら」の子が「からすみ」で、この「ぼら」の子を、鹽藏にして、干したのが「からすみ」である、しかし、此「からすみ」の代りに「ぶり」、「さわら」の子抔を使つて、「からすみ」の代りに使ひますが、なか〱さくつて宜しくありませぬ。

蝦は大きい蝦のことは、大車即ち車蝦と稱する、料理にしまするには、此車蝦を使います、之は體が赤い色て、肉は幾分か硬くていけませぬ、中車と稱する迄の中が甘い、車蝦の成立は、小さいときには、「さいまき」蝦と申します。

蝦は夏の食料によいのであります、未熟煮は食はぬのが宜いのであります、半燒、半煮は喰べて身體に衞生上宜しくありませぬ　蝦でも、蟹でも、皆灰質が強いから食べるときにも、能く、煮たり、能く燒いたりして、食べるのが宜いのであります、所によると隨分半燒、半煮を喰べて居る所もあります。

此蝦を二三十年前迄は、虫だと申しまして、喰べなかつた國が外國にございました、何處の外國の公使でありましたか、其國は忘れましたが、其公使が長崎に來ましたときに、私の知つて居ります料理人が、筍や蝦の料理を出しました、其時公使の話に私の國では蝦は海の虫だといつて食べませぬが之は大そう甘いといつた、

それて筍の料理の方て、筍の料理が何の食物だか解りませんてすから、其料理人が、之は先年あなたの國に早竹虎吉といふ竹乘の名人が行つて藝を致しました、其竹の子の種類て、筍を料理して出しましたのてある、といひましたらば、公使のいひまするには、成程さういふこともありましたつた、甘いと謂つて居られたさうてす、今日ては、其國ても、蟹や、蝦を料理して、日本人の其國に行けるものにも出すさうであります。

蝦を漁りまするに、手ぐりといふ網を用ゐます、之には蝦許りてはありませぬ、小魚もはいりまする、夜分にとります、車蝦は日中は藻の中に這入つて居りまして、夜分になると藻の上に出て來る、其所の所で、網を引いて漁るのてあります、車蝦の一番甘いのは、天麩羅てす、蝦類は水に入れて置きまするると、灰質が出まする、鎌倉蝦てもさうてす、舊の四月頃から後は蝦は宜くないから食べない所もあるさうてありますが、それは夏になりましては、脊腸が大きくなる、その時分には食べないさうてす、さういふことを聞いたこともあり、又此等の調理法に就きましては、後に述べることに致しませう。

以上述べました所は普通の膳に上ぼる所の一二の魚介類の生育について御話いたしましたが、料理の方を少し知つて居ると居らぬとては、大いに其味を宜くすると、せぬとの違いがありますそれてこれが料理法を習ふ時間といふことは、却て此節お互に忙しい時てありますから、間々其少し許の時間てもございましたらは、其時機を利用して以て、心得るといふより外ない、學校に出まするものは、日々の學課に追はれ、妻君は妻君て、家事のこともしなければならぬ、詰まり、夏期の休業にでもしましたならば、小學校の女子の教師の職にあるものは、これらのことを心得ましたならば、只に自分て利益を得るのみならず、自身の日頃教授する所の子女にも敎へることか出來ませうから、自然と斯道の廣まることになるだらうと思ひます、此等のことは理屈といふよりは、寧ろ、實際の方の學問てありますから、實地に其人に就て、其爲す所を見、其加減を習ひましたならば、さう六ケ敷ことはないのて

あります、唯自分で之れで間に合つて居るから宜いとあきらめて居つては、何時迄經つても美味のものを食することは出來ませぬ、衣食住中他のもの丶進むのも必要では勿論ありませぬが、食物は衛生上にも大いに關係があり、且つ毎日に用ふる所のものでありまするから、その家内の經濟上に及ぼすことは大きいことであります、地方の如きは、十人なり、二十人なり集りまして、其道の明るいものに就き大體の話を聞いて、兼ねて注意して實地に家で行りましたならば、その之を習はざるの前に比しましては、何程の違いがあることゝ信じます。東京市教育會時報所載

長壽の要訣は適度の食餌と適度の運動にあり

溫泉の話

千朶學人

▲溫泉の効用

毎年夏季になると箱根や、伊香保の溫泉塲が繁昌するのは何故でありませう。云までもなくそれは湯が身體の藥となるからであります、併し醫學上から申せば溫泉が直接に身體に及ぼす効能といふものは極めて僅少である、素人考へて何もかも身體の病的を悉皆湯で以て治すると思ふのは甚だしい誤りである。

然らば何故に夏季になれば人が大騒をやツて遊るゝと山坂を超へて斯様な邊僻に態々と不自由を忍んで行くのでありませうか、それは溫泉塲に附屬した種々な効能があッてそれが直接間接に身體の保養となるからであります。言ふまでもなく溫泉のある場所は大抵、里を離れて高山の半腹とか、或は海岸にした處ろが多くは人家と懸隔てた斷崖絶壁とかで。山は蜿々として翠微滴るが如く水は潺々として碧緑の色を染め出し、波は碎けて銀片を散らし、風は嘯ひて自然の音樂を奏てるといふやうな所ろで。景色も雄大なれば、空氣も新鮮で清朗である。一年三百六十五日都門の塵氣に醱醸した人々が偶にこんな所へ行けば氣分が爽快になッて一時浮世のこた〳〵を忘れて仕舞ふ。これがまづ何よりの藥である。

土地は高燥であり、空氣は清澄であり。四面の風光が人寰を脫してゐる處ろに大なる効能があると言はなければなりません。

それで前申した通り溫泉が人間の身軆に與へる直接の効能といふものは極々少量であッて、僅かに外科に屬する疥癬挫瘍などの皮膚病、梅毒、關節炎レウマチスなどを除いて其他の內科に屬する諸病には大して效能はないのである、併しそうかと言ッて虛弱な人が醫者の藥ばかりを便りにして年が年中湯藥に親しんでゐるのはいけない一日も早く溫泉場へでも行つて煙霞療養をした方が遙かに利益である。殊に慢性の胃弱、慢性の腸加多兒、乃至は婦人生殖器の慢性病乃至一般の衰弱症隨分効能のある溫泉も澤山ありませう。然らば何故に溫泉は人の身軆に多少の効能があるかそれは勿論特種の鑛物を含てゐてこれが直接間接に身軆に觸れるからである有名な樫村博士の溫泉說の中に溫泉に就ての効用が述べてある即ち

溫泉の熱病に効用あるは主として泉中に含有する成分及び溫度に由ると雖も亦土地の高低、地質、氣候、の濕度及び寒濕、風の方向及び強弱、雨量、光線電氣、森林の有無、山嶽、海濱、屋交通 生活法、散步、遊戲等即ち外物及び精神上の關係、浴用法、服用法等の宜しきを得さればその奏効を期すべからず云々

とある以上の如く溫泉の効用はその作用甚だ複雜である。とは言ふものゝ、要するに溫度の作用と、電氣作用壓迫作用及び化學的作用であつて、身軆諸機關の新陳代謝を旺盛にし、精神と軆力とを回復して全身の諸器官能を容易ならしむるに過ぎない、更らに一層之れを說明すれは、皮膚の毛細血管が膨脹して血液の運行を速かにし心悸が進んで脈の數が增し、呼吸は緩徐になつて且つ深く長くなる、かやうにして身軆內部の血液が皮膚に廻るから自然と內臟の鬱した血を去つて軆內諸機關の官能を盛んにして全身一般の爽快を覺へしむるやうになる、そこで精神が大に安靜て來るのである、それから又皮膚の汚垢も自然と洗はれて來るから老廢の表皮が去れて汗腺の分泌を催進する、これが又大に

体内の新陳代謝を旺盛ならしむるのであるそして日本人に適する温度は華氏の百度乃至百十度であるさうな

▲温泉湧出の理

されば此の一年中の保養季節を利用して温泉へ行かうと思ふ方は、まづ地形の善悪は勿論の事でありますが、鑛泉の種類によつては、縦し醫藥ほどに効能がなくても病症に適すると適せないのとがあるから。今如何なる泉質が、如何なる病症に適するかの一班を大醫の示しによつて茲に書き出しませう。

一体温泉といふは各種の鑛物を含んでゐる處ろの湯で、地下から湧き出す所ろの泉水である其の温度は不均の氣温即ち大氣の温度よりも高いのが通例であるが中には頗る高度の熱を有つたのもあつて沸騰點以上に達するのがある、且又温度が極めて低く氣温よりも寒冷なのがある、これを冷泉と申します。

扨て然らばその温泉の湧出す理由は何故であるかと申すに、これは地質學上の説明となりますが、一体この地球の中心は非常な熱度を有たもので、その度合は迚も通常の度合を以て測る事の出來ない程で、その熱度は地面を下るに随ッて漸次にその度を強め平均三十三メートル即ち十丈を下る毎に攝氏の寒暖計で一度を増すの割合となッて居ります。これを地心熱と申しております。それでこの温泉の湧き出る譯は地中に所々洞穴があッて、そこから水が段々と地中へ落ち込んで地熱の有る處ろへ達する。その水か地熱に温められて、上から流れ込む水の壓力によッて様さまに地上へ噴出するのである。そこで、その鑛物を含んでゐるのは水が地中を通過する際に地中に含有する處ろの各種の物質を溶包で湧き出づるのである、そして又冷泉の同じく鑛物を含んでゐる譯は一度熱せられたる時に溶解したものゝ再び冷却されて地上に涌き出すからであります。すべて水といふものは各種の物質を溶解する作用を有つてゐるものでありますが、熱度の高い水は冷水よりもその溶解力は一層著しいのであります。されば地中の熱氣に觸て高熱となッた水が地中に存在する處ろの

鑛物を何程溶解するか知れません。論より證據には彼の温泉が甚だしい硫黄の臭氣を有つてゐるのでも知れませう。

▲温泉の種類と主効

そこで今その礦物を含有する處ろの温泉の化學的性質に隨つて區別を立てますれば。四つの種類に分たれます。第一か炭酸泉、第二が硫黄泉、第三が鐵泉、第四が鹽類泉である。

▲炭酸泉　に二様あり、純粹の炭酸泉ならばヲム子の代りに食前、食後に飲めば胸がサツパリとします即ち暑中飲料水の代用物となつてゐる平野水などはこの純炭酸泉である。さてこれに入浴すれば小便を通ずるの効能があつて病後の出養生などによろしい。又アルカリ泉といふのは炭酸の外に硅酸を帶びて居るもので、これには胃加多兒、消化不良、慢性腸加答兒、肝臟病、婦人生殖器の慢性加多兒、氣管支炎、加多兒、慢性肺炎などに宜しいとしてある、又この温泉は他の鑛泉に比して諸病に通用する、その泉質は無色、或は微濁を帶び、無味無臭であつて、噴泉の穴孔には石灰石を堆積してゐる、此種類に屬する温泉は我國には割合に少けれども概ね左の如し

伊豫道後	アルカリ	九十度
豐後湯の平	仝	百四十度
但馬の湯島	仝	百十度
肥前の嬉野	炭酸	二百三度
攝津平野	仝	八十七度
仝　諏訪山	仝	七十一度

▲硫黄泉　酸性にして主として硫化ソヂユーム鹽化ソヂユームを含有し、各種の鹽類を保有し腐卵臭の臭ひ甚だしとあり。大概の硫黄泉では銀時計が忽ち黒色に硫化さるゝので硫黄分の多いのが解かる。この臭氣は硫化水素の瓦斯を發散するゆゑであるが、中には無臭のものもある、凡そ硫黄泉は疥癬、濕疹、乾疹、挫瘡などの皮膚病に効能がある、その外梅毒、骨膜炎、關節炎、レウマチス等によし、この温泉は通例白濁色で、稀には透

明又は半透明のものもある。硫黄泉の種類に屬する所ろの温泉場は

伊豆修善寺	硫酸ナトリユーム	百三十度
函根底の湯	硫酸ナトリユーム	百十度
上野草津	硫酸マグネシヤ	二百度
仝伊香保	コロールナトリユーム	百十度
伊豆熱海	硫酸マグネシヤ	二百度
肥前温泉岳	硫黄	百五十度

▲鐵泉　これは鐵氣であるから著るしい澁味をもつてゐて諸種の成分と共に酸化鐵を含有んでゐる、泉底及び附近の地には赤錆色を附着すとある。又含鐵炭酸泉といふは普通の炭酸泉に鐵を含有させたもので婦人の産後の貧血、白血、萎黄病、ヒステリー、ヒポコンデリー、神經痛、神經衰弱、等によろしい箱根の各湯、伊豆の修善寺等多少の含鐵泉であります。

▲鹽類泉　これは食鹽、苦味、石膏、芒硝、沃度を含有してその分量の多少によりて効能にも相違あるが、主なる効能は便秘、逆上、痔疾、ヒステリー、心臟病、レウマチス、胃加答兒、子宮の炎症によろしく殊に其の沃度泉は腺病、肋膜炎、梅毒、子宮窒カタル等に著るしく効驗がある鹽類泉は無色透明で時には微黄を帶び、輕微の鹹味を有つてゐるその鹹泉の鹽類泉と異る所ろは鹹泉は著るしく舌頭を刺撃のてある本邦に於ける重なる鹽類泉の湧出する個所は

下野鹽原	百十度
攝津有馬	百度
攝津庫湯	六十八度
伊勢の鹽湯	五十八度
能登和倉	百八十度
伊豆伊豆山	百四十四度
但馬湯村	百七十度
加賀山中	百十八度
越中小川	二百二十度
箱根宮の下	百十度

▲無盡泉と定泉期

又温泉の湧出する形狀によつて無盡泉と定期泉との二樣に區別されてあります無盡泉といふのは二十四時、

通じて間斷なく湧出する溫泉で、日本の溫泉は大抵皆この無益泉であります、これは泉水の地中に集まる所その溜の大きくて更に缺乏する事がない又定期溫泉といふのは、時を限り、期を定めて湧出するもので、日本では伊豆の熱海の外は他に餘りこの定期泉といふのは聞かない。今日本礦泉誌に出て居る熱海の大湯の記を見るに定期泉の湧出する景況が錄してある。

大湯は上町にありて海面より高さこと七十四尺、湯壺石疊の間に湧出口ありて一定の時期を刻し熱湯と蒸氣とを交互に噴出す、其の始め沸騰の響き地底に發して雷鳴の如く漸々熱泉を迸出し、其盛なるに當つて、一丈餘を距る前面の石に注射す暫くして勢減じ次て蒸氣を噴出し地底又鳴動し蒸煙四方を蔽ひ、殆ど咫尺を辨ぜず少頃にして蒸氣熄へ再び熱湯を出し復た蒸氣となる、この如きこと、凡そ一時間半にして一晝夜六次とす、是れ定期噴泉、即ちガイシルなり但し毎月一回に長湧することあり、十二時間にして止めは又長休す其間一滴をも出さす云々

この如き間歇泉は日本に於て蓋し特種のものであらう

▲諸國溫泉の數

一體日本は火山の多い國で、諸國至る所ろに溫泉があってその著名なものばかりでも既に四百三十二ヶ所ある就中東山道は我國の最高脈及び火山脈であるから隨て溫泉の湧出る所が多く實に百七十ヶ所に及び就中福島縣の岩代がその第一である、それは有名な磐梯山を始めとして會津平野の四面は多くは高山火山質があるのでその山脈には皆溫泉が湧出る、その數實に三十七ヶ所に及ぶ、次は上野の國、此國の國境には有名な淺間山の活火山があつて其の山麓に、草津溫泉があるそれから四萬溫泉がある少し離れて伊香保もある、其他大小の溫泉實に二十三ヶ所に及ぶ、その次は信濃國で二十一ヶ所、東山道の次は北陸道である、北陸道には加賀の白山、越中の立山、などいづれも休火山であるからその地一帶は火山脈の通じてゐる處であるが溫泉の數は五十一ヶ所、就中越後に二十八ヶ所、越中加賀に各ゝ十

ヶ所、その次は東海道で、富士の火山を中心として其の四邊に散在する温泉は頗る多い、まづ伊豆國に十三ヶ所、相模國に八ヶ所それから山陽、山陰、に三十一ヶ所、四國に九個所、九州には肥後の阿蘇山、日向の霧島山、肥前の温泉ヶ嶽、などいふ有名な活火山があるだけに温泉も至つて多いが、就中肥後に二十四ヶ所、薩摩に十四ヶ所、肥前に七ヶ所、豊後に十二ヶ所、日向に八ヶ所、其他總計七十八ヶ所に及び、北海道はまだ充分の調べはついてゐないが、火山の數が七つあつて、その附近に湧出する温泉の數今日までの調査によれば六十二個所あるといふ事である。

▲烟霞療法

一體温泉に行く人を見るのに多くは入浴する事ばかり考へてそれで効能があるやうに思ふて居る、これは甚だしい誤りである、温泉の効驗は單獨では効がなく、他の療法と双方相須つて始めて奏功の完きを得るので、即ち前節に申した通り第一土地を轉じて平常の煩勞を拋擲ちそして身心を安逸にするのが第一即ち轉地療養の精神である。温泉場へ來たからといつて平常のやうに家の事に心配をしたり又は御務めのやうに湯にばかり無暗に浴つたからといつて決して効くものではありません。第二は新鮮の空氣中に生息し或は海水に浴し適宜の運動をなし食物を攝守するに在る、これが即ち大氣療法、運動療法、食餌療法の精神で、是等は實に温泉療法を補ふ處ろの良法である。

一體この氣候療法といふものは大氣を利用して健康を保ち疾病を治する所ろの方法であるが、その氣候といふのはその土地の風土の狀況、即ち地形や、空氣や、日光や、動植物の模樣によつて熱、光線、電氣、氣壓に千態萬狀の變化を來し、此の變化が地球の表面に生活する處ろの動植物に及ぼす働らきの成績をいふのであるそこでこれが人身に關係して害のある所は避け、利のある所は收めて利用して一種の藥品とするのが氣候療養の目的である。されば温泉に行く人はなるべくこの氣候療法といふ處ろに着眼して温泉療法と相須つて効

を收められん事を望むのてあるのてある。

脳髄せんよりは運動せよ

紅水と白粉

木村小舟

花は名殘を若葉にとゞめ、鳥は遠く幽谷に去りて、聲漸く老ゆ、かつて南郊に蝶と戯ふれて、若菜をつみし乙女は、今や西丘に織りなせる、新樹の翠幄中に有つて、正に郭公の聲をきくべき、時節とはなりぬ。

さる程にこゝに姉妹の令孃は、同じ賢母の腹より出で、たゞしき家庭に育てられて、人となりしと雖、姉の萬事に注意深くして、質素を旨とするに反し、妹は性質粗放にして、徒に臙脂白粉を以て、外貌の美を裝はんとす、しかも天のなせる處、飾らざる姉の、遙に眉目の秀づるを如何。

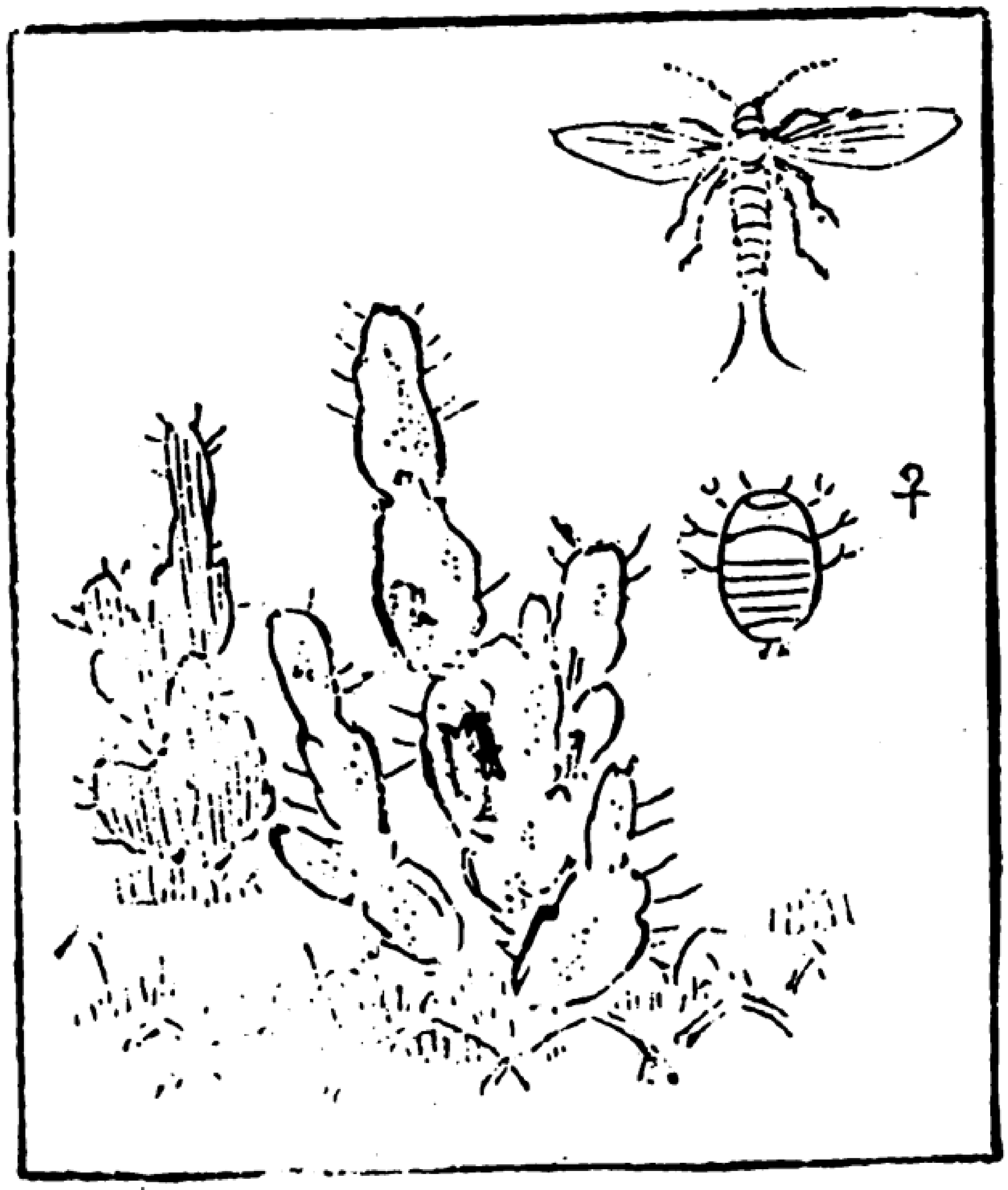
一日姉は、己が書齋に妹を招ぎて、語りけるやう、噫妾の目より見る時は、御身が顏面には、鉛や血汐を塗られたり、妾は見るからに心よからず、御身は定めし不快の極みを感ぜん、など早くそを取り捨て給はざるやと云へば、妹は直に鏡面に對ひて、また化粧せしばかりなる我が顏貌を見れども、たゞ臙脂濃くして口唇紅を點し、白粉厚くして首を閉ざすと見るばかり、別に血液と見え鉛と思はるべきもののなきに、まづ怒りをしづめて、靜かに姉君に向ひて、事の次第を尋ぬべく、餘義なく頭を下げぬ。

姉は妹を顧みて、いざさらば語り聞かさん、日頃御邊が嗜める臙脂は、何より造らるゝか、妾は之を血液の固塊なりと思ふ、御邊はそを知り給ふか、妾さきに人よりきゝし事あり、熱帶の野蠻國、毎年一人づゝを限りて、世に類ひなき美女を生ず、土人は之を得るや、皆喜び祝ひて、山林の奧深く連れ行き、無慙にも其身躰に錐をつらぬき、その創口より流れ出づるうつくしき、血液をば殘らず器に盛り、女の屍をば其儘其處に捨てゝ又顧みることなし、かくて取り得し血液をば日に乾かして諸國

に賣り出す、これ實に臙脂なりと。
妾もはじめは、かゝる物語を眞實とせざりかと、物事を學ぶに就きて、端なくもこの話の、全く理なきにもあらざることを確めたり、たゞ美女とたとへしは、小さき昆蟲のことにして、名さへ臙脂蟲と呼び、泰西の學者はコチニールと稱せり、墨西哥の南部、太平洋に面せる海岸一帶は、この蟲の特產地にして實は昆蟲學上、有吻目の介殼蟲科に屬し、常に仙人掌の莖に寄生して、その養液を吸收すれども、土人はその收利多きを喜びて、盛に之を飼育し、その飼育場をば、稱してコチニール園と呼り。
コチニール蟲は、本來有吻目なれども、雄虫の下翅は退化し去り、やゝ長大なる二翅を殘し、且つ立派なる觸鬚を有すと雖、雌虫は全く羽翅を欠き、たゞその躰肥滿にして、殆ど球の如き圓形を呈し、頭には極めて微小なる觸鬚を有し、短かき足の尖端には、一々鈎を備ふれば食草に纏り付きて、生活を安んずべし。
さて又コチニール園の摸樣は如何にと云ふに、一園每に凡そ五六萬株の食草、即ち仙人掌を植えならべ、夫れより三年を經過して、食草根を固め、枝を增して勢力盛なるを待ち、茲に始めてコチニール蟲を宿さしむべしと云ふ、しかも仙人掌の刺針多きものには、他の敵害少なくして、最も安全に蟲を繁殖なさしむるの利あり。
我が國にても、蠶兒を飼育するもの、良好なる蠶卵紙を購ひて、之を孵化せしむるが如く、コチニール蟲の種も又、枝に寄生したるまゝの株にて、市場に賣買せられ、その相場の如きは、凡そ百株に付いて、我國の五六十錢程なりと云へり、かくて買ひ入れし種の株をば、しばらく之を野小屋に貯へ置き、夫れより半歲を經て、本園に移植すべく、其後四ヶ月にして、初回の收蟲をなすを得べき事なるが、この際蟲の數は非常に增加して、種蟲の時の十四倍を示すと云ふ。
蟲の掃き立ては、極めて大事にして、多くは婦女子の事業に屬せり、彼の初生の蠶兒を、羽箒に輕く撫で落とすが如く、コチニール蟲も又、栗鼠その他の、柔かなる毛を有する獸尾にて造りし箒もて、一疋づゝ丁寧にしかも其雌蟲のみを拂ひ落とす。

臙脂即ちカーマインは、專ら雌虫の占有する處なるが、元來微小なる蟲躰なるに依り、今百二十匁のカーマインを得んとすれば、恐らくは十萬に近き蟲躰を得るにあらざれば、得るに難しとぞ。然るに此地方より、年々歐洲の諸國に、輸出する處のカーマインは、百萬ポンド（一ポンドは我百二十匁なり）越ゆるを見ば、如何にこの業の、盛なるかを思ふにあまりあるべしコチニール蟲を殺すには、熱湯を注ぐか、但しは又多くの虫躰を積み重ねて、天日に曝し、自然に之を殺し、之を乾し上ぐるにありと云ふ。

カーマインは、この乾し上げたる多くの虫躰に、二三の混和物を得て造り出だされる、彼の顔面に塗る紅水と云へる贅澤品も又、畢竟カーマインの精品に他ならずと聞く。扨カーマインの紅水をぬりて悦ぶ、御身の首筋に、眞白く見ゆるものは、實に彼の鉛と酢との化合物に、葛粉を混入したる者なるを知ずや、凡そ金屬の中にて鉛程人躰に大なる害毒を、被らす者なきを知らずや、鉛毒病と云ふ恐ろしき病氣も、又白粉を多量に使用する人にのみ限りて、之あるを知らずや



薄き鉛板を卷て、之を圓筒の中に挿し、醋酸と稱する酢の、稀薄なる液躰を充したる器の上に重ね、永く半月に渡りて此酢を熱する時は、其蒸發氣は、空中の酸素に觸れ、更に鉛板と合すべく、此三種の化合物をば、世に醋酸鉛と稱す。この醋酸鉛は、圓筒内の鉛板面を被ひ盡ずが故に、別に炭火に依つて、彼の炭酸瓦斯を發生せしむる時は、醋酸鉛は、之とも又化合して、こゝに初めて炭酸鉛と云へる

を生ずべく、此を鉛板面より打落として、清水にかけ、手を換え品をつくして、精製せしものに彼の葛粉や、又御身の好むべき、麝香に類する各種の香料を加へ、手奇麗に製し上げたるを、世に白粉と稱して賣り出すなり。

又別に彼の炭酸鉛をば、亞麻仁油と云へる者に煉りてペンキとなし、以て木質の腐蝕を防ぎ、其他各種の裝飾と爲に用ひられ、又顔料とて洋畫を畫くに必用ときく。

かく語り來るとも、御邊は猶もカーマインの類、白粉の毒鉛をまで、我貴き皮膚面に塗りて、其醜貌をかくさんとするか、誰かその愚を憫笑せざらん、徒に外貌の美ならんよりは、寧ろ性情の美くしきことを望む、まして節操正しき、日本婦人に於いては殊更ならずや、御邊もし妾が深き心づくしを汲まば、今日よりは心を改めて、紅水を去り臙脂を洗ひ、白粉をすてゝ之に換ふるに、心の奥底を粧ひ給はずやと、厚くさとしければ、流石の妹も我不覺を耻ち入ること深く、夫れよりは萬事質素を旨とし、召し使のもの共をも情をかけ婦道に欠くる處なく、姉妹共に、美名を一郷に擧げしとなん　（完）

密蜂の生活

梅軒

春は去り、夏は來にき、といふ季節となれば天地自然の光景が自から面目を更めて參ります。先づ梅雨で以てあらゆる自然を濕すのみか、人の心までを濕すといふ大變動から、夏の序幕が開かれ、それで、山に野に、木や草の緑の色が益々深くなつて來て、田には、盛んに植付が始まり、それから日本全躰の平野が變じて、水田の海となり、青稲の原となるともいはれる景色となります斯くなると、蚊は時を得がほに、プン／＼と跳ね廻つて我等を殺ひ、蟬は今こそと樹の間に騒いで、我等の午睡を促し立てるようになり、蜘蛛は蜘蛛、蟻は蟻、蝸牛は蝸牛、蚯蚓は蚯蚓など〻、動物は大となく、小となく、各々其の生を樂しんで、勇しく、甲斐／＼しく立働く様、誠に自然物の活動を目の當りにするといふべく、それに、蒸し燒く、將た燬くが如き時に、一陣の凉風が颯と袵を洗ふ心地は、得もいはれまい。それに悠々とし

た池の面に、紅白の蓮花が、ソヨ吹く風に誘はれて、微に動くもあり、蛙鳴く川の邊りの夕闇に、チラ〳〵と螢火が我等に漫歩を勧めるもある。

これ等は、夏季三月に渉る光景を全寫にたので、自然といふものは、歩一歩段一段と、順を逐ふて進んで來るのであります、

そこで、此の夏の自然の補遺として茲に蜂の生活を話しませう。

御覧の通り、蜂には人が飼ふ密蜂と、自然に生活する黄蜂や足長蜂がありまして、足長蜂は名の通り、其の脚が極めて長くて、腰が甚だ細くあります。それに其の巣が通常、其處此處の軒下や樹陰にあつて、チヨツト鐘のような形をして居る。黄蜂は總躰に肥つて、先づ屈強な躰格とも、いはれて、それには山蜂といつて、殆ど二寸ばかりの大きなのが居ります。黄蜂の巣は中々大きいもので足長のような形で今少し淺くないものが、幾段にも重なつて、其の外側を全く被ふて本當に眞丸い形をして居ります、其の大きなものになると直徑二尺程のものがあります密蜂になると、躰の色が褪黒ずんで、毛深く、これに就いて話すことが實に澤山あります。こゝでは專ら此の密蜂に就いて色々面白いことを述べたいと思ひます。

一躰密蜂ほどに、よく働く昆虫は、復とありません。それも密蜂のどれもが、働くといふのではなくて、尻尾に劍をもつて居るものである。しかし、同じ劍をもつて居るものに、特別に躰の大いものがあつて、これが密蜂の幾千幾萬といふ家族を主宰し、又母として、最も大切に最も深く尊敬せられるものである、これを密蜂の王と稱し全群中で只一匹しか居りません。此の外に、躰の肥つて全く劍を有たないものがある、これは、蜂の雄で、少しも勞働せずに、食つては寢、寢ては食ふといふ様であります。そこで密蜂を區別して（イ）王蜂、（ロ）職蜂、（ハ）雄蜂の三とすることは今更にいふ程のこともないと思ひます。其の職蜂は實は雌で、これを王蜂に比べれば不完全な雌で、若し其の幼い間に充分に大切に養育さゝれば、矢張り王蜂のやうに完全なる雌となり

て躰も大きくなつて、即ち王蜂となり得らるゝのであります。それで一家族中の王が若しも失はれるようなことがあれば、右のようにして、新に又一個の王蜂が造り出される。何でも劒を有つて居るものは、皆雌の方で、有つて居らぬものは皆雄の方であると考へて居れ



は、間違はないのです。實に王蜂が産む所の卵は、莫大な數であるが、只雄を雌との二種あるだけで、其の雌の卵から僅の王蜂と職蜂とが分れて來るのであります。

今職蜂に就いて、少しく述べませう、其の數は一家族の中に、一萬五千から、五萬程もある。そうして、其の役

目は、幼者と老者とて異つて居るので、幼蜂は専ら内役に従事して、女王のために働いたり、多くの蜂兒を養つたり、又巣の中に掃除して、之れに風を通したり、躰から蠟を出して巣の建増をしたりして、中に忙しい役目をして居ります。それから老蜂は専ら外役ばかりに従事して、花から花の間に飛び廻つて、密や花粉を集め、又諸所から水を求め樹脂や蠟を尋ねて 凡てこれを巣の中に持ち運ぶ役目で、これも亦中々忙しくあります。

蜜蜂が花を尋ねて得た所の密汁は、どんなにして持ち歸るであらうか。それは先づ舌で吸ひ取つて、食道から腹の中の蜜嚢に蓄へて歸る、勿論其の嚢の中にある蜜は、本の花にあつた蜜とは既に、品が變つて居る、それは食道を通らうとする前に、口の邊から出る津液と混じて、左様なるのである故に蜂蜜といへば、既に花密からは變化して居るのである。併し蜂の食物は密ばかりではない、花粉も亦大切なる食物である、否、花粉がなへはて たとひ密ばかりあるも、子は全く育ちませんだから花粉をも一生懸命に探し廻ります。それを花から集め採るには足を以てするので、元來第一對、第二對、第三對の六本の足ある、中で、第三對の足を用ひます、此の圖にある如く、第三對の足は最も大きくて、其の前跗が甚だ扁く、其の裏の面に櫛の歯を並べたように、毛が立ち列んで居る、それで以て花から花粉を掻き取り、それを其の足の脛の表なる凹に蓄へそうして巣に歸り、これを第二對の足の脛の終にある針で以て、掻き湊へて、巣の房に押し込むのである。序に申して置くことは、第一對の足の前跗にある毛は 眼や顔に着いた塵を掃除する道具であります。

女王の尊いことは、前に述べたので分かつて居る、實に、どんな強盛な蜂の仲間でも、此の女王がなければ、精神のない身躰のように、到底其の全家族が滅亡に歸して了ふことを免れない、であるから全家族が女王を愛護することは、譬へようもない程で、周圍からこれを圍んで守り、或は食物を捧げ、或け巣の上を歩き行くときに恭しく路を開き、其の様は、少しも人間社會の君臣の間柄と變つたことはありません。若しも何かの事變で

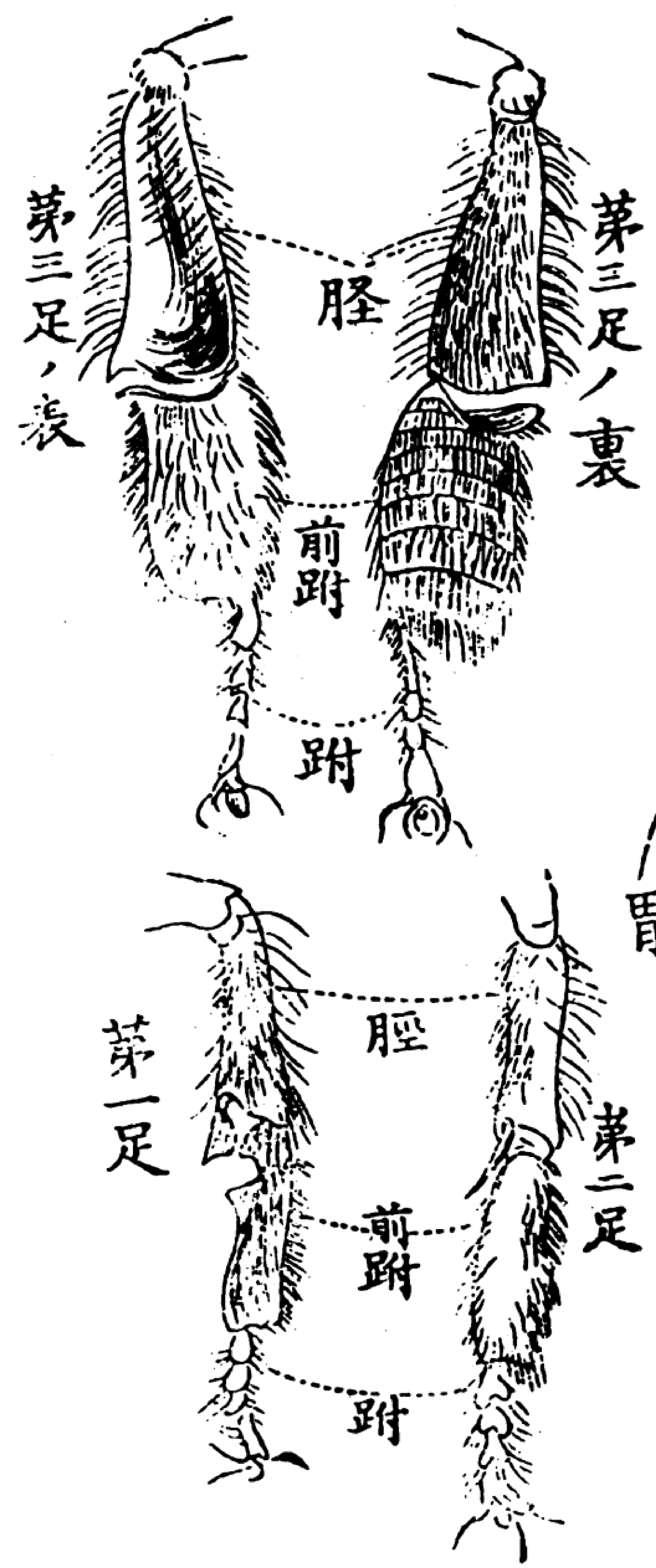
女王の姿が全く見えなくならうならば、其れこそ、甲から乙へ、乙から丙へと、其の警報を傳へ一同最も甚しき悲痛の境に沈み、内外の業務は總てこれを廢して、哀悼の狀を示すことは、恰も國家の大喪があつて臣民一般が生業を停止すると、少しも違はないのみか、群り集ふ所の蜂は、哀れなる聲を放ちて巣の上を走り、或は外に出て切に尋ね求める樣實に此んな小さな虫にして觀る者の哀れを催させる程であります。何が故に、此くの通りになすかといふに、女王がなければ子孫を、産んで此の一大家族を滅亡させずに置くことは出來ないからであるそれも女王が既に相當に、卵を産んだ後であればそれほどに、騷ぐはとないが、兎も角、我々の一家に引き比べて全くの、安危存亡に關係を有して居る者に無くなられては、どれ位の悲嘆であらうか、誠に想像するに餘りあらう蜜蜂が巣を造るには、職蜂の腹の兩側にある四個づゝの小い嚢から分泌する蠟を以て、六角形の小い房を、段々と組み合せてするので蠟とはいふもの、割合に丈夫に出來て居ります。其の房には大小の區別があつて、總て小い房は、職蜂の卵を産み付け、大きな房は、雄蜂の卵を産み入れるか、若しくは蜜や花粉を貯蓄する場所である。王蜂の房は甚だ僅で、他の房と違つて、多くは下向きに設けられて、中々大きくあります。女王が産卵するには、先づ巣の一團の中央に卵を置き、それから其の周りへ産み擴げて行くので、時として一日の間に、三千餘の卵を産むことがある、それも唯、一度雄と交接へば生涯年々此のような莫大の卵を産みつゞけるので、獨り雄蜂の卵は、全く交接はずして産む所のものであります。女王の産卵力は、年の加はると共に減つて行いて、普通四年に至つて死にます。職蜂の壽命は一定しないで、其の最も繁忙な春夏の時に産まれたものは、僅々三十

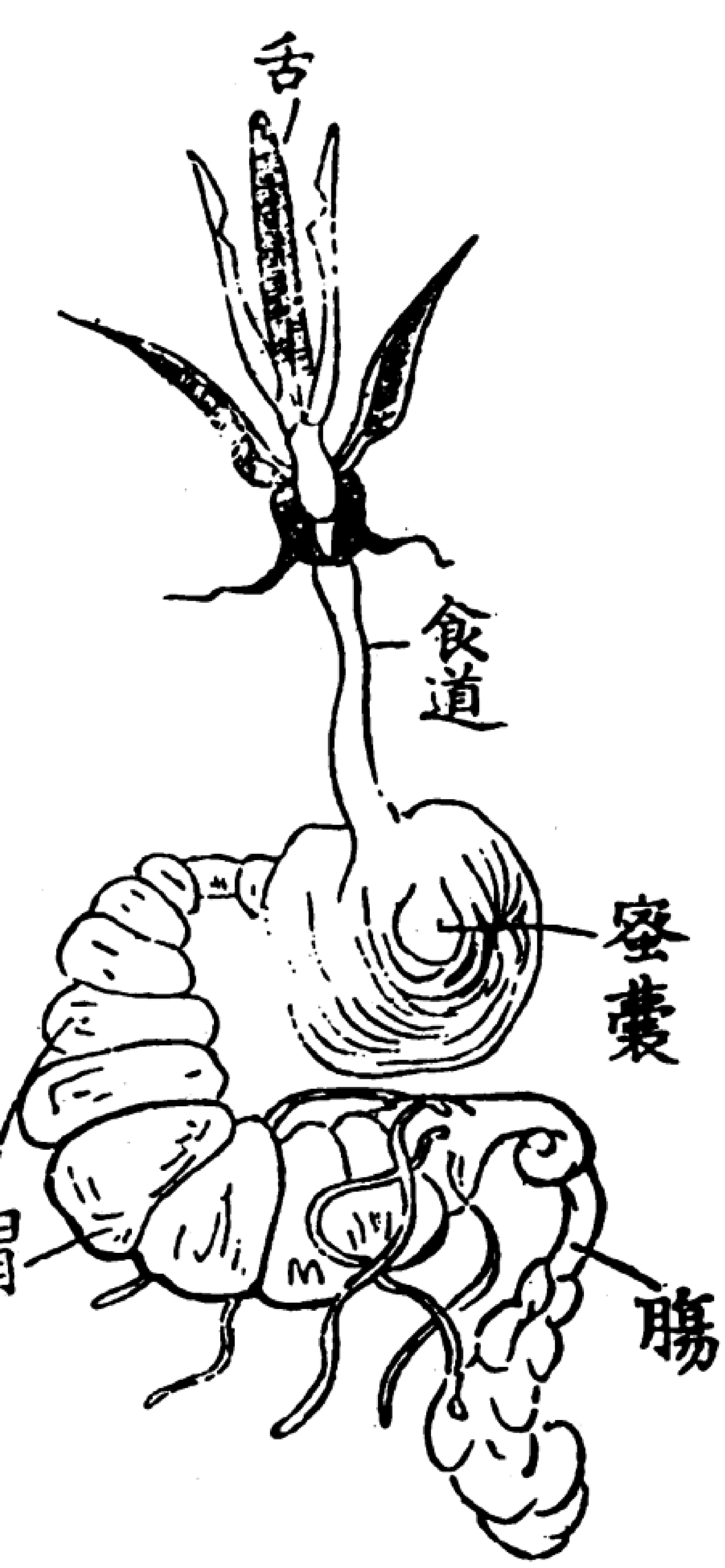
イ


ロ


ハ

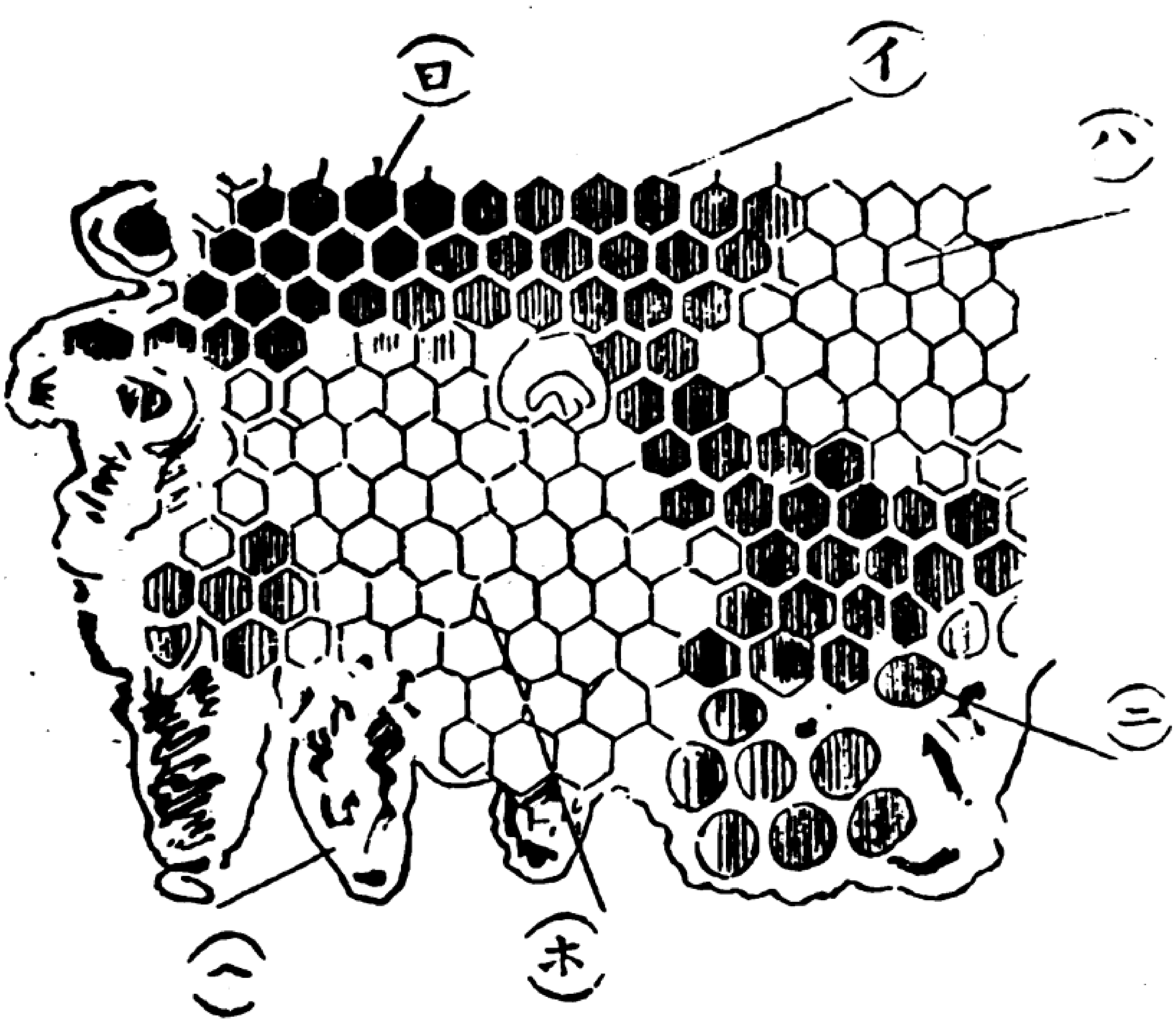

五日て死んで了ふが、秋の閑暇の頃に産まれたものは六七ヶ月間も生きて、即ち王蜂と共に冬を越して翌春に巣を増殖し、新に産まれた子を養つて、然る後に其れぞれ死亡せます。蜂の一代は此のように短いが其の家族の續くことは決して短いとはいはれない、往々四十年間にも亘ることがあるそうです、丁度我々の一家族が祖先から傳はつて、百年二百年以上も續いて居るものがあるが、一人づゝの生命は、五十年七十





年程であると同じような譯であると思へは何でもありません巣の中にある職蜂は臭に依りて互に識り合つて、能く互の必要を悟り、又互に睦

じく働いて、若しも他の家族の蜂て、入り込んて來ようならば直に攻め殺して了ふ程てあります。ところが又一種殘忍な習慣もある若し仲間の一蜂が、病氣か何かて働けなくなれば、其れ自身が、外に出て仕事しながら死なずあれば、多くの仲間が容赦なくこれを引出して了ふのてす。さても殘酷なことてはないか如何にも左樣てあらうが、更に思ひ廻すと彼等は一個々よりも一家族全体の上に常に心配するのてあるからだと見えます。恰も、國の爲家の爲には、一個の身命を投げると同じような條理てあります。恐らくは、國家的道德を重んじて、個人的道德を輕んずるようなものてしよう。寧ろ美德ともいはれるのてす



それのみか、若し仲間の一匹が、他の仲間の者に害せられて、苦しみ悶える所なんかを見付ければ、必ずそれだけの仇を報いるそうてあります。雄々しい心がけてはありませんか。

圖中(イ)は花粉の滿されたる房(ロ)は職蜂房(ハ)は蜜の封ぜられたる房(ニ)は雄蜂房(ホ)は職蜂房の蓋されたるもの(ヘ)は王蜂房也

雄蜂は一家族の中に數百も居つて、實に働くに道具もなく、防ぐに劍もなく、其の職分は、唯年若き女王を姙娠させるより外はないのてす。實に只それだけに巣の中に養はれて居る食客てあります。春夏の天氣の善い日に空中に舞ひ遊んて、其の間に雌に接するのてある。此のように遊びに出て腹がすけば、巣に歸つて來てタラフク蜜を食ひ飽いて、亦出遊びますだから秋

になつて役目が濟めば、職蜂一同から逐ひ出されて餓え死をするか、若しも强情で從はなければ一同から螫し殺されて了ふのであります。されど女王と一旦交接したものは、直に自ら死んでしまひます。憫る者の果は每も此の通りではあるが、去りとて亦可哀想ではありませんか。

女王は實に夥しく卵を產みますが、將來の女王となるべき者の卵を產むことは嫌ひます。何故であるかは分かりましよう。一家族の中には、一個の王より外には許されない、丁度一國には二人の王が並び立たれないようで、中々嚴しいものであります。それで、全く女王の卵を產まない譯には行かない、一家が連綿として續いて行くには、是非二代目、三代目などの女王を造らねばならんのです。卽ち女王の房として、一家族中に數個設けられたるものに、卵を產み附けます、それでも其の女王の卵が孵へれば、矢張り女王は恐れて、其の長しない前に之れを殺さうとします。ところが多くの職蜂が、これを支へ止めて、そうはさせません。何故にそうするかといふに、職蜂も亦多く卵を產まれるから、數が多くなります、すると其の住家が狹くなる譯です。そこで、分家でもせんければならん、すると二人の女王が必要になる譯です。

子たる女王が、右の譯で無事に成長すれば、房を出ますサア、そうすると、一時たりとも一家に二人の女王がある譯になるから、二人ともはどうしても血戰をしなければならぬ。すると親の女王の方が、血氣盛んな若物は負けることは分かり切つて居るから、子の女王が房を出ない間に一部分の職蜂を引き連れて他へ移り去ります。先づこれで一段落は附いたが、しかし子の女王には、猶姉妹があります、女王は固と數個の女王卵を產んで置いたからです。そこで此の姉妹間に恐ろしい決鬪が起るのです、現在骨肉の間に修羅塲を演ずるのです。しかし最も早く成長したものが、他の妹等が未だ房の中に眠つて居る間に、刺し殺して了ふのです。それで、一人が全く一家の王となり濟すことが出來ます。ところでどうかすると、他の妹を刺し殺す塲合に、職

蜂が妨げて、さうはさせないことがあります。それは、家族が猶多過ぎて、もう一度分家の必要がある場合にするのであります。そこで、其の姉は詮方なく、一部分の職蜂を引き連れて他へ移り去ります、これが第二の分家です。蜂の數が多ければ多い程、第三、第四などの分家が行はれるのです。

こゝに、生憎、姉妹が、全く同日同時に成長して房を出ることがまゝあります。サア大變で、此の二女王はどうするか、こゝでこそ、もう決鬪は免れません。分家する必要もなくて、此のやうなことがあらうならば、職蜂も決して仲裁をしません。恐ろしい勢を以て、角と角とをかち合はせ、口と口とを噛み合わせ、果は一方が腹を曲げ、劔先を以て、他の一方を螫せば勝負は立どころに決するのであります。無慘といはうか、痛ましいといはうか。婉として嬌かなる女性の人間が、髪を振り亂し口は裂け、眼は血走り、双方劔を閃かして鬪うならば、見る者、どんなに慄くてあらうか、將たどんなに、怖れるであらうか。蜂ならばこそ、さして惟しみも爲まいが、これを人間と見ればどんなであらう。東洋流の習慣では、兎角女性は、蜜蜂のように權力はない、これが一つの憂ふべき點ではあるが、去りながら又權力のあり過ぎて此の蜂の如く、女性互に相爭ふに至りては、實に悲慘なことではありませんか。

辛抱と月日とにて桑の葉が錦の袍となる

鑵詰のはなし

茗溪女史

食物を貯藏するのは經濟上にも衞生上にも兩利益であつて世の進むと共に益々その方法の改良せらるゝに至るでありませう、扨て食物の貯藏に就て現今弘く世に行はれてゐるのが、乾製、燻製、鹽藏法の三種であります。乾製と申すのはいふまでもなく、すべての食物を日光に乾曝して水分子を除去り。永久に貯藏するのであつて、乾物屋の店頭へ行つて見れば、穀物、野菜、菓物魚介その他あらゆる食品が如何に乾製されてゐるかを

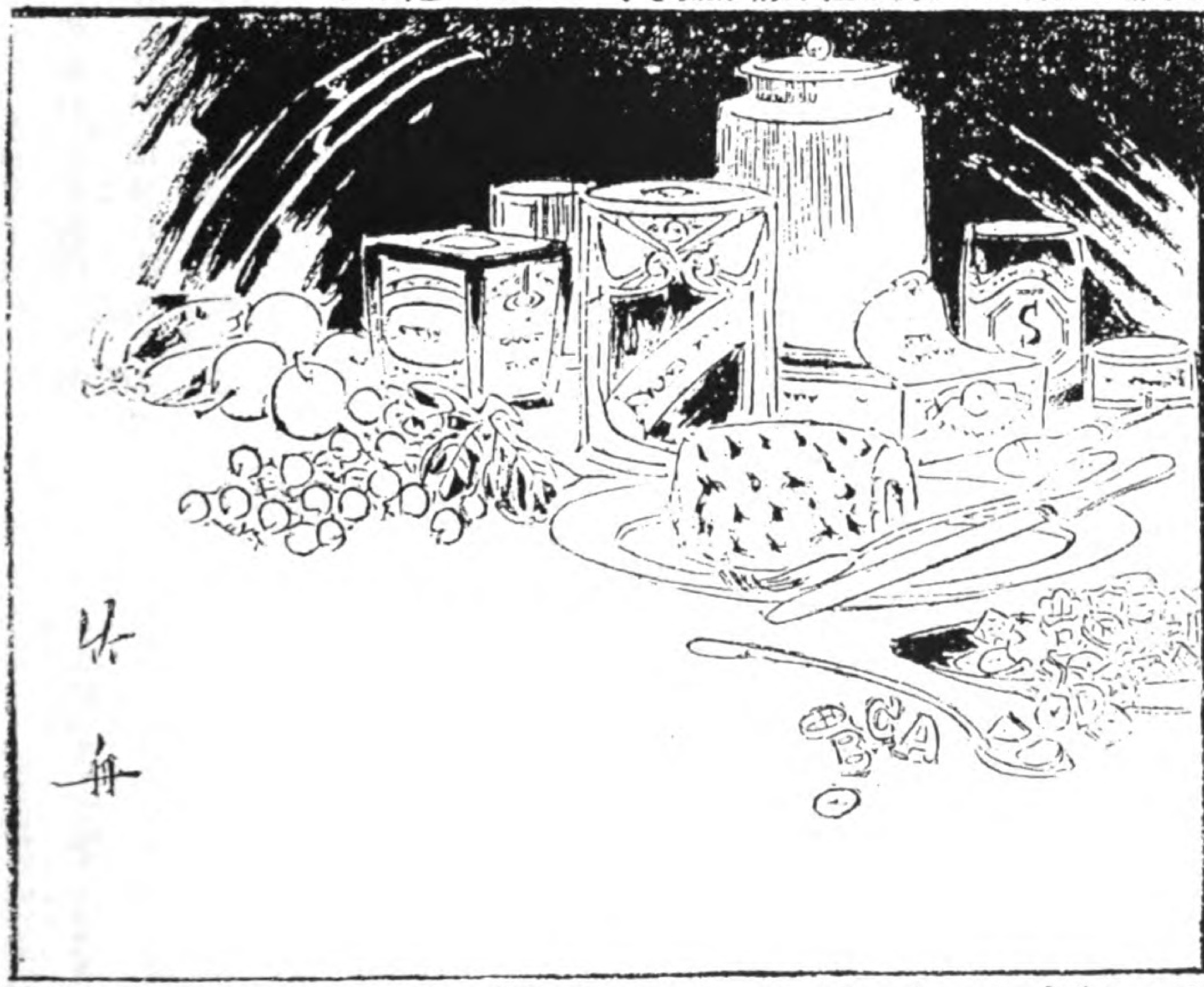
知る事が出來ませう。又燻製といふのはこれまで日本てはあまり、行はれては居ませぬけれども西洋では隨分この方法が行はれて居ります、これは重に肉類に用ゐる方法で、生肉の表面を燻し固めて有機物の浸入を防ぐのであります。次に淹藏法といふのは、俗にいふ鹽漬砂糖漬で魚類でも野菜でもすべて鹽や砂糖につけて腐敗を防ぐのであります。

▲併し乾製でも淹藏法でも貯藏法にしては至つて不完全なものと言はなければなりません、なぜかと申すに乾燥法として既に日光に乾曝した以上は大にその天然の性質を損ずるのみならず。どうかすると氣候の變化に遭ふて。品物に黴が生へたり。朽ちたりして。質を害します。又鹽漬にしても、同様で魚類でも野菜でも一旦鹽につけると、天然に含まれた水分がにじみ出ると共に滋養分の幾分かが失はれて仕舞ます。して見れば乾製、鹽製ともに食物の貯藏法として完全なものとは申されません。然るに罐詰は以上二種に比較して大に立勝つた方法で。これは食物を天然の儘、或は製法したものをブリキの罐に詰め込んで、四方を密閉して空氣の浸入を防ぐのであります。いふまでもなく空氣中には人の眼に見へないバクテリヤが存在してゐる。から有機物が空氣に觸れると段々とバクテリヤの繁殖を來して遂には腐敗して仕舞ふのであります。それゆゑこのバクテリヤの繁殖を防ぐには空氣に直接させない工風、即ち空氣の杜絶を行ふのが一番宜しいのである罐詰法は必竟この理から考へられたものであります。鳥獸肉、魚介類は言ふまでもなく、果物でも野菜でも何でも皆なこの方法で、蒸したもの煮たもの、或は生物、或は漬物を其儘罐につめて永久に保存する。牛肉の大和煮でも筍の砂糖煮でも。鮑や帆立貝や、松茸や、また果物でも杏子、桃、水蜜桃その外熱帶地方の果物で隨分貯藏に困難なものでも罐詰すにれば永久に保存する事が出來るのであります。

▲罐詰の効用は單に防腐貯藏に便利ばかりでなく、旅行用として携帶に便利あり、贈遺品として運搬持扱ひに利便なのが又一德であります。縦や新鮮といふ事は

得られないにした處ろが、夏季の果物を冬籠りの時に賞翫する事も出來れば、秋の野菜が春の始めに食ふ事も出來て食卓を賑はし或は萬里の波濤を隔てた山海の珍味千島の涯の鮭の肉でも。布哇、小笠原の鳳梨正覺坊の肉が比較的廉價で平民流の膳部に供する事も出來るのは主として罐詰の德と言はなければなりませんけれどもこの罐詰にも往々危險な品がありますれば隨分注意をしなければなりません。殊に目下の如き盛夏の候となれば、餘程の注意を加へねはなりません。

▲罐詰の法　は西曆の始め、



アッペルトなる人の創案に係る者に段々と改良を加へて來た者でありまして、四季常に新鮮な食品を食卓に供するのであります。罐詰を製する普通の法は、罐中の空氣を抽き出して、攝氏の百度から百五六度位の熱を加へ諸種の腐敗菌を消毒した後に、密閉するのでありますが稀には硼酸とか水揚酸とか云ふ樣な防腐藥を混入した者があります

▲扨此罐詰品を鑑定するには、先づ其消毒法は充分行はれて居るか、其の使用されてゐる防腐藥は

更らに人身に危害のないものであるか等に、注意せなければなりませぬ、日本に於ける罐詰業者の大部分は西洋に比較して一般に其規模が小仕掛で、消毒用の方法が完全してゐません、この消毒に用ゆる罐も蒸氣罐等を用ゆ者はなく、重に通常の平釜ですから中々百度以上に熱すると云ふとは出來ません、從て其消毒に付ては隨分疑はしいものがありませう。若も其消毒の法が不完全て滅菌が出來なければ、忽ち其細菌は蕃殖を逞しくして、罐内の食品を腐敗に陷らしむる者と思はねはなりません。

▲又此罐詰に今一ツの恐るべきものがあるこれは罐詰用のブリキと、罐を製造するに用ゆる封蠟即ち俗に「はんだ」と稱するもので是等の者には多く人身を毒する、鉛分が含まれて居つて、罐内の食品が酸敗すればするほど、容易に其鉛毒が浸出るから非常に危險であります。此「はんだ」と稱するものは、錫と鉛との合金でありますが、鉛の分量の多いほど融け易くて、使用に便利であるから百分の「はんだ」の中に七十分も鉛を混じて居るものが、ある殊に近時は、石油の空罐や石灰の空罐などに用ひて居る者を剝取して、罐詰の蠟着に仕用する者もあるとのことでありますが、これは實に恐るべきものと言はねばなりません。

▲其外まだ大に恐る可き者があります、夫れは蛋白質の腐敗及ひ醱酵の初度に起る、プトマイン毒の生成であります、プトマインの恐る可き毒物であつて、蛋白質の分解から來る者であるとは、已に一般學者の確認する處となつてをります。

▲外國品を賞めて國品を毀るのではありませんが、罐詰製造業がまだ幼稚である日本の品は種々不完全な點が多くあります。譬へば牛肉の大和煮にした處ろが日本の方は一旦釜で煮たのを詰めますから滋養分は幾何か生肉よりも減じてゐます、然るに濠洲邊から輸入した品は罐の中へ生肉をつめて罐ごと蒸滊罐に入れて蒸すのでありますから滋養分は少しも損りません。野菜果物でも矢張りその通りで輸入品は純粹であります、どうか日本でも舶來品のやうに製造が完全になるやう

にしたいものです。

▲次に罐詰の鑑定法を少しく申しませう罐詰は周圍から密閉してあるから、腐敗すると有害瓦斯の發生する爲に蓋や底が非常に膨脹して來る者です、それで、指先て押て見ると、必らず多少の彈力性を有して居つて、叩いて見ると響が濁みて居ます（善良なるものは音響清澄なり）げれども罐が破れて居るとか、細菌がまだ發育せぬとかいふ樣な塲合は、是で鑑定することは出來ぬから、據なく孵化器や顯微鏡等を應用し或は化學的の檢査に依らねばなりません、又鉛が食品中に浸出して居るか何だかと云ふとを試驗するには、先づ罐中の食品を少し取つて灰になるまで燒いた後、硝酸を加へて溶解するのであります、そして之に硫化瓦斯を通すると黑色の沈澱を生ずるに依て知るとが出來ます。併し學理上の御話て素人方には一寸出來兼ます。

▲夫れから果物などの罐詰に、誠に麗はしい色を以て居る者があるが、是は大概銅を以て着色した者で有毒てある、例之ば青梅昆布のやうなものは、少許の醋を入れて銅鍋で煮ると極めて美麗な色になりますそんな鹽梅て是等の物には多く、彼の有毒性なる銅氣を含むて居ります、是を試撿するには、何の造作もないので、只琢磨いた鐵線を一晝夜位浸して置くと、直に其鐵線が銅渡金されるからすぐ鑑定がつきます、防腐藥として重に用ひるものは水楊酸で、之は過格魯爾鐵を加ゆれは、紫色になるから分ります。

以上の試撿て確めたものであるなら先づ善良な者として差支はあるまいと思ふけれども、空氣に觸るれば善良な者でも腐敗して、鐵葉に銹を産じ金毒を溶出する者であるから、口を開いたら直に硝子瓶の如き者に移して置くのが肝要であります。以上は罐詰に對する一般の心得て、唯庖厨の主宰者たる主婦方の爲めに御叅考として申し述べたのてあります。

淵に臨んで魚を羨むよりは
退いて網を結むに如くはなし

挿花のしをり

捻華庵主人

▲四方正面の花

従来の日本流の花は何派でも何流でも大抵は一方から見る花であつて、只一意にその前面計の恰好を調ふるから、之を側面より見るときは如何にも無様で見るに堪へぬ、勿論之は無理は無い、それは日本流の花は多く之を床の間に飾るものであつて、床の間は大抵の床が三方が塞つて一方のみ開けてあるから、一方のみを主とするからの事ではあるが然しながら一方のみを調へ置けば、それで好いと云ふものでもなからふ、只それにても可なりと云ふ計りて、望む所は少くとも二方若しくは三方は何方から見ても見苦しくない様に致さねばならぬそれは、然様致さねば一瓶の姿が整ぬからである、從來日本流の花は、丁度婦人が正面ばかりの化粧をして側面の化裝修飾を施さぬ様なもので、寧ろそれ等は滑稽に近ひのである、然し左様に申せはとて、前も横も後も同じ様に單調の挿し方に致せと申すのでない側面には側面の趣を整へ、後部は後部の趣致を作り度ひと申すので、横にも後ろにも目や鼻を付けよと云ふのではない。付けたれば餘程可笑しいが、日本流の挿花には、その側面の飾りの耳や鬢や後の方に頂の無い様なものであろふ、即ち挿花の姿に就て申さば、前面は陽方で後方は陰方で、そして側面は半陰半陽とでも區別する、それで前面なる陽部を客方に向はしむるのであるが、之は日本流の居室に置く挿花に就て申すのである、然し歐風の居室は勿論同じく日本流の坐敷でも、歐風に椅子や卓子を置て歐洲風に裝飾を致した室には此種の挿花てはどうも似つかぬ、歐風の居室に飾る花でも、中央の卓上に置く花瓶もあればカーヘルの上や壁倚りの卓上に置く花瓶もあつて、一概に斯様であると取り極めて申す事は出來ぬが、何方からと云へば、大抵は客が四方少くとも三方から見るものであるから、之には是非四方正面の花は必要である、之れは勿論日本流の挿花の三方面、若しくは四方面とは異つて四方

何れも正面即ち陽方に整へねばならぬ、そしてその正面陽方の中に矢張種々と陰陽や疎密や高低長短などを作るものである、即ち前に申した盛花の花の樣に四方何れも同じ樣に姿を作るので、それは梅櫻水仙寒菊せんりやうなと種々の花を挿し交ふる時ばかりでなく梅なり櫻なりの一種の花を挿す時にも、矢張り四方正面の挿花に依り度ひものである、尤も日本の挿花にも、池之坊流の立華には四方正面と申す者があつて、四方何れから見ても同じ樣に見ゆる樣に、前假も胴も四ヶ所に挿すので、之は鐘の供養とか献花とか申して、神社の拜殿などの樣に、四方から人の見る場所などの挿花て、多くは正式儀式て挿むものであるが、私は歐風の居室や、又日本流の家屋でも、歐洲風に室内裝飾を施した場合には、斯樣な風に挿し度いと申すのである、斯かる挿花には花留は之れまでの股張りや配りでは六つかしい、それてこの四方面の花には 渦 即ち鉛製の 渦卷形の花留を用ふるか、眞の花を挿す時に用ふる井筒を使ふが好かろふと思ふ、井筒は細い竹で、花瓶の口へ井字形に井桁を組みて、それへ草花の根元を挿す、この井筒なり渦なりは、四方正面の花を挿すには、一番便利で好い樣に思はるゝ、この四方正面も矢張り主位となるべきものと眞髓として、從位の草又は花を以て全躰の透間を塡補して、そして客位の草花を四方に挿して全瓶の美を整ふるのである、花の形は云ふまでもなく、半月も滿月もない、倒れて伏したるも捻れて靡けるものも好い、或は百花の咲きみだれたる春の野の美を偶し、或は萩女郎花糸薄なとを挿し交へて、鳴く虫の聲でもしそうな秋の花野のなまめげる狀を寫すも面白かろふこの四方正面の挿花は、洋風の室のばかりでなく、日本風の裝飾を施したる坐敷でも、机の上や棚の上に置くには決して惡るくは無い。

▲草庵茶室の挿花

流儀張つて、格法に泥つんだ挿花の俗つぽい嫌味勝で裝飾上の類を傷づくるときは曾つても申したる所であるが取分け、草庵や茶室の床には、この種の花は大禁物である、床の脇には嵐窓か何かゞあつて、軒先には蘆

廉ても係けて掛物は、古更紗か大藏榛原か何かの寂びた表装の禪語か消息文ても掛けてある、草庵にどうして古流や遠州流の拙な曲な花が似合ひませう、それは丁度藜杖の隱士の家に藝妓などを連れて來た樣なもので不權衡なことは此上もないことで彼の漁樵路上着一蓑衣。時朝士轉添許多俗なるもので蓑衣的の朝士てさへ俗氣がある、況して蓑衣時ならざる花柳の紅粉の臭味は酷評かは知らぬが、隱士の幽栖を汚すと云ふても好からふ



草庵茶室の花は只無作意に何となく自然のまゝに挿したるが好いそれも、枝數の多からぬに風情は多い床柱にかけた魚籃か經筒かに莖がほそれも可成丈短かに挿したる若し置生けなれは獅子口か靑磁燒の一輪挿に當季なれば四季咲の牡若や甘草などを挿したるは先づ似つかはしい方で牡若なども花の大きく肥えたるは騷々しくて面白味が薄い、凡て茶室の花は閑寂な痩せたものが好いどちらかと云へば却て名も知れぬ野花などの方が風情のあるものである、草庵茶室に相應する花器今申す魚籃靑磁燒古銅製の甘筒形竹器ては尺八向ひ鶴など兎も角も草庵茶室の花に曲のある派手なものは禁忌てある作意を用ゐぬ不用意なる所が賞翫の目的で數奇の主旨に戻らぬ樣にすれば好いこの不用意の挿法法式の據るべきもの丶多い爲に却て面倒

て實は筆舌以上の奥秘てある私は人のこの種の挿法を問ふ毎に左の語を以て答ふる

能脱俗便是奇作邀倘奇者不爲奇爲異

▲花なき草木

花のない草木を挿すことは池の坊流などては爲ぬ事てあるこれは禁じたと申す譯てはない然し花なきものは挿したとて何の可笑味も無いものてそれて何となく昔から花のない草や木は挿ぬことに成つたのてある、それで若し松だの竹だのと云ふ種類の樣なものを挿す時は根〆に何なりと花のあるものを添へる、然すればその松や竹の樣な花の無いものもこの花のために却て一段の光彩を添ふる譯て所謂新綠叢中の一點紅て大變に引つ立つて見ゆる。

▲當季の花

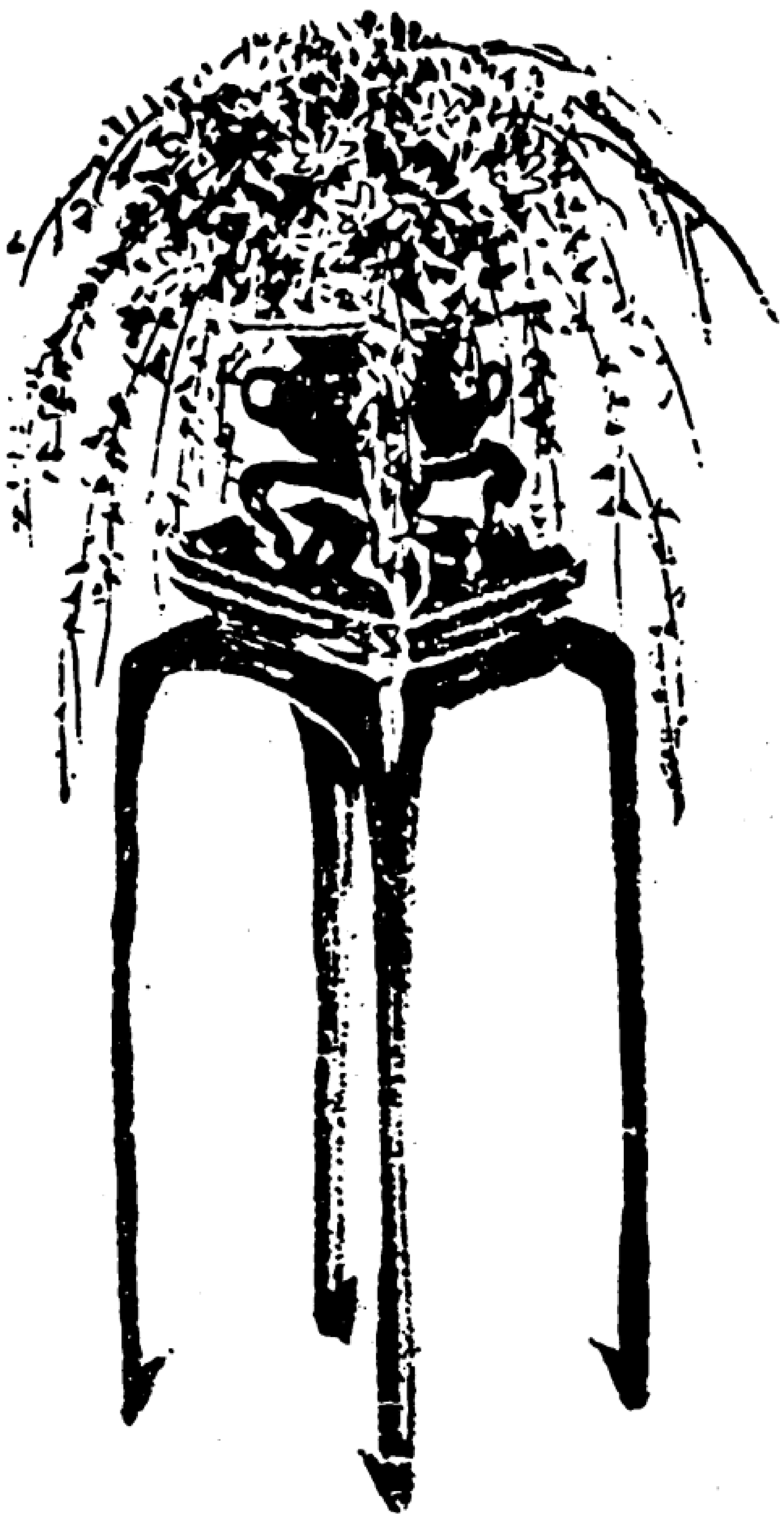
●牽牛花　秋や薄や女郎花なとゝ交せ挿しにして所謂秋の七草を挿す時は格別若し單に此花のみを挿す時は花の數は極めて少ない方が好い多くも二輪大抵は一輪て充分てある、花器は釣舟、其他の掛花器、大窓の竹器などが好いさゝやかなる小笹の枝か其他何にても枯れ枝に纏はせて挿す花の姿は勿論草躰て主位の所に花を使ふのてある前晩に莖を切り取りて小笹や枯枝に纏はせて花の姿を作り置けば翌朝に至つて花は位置正しく開き何となく沈着して自然にこの花瓶に根さしを留るかの樣に見ゆる、水に潤れた釣瓶形の花器などに挿して板床の上などに置た樣子は實に爽絶て眼も覺る樣で彼千利休が朝の茶事に秀吉を驚かせたるこの朝顔の一輪てある此花の水揚は莖の根元に針を刺し置けば五日六日能く水を揚げて萎むことはない。

●木槿　眞の姿にも行の姿にも挿すことの出來るものである、大抵は根〆などに餘の花などを挿むことなく此の花のみを活けたるが見榮えのするものなり、即ち客位に開きの三四輪乃至四五輪も遣ふて從位に半開二三輪、主位には蕾勝ちの枝を用ふ。

紫色を帶んだ赤味かゝつた花は下品てある。木槿の美はしいのは底紅の花、花器は竹器ても銅器ても寸筒形のものが殊に取合が好い。その外は玄猪式の花瓶な

どてある。ずつと好いのは竹籠、その主角の無い淡然とした所に何となく雛や茅屋などの様子を連想させて異に此花の趣味を賞玩することが出來る。水揚は根元を打ひしぎて木皮を剝し置く許りてある。

●蓮　花の數は五本か七本、葉は之れに伴ふ。客位に滿開のものを用ゐて主位の所に未開のものと半開のものとを挿す、從位には花瓣の散り失せた蓮巣を使ふて之に一莖の未開の花を伴はしむなど、その時の都合で種々臨機に趣向を作る、葉も廣葉卷葉、種々と取り交ふる、そして是非一枚の浮葉を花器の水面に浮かする、此の開落種々の花を挿すのが蓮華の三世と稱へて、流派に由ては秘傳とか許しとか申して大變に八釜敷云ふのてある。



夏季には美しい花も多いがこの蓮花に優る花は少い。凉らかな水盤に水を一杯湛えて、淡紅色て眞珠形をした蕾が、綠り色の天鵞絨の様な葉の間に見えて浮葉の上に滴る露が金剛石の様に種々の美はしい光を放つ様子は當季の挿花の中ては無類の美觀てある。

▲盛り花

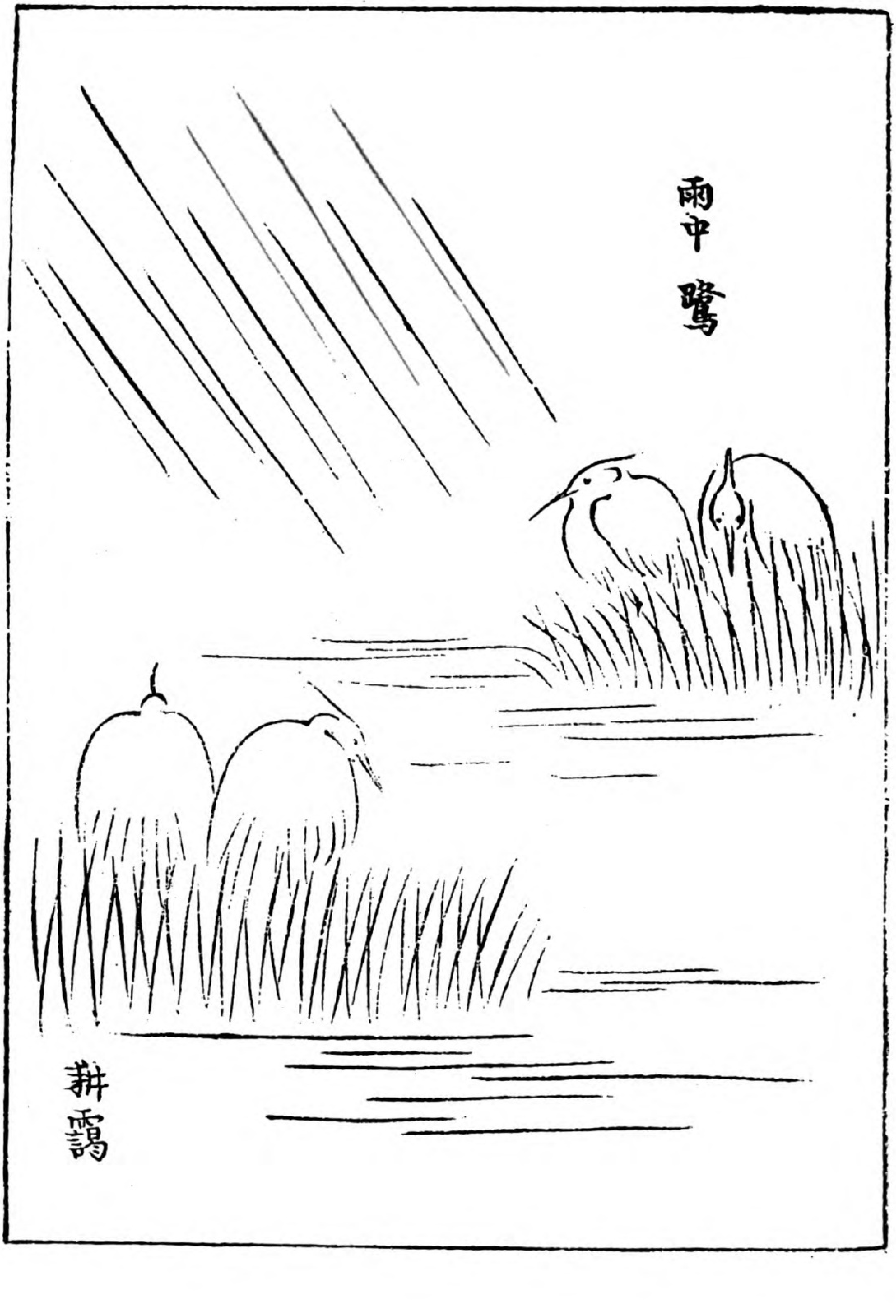
一莖の杜若を青磁か古銅の花瓶に挿したる閑寂の趣味は素より好い、然し又銀盤に紅白の薔薇や淡黃色の遊蝶花、その外、紫匂ふ菫艸を深綠の下艸の間に挿してところ〳〵に、嫩綠のアチヤントンや、山しだが縱横に掩ひ掛つて、薄萌黃の細かな葉の間に珊瑚を點綴した様な姫蔓が長く臺下まで垂れた盛り花の艶麗なのも決して捨つることの出來ぬものて、これは歐風の卓上の飾りに好い許りてな

刺繡圖案

朝皃



耕霞筆


雨中鷺
耕靄

く、日本建の坐敷でも書院や廣間の床脇の棚などの飾りには恰好の装飾の一である。

この盛花は丁度薬玉を切半して皿に盛つた様なもので初めに花器に相當する大きさの板を作つてその上に水苔を半圓形に盛つて之を糸針金で動かぬ様に固定する恰も水苔で作つた半球が出來るそれに充分水を注ひでこれに下草を一面に挿す、下草は「いぶき」「そなれ」その外、杉でも何でも花の無い青葉——を凡そ三寸程の長さに切つて之に二寸乃至三寸位の竹の脚を結び付けて彼の水苔の半球上にすきまなく挿す、すると水苔の半球は變して杉か「いぶき」の半球となる、その上へ薔薇花なり百合なり何にても挿まんとする所の草花を好き程に切りてこれも同じく竹の脚を結び付けて、彼の半球の上へ所〱へ位置よく挿すそして、最後にしだや姫萩の類を挿す、が之は普通の挿花と異つて四方から見るものであるから何くも同じ様に飾り挿すのであるが、斯様にして出來上りたる花に先つ水を注ぐ、紅黄紫白の花の蕊や瓣に置く白露は種々の光を放つて、さながら金剛石を花の間に鏤めたる様で、その美麗なる事は喩ふるに言葉も無い。そして時としてこの挿したる花の上へ香水を撒布することもあるが、これは随分贅澤な爲方であつて貴賓を招ずるとか夜會とか晴がはしき席には必ず致す、錦上に花を添ふると云ふ事を申して物の充分に完備することを誇るが、これは又錦上の花に更に靈香を添ふるのであつてその風流華奢は全く饒舌の外と申して好い。盛り花器は金銀製の皿にても又籠にても白玉製にても好い、私はこれを日本從來の薄端と稱する花器に盛たれば至極面白からふと思ふ盛り花は近時歐風の装飾と同時に海外より輸入したものであるが、これを日本風の座敷飾に混して飾つて決してその配合の惡しく無いことを信ずる、金屏風でも引立て前に紫檀か蒔繪の高卓を置てその上にこれを飾れば立派な日本的の装飾で、御厨子や黒棚と相對して却て從來の挿花に一等地を拔く様に考ふるこの盛り花に就て彼の三義を割り宛てゝ申さば薔薇花や百合花やその外の草花が主位て、下草の「そなれ」や杉が從位て、姫かづら、アチヤントンなどが客であると申してよかろふ。(完)

講義

國文學講義

この君（枕艸紙）

文學士　尾上柴舟

五月ばかりに、月もなく、いと暗き夜、「女房やさふらひたまふ」とこゑ〳〵していへば、「出てゝみよ、例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出てゝ、「こは誰ぞ、おどろ〳〵しう、きはやかなる」はといふに、物をもいはで、御簾をもたげて、そよろと、さし入るゝは、呉竹の枝なりけり。

〇これ、前條とおなじく、少納言の秀句の話なり。〇五月ばかりに、月もなく、いと暗き夜、杜鵑などの鳴きわたるべく雨近けなる五月頃の、月もなくて、いと〳〵暗き夜なり一句、まづ、其狀を思はしむ。〇女房やさぶらひたまふ。「女房は、居らぬか」といふなり。これ、殿上人等の語。〇「出でゝ見よ云々」は中宮の御語なり。少納言に、「何人の云ふにか、出てゝ見て來よ例に。違ひて、騒しくいふは、何人ぞ」と仰せらるゝなり。〇「こは、誰ぞ、おどろ〳〵しう云々」、こは、これは、なり。おどろ〳〵しうは、恐しく、仰山らしく位の意。きはやかなるは、明瞭なる、際立ちたるほどの意。「これは、誰なるぞ。仰山らしく、例にたがひて、公然と、際立ちたる物言ひざまかな」と咎めたるなり。〇御簾をもたげて云々、御簾は、中宮職の表にかけたる御簾なり。もたげ、は、持ち上げ、なり。そよろ、は、竹の葉のさわめく音なり。呉竹葉、細くて、節多き竹なり。〇少納言、中宮の御前に在りけるが、五月頃に、月も出てず。あたり、いと〳〵暗き夜、人の聲して、「女房は居たまはぬか」と聲々にいへば、中宮は これを聞

し召して、少納言に、「出て見よ。例に違ひて、聲高く云ふは、何人ぞ。見て來よ」、と仰せあれば、少納言は立ち出でゝ、「かく、のたまふは何人なるぞ。仰山らしく、際々しき、物言ひざまかな」と云ふに、來りたる人々は、返事の詞をも云はで、表にかゝれる御簾を持ちあげて、そよろと云はして、さし入れたるは、思ひもかけぬ呉竹の枝なりしなり。

○始めの一句に、其夜の景情を髣髴せしめたる、すてに、趣あり。御簾をもたげて云々より、呉竹の枝なりけりまでの句。何となく、匂ひありて、老手にあらざれば、とおもはる。かゝる處、文かゝむ人の、注意すべき節なるべし。

「れい、この君にこそ」といひたるを聞きて、

「いさや。これ殿上に行きて、語らむ」とて、中將、新中將、六位どもなど行りけるは去ぬ。

○おい、は、今の、オヤ、などいふ語にやあたらむ。○この君、は、竹の異名なり。晋の王子猷、空宅の中に寄居して、竹を植ゑて、何ぞ一日も此の君無かるべけむや、」といへりしより、竹を、やがて、此君とは云へるなり。されば、少納言も、竹の枝の入れられたるを見て、」何人かと思ひしに、此の君（竹の異名を、人の如くとり做していふなり。）なりけり」とは云ひしなり。此一句、また、前條とおなじく、少納言の機智の程を知るに足らむ。○「いさや、これ殿上に行きて云々」いさや、は、サー、といふに等し。これは、少納言の此語をさしていふ。殿上は、禁中にて、紫宸殿、清涼殿の上を特に云ふ。○中將、新中將、何人とも分かず。

○少納言は、竹の枝を見て「あゝ、何人かと思ひしに、此の君にてこそありけれ」といへば、外にては、これを聞き取りて、人々、「いざこの秀句を殿上に行きて、居合はす人々に語り聞せむ」といひて、中將、新中將、六位の人々、其處に來りたるは、皆歸り去りぬ。

○おい、此の君の一句、何ぞ慧敏なる。此一句、乃ち、此文の生命なり。突如として、出で來りたる、おいの一語も、また、甚だ趣味あるを見る。

頭辨は、とまり給ひて、「あやしく、去ぬるものどもかな。御前の竹を折りて、哥よまん

としつるを、職にまゐりて、「仝じくは、女房など呼ひ出でゝを、」をいひて來つるを、くれ竹の名を、いと疾くいはれて、去ぬるこそをかしけれ。誰が敎を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をば云ふぞ、」などのたまくば、

○頭の辨、藏人の頭にて、大政官の辨官を兼ねたる人とゝにては、藤原行成をいふ。○「あやしく去ぬる云々」行成の語なり。あやしくもは、奇怪にもをかしくも、位の意。歸るにも及ばざるべきに、をかしくも、逃げ去りたる人々かな、と嘲笑するなり。○御前の竹、仁壽殿の前にある吳竹ならむ。○職、中宮職なり。○「呼び出でゝを、」女房など呼び出して、歌など詠ませむ、といふなり。を、は詠歎の辭。○「くれ竹の名を、疾く云はれて、」此の君といふ吳竹の異名を、疾く云はれて、なり。○誰が敎を知りて云々、」何人の敎によりて、御許は一般の人の知るべくもなき、竹の異名などを知りて、人には云ふぞ、」と云ふなり。

○頭の辨、行成は、人々は逃げ去りたれど獨り留りたまひて、云はるゝやう、「をかしくも、逃げ去る人どもかな。今夜、殿上にて、仁壽殿の吳竹を折り取りと人々、それを題にて歌をよまむ、としたりしが、「只、此處にて、詠みても興淺し。それよりも、同じことならば中宮職に參りて、心ある女房など呼び出して、詠ませてみむ、」と云ひて、此方には來りしなるが、御許に吳竹の異名を口疾く云はれて、逃げ去りたるこそ、まことに面白けれ。さるにても、御許は、誰人の敎によりて、人の一般に知るべくもなき、竹の故事、異名をば知りて、かくは云ふぞ」など、云はるれば。

竹の名とも、知らぬものを、なまねたしとや覺しつらむ、」と云へば、「まことぞ、え知らし、」などのたまふ、まめことなど、云ひ合せてゐたまへるに、「此君と稱す」といふ詩を誦して、又集り來れば、「殿上にて、云ひきしつる本意もなくては、など、歸りたまひぬるぞ。いと、あやしくこそありつれ」との

たまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。いと、なか〳〵ならむ。殿上にても、云ひ罵りつれば、うへも、聞し召して、興ぜさせたまひつる。

○「竹の名とも、知らぬものを」、少納言の、謙遜して云ふ詞なり。○「此の君といふことが、竹の異名とは知らざりき、たゞ、殿上人達の見えたれば、此君とは云ひしなり。」まねたしとふ云々、なまなかに、ねたましく、心憎きことを云ふ女とや、思召したるならむ、といふ意。○まことぞ、え知らじ」行成の詞。御許のいふ處は、誠ぞ、竹の異名などは、知り得ざるべし、」といふなり。○まめごと、眞面目なる話なり。○此の君と稱す、和漢朗詠集に載せたる、藤原篤茂の句（脩竹冬青の詩の序)に、晋騎兵參軍王子猷、種而稱此君、といふこれなり。○殿上にて云ひきしつる本意、殿上にて、御互に、云ひ約束しつる本心なり。きしつる、は期しつるなり。殿上にて、女房に歌よませむ、と約しつるを云ふ。○「さる言には云々」さるは、さるべきたり。然るべき名言には、何の答をかせむ。答へせむは、却てよからずの意。

○少納言は、行成に問ひし糺されて答へていふ。「此の君といふ語の、竹の異名なりとも知らざりしが、たゞ、殿上人の御座したれば、此君とはいひしなり。さるに、それが、偶然、竹の名と一致したれば、君（行成）には、なまなかに嫉ましく心憎きことを云ふとも、思召したらむか」といへば、行成は、うなづきて、「御許の云ふことは、誠ぞ。かゝる、むつかしき故事を、御許の知りたる筈はあらじ」などのたまへり。さて、猶行成は、少納言と、眞面目なる物語り云ひあひて、居たまへるに、殿上人ども此君と稱す、といふ朗詠集にある字の句を、打ち誦して、また集り來りたれば、行成、人々に向ひて「殿上にては、竹を中宮職にもて行きて、女房に、歌よませむ、と云ひて、約束して來りたるに、その本意を遂げずして、何故、早く逃げ歸りたまひしぞ、いと奇怪なることとにてありき」などいはるれば、殿上人等、答へ「少納言の、「おい此君」といふ名言には、何の返答をかすべき。なまなかの返辭せば、却て、我等の名折れともなるべからむ。故に我等は、皆、直ちに、かへり去りたるなり。殿上にて

も、この少納言の語を云ひ傳へて、賞讃すれば、天皇もきこしめして、興に入らせたまひたり」と語れり。

○此一段、何といふこともなく、よく、すら〳〵と書けり。たゞ、竹の名とも知らぬものを、なまねはしとや云々」の句の如き、語簡にして意長きもの、散在せるは、例の、此記者に手腕の程を見るに足る。

辨もろともに、かへす〴〵、おなじことを誦して、いとをかしかれば、人々出でゝ見る。とり〴〵に、物いひかはして、歸るとて、猶、おなじことを、もろ聲に誦して、左衛門の陣に入るまで聞ゆ。

○おなじことを誦して。前と全じ、此君と稱す、の句を誦するなり。○人々出でゝ見る。中宮職中の女房ども、あまり、かしかましきに、何事かとおもひて、出でゝ見るなり。○とり〳〵に、物いひかはす。殿上人と、女房等と、物をいひ交すなり。○左衛門の陣。左衛門は、左衛門府の畧、衛門府は、禁門護衛の武官の居る役所。これに左右あるなり。左衛門の陣は、建春門に在り、といふ。陣は、官吏の溜りをいふ。

○殿上人等は　頭辨行成と一處に、くりかへし〳〵、おなじ詩の句を、打ち誦して、いと〳〵面白かれば、中宮職中の女房だち、皆何事ならむかと、出て見る。さて、殿上人等は、女房だちと、各物をいひ合ひて、かへり行くとて、猶おなじ詩の句を、同聲に打ち誦して去れり。其際人々の建春門にある左衛門の陣に入るまで、此方に、響きわたれり。

つとめて、いとゝく、少納言の命婦といふが、御文まゐらせたるに、此事を啓したれば、しもなるを召して、「さる事やありし」と問はせたまへば、「知らず、何とも思はで、云ひ出で侍りしを、行成の朝臣取りなしたるにや侍らむ」と申せば、「取りなすとても」打ち笑ませたまへり。たれが事をも、殿上人、譽めけりと聞かせたまふをば、さ云はるゝ人を、よろこばせたまふもをかし。

○つとめて、いとゝく、は、その翌日の朝、いと早く、なり。○少納言の命婦、主上の御傍に候らひける女

官の名。命婦のことは、既に云へり。〇御文まゐらせたるに、主上の御文を、中宮に持ちて參らせたるなり。〇此事を啓したれば、此の事は、此君と云ひたる事なり。それを、中宮に申し上げたるなり。〇しもなるを召して、時恰も、清少納言は、御前にあらで、下局に下りて居りたれば、それを中宮は召させたまひしを云ふ。〇知らず。何とも思はで云々、知らずは、更にさる事は知り侍らずといふなり。何とも思はで、云々は、自分には別に故事を引くとも、何とも思はで、ふと、おい此君と云ひ出てしを、行成朝臣の、その詩を知りて云ひたるやうに、善き方に、取り做し給ひたる爲めに、かく云はるゝまでなりしにや候らはむ、と中宮に御答へ、申し上げたるなり。〇取りなすとても、中宮の御詞たとひ行成卿の取り做したりとも、御許の云ひ方の面白からざれば、かく有名となる事はあるまじ、との意。〇さいはるゝ人をよろこびたまふ。さいはるゝ人は、しか云はるゝ人、左樣に譽められたる人なり。喜ばせは、その人の名譽を得たるを喜びたまふを云ふ。〇その翌早朝、禁中の女房なる少納言の命婦といふ人の主上の御文を持ちて中宮に差しあげたる序に昨夜清少納言の「おいこの君」といひて、人々感嘆せしことを言上したりしかば、中宮は、清少の局にありたるを、召しよせたまひて、「眞に、昨夜、少納言の云ひし事はありしか」と問はせたまふ。清少は答へて、「さる事は知り候らはず。たゞ、何の氣もなく（詩の故事あるといふことも知らで）、此君といふことを、云ひ出てしを、行成朝臣の、よき方に做して、賞讃したまひし爲め、かく人に云はるゝまでなりしにや候らはむ」と申し上ぐれば、中宮は「設令、行成の取り做したりとも、御許の詞の、なみ／＼ならざりければならむ」とてうち笑ませたまへり。この中宮は偏頗といふ事なく、何人にても、その人の事を、殿上人たちの譽めたりと聞し召せば、しか譽められたる人をまた喜ばせたまふも、いと／＼趣ある事なり

〇此一節、前段の余波のみ。されど、こゝに、彼女の謙讓の德あるを見るへし。みだりに、誇稱することなくして、他人の取り做しの庇陰なりといふ謙退自讓欽すべからずや。彼女を以つて、偏に、傲岸人にくだらざるものとなすは、蓋し謬れり。

〇此の君の一句、靜かなる夜の禁中に、忽ち、一道の活氣を加へたり。支那崇拜の結果として、故事故典を重んずる平守朝、かゝる些細の事にまで、殿上人總出にて、騷ぎまはりしなり。此文、主眼とするところは、おい、此の君といふあたりにあり。其後節は、たゞ、余波のみ。而して、この後者の永きに過ぐるが如きは、いはゆる筵の走り過ぎたるの弊にあらずや。あるは、むしろ、少納言の、己れの功名を傳ふるに急なるより自づから此に至れるにあらずや。

得失は一世、榮辱は千歲

漢文評釋

文學士　久保天隨

天女使（三）（菊池三溪）

女顧左右。促膝低聲曰。妾是不忍池主辨財天女之使女。如聞近日官興浚池役。天女原有神通。勺水可以托其身。莫足憂者耳。獨至其八萬四千鱗介族屬。遽失其巢窟。無生可活。天女深仁。甚憫之使妾假君家園池。不知見聽乎否。

●●(訓讀)女、左右を顧み、膝を促し、聲を低くして曰く、妾は是れ不忍池の主辨財天女の使女、聞くが、如くむば、近日官浚池の役を起す、と。天女原と神通あり、勺水以て其身を托すべく、憂ふるに足る者なきのみ。獨りその八萬四千の鱗介族屬に至りては、遽かにその巢窟を失ひ、生の活くべきなし。天女深仁、甚だ之を憫れみ、妾をして君の家の園池を假らしむ。知らず、幸に聽かるゝや否や、と。

●●(字解)顧左右、あたりを見廻はすといふこと〇促膝低聲、膝を押し進めて近より、聲を低くし、他に聞こえぬよふにするよ。すべて秘密なる相談の態度を形容した言葉〇不忍池主、不忍池の主、俗に池や川に主が居るといふことを謂ふが、その主と相通じて居る〇使女、使の女と云ふのではなくて、常に傍に奉使して居る腰元といふ方に見るが善かろう〇官は、お上、幕府を指す〇興、始める〇役は工事〇原は、もとと訓す、本來、元來など、同義〇神通、雲に駕し、風に乘じ、水に入り、池に潛ったりする幻術をいふ〇勺水、一勺の水といふこととて、極めて少量なる意〇托其身、自分

の身体を寄せて隠れることを○莫足憂者、別に心配する程のことも無い○獨こゝては唯だ、若しくは然れどもといふ意○八萬四千鱗介族屬、鱗は魚、介は貝殻あるもの、魚類及び軟体動物以下、すべて水に棲むものを併稱したのであるから、特に族屬といつたのである。八萬四千は、その總數でこれは佛典に出て居ることとも考へるが、深く調らべなかつたから、何の經に出て居るか知りません○遑、俄かにと訓す○巣窟、すみかといふこと○巣は鳥にだけ限つた様だが、巣窟と連用して熟語となるときは、何にでも使ふ○賊の巣窟などいふのも、その一例である無生可活、生は生命、いのちの活かし様がないといふこと、即ち、とても助からぬといふ意○深仁、大そう深い慈悲の御心○憫之、これを不憫と思はれる○假借と同義で、拜借するといふこと○見聽の見は、被と訓すれば善い。

●●（文義）あるじの翁は、すでに人を却けて、早く用事を仰せ付けられよと催促したので、女はあたりを見廻はし、あるが上にも一層秘密らしく、膝々前に押し進め、聲を低うし、さて口を開いて言ふには、今は何を隠しませう、妾事は不忍の池の主辨財天女さまの腰元でありますが、今夜わざ〳〵参つたのは、外の用事ではありません。世間の風聞によれば、何でも、近日の中に、お上では池を浚ふ大工事を始められるさうであります。しかし、辨天様は、もと〳〵神通力を持つて居られますから、どんな場合でも、一勺の水に御身を寄せて隠れて仕舞はれることも出來ますから、別に心配する程の事もありません。しかし、八萬四千の水族のたぐひ、俄かにその棲處を無くした日には、とても命の助かり様もない。辨天様は、御慈悲深く居らせられますから、甚だ之を不憫と思し召し、妾を使として、貴方の御家の池を拜借し、一先づ水族の假りの棲處として、工事の終る日を待たうとの事でありますが、どうです、幸にもこの願を聴いて下さるか、どうか。

●●（評論）この一節で、女客の何者たるかが、略ぼ見えたが、その本體はまだ分らない。今時ならば、左迄こんな事もなかろうが、何を云つても昔で、お負けに平生の慾深爺、辨天の迷信熱に浮かされて居たものだから、まんまと其手に乗るやうなことになつたのであ

る。この女客も自ら辨財天女といはずして、天女の使女といひ、それから天女は神通があるからといつて、特に眷屬を持ち出した按排など、如何にも巧に辻褄の合ふ樣にこしらへたものである。若し直に天女が自分で凡夫に賴み、下界の園池を借りて、一時の危難を避けるなどいへは、甚だ不道理で、折角の仕組も、すぐに敗れて、やがて化の皮を引きめくられるに違いなからう。

主翁一聞使女言。景仰益恭。急具酒饌、周犒從者。且謂之曰。不次湫隘盆池、所蔑視、辱枉神駕。此賤僕所企望而弗獲、榮亦甚也。不敢謹奉神勅以迎龍駕邪

●(訓讀)主翁一たび使女の言を聞いて、景仰愈よ恭しく、急に酒饌を具へ、周ねく從者を犒ひ、且つ之に謂て曰く、湫隘なる盆池を以て蔑視せられず、辱くも神駕を枉げらる、此れ賤僕企望して獲ざるところ、榮も亦た甚し。敢て謹て神勅を奉じ、以て龍駕を迎へざらむやと。

●(字解)景仰益恭、信心して尊敬すること一層丁寧に、且つ盡すといふことと。具酒饌、酒や御馳走を用意して、差し出す。具は備へると訓す○周は、あまねく、取落のないこと。○犒、ねぎらふ、やはり御馳走すること○湫隘、またなくして狹いこと○盆池、盆ほどな池○蔑視、さげすむ、馬鹿にする、取るに足らぬものとする○辱枉神駕 かたじけなくも辨天さまの御車を枉げて立寄らるるといふこと。○賤僕、謙遜した自稱○所企望而弗獲、願つても、とても出來ない程、有り難い事であるとの意○榮亦甚矣、榮は榮譽、もしくは光榮、この頃の祝文などに「これ予が光榮とするところなり」とあると同義○龍駕、やはり御車といふこと、前に神駕といつたから、少し字面を改めて此の如くしたのであろう。

●(文義)あるじの翁は、一たび天女の腰元と名乗る女の言葉を聞くや、大そう有り難がつて、待遇も一層恭しく、にわかに酒肴を用意さして、殘る隈なく、供人を犒つて御馳走し、それから返答を申し上げて云ふには、この汚な、狹い盆の樣な小池を御さげすみにもならず、辱なくも辨天さまの御車を枉げて御出になろうといふのは、賤僕が、たとひ、願つても、叶は

ぬ程、有り難い冥加至極な事、まことに光榮とするところであります。どうして、謹んで仰せを承はり御車を迎へずに居ませうか、どうぞ、乾度御出なすつて下され。

●●（評論）一たび、天女の使者であると聞いて、一層の信心を起し、急に酒饌を具へるなどいふのは、一寸したことだけれども、市井小人の常態、さながら見るが如くである。それから、その返答の言葉を吟味すると、獨り鱗介族屬ばかりでなく、天女自身が來向されるものと早合點に吞込んで、有り難がつて居るものらしい。この位、深く此方の術中に陷れば、もう占めた者である。

使女大悅。約以某月某日。且曰。某日夜半風雨大起。是鱗族移居之時也。當是時。亡論主翁妻子。雖蒼頭赤脚。屛居一室。毋敢窺其外。主翁唯唯奉命。

●●（訓讀）使女大に悅び、約するに某月某日を以てし、且つ曰く、某日夜半風雨大に起らむ、是れ鱗族居を移すの時なり。是時に當つて、主翁妻子を論ずるなく、蒼頭赤脚と雖も、一室に屛居し、敢て其外を窺ふこと毋かれ、と。主翁唯唯として命を奉ず。

●●（字解）約以某月某日、何月何日といふことを約束した○且曰、約束した上に、言葉を改めて言ひ出す樣を云ふのである○亡論主翁妻子、亡は無と同じで、主人の妻子は言ふまでもなくといふこと○蒼頭赤脚、蒼頭は史記の項羽本紀、異軍蒼頭特起の注に、「應劭曰く、蒼頭特起、言ふは衆と異なり、蒼頭は士卒の巾を謂ふ、肩を赤くし、領を青くし、以て相別つ如きなり、と。如淳曰く、魏君兵卒の號なり。●●●戰國策に、魏に蒼頭二十萬なり、と。索隱に曰く、晉灼云ふ、其軍を殊異にして、蒼頭と爲す」とあるけれど、こゝのは、それ程の深い意味もない。町家の番頭などは、めかし込んで、月代の痕が青くなつて居るから、かくの如く云つたのである。赤脚は、臺所で水仕業をする婢僕で、赤い足を捲り出して居るから、かく云つたのであらう○屛居、屛は退くといふ字で、一間の中にすつこんで、居るといふことである○毋は勿と同じ、母の字とは別てある○唯は應答、他の命に從ふ言葉であるが、二字重ねて愈よ他意なきことが分かる。

(文義)使女は、主翁の言葉を聽くや、大に悦び、そこで、何月何日と日をちやんと決めて、約束し、さて、言ふには、その何日といふ日の夜中頃、風雨が盛に起るに違ひない。その時こそ、水族が不忍の池から棲處を此家の池へ移すのであるから、主翁の妻子は言ふに及はず、番頭下部の末々まで、一間の中に退いて籠り、決して外面をのぞいては可けない。主翁はハイ／＼と返辭して、異議なく、命を奉じました。

(評論)某月某日と日々決め、その時、風雨の起ることまで、前知して居るのは、どうも不思議であるが、迷信の外に何にも無い主翁は、決して之を疑はないのみならず、愈よ信を增したのである。たゞに風雨大起といひ毋敢窺其外といふのは、騙局の眼で、女は之を言ひ出さむが爲に、自ら天女の使と名乘つたのであることは、後の方を見れば、始めて分かる。

學問は金庫、練習は鍵

歴代和歌評釋(七) 後撰集の部

文學士 塩井雨江

佗びわたる我が身は露を同じくは
君がかきねの草に消えなむ

○この歌は、後撰集の十の卷にありて、貫之の作なり。日ごろ戀ひしく思ふ人の家のあたりに至りて、よめるなりとあり。

○佗びわたる。佗ぶとは思ひわづらふ事にて、我が思ふ事のかなはずして、いたく思ひなげく意なり。わたるはつゞく意なり。永くなげきつゞけ居る事なり。○露を。露ならにといふに同じ。「我が身は露ならに」とは、今や思ひに堪へずして、我が命もはかなく消えんばかりの心地するより言ひたるなり。○同じくば。同じ事ならば、即ちどうせ消ゆる事ならばといふ意なり。○君がかきねの草に。君の宿の垣ねに生へて居る草の上にてといふ意なり。○消えなむ。消えむと思ひてこゝに至れりといふ意に見るべし。○一首の意は、かく永く君を戀ひて、思ひわづらひ居

れば、今や我が命は堪へず、露のはかなく消えむとす。どうせ消ゆる事ならば、せめて君のかきねの草の上にて消えむと思ひて、かくは此庭に來たれりといふ意なり。思ひに堪へずして、命もおぼつかなくなれるを、「我が身も露」と言ひ、さて、せめて君のほとりにて死なんといふ意を、君が垣の草にと言へるなり。

○さしたる非凡の意匠にはあらねども、此の時代の詠としては、面白し。且つ、我がおぼつかなく覺ゆる命を、露によせて、君が垣ねの草に消えむと言ひたるたとへも、おだやかにして、よし。あはれに堪へぬ情はやさしくひゞきたり。

○

なき名ぞと人には言ひてありぬべし
　心の問はばいかゞこたへむ

○これも、全集十一の卷にあり作者はわからず。○なき名。跡方なき評判といふ事なり。事實なき事を、ありと世評せらるゝ事なり。○人には。他人には、世間の人にはといふ意なり。○ありぬべし。言ひて居る事も出來ようといふ意なり。○は強くいはば偽めに置けるにて、あるべしといふに同じ。○心の問はば。我が心が、其の事を問はばといふ事なり。○いかが答へむ。どう答へむか、跡方なき評判とは答へがたしといふ意なり。

○一首の意は、若し世間の人の此の事を聞き知りて、とやかくと評判せば、決してさう事實は我が身に覺えなし。そは跡方もなき評判なりと語りて居る事も出來よう。されど、我が心が其の事を問はば、どう答へむか、我が心は、我が身の事は、よく知り居る故に、そは跡方なき世評なりとは答へがたからむと言ふ事なり。他人を欺く事は出來るとも、我が心を欺く事は出來じといふ意なり。

○此の歌は、親ある女に忍びて通へる男の、しばし世間の人に知られぬやうにと言ひける時、女の讀みたるものなり。されば其の詞は、みだりなる事に出てたり。されど、其の心は、實に正しき天の訓に出でたり。僅に三十一文字の短字句の間、誠に千萬言の修身書の粋を認くしたる心地す。以て、坐右の銘とすべし。以て、朝夕の戒めとすべし。而して、よく我心に恥づるとなきをつとめなば、人倫の正道、自からふむを得べきにこそ

住み侘びぬ今は限りと山里に ○
つま木こるべき宿もとめてむ

○これも、全集十五の卷にあり。業平朝臣が人世に憤慨する事ありて讀めるなり。

○住みわびぬ。我が意の如く成らずして、此の人世に住みわづらふ事なり。○今は限りと。此の浮世にまじる事は、最早今日までと思ひ定めて、斷然此の世をすてていふ事なり。○つま木。薪をいふ。薪をこるとは、薪を伐り取る事なり。つま木こるべき宿とは、薪を伐りなどして暮らすべき身の上をいへるなり。○もとめてむ。もとめてしまはむといふ意なり。

○一首の意は、人世我が意の如くならず我れは實に此の浮世に住みわびたり。最早人世に望みなし。此の浮世にまじる事は、斷然今日までと思ひ定めて、此の世をすてて、世外の山中に、薪を伐りなどして暮らすべき身となつてしまはむといふ事なり。

○この歌の第四の句を、伊勢物語には「身を隠すべき宿」としたり。されど、こゝは「つま木こるべき宿」といへる方、詩趣多し。「身を隠すべき宿」といひては、うちつけにて、面白からず。薪を伐りなどするは、自から隱者の所業なり。それを以て隱遁者の身の上をあらはしたるは、面白き修辭上の技にて、極妙多し。一首の調はじめ切に、末いうに、無量の感慨自から深くあはれにひゞき得たり。

○
これやこの行くも歸るも別れつゝ
知るも知らぬも逢坂の關

○これも、全集全卷にあり。蟬丸の作なり。其のはしがきには、「逢坂の關に庵室をつくりて住み侍りけるに、行きかふ人を見てよめる」とあり。

○これやこの。「此處が彼の」或は「此處が其の」といふ事にて、「此の」といへるは、此處が逢坂の關なりといふ事を、強くいはむ爲めに、置きて「此處が其の逢坂の關なり」といふやうにいひたるなり。○行くも歸るも。行く人も歸る人もといふ事なり。○別れつゝ。百人一首には「別れては」とあり。いづれにしても同じ意味なり。別れては逢ひ逢ひては別れて、別れつ逢ひつするなにいへるなり。こゝに別るといひたるは、蟬丸の心に、行きかふ人の見えずなるを、別ると言ひたるなり

○知るも知らぬも。知る人も知らぬ人もなり。○逢坂の關。此の逢ふといふ詞に、人の行き逢ふといふことをといひかけたれば、「逢ふ逢坂の關」といふやうに、詞を足して見るべし。この逢ふといふも、唯だ行く人、來る人の行きあふをいひたるなり。

○一首の意は、此處が其の行く人も、歸る人も、知る人も知らぬ、人も、別れては逢ひ、逢ひては別るゝ逢坂の關なりといふ事なり。逢坂の關は、都より近江路へ出づる關門にて、東海東山北陸等の諸國への往來の人のあつまる所なり。この山に、蟬丸が庵室を結びて住み居りたれば、一つ關を越えて、彼方へ行く人もあり、此方に來る人もあるさまの、何んとなう面白く感じ、また、佛教にいふ會者定離などいふ事にも思ひよりて、いと面白くおぼえて、よみたるなり。これを、全く會者定離をうたひたるものとのみ見るべからず。一つ關を越えて行きかふ人のさまの、何んとなう面白く覺えたる興もあるなり。それに、會者定離のことわりなどをも思ひ浮べたる心もこもるなり。何んとなう關面白き歌なり。これ、この行く、歸る知る、知らぬと、詞を疊みたるあたりも、大に味ふべし。

○
人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道にまどひぬるかな

○これも、全集の全卷にあり。作者は藤原の兼輔朝臣なりなり。

○人の親。單に親といふ事を、人の親といひたるなり。なほ彼の業平朝臣の歌に「世の中に去らぬ別れのなくもがも、千代もと祈る人の子の爲め」とある「人の子」の詞づかいに同じ。子をもちたる親の心といふ事なり。○闇にあらねども。闇とは暗夜なり。暗夜には事物の見えぬものなり。されば、子の可愛さには、物の道理もわからずなる親の心を暗夜に引きくらべて言へるなり。人の親の心とて、元來は物の道理のわかるべきものなれば、暗夜にはあらざれども言へるまゝ、さらにゝの可愛さには迷ふとなり。○子を思の道。我が子を愛して、我子の身の上の事を、とやかくと心配する事なり。道といへるはまどふの緣にて言へるなり。○まどふ。迷ふに同じ。

○一首の意は、親の心とて、元來物の道理はわかり居

るものにて、暗夜の如きものにはあらず。されど、我が子の可愛さには、物の道理もわからず、とやかくと其の身の上その行末などを心配して、まるで暗夜の如く思ひ迷ふワイと言へるなり。

○子の可愛さに迷ふ親心をくらべ來たりし暗夜の意匠も、すなほに穩當にして、尤なり。一首の心情、誠に慈愛深き親心の誠を盡くして、有りがたく涙こぼるるよ。彼の業平朝臣の「千代もと祈る」の歌と合はせて、誠の親子の愛情を盡くしたる一對の絶唱といふべし。詩、こゝに至りに、天のみ聲をきく心地す。詩人、こゝに至りて、眞に神に近きをおぼゆ。

○

たらちねはかゝれとてしもぬば玉の
　我が黒髪をなてずやありけむ

○これも、全集の十七卷にあり。作者は僧正遍昭なり。はじめて頭髪を剃りて僧侶になりたる時によみたる歌なり。遍昭は、大納言正二位良岑安世の子にて、俗名は宗貞と稱し、仁明天皇に仕へ奉りて、寵遇を被りぬ。されば、天皇の崩ずるや、哀悼の情に堪へず、遂に叡山に上り剃髮したり。其の折りによめるなり。

○たらちね。こゝにては親の意に用ひたり。もとは、乳を足らはし育つる意にて、母親の枕詞に用ひたる詞なるが、その枕詞を、直ちに母の事、さては親の事に用ふるやうになれるなり。○かゝれとてしても。「かくあれとて、マアー」といふ意なり。かくあれとは、斯く剃髮して僧侶になるをいへるなり。○しは強むる助詞、○もは感動詞なり。○ぬば玉。射干といふ草の實にて、其の色の黒き物なれば、黒しといふ詞の枕詞に用ふ。こゝもそれなり。黒髮の枕詞に用ひたるなり。○なてずやありけむ。撫でなかつたであらうといふ事なり。やは疑問の助詞なれど、こゝにては、輕く見るべし。末のけむといふ推量の詞に應ずる爲めに用ひたるものと心得べし。撫づるとは、我が頭髪をなづるといふ事にて、親の愛育を言へるなり。

○一首の意は、我が親は、斯く剃髪して僧侶になれとて、マアー、此の身をなてかあいがり育てはしなかつた事であらう。親は、必ず我が身の人なみに世にまじりて、永く幸福にして榮えゆくやうにと祈りて、我が身を愛育したまひし事ならむ。今や世をすてて、剃髪黒衣

の身となりはてむとす。親のみ心には、定めてかひなくおぼしたまふ事ならむといふ意なり。

○君を悼むの情に堪へずして、捨てがたき此の世を捨てはてむとす。何んぞ其の君を思ふの情の切なる、而して、今や剃髪の身となりはてむとして、我が子よかれとのみ祈る親の愛情、幼きより心をこめての愛育せられたる両親の恩義を思ひいで、ゝさこそかひなく思ひたまふ事ならむと思ひやりたる、何んぞ其の親を忘れざる情の可憐なる。世を捨つるの情こゝに至りて、誠に涙ありといふべし。貫之は古今集の序文に、遍昭を評して、歌のさまはえたれども、まこと少し、たとへば、畫にかける女を見て、いたづらに心を動かすが如しと難ぜられたれど、この僧正遍昭の歌をきゝては、何んぞ貫之の説に首肯するを得む。誠、誠、限りなきの誠をこめ得たり。なほ此の法師の吟に、「末の露本の雫や世の中のおくれさき立つためしなるらむ」「皆人は花の衣になりにけり苔の袂よ乾きだにせよ」「限りなき雲居の外にわかるとも人を心におくらざらめ」などの吟、皆誠のこもれりといふべし。

◉談話の規則十條（メーソン氏考案）

一、友人は書物と同じに我に益ある者を撰むべし。

二、若し汝の友人が汝よりも優等ならば萬事之に聞き、注意深き聽手となるべし、友人が汝より劣たるものならば彼等を益することを勉むべし。

三、若し他人と談話せる時、話しが中絶したる時は、汝注意して廣く、一般に渉りたる事を問題として出すべし、誰れか之に和して談話を接くべし。

四、人と談話中に得たる所は學問の一として記錄簿に止むべし、之に反して無益のをば、記臆に入れざる樣にして腦を疲らしむべからず。

五、集會に出でゝは多言なるは勿論惡しけれども無言なるも又惡しゝ、無言なれば人に惡くまるゝの原因なり、無益の人と下げすまるゝの原因なり、時に應じて適宜に語り出すべし。

六、人が他人の談話に加入するに慌忙つるなかれ、面白そうなることを話すもその人が全く云ひ終らざる内に贊成すべからず、又た善き事なりとも全じ集會にて全じ事を二度と語るべからず。

七、人の言に過失ありと思ふ時も、麁々しく之に反對すべからず、その人は又一種の眼光を以て之を見る處ありて云へばなり。

八、仲間の人々が卑劣にして俗なる談を始めたる時は若し一言にして之を打破り得ると思はゞ之を破る事を試みよ、もし能はずば沈默によりて破るべし。之れも出來ずば其場を退たすべし。

九、汝の能力、若しくは汝の上手なる處を見せかくるが如き談話を避くべし。

十、これに關係もなきが如く見ゆる事も忍びて聞く内には何か益する處あらん。

小説

小人國

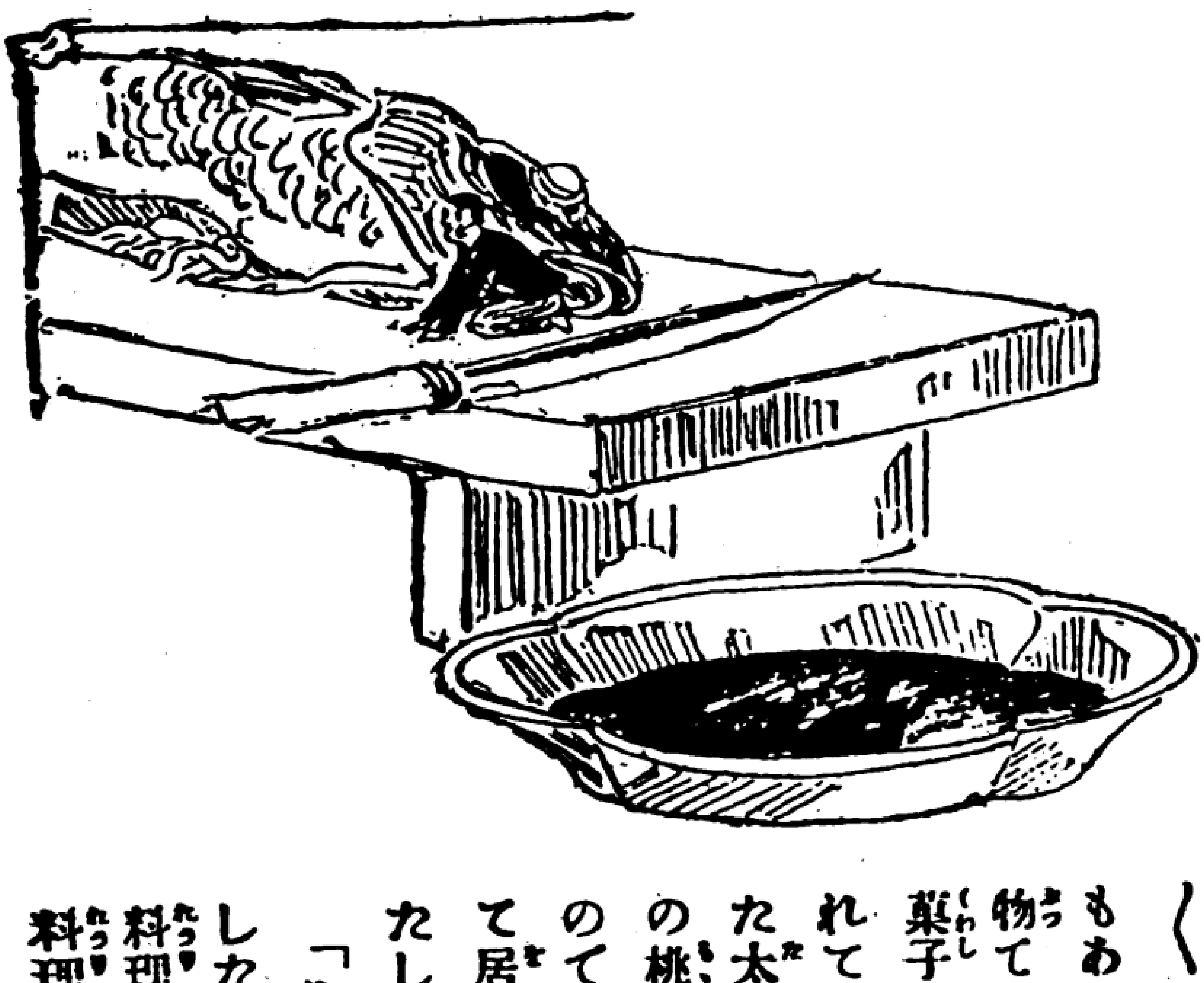
長田薫香

其五

或朝母親が臺所のテーブルの上で、神棚に供へる御菓子を拵へて居りまして、丁度其中へ牛乳を入れやうとして居た時、急に用事があるといつて、他の人から呼ばれましたので、其儘出て行きました、最前から母親が何をして居るのだらうと思つて、見て居りました太郎は、母親が出て行きましたのを見すまして、やつとの事テーブルの上に這ひ上り、其周圍を何遍もどう〳〵巡りをして、御菓子の鉢を見付け出しました、ハテ、其中には何か這入つて居るだらうと、鉢の縁から中を覗き込まうと思ひましたが、如何せん背が屆きません、猶更中が見たい〳〵と例の物好な心がこみあげて、來ました、そこで色々工夫をした後て、テーブルの傍に横になつて居る肉叉を、一生懸命に引きづゝて來て、鉢の傍に横に立てかけ、普通の人間が梯子を昇るといふ格て、肉叉の齒を足代にし、やつとの事て鉢の縁へ這ひ上り、脊延ひをして見ると、中にはクリーム風の御菓子がある、如何も甘さうに見へたから、腰を屈め、手を伸して一寸摘んで見やうとした其途端アットいふ間もあらばこそ、身躰が平均を失つたから堪りません、鉢の縁から眞逆さまに出來かけの御菓子の汁の中に落こちました、目も鼻も耳も御菓子の汁たらけ、丸て鼠が天水桶の中へ落たのと同前、只中て飛ひ上つて居りました、すると、斯とも知らて其處へ母親が歸つて來て、御菓子をこねやうと思ふと、何たか鉢の中に動いて居るから、變に思ひました、しかしなぜ動くのか分りません、夫も其筈、太郎は、其時最早飛ひ上るとも出來す、御菓子の汁に裹まれて居りましたから、母親は眞逆に太郎が其中に居やう

とは思ひませんから、こんな氣味のわるい菓子は寧そ捨て了をふと云ふて、窓から其下を流れて居る川へ流してしまいました

下の川には其時大きな太つた魚が餌を漁しながら、小さな口を開いて浮んで居りましたが、よき獲物御参なれと、ペロリと一呑にしました、而してまだ食が足らないと見て、方々餌をさかして居る中に、釣針があるとは知らず、餌を呑んだ爲、陸の上へ釣り上られました、實に見事な其魚を釣つた漁師は、珍らしい獲物だ、王様の召し上り料にしやうと。考へアーサ王の料理人へ其魚を賣りました、料理人はよい物が手に這入つた定めし王様も御喜ひであらうと、勇み進へて持つて参りまして、爼の上に載せ、いさや料理にかゝらうと、研きすましたる出刃で、今や爼の上の魚の腹を



切り開くや否や、是はそもいかに、中から飛び出したものがあります、料理人始め並居る人々、驚きながらよく〳〵眸を定めて看ますと、親指大もあらふと思はれる人形の樣な動物てあります、是は申す迄もなく、菓子鉢覗きの一件から、川へ流されて一時魚の腹の中へ葬られました太郎が、飴の中のおたよ、桃の中の桃太郎といふ見得で飛んで出たので、平常母親から行儀を敎はつて居りますから、丁寧の叩頭をいたしながら、

「お陰さまで命拾ひをいたしました、此大恩は一生忘れません」と料理人に向つて、禮を述べました、料理人は何が扨奇妙のものが手に入つたと思ひまして、太郎をば自分の帽子の中へ入れまして、アーサ王の御前へ連れて参りました、處が王様

も如何にも珍らしい可愛らしいものだと、面白く思召し、皇后樣をお呼び寄せになり、お兩人で交るがはる、其身元や履歷などをお尋ねになり、又太郎は例の小さい聲を張り上げて、怯めず憶せず、一々お答へを申上げ、餌、魚の腹から飛んで出ました、その一部始終を詳しくお話に入れた上、兩親が夫とも知らず、定めて案じて居りましやうから、手紙で自分の安否を知らせてやりたいといふことを願ひました、王樣は夫を御許になつて、そんなら是方から兩親へ知らせて、遣さうと仰せられたが、御政治向きや何やかやお忙がしいので、お忘れになつてしまいました、其時、アーサ王の軍隊の司令官に大相子供の好きな軍人がありまして、太郎の樣子がいかにも可愛らしい處から、或日のこと、二つの指で太郎の片足を釣上げ、自分の眼の傍へ持つて參り、目鼻等を丁寧に眺めて居りました、て、太郎は逆に吊されたことですから、苦しくつて堪りません、チイ／＼泣き出しまして「お母さんお父さん、私は好な靴の搖り床へ早く歸りたい、私は何故お菓子の鉢の中へ落こつたのだらう」と叫ひまして、漸く司令官の指の尖から免れることが出來ました、アーサ王は此事を御聞になり、定めて寢起する處がほしからうと、奇麗な人形の家の樣なものを造つて下さいましたが、太郎は搖り床の方がよいと見て、格別有難くない樣子、家へ歸りたい父母の顏が見たいと思ふ餘り、

拜啓私は今何とも好きな物は得られ申し候しかも澤山に得られ申レモン水のみを飲みクリームや、御菓子なとを食し居り誠に結構に暮し候得共矢張元の家の牝牛の乳の一滴の方滿足に存候

太郎より

御　兩　親　樣

といふ手紙を書きましたが、如何せん宮中から郵便を出すことが出來ません、而已ならず、萬一王樣に目つかつては大變だと、色々工夫をして、石を拾つて手紙の中へ包み込み、人知れず窓から外へ投げました、誰れか心切な人があつたら拾つて郵便函へ入れてくれるだらうと思ひつゝ、毎日塔の上へ這ひ上り、已に兩親の手に入つて迎ひに來てくれるかしらと頼みにもならぬことを、頼

にして居りましたアーサ王と皇后樣は、太郎が何だか心配相な風をして居るので慰めて遣らうと思召て、王樣は式部官に御命しになり、金や金剛石で鏤た、見事な畜物を造らせ、皇后樣は美しい小さな馬車を造らせそれを、四匹の鼹鼠に引かせ、毎日宮中を乗り廻つた、其可愛らしさは何とも譬へ樣が御坐いません、

其六

太郎が例の通り、此鼹鼠の車に乘つて、宮中を乘り廻して居りました、處が、或日途中で計らず、一匹の大猫に出逢いました、大猫は何と思ひましたか、乘主の太郎をも車に一處に引ツ攫えて、樹の上へ驅上りました、太郎は今は一生懸命、此時までも腰の邊を離しません、仙人の女王から頂いた劍を拔きはなし、猛く狂ふ大猫を相手に木の上て鬪かつて居りました、此有樣を注進するものがありましたから、アーサ王は、大に驚きて取るものも取りあへず、其場へかけつけ、猫を追ひ拂ひ、太郎を扶け下さうと致しました、彼の時迅く此時遲く、猫の爲に手負をしました太郎は、傷所の痛手に堪えやらて木から落ちかけましたから、王樣は手早くハンカチを帽子の中に入れ太郎を此中へ柔に受けとめまして、醫者よ藥よと大騷き、大きな聲を出しては太郎の病氣に障るからといふので、宮中、大聲御停止の御觸が出るといふ始末、斯樣に大事になさいましたが、太郎の傷は中々治りません、夫のみならず、段々衰弱して、明日にも知らぬ容躰、太郎は只戀しいと思ふ兩親に會はずに死ぬのを、此上もなく殘念に思つて居りました、

話し轉つて、前に見へました魔法使のマソンは、太郎の病氣が危篤だといふとを早くも承知しまして、急ぎ仙人の女王の許に注進に及ひ、一刻も早く助けてやつて下さいと、歎願しました、女王は太郎の戒を守りぬ爲め斯うなつたのたと思召たもの丶いかにも不憫であるといふ處から、人知れすアーサ王宮へ御出になり皇后の御寢になつて居る枕邊に見はれ給ひ、て、

「我は天國の女王、太郎の病を治さん爲、迎に來りしなり病愈なば再ひ宮中に送り歸へさん、」との御告けあ

り、夫より太郎を受けとられた、太郎は是から女王の許で、厚い御介抱、さしもの大病人も天國の有難さ、病氣早速に全快に及びましたが、兩親に逢ひたい、側へ行きたいといふ念は益々熾で、遂に女王に、御願ひ致しました、女王はマーサの皇后へ太郎全快次第送り返す約束があるから、ては、其前に一日丈暇を遣さうといふ御許し、太郎は大悦びイザ出立となると、女王は自から金庫へ案内されて、

「コツヤ、太郎、兩親への土産に、何なりとも好き物を持てる程、持つて行け、」といふ誠に有がたい仰せ、さらばといふので金庫の中を見渡すと、話しにも聞たこともない、寳物計り金銀瑠璃、玻瓈、珊瑚、瑪瑙は愚か、得がたき物で充たされて居ります、て、太郎は躰が小粒なるに似氣なく聊か慾心を起し、其中から一番大きい小判を撰りぞつて、



女王に暇乞に及び、其小判をば擔いだり、落したり擔いたり落したりして、エンヤラヤツト大汗で我家の前まて持つて參りましたが生憎門が閉つて居て開きません其處で持つて來た小判で戸をコツ〳〵と叩きますと中では、

「誰だへ、叩くのは、誰だへ」

といふ聲まさしく戀しい母親の聲ですから、しめた〳〵と大喜び我を忘れて

「私です、私、……私、……たゝゝ、太郎です、……」と叫びましたが、母親は聞へた樣な、聞えない樣な風で、

「誰だらう、今の聲は、……太郎の聲に肖て居るが太郎は今は此世に居ない筈だ、夫にしても不思儀だと、獨り呟いて居る樣子、太郎は詮方なさに、また小判でコツ〳〵〳〵

「私です、太郎です、お母さん戸を開けて……、太郎

てす、太郎は死にません、これ此通りチヤンと生きて居ます、戸を……、戸をあけて下さい、」と泣き出さん計りに叫びました、母は漸く戸を開けて與れまして、

「どうして御前は無事て……」と嬉し涙に問ふ可き言葉もありません、折柄此處へ父親も歸つて來ました何にしろ死んだと思つた太郎が生きて居つたのてすから、父の悅びも想ひやられます、太郎はお土產に持つて參つた、小判を兩親の前へ轉かして、

「御覽なさい、お父さんもお母さんも、善い運を持つて參りました、」と最と誇り顏に御土產の吹聽に及び、扨て其日は菓子鉢から川流されの一條、夫から王樣や、皇后樣へ御目通りをしたとの顚末を殘る限なく物語ました、親子諸共時刻の經ち易さを憾みましたが、仕方がありません女王からの言付かあるから別れを惜しむ兩親になく〳〵別れを告げ仙人國へ參つて女王にも暇乞の上風に乘りて王宮へ歸ります途中折あしく風がひどく吹きましたので、恰も王宮の前まで參りました時乘つて居る風に煽られて、扨て落てちる塲所は何處てしやう、

此時王宮ては、コツクが王樣に差上るスープが出來上つて、今王樣の御前に持つて參る廊下の邊、何物とも知らず、一陣の風と共に不意にスープの中へ舞ひ込んだ、物がある、ペチヤンといふ音と同時に、生熱いスープがコツクの顏にかゝつたのて思はず、

「ヤア大變、大變……、」と叫んだ、何事ならんと馳せ集まる人々、落ちて來たものはハテ何だらうと氣を注けて見ると、例の太郎が、親指大の躰てスープの中を泳いて居る、ので、早速摘み出して事の由を王樣に御注進した王樣は、

「我が口に上るべき物の中に土足て飛込むとは不埒な奴だと、仰せられて面白半分に、太郎を帽子伏せにして其中に監禁しました、太郎は全くの粗相である故意といたしたのては……涙ながらに辨解いたしましたが、御許しがない、太郎も、詮方なく、帽子の牢屋の中に小さくなつて居りました、餘りといへば王樣の處置が氣に入らない、と立服の餘り例の劒を引き拔き、中から

帽子を切り破つて牢破りと出かけましたが、出ると直樣王樣の御目に止まり、今度は裁判所へ連れ出され、大きな恐ろしい顔の裁判官の控へて居る前へ立たせられ死刑の宣告を受ける事になりました、今や裁判官は、嚴格に宣告書を讀み上げやうといたした時、裁判官の机の上に、飛ひ上ると見る間に、早くも宣告書を小さい手に取つたものがあります、これは疑ひもなく太郎でアレと云ふ間に其宣告書を風船の樣に膨らましたと思ふと共に、緖に捉まりながら、風船と諸共虚空遥に舞上つて、さながに小さい體は、看る看る見えなくなつて了いました、

王樣は素より、太郎を罪にする積りでもなく、只惡戯を止めさせる爲、いはゞ面白半分にやつた事ですから、此躰を見て、大相名殘を惜まれたが、人間の力では最早呼ひかへす事は出來ません扨て其後の太郎は如何いたしましたか、風船て仙人國へ着いて見ると、是はそもいかに、最早逢れまいと思ふた、兩親が兩手を上けて、自分を迎へる、古い元の小屋も、畠も、牝牛も、夫の植木鉢の庭も、夫の揺り床が、殘らず其まゝ此處にあるといふ何から、何までが、僥の幸ひ是は皆んな魔法使と女王との力で、こゝへ取り寄せて下すつたので、太郎父子は爰に樂しい善い長い月日をおくつたといふ事であります、

めでたし／＼

▲小兒と遊ばんと欲せば小兒の如く遊ばざるべからず
▲噛まれたる小兒は犬を恐る
▲小兒は家内に於て聞く事を世間へ出てゝ話す
▲小伜と白紙とは如何なるものをも印記せらる

雜錄

女學史料

石井研堂

女子の斷髮

明治四年八月九日、散髮脱刀皆適宜たるべき布告あり。これよりさき、男子の斷髮する者日をおひて、多かりしが、一たびこの官令にわひて、特に斷髮熱を高め、婦人僞眞髮を斷ちて、わけ髮などを裝ふに至れり。

「武江年表」四年十月の條に、散髮者女にもこれあり、上野山内清水堂傍茶店の女、又新内節上るり語の女も、散髮と成てトンビを着たるもあり。

五年二月の「日要新聞」に、先年來、貴賤となく、或は禿天頭の如きも、漸く髮を蓄へ、今日に及んでは、士は素より平民に至り、十に三四散髮せり。……然れども一の甚しきは、頃日、叨りに婦女子の散髮せるあり。……尤多くは、煎茶屋の給仕女にて、啻に奇を好むのみならず、書生兵員僚の寵戀を計るか、或は自負の強さ不從敎輩の所爲なれば、實に笑止の甚しきなり速く異風を改め、人こ相應の容を爲て、一婦もかゝる至愚なきやうありたし。

とあり。果して此異風は、五年四月五日、東京府より告諭文出てゝ禁止されたれば、忽ち止みき。

婦人眉を立て齒を染めざる始

婦女の嫁したる者の、眉を剃り齒を黑くするは、我邦古來の習俗なりしが、明治四年ころより、之を廢すべき議論民間に喧しく、同六年に、皇后陛下率先して眉を立て鐵漿を剝ぎ給ひてより、其風大に民間に行はるゝに至れり。

明治四年五月の「新聞雜誌」に心ある男子は、齒を染めず眉を剃らざる婦女を貴ぶ者少からず。婦女も亦

齒を染め眉を剃るを歎く者なきに非ざるも、一般の風俗に悖るを憚りて、其志を行ふことを得ず、最も悲むべし、といへり。

五年二月の「毎週新聞」に、估て皇國開化、既に女學校を設くるの度に至るといへども、尙ほ皇國婦人の俗、夷風を免かれざるの一事なり、是は則ち婦人嫁して眉を剃り、齒を染むるの惡風なり云々と、其無益を論じたる文あり。

されども、守舊家の之を冷評するもありき。

六年一月廿一日の「日々新聞」投書に、頃日新聞紙を閱するに、「カタタ娘」(研堂いふ、婦人のかねを付くるは人工不具たることを論ぜし福澤諭吉氏の著書なりといふ)といへる書に因て、婦人剃眉涅齒の禁令を望む者あり、……福澤翁の糟粕を甞めて、無益の言を費す者といふべしと。

六年三月三日、皇后陛下、天稟の淑資を傷害すべからざる見を諭り、齒を剝き、黛を落し給ふ。これより追々人民も之にならひ、七年十月頃の「東京新繁昌記」に、今都俗を觀るに、男にして斷髮せざる者を因循と曰ひ、婦にして眉を剃らざる者を開化と曰ふ、といふに至れり。

婦人束髮の始

婦人束髮の始は、明治十八年の夏、ドクトル渡邊鼎氏の妻君に起れり。「社會事彙」に、明治二十年四月婦人束髮會起りてより、洋風を好み輕便を主とする婦人は、束髮に束ねられども云々とあるは、何かの誤なるべし。すでに、十八年七月廿一廿九兩日の、朝野新聞に、渡邊鼎石川暎作二氏發起して、婦人束髮會を起したれば、市下の鼈甲商は、上等ものゝ製造に躊躇すなとの記事あるを證とすべし。

男女の混浴を禁ぜし始

明治五年四月東京府禁令の中に、「男女入込洗湯不相成候事」とあるぞ始なるべき。

七年發行の「繁昌記」溫泉の條に、一堂を區劃して別

浴槽と爲し、以て男女を別ち、隔に玻璃戸を以てす
とあるは、今日の湯錢の樣にやゝ似たり。

女人結界を禁ぜし始

佛道に、女人を以て外道魔物となし、法により界を結びて入るを許さゞりしと、之を結界といふ。明治五年四月、神社佛閣の地にして、女人結界これありし處、自今廢止し登山參詣勝手たるべき旨布告あり、これより男子同樣參詣登山の自由を得ることとなれり。

婦人乘馬遊びの始

明治四年四月十九日、庶民の騎馬を許せり。今まで嚴束せられし禁の弛びしとて、權も入も借馬に跨り、市内を遊行せしは當然のことなり。其風婦女子にまで及びしは、次の記事にて知らる。

五年の「新聞雜誌」七十號に、府下の異風醜態を列擧せし中に

婦人着袴乘馬、奴隷下駄にて乘馬歴をあらはす

とあり。又六年版の「童戲百人一首」に、

袴きて町を走らす町中の、乙女の姿しばし留めん

とあり。又同年版の「泰平大擊劍圖」に、婦人乘馬の圖あるなとより見れば、當時下層社會婦人の乘馬の戯れは、一の流行なりしなるべし。尤も、古代の婦女の、鞍に跨らずして、今の西洋婦人の如く騎馬する風俗ありしは勿論のことなり。

年季娼妓解放の始

從前の娼妓なるものは、抱主の所有物件たる觀ありて、人權を束縛したること甚しかりき。然るに明治五年十月令して諸國の年季娼妓を解放せしめ、自主の民たらしむ。これより先き、南アメリカ秘魯の賣奴船、わが横濱に來泊せることあり、わが有司、人身賣買の天理に背くを以て、之を拘留して出船を許さず、遂に兩國の葛藤となり、露國皇帝に其裁判を托す。露帝審判して我國を正理と爲す。然るに、我國の年季娼妓の習俗は、却て此背理の實例なりしを以て、此令ありしなり。

翌六年八月の「寶戲百人一首」に、
とき放しされて親なし家なしの、世をうち山と人はいふなり。
七年十月の「新報節略」近世六歌仙中に
自主ながら二兩の税のやりくりに、うしと見し世ぞ今は戀しき。
これ、新法によれる娼妓營業者は、自ら納税するやうになりしをいひしものなり。

女學校の始

明治四年十二月、文部省の布令に曰く、
今般西洋の女教師を雇ひ、共立の女學校を相開き、華族より平民に至るまで、授業料を出し候はゞ、入學さし許し候間、志願の者は、向ふ申(五年)正月十五日まで當省へ願出べき事。
　女學校入門の心得。（但當分英學の事）
一授業料毎月金二兩相納べき事
一書籍等は銘々持參いたすべき事。
一稽古時間は毎日五時間の事。
一生徒は女子八歲より十五歲までの事。
　但し、すべてかよひけいこの事。
「社會事彙」に、明治五年二月、始めて女校を南校中に設け、小學科に英語學を加へ、邦人英人の兩女教師其事を分掌す
とあるは、前と同一の記事なるべし。これ專ら女子の學校ある始なり。三十三年來、全國の高等女學校數は、すべて二十六校なり。

女學生洋行の始

明治四年「新聞雜誌」二十二號に、
東京府士族　秋田縣典事 吉益正雄　娘　亮子　未十六歲
同　府士族　津田仙彌(今名仙)娘　梅子　未九　歲
靜岡縣士族　永井久太郎娘　繁子　未十　歲
青森縣士族　山川與七郎妹　捨松　未十二歲
外務省中錄　上田畯　女　悌子　未十八歲
の五少女は、黑田開拓次官の周旋にて、留學の爲め、

米國全權公使デロング氏の妻に托され、明治四年十一月十二日、横濱より米國紐育府へ渡航せり。

とあり。（研堂いふ岩手縣人大布氏が、予に書き送れる所によれば、五女の寫眞の背書に、悌子の歳申年にて十八歳とありしといふ。

これより先き十一月九日、五少女は宮内省に召され、皇后宮より茶菓及び左の書付を賜はる。

其方、女子にして洋學修業の志、誠に神妙のことに候。追々女學御取建の儀に候へば、成業歸朝の上は、婦女の模範とも相成候樣心がけ、日夜勉勵可致事。

翌五年四月の「毎週新聞」に、外字新聞の抄譯を掲げて、五少女の消息を傳へたり。云く、

デロング氏誘導の幼女五人は、ワシントン近傍のヂヨーヂ街中の女學校へ寄宿せり。渡來の節着用の美麗なる日本服は、チカゴに於て米國當世風の服に改めたり。ヤマクワといへる少女は、グレンドホテルの衆女に愛せられたるものなり。此女は紐育の學校に入り、こゝにて十年留學の見込なり。其他の留生は、諸國の學校に配當せられたりと。

又、同年五月の「日要新聞」にも、

米國に渡りたる幼女五人の内、ワシントン近傍のヂヨーヂトウン街中のランメン の宅に、梅子亮子の二女在留し、同所醫師ヘボン先生の兄の宅に、悌子捨松繁子の三女あり、森辨務使、此女のことを總括せるよし

とあり。（當時の幼女梅子は今の津田女子英學塾長、捨松は今の大山侯爵夫人、繁子は今の瓜生高等女子師範學校教授、悌子は故朝野新聞社主乙骨氏夫人にして文學士上田敏氏の母堂）

女醫の始

始め高木賓吉等の諸氏に從ひて修業し、後慈惠院にて實地を研究し卒業後、同院助手を托せられ、最も婦人科小兒科に妙を得たる本多せん子（本多ドクトルの夫人）は、本邦に於ける女醫の嚆矢にして、明治廿五年十月頃より、赤阪新町三丁目に出診所を設け、廣く患者の需に應じて診察治療を施せり。

華族女學校の始

明治十八年九月、學習院の規則中より、女子部を除き、創めて華族女學校を設け、宮内省の所管とせられたるにあり

華族と平民と結婚の始

明治五年の「新聞雜誌」七十一號に、松江舊知事次息今般大阪巨商天王寺屋某へ養子になる、華族平民結婚の嚆矢なりとあり。

尤も四年八月の太政官令にて、華族平民の相婚嫁するを許したればこのことありしなり。

求婚廣告の始

本邦の婚姻の習俗は結納の濟みて、約束の堅まるまでは成べく之を秘する風ありしかば、新聞に廣告して婚嫁を求むるなどは、夢にも思はざることなり。そのこれあるは、明治十九年十月中旬(日を脱す)時事新報に求婚廣告せし某書記官に始らる。

新式結婚の始

明治七年十二月六日、兒玉淳一郎(今の貴族院議員)佐々木靜枝(高行(今の伯爵)の娘)二人の結婚には、時の敎部大輔宍戸璣氏の祝文朗讀にて、式を擧げ、又、八年二月六日、森有禮(後の文部大臣)と廣瀬常女と結婚するや、民法上の權利を明かにしたる三ヶ條の約定書を交換し、證人は福澤諭吉氏なりし。

婦人の職業

江湖生

從來の女子は男子に依賴して衣食し來りしも、已に民法も制定されて人事篇中明らかに夫の財産、妻の財産と區別されたる今日、爾後の妻たらんものは徒らに舊慣を固守してゐるのみならず、身は男にかゝり升、袖手傍觀しゐるは、民法の手前に對しても大いに恥づべきことならん。例令、夫の收入を以て僅に一家を支へて

行くことを得るも好むべきことにはあらねど槿花のそれよりも猶は果敢なき人生にありては、いつ何時「死」てふ怖るべき惡魔の爲めに、杖とも柱とも恃みになせる敬愛の夫を奪はるゝ不幸なしとも限らず。此時に當つて其家に財產あつて、夫の死後、尙且他の力を借らずして一家を維持し行くことを得ればよし、萬一左樣なき時には身に覺えある職業の有無により、將來の生計上大いなる關係を及し來るべし。是れ他日良妻となり、賢母となるべき女子諸君の宜しく研究に値ひすべき問題ならずや。茲に漫に題して「婦人の職業」と謂ふはなにかし、令夫人、令孃と崇められ玉ふやんことなき側に居らるゝ方々は措て問はず、唯重に中流以下を標準として、自營を計らうとする人々の爲めに、將來如何なる職業を擇まばよからんかとの疑問に對して、聊かその解決を與へんと欲するのみ。

さて、一概に「婦人の職業」といふも千差萬別にして、以下條を逐ふて揭ぐる數項によりて、女子諸君が各自の性行、嗜好等を參酌してその適不適を究められし後、任意に擇ばれんことを望む。

▲琴の指南

峰の松風の音に通ひて、玲瓏として銀盤に珠玉を轉ずるがごとき、實にや氣も心も澄み行く樣に思はるゝは琴の音なり。月明の夜是れを聞かば耳、音曲を解することを得ざるものも、何となく心の塵の洗はるゝ樣なる思ひするなり。「婦人の職業」として此位高尙にして、又品位のあるものはあるまじ。勿論、單に琴と稱する中にも生田流、山田流、其他猶幾流派にも分れたり、其の異る所は生田流にては角爪を使ふべきを、山田流にては丸爪を用ふるが特旨の點なり他は左したる相違なし。是迄東京にては、山田流非常に勢力を占めゐて、琴といへば山田てなければならぬ程にいひしも、宮內省にて生田流を用ふることゝなりてより有繫に一時至盛を極めし山田流も、大勢の赴く所如何ともし難く、當今にては生田流の爲めに勢力範圍を蠶食されたる傾きあり。

さて、假にも一道の指南を仕樣と欲せば、奧許は無論の

こと、技藝に於て熟達せざるべからず。山田流なり、生田流なり、自己の好む所に随つて弟子入をなし、一意専念、少くとも八年の歳月を積まずはあらじ。最も當時は僅かに三年位にて奥許を得るものもあらんが、其人の性質にもよるべけれど、それは素人藝たるに過ぎず、換言すれば御祝儀の功力によつて授けて貰ふゆえ、指南の看板を掲げるにはチト怪しきものなり。兎に角八年の日子を費して漸く一人前の師匠となり、何々流琴曲指南の看板を掲げてより、いつも十人乃至二十人の弟子があるそして一ヶ月の收入は何の位あらんか。

先づ第一の收入は月謝なり、是れは一人一種にて五十錢の定めなり、されど多くは一人にて三種位習ふものもあるゆえ平均一人一圓として假に弟子を十五人とすると十五圓、次に入門料是れは俗にいふ束修で、始めて入門する時一人に付五十錢宛の目錄となれり、絶えず十五人位の常稽古のある處にては一ヶ月大概四人の新入門者があるゆえ二圓となる、その次は出稽古にて、是れは重に華族など地位ある人の夫人、又は令孃等の宅へ三日目若しくは五日目に一度位づゝ稽古に行くものにて、其謝禮は家に依つて元より一樣ではなけれど、大抵三圓から十圓まで範圍を脱せず、平均一軒が五圓として三軒あれば十五圓、その次は月溫習の祝儀なり、是れは毎月一回門人を集めて溫習をなし、其附屆は思ひ〳〵の目錄にて一寸と算當が出來ざれど、現在の門人十五人として一人平均五十錢とすれば七圓五十錢、以上が琴の師匠一ヶ月一定したる收入にて、合計すれば三十九圓五十錢、マア四十圓となる。年額四百七十四圓乃至四百八十圓だ。まだ此外に臨時の收入として、初會、納會と稱する大會がある。此時も一統の門人より一圓以上三圓迄のお包を持參するゆえ、是れを一人平均二圓として十五人分だけで二會分六十圓、次に糸代、これも年に二度一人一度に付平均五十錢として二度分十五圓、次に炭代、春一度一人五十錢宛として七圓五十錢次に出稽古三軒より年末年始の心附凡そ六十圓、それから許しの祝儀、琴の許しは、凡そ三階級に分たれて居て、其許しを受くる毎に夫れ相應の祝儀目錄を進ずる

のとなつてゐる。乃ち初許が三圓以上十圓以下、中許しが五圓以上十五圓以下、奥許が十圓以上二十圓以下なり。右の内中、奥の修業は一ヶ年半も掛るから此祝儀は勘定以外として、初許は大抵六ヶ月にて卒へるゆゑ一ヶ年二十人はあるべし。初許の門人一人に付て祝儀肴代共平均五圓とすれば百圓となる。以上臨時の收入のみにても二百四十二圓五十錢の巨額に上る。ことに一定の年額（四百四十七圓）を加ふれば、七百十六圓五十錢、實に高等官七等の年俸と相當するなり。唯、一婦人として是れだけの收入を得るは容易の事にあらず。

凡べて何業に限らず夫れ相應に資本は入るなり、然らば琴の師匠たるべきの資本は如何。稽古道具として是非三挺位な琴はなくてはならぬ、此の費用、贅澤をいへば際限のなけれど何うせ稽古用ゆえ普通のものとして四五十圓は入るべし。次に人に指南をする迄に——藝道修業の爲めに費したる金は少くとも三四百圓はあるべし。

▲插花師匠

一は慰みとなり、一は禮式ともなるのは插花なり當今上流社會にては嫁入準備の中に數へられ、苟くも中流以上の淑女は是非研究をせねばならず。從つて古來よりその流派も種々に岐れ、先づ古流、池の坊、遠州流、美笑流、千家、未生流なとて各々その特長を備へてそれ〳〵門戶を張れり。その師匠も、女のみに限られて居ず。重に生花を賣る家の主人はその心得あつて、商賣の片手間に師匠をなしなほ純粹の師匠としても男もあれど、何方かといへば女子の職業として琴曲に讓らない程、體裁もよく、下品でなし其收入も男女に依つて多少の相違あれど、要するに技藝の巧拙、弟子の待遇ひ等によりて大に影響する職業ゆゑ一樣に言ふこと能はず稽古に自宅稽古と出稽古の區別ありて、其稽古日は何れも三の日、五の日と一定され。自宅稽古人が十人あるとすれば五圓之れに此十人の弟子が稽古の爲めに使用する花代が一人に付少くとも五十錢として五圓、其内の半額は花屋へ支拂ふ實費となり師匠の手取は二圓五十錢となる。又出稽古の分は一ヶ月平均六軒として、

一軒の家で夫人、令孃等と二人又は三人の稽古があるとして、少くとも二圓宛の謝儀があれば六軒分にて十八圓總じて挿花の師匠は琴曲と違ひ出稽古が收入の多きものにて、自宅の稽古は可成月に六齋位にして出稽古の得意を殖す樣にしてゐるなり。又月に一回は必らず會を催すものにて、此時に會合する新舊の門人より目錄を持參すること となるが、平均一人三十錢とし二十人集まるとすれば六圓、併し琴といはず、挿花といはず、何師匠に限らず入門料、盆と正月とにお弟子より、祝儀が來殊に大家へ出入して過分の心付もある上に、初傳、中傳、奧傳などゝいふ許しの時に祝儀を得るの慣例とありて、從がつて臨時の收入も多額になり、每月定額の月謝、花代、會などの收入と臨時附屬許しの祝儀とを合すと少くとも四十圓位となる。是れ挿花の師匠の收入なり。

●レモンの效用

レモンは誠にいろ／＼の效能ある果實にて、顏に小さなつぶ／＼のできる人は、一週に三度づゝもレモンの汁をぬれば奇麗になるのみならず、色を白く滑かにし艷を生ず。餘り外出せざる婦人などは額鼻唇等血液循環わるく垢しみやすきものなるが、これは石鹼などにてはなか／＼落らず、されど此汁にて洗へば直ちに奇麗となるものなり。西印度あたりにてはレモン油ありて、身体を清淨にし强壯劑として最も效ありと云ふ、沐浴に用ふるには先づ五六個のレモンを各二ツに切りて水の中に入れ置き、入浴三十分前に取り出すべし。又食後コップ一杯に一匕のレモンを入れて口中をそゝげば、惡臭のを去煙臭氣り、清涼防腐の效あり。又髮を洗ふに用ゐて最もよろし。先づ髮を微温湯に浸してレモンにて擦すり、のち又微温湯にそゝげば毛髮の艷を出し、よくふけ、あぶらを去る事石鹼などの及ぶ所にあらず

名家談叢

虎列剌病の歷史

(東京市教育會席上に於て)

警察醫長
醫學士　山根正次君

此傳染病といふ事に就ては、別段其定義を申上げる必要はない、傳染病といふものは段々人に傳まる病であつて、其爲めに生命財産を失ふ所の病氣である、國を滅す所の病氣であるといふ事丈けを覺えて居つて貰ひたい、而已ならず私が之に加へてお話するとは、傳染病が如何に教育を妨げて居るか、傳染病が流行すると、非常に此學校の上に影響を來すのである、非常な流行に際しては、即ち交通遮斷といふことになる、此交通遮斷の爲めに學校に來られぬ所の子弟が出來るのである、夫の山梨縣の如き赤痢病が非常に流行致して、其當時は各學校が休んだのである、何故かと申すと、子弟の通ふ所の學校には皆な赤痢病が發して居る、或は家に於ては子供が赤痢病に罹つて居る、親が罹つて居る、兄弟が罹つて居るといふやうな有様からして、學校に通ふとが出來ない、詰まり學校を悉く閉ぢた所がある、それが爲めに學校の教育が非常に後れた例がある、又東京に於ても近い例が、本郷新花町の小學校に於て、小使が不發生した爲めに疑似虎列剌に罹つたのであります、其結果として新花町の公立小學校は今日尚は遮斷中であつて、學校が閉ぢられて居るといふやうな有様、又傳染病によりては、例へば麻疹が流行する、インフルエンザが流行する、實扶的里亞が非常に流行する、殊に小兒を冒す所の病氣が流行する際に於ては、追々學校を閉ぢればならぬ場合が起つて來るのであります、

扨今日流行して來やうといふ所の傳染病、即ち虎列剌といふものは實に劇烈なるものであるが、此病氣が何年頃から起つたか、如何なる歷史を有つて居るかといふとを是よりお話致さう、虎列剌といふ病は印度地方に於ては紀元前からあつた所の病氣である、彼の地理書を御覽になつた方は分りませうが、印度にはフラヤクトラとかケンケスといふやうな大きな川があります、其川の縁は濕地である其地方に於ては風土病となつて屢々印度地方に行はれたものであります、併ながら往古は舟車の便もなく、交通といふものが盛にないから、虎列剌といふものが歐羅巴或は其他の國に知れ渡つて居らぬ、然るに支那にも隨分古くからあつたかも分からぬと思ふ、それは支那の書物の中に、瀉病といふ病氣がありますが其瀉病といふものゝ病性を調へて見ると、虎列剌に相違ないといふとが今日證據立てられるのであるから、支那の内地にはあつたものと見ゆるのであります、

此病が歐羅巴へ知れ渡つたのは、何年頃からであるかと申せば、千八百十七年に於て、英國が印度を征伐する爲めに軍隊を澤山印度へ送つたのであります、其時にヘスチングといふ將軍が居りました、其將軍が印度征伐に向つた所が特に印度の風土病たる所の虎列剌病が發して居つて、僅に五日間に於てヘスチングの率ゆる軍隊の五千人が死んだのであります、病に罹つたものは澤山ありませうが、死んだ者ばかりが五千人、五日間にあつたのであります、此激烈なる印度の大攻擊に遭ふてヘスチングは非常に困つたといふとであります、

そこで此病氣が歐羅巴へ知れ渡つて、即ちコレラといふ名の病氣が彼地に知れたのであります、それから次の年即ち千八百十八年に於て此病氣が歐羅巴の方へ行つたのは、比耳西亞を越えて、歐羅巴へ行つた、此時は伊太利獨逸、墺太利、佛蘭西、英吉利、露西亞等の各國が悉く此流行の疫に罹つたのであります、殊に激しく流行したのは千八百三十二年の頃に於て佛蘭西の如きは大に流行致しました、佛蘭西ては前後五十回の流行を爲して居りますが、其度每に年々十四萬人以上の人が死んで居る、

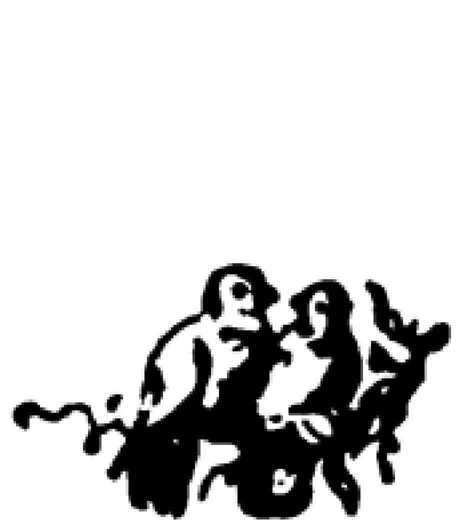
此恐るべき病氣が日本へ來たのは何年頃であるかといふとを警索して見ると、丁度今から滿八十年程前で、文政の五年であります、當時長崎から虎列剌病が這入つて來り、京都即ち

五畿内の方で流行を極めたといふ事でありま
す、それから後は暫く此病氣が絶へて居りま
したが、再び來たのが即ち安政四年五年の頃
であります、是より二年前安政二年の頃に和
蘭人が長崎へ參つて居りまして、其時の政府
即ち幕府に向つて建議をして居る、何いふ建
議かといふと、布哇や其邊の近傍に於ては一
般に大變氣候が惡い、其氣候の惡るい爲めに
虎列剌病といふものが流行して居る、其故に
大に用心しなければならぬといふ事で、其豫
防の方法を香物を燻さしたり何かして其時調
へて出て居るのであります、其時の流行は矢
張長崎から蔓延し始めまして、それが全國に
亘つたのであります、安政五年丁度今から去
る四十四年前に東京の方へ此病氣が這入つて
來まして、非常な流行であつた、之が空前絶後
であらうと思ふ、其時江戸の町奉行所より書
上げた所の數を見ると中々大きな數である、
是は一々年號が違つて居りますが、安政五年
八月一日より同九月十五日まで僅に一ヶ月半
の間に各寺院各役場に於て取扱ひたる死亡者
は東京丈けで總數二十八萬八千五十七人あつ
たのであります、其他兩國回向院へ埋葬した
無人別行倒が總計七千五百人あつた、それか
ら殿下の四念寺に於ては前同樣行倒の數が四
千五百二十五人ありました、此中には五人や
十人泊めた所の寺といふものは一つも採用し
てない、それて前の三つを合せましても總計
が三十萬八十二人で、それ丈けの人が江戸
に於て虎列剌の爲めに死んで居るのでありま
す、斯の如き流行といふものは實に慘酷なも
のであつた、其時に亞米利加のペルリが之を
附土産にして行つたといふので、大變に攘夷
熱が盛んであつたといふ事です、此時に（亞
米利加土産は大したものよペルリがコロリを
置いてつた）といふ歌が流行して、子供が皆
な謡つたといふことて、丁度其の時に治療を
した三上米といふお醫者さんに今朝其歌を聞
いて來たのであります、アヽいふ病氣を日本
に置いて行つて太い奴だといふ所から、攘夷
熱が最も盛んであつたといふ事であります、
又一說には下田の方へ持つて行つて米國の軍
艦が水葬した死体がある、其水葬した死体を
立派な桶に入れて流したのでありますから、
之を漁師が行つて開いて見た所が死人が在つ
た、それが多分虎列剌患者であつたらうとい
ふので、それを見て傳染病が下田の近傍から
始まつたといふ事を言ふ人もあります、
それから後に參つたのは何年頃であるかを調
べて見ると、即ち明治十年、丁度西南戰爭の後
であつたのであります、其時には凱旋の將士
が折角戰爭に勝つて歸る時でありましたが彈
丸には中らなかつたが即ち此虎列剌病に感染
した、其時は一体何所から來たかといふと英
國の郵便船とか或は他の軍艦の水兵抔が虎列
剌病に罹つて、そうして其死んだ者を内々長
崎の大浦といふ所へ持つて行つて葬つたので
あります、無論排泄物抔といふやうなものは
海の中へ皆捨たのでありますから、通船の船
頭が一番先に罹つたのであります、それを嚆
矢として一萬何千人といふ多數の病人が出る
やうな事になつたのであります、それから次
に流行しましたのが明治十二年であります、
この年は安政年間の虎列剌に亞く所の大流行
であつて十六萬何千人といふ病人が出來まし
て、其の中で十萬人以上死て居るのであります、
それから明治十五年には殆と六萬に垂んとす
る所の患者が出て、それから後の大流行は十
八年十九年であります、十八年には長崎から
流行し始めて、それが十九年に續いてありま
した十九年には四國の方から始まつて全體に
亘つて參つたので、其年は十二年に亞く所の
流行て、十萬何千人死んで居ります、
丁度それより二年前に、虎列剌病といふもの
は黴菌が居る、一つの菌が居る、即ち其黴菌
といふものを獨逸のコーホといふ衛生大學者
が印度の方へ行き埃及の流行地へ行つて發見
をしたのであります、十八年には日本に於て
も其新聞を見其書物を讀んで居りまして、私
は丁度長崎の醫學校の教授をして居りました
から、之を一番先に染色して見た、コンマ
チルスの居る所を染めて見て、其後一人の解
剖を致しました、それから次の年は病院の監
督を致しまして、非常なる流行に出合ひまし
たが、其時に私共の同學士で學校の教授を
して居るものが二人罹り、其等の教授の要君
も虎列剌に罹つて死ぬるといふやうな場合で
ありました、學士では私が一人居つて、さうし
て監督だの治療の事に當つて居つたのであり
ます、其の時は十八人解剖を致しました、其
當時虎列剌に就ての書物抔といふものはまだ
十分てないと思つて　虎列剌の歷史の種々な

ものを書いて居るのであります、それから後に虎列剌病の流行しましたのが明治二十四年五年の頃に少しありましたが、其時は澤山な數ではありませぬ、然るに又日清戰爭の際に於て此病氣發生致しました、御存しの如く其時は十萬噸に充たない所の日本の運送船でありまするから、政府に於きましても早手廻しをして運送船を買入れたのであります、其の運送船といふものが、即ち印度地方を彼境此境通ふ所の船であります、其船を十分に消毒しなかつた、さうして直ぐに運送に用ひたのであります、御存しの如く伊藤さんだの陸奥さんだのが下の關に於て李鴻章と談判をして居るときに、御は日本の勢を見せる爲めに澤山の運送船に近衞兵を澤山に乘せて、下の關の丁度談判をして居る前を滿艦飾をして、大砲ドン〳〵打ちつゝ祝砲を放ちて支那の方へ向つて行つたのであります、大變威勢を張つた、其時に旅順口で兵隊を上げるときに、此近衞兵が澤山虎列剌に罹つたのであります、戰爭に行つて支那人と闘はぬ中に虎列剌と闘つて大に負けたのであります、私は其時大變に關係つて居りましたが、其際に當りて殊に澎湖島杯へ行つたものは千を以て數へる程死亡したので、其人を彼地でドンドン火を焚いて濱邊で燒いてしまつたのでありますが、實に慘酷なものであつたのであります、其當時軍隊に於て戰死した者は千何程しかない、然るに傳染病に罹つた者といふのは四萬何千人あつたのであります、さうして死んだ者が大半あります、

それで戰爭よりも洪水よりも恐ろしいものは傳染病であります、殊に虎列剌は人の生命を害ふ上に於て最も慘酷なものであります、それから此病が其後なかつたのでありますが今年の春以來香港といふ港に此病氣が出た、新嘉坡にもある、馬尼剌にもある、或は厦門其他支那の海岸に於て彼地此地に出るといふとの通知がありましたが、今年は何れの國に於ても氣候が惡い、常に雨が多くて濕氣が餘計出る年である、ドウか虎列剌が日本に來なければよいがといつて居る中に、先々月の三十日に於きまして、唐津地方に於て一の病人が出た何でも、虎列剌の徵性によく似て居るといふ所から、段々調へて見ると虎列剌であるといふとの通知がありましたが、其後唐津地方に於ては何十人といふ病人が出たのであります、それから此唐津に出ますると、内務省に於きましては中央衞生會を開いて、さうして之が豫防法を講して居る中に、早く此病氣に似た樣な病氣を見出して取締るが宜いといふので、夫を屆出をするやうにといふ訓令が出たのであります、スルと東京の如きは警視廳に對して屆出をしなければならぬといふをが先月の十三日に出た、然るに二十三日に於て京橋から先登第一に警視廳へ屆が出たのであります、此者は酒屋の番頭であつて、さうして酒を受取りに新橋の方へ行つて、歸途祭禮の饗應を澤山食つて、鰻頭酒を飲んで不養生をした結果、其晩から大變吐瀉が始まりまして、三日經たぬ中に生命を取られてしまつたのであります、それと同日に京橋區内に始まるし、それから尋て眞症の虎列剌が御存しの如く芝の愛宕に出て、續いて同府地に於て二人出て、新宿に於て爺と婆とが喜悦付つ石花菜（ところてん）、アゝいふものを澤山食つた爲めに病氣を起して死ぬるといふやうなことになり、淺町にも出て、淺草にも出て、それから京橋にも又出て、而已ならず神田にも二人出まして、さういふやうになつて今日は疑似の病が十何人直症が三人出た訣であります、然るに、といふのは檢黴検査の上から三人と申すのでありますが、他の疑似の十四人といふものゝ始と虎列剌の徵性を備へて居りまして、此大半は死んで居るのであります、然るに昨今巡查が此席へ報告に參りました話を聽きまするに、京橋區新榮町五丁目七番地人力車夫森伊三郎長男伊之助(三歲)といふものが昨今疑似症に罹つたといふことを申して來たのであります、斯ういふやうな譯で日本に於ける慨略の歷史と、虎列剌病といふものが往古からあるといふ事がお分りになつたであらうと思ひます、

(次號完結)



雜俎

素人料理

華族女學校教師　岩間芳松

鶏卵の營養に富むは牛乳と仝じ之を料理するに其調理法に依りて消化の良否に大なる關係があります故に注意せねばなりませぬ。

▲鶏卵豆腐椀盛　鶏卵を深き丼等へ割よく攪き交ぜたる中へ冷したる二番の鰹節汁或は血合上皮等より煮出し取たる汁を割入れ煮切をよくかへ醤油と鹽にて味をつけ平なる丼　或は角形の器物へ入れ鍋に湯を沸騰させたるうへに(人數に應じ)蒸籠或は味噌漉等の中に入れのせて鍋蓋をして火が威を弱めにして暫時經て蓋を取除き鶏卵の黄色になりたれば蓋を少し除け其間より湯氣を外へふかして蒸あげると豆腐の如くなるなり蒸あがりかげんを見るには箸を一本持て鶏卵の眞中を押て箸の間より汁の出ぬを度とし蒸器を外へおろし金杓子にて適宜にすくい椀盛へ入れ其うへに淺草海苔の煎りたるを小さく切てのせ青みを見斗ひ用ひ椀汁は醤油味或は煮出し汁へ煮切を少しかへ醤油味に仕立たる中へ葛を水にて解きたるを流し入れよく煉り薄葛汁に仕立生姜の卸汁を絞り入ると味よきものなり

▲注意鶏卵の用ひ方　凡三人前の椀盛を仕立るには三個の鶏卵を深き器物へ割よく攪交ぜ此分量の一割半程鰹節汁をかへ交ぜ合せ盃　或は小皿等へ入れ蒸上げて柔らかさを心見て若し堅き時は鰹節汁を増入れ柔らか過ぎたる時は別の器物へ鶏卵を割攪交ぜて入るなり

▲煮切の心得　日本料理を美味にするには是非とも凡二合の味淋を深き鍋に入れ白砂糖を盃に貳はいほどかへ小皿を入れ(ふきこぼれぬため入れるなり)弱き火で壹合四五勺に煮つめ置之を料理に用ゆるなり。

▲煮肴の心得　煮肴と云へばたれにてもわけなしにてきる煮物と素人方はお心得てあるけれども本職になると其魚の鮮と不鮮とに依り汁かげんは六ッケ敷もの故一寸記し置升、煮肴の魚は鯛、鰈、鮃、鱚、鯔、鯵、鯖、其他何魚にても極鮮魚なれば酒六分味淋四分の割に用ひ甘味を少なく致し普通の魚なれば甘味を少々多くにして適宜の分量となし敷笊（笊物屋にあり）若しなき時は竹の皮の眞中をひきさきて魚の下に敷（丸魚切魚とも鍋につかぬため）魚を平にのせ小なる蓋を落し入れて暫らく此汁で煮て醬油を度々にかへ煮あがり際に至りては魚に適當する汁を煮つめるのが肝要で是は滋養分が汁に散して居るのですから之より皿へ移し入れ魚の上に生姜の細く切りたるか御汁を絞り入れて食膳に供するなり。

▲茄子の鴫燒　茄子は成たけ皮を薄く剝ぎ小なるは立二ッ大なるは小口より三ッ切より四ッ切にして切口の小なるを手前となし眞中へ中切を置先きに大切と順々に三個並べ串を貳本さし込（鐵火串）胡麻の油を鍋へ入れ火にかけ煙のたちたればおろして白紙をよくもみて油を茄子の兩面になすり適度に火にかけ片面燒たれば又油を薄くぬりて下面燒たれば薄くぬりて又煎り柔らかくなりたれば煉り味噌へ鷄卵をよく攪き交ぜたるを少し入れ交ぜ合せ片面へぬりこんがりと味噌のかわきたるを度として器物へ盛て供するなり此鷄卵を交ぜるのわ味が美になり盛り重ねても上の口切につかぬなり

▲味噌の拵へ方　白、赤、甘味噌何れを用ひるも其人々の好に應じて能く摺りて裏漉しにかけ鍋に味淋を少し入れ砂糖を適ぎに加へ沸騰したる中へ味噌を入れ適當の甘味となして煉りて冷し置き入用丈け見積りて鷄卵を少々加へ柚子を御入れ用ゆると宜敷味噌の堅きときは水にてもさし入柔らかさを適度として用ゆるのですが以上は料理としての仕用法なれども雜菜用には肴を煮るにも砂糖を甘味に用ひ味噌を煉るにも湯と砂糖にて煉り鷄卵は用ひなくも調理をなすなり

夏の臺所

春江女史

▲茄子の五品料理

茄子の唐煮と云ふは中通りの茄子を皮のまゝ頭より庖丁目をたてに細かに入れ、酒にて一旦煎てぼし、味淋と醤油にて旨煮することなり。また甘煮とは鹽押の茄子を能く鹽を煮出し、砂糖ばかりにて煮るなり。小茄子の丸煮は少さき茄子のへたを去り、丸のまゝ茹てゝ惡を拔き味淋と醤油にてからい加減とし、鰹ぶしを入れ、汁無きように煮あげるなり。油いためは鍋に胡麻油を引き、小茄子を丸のまゝいため、後味淋、醤油にて煮る胡麻よごしは茄子の皮をむき湯にゆてゝ惡汁を去り、竪に四片五片に引き裂き、擂鉢の中に調製置きたる胡麻と煮汁の中に浸して食わえるなり。茄子のいりたしは茄子を切るか、又は小茄子なれば全のまゝ、胡麻油にて素揚を爲し、大根擦を添え生醤油をかけて食す、

▲鰻の八幡燒と茶碗むし

鰻の蒲燒は素人の家にてはなかく面倒なれば、略して記さず八幡燒と云ふ方法は、此魚を常の如く割きて中ぼねを去り、牛蒡を能き程に切りて鰻を卷き付け、まきとめは牛蒡にはさみ、横より串をさしてつけ燒きにするなり。又鰻と鰌とは、夏向茶碗蒸の材料とするに適するものなれど、兎角泥臭き嫌ひあり、これを避けんには、茶碗に入るゝ前に葛粉をまぶり底の方へ沈ませ置く時は、一種風味ある茶碗蒸が出來るなり。茶碗蒸の種には百合、しひたけ、青味ととり合せあるべし、

▲鯨じる

鯨汁も又此頃の食品なり、無論白肉(脂肉なり)の白味噌汁なるが、くじらを薄く切りざつと茹でゝ糠湯にてさらして濃脂を去り、後味噌汁に入るべし、さなき時は脂濃くして食するに堪えざることあり、一旦酒にてさつと煮、其酒をすてゝ味噌しるとするもあり、孰れもつまはさゝがき牛蒡、吸口は燒唐からし胡椒など面白し。

▲鮎のフライ(西洋もどき)

腹を割きて腸を去り能く洗ひ拭巾にて水氣を取り、よ

く溶したる玉子に浸し麵麭粉を塗り別に平鍋にバターを溶かし右の鮎を入れて黄色を帶びるまで打返し〳〵燒き、ソースを懸けて出すなり、胡椒食鹽を用意すべし

▲海老のフライ

海老を茹て皮を去り細かく刻み、胡椒食鹽麵麭粉に牛酪を加へこねまぜて圓く薄く又は細長く好に應じて團子に拵へ、玉子を溶したるものに浸し更に麵麭粉に塗らして鍋の中にて溶したる牛酪にて揚げるなり、前の如くソースを懸けて出すなり

▲葛の燒餅

吉野葛一舛水一舛砂糖一斤の割にて先づ葛と砂糖とを器に入れ水を漸々に入れ手もて能く混ぜるなり、(必ず一度に水を入る可らず粒になりて混らぬものなり)斯くしてこねたるものを蜜柑大に圓め平たくなし、更らに胡麻の油を塗きたる鍋をジリ〳〵やき前への團子を裏表より打返し〳〵燒くなり

▲鯛麵

鯛を三枚に卸し兩身の皮を去り五分角位に切り鹽にまめし後ち布巾にて能く水氣を取り小串に差して胡麻の油を塗りながら燒き串より身を拔き取りよく茹たる素麵に、木くらげ、薄燒玉子及び三栗とを合し鰹煮茹に入れて一沸き煮立るなり

▲鯛の味噌漬燒

鯛を常の如く調理し身を程合に切り味噌をすりて味淋醬油にて解め右の肉を一夜其中に埋み後取出して味噌を拂はずして鐵架に乘せ身の崩れぬやうにして裏表より燒くなり

▲細魚鱒の鹽燒

是は骨を拔きたるも拔かざるもよし、鹽を可成濃く懸け小串に差して裏表より不等のなきやうに燒くなり

▲蜆の汁

此は赤味噌仕立なり、すり味噌を小鉢に取り水を注ぎて指もて能く摑みて溶し水嚢にて漉し鍋に移して殼蜆を入れ蜆の口を開くるまで煎るなり、椀に盛り出すとき立てたる芥子を少許加へて出すべし

▲鮎の酢味噌あへ

鮎を能く洗ひ頭と臓とを取り去り斜にヅク〳〵に切り酢にすり味噌を擬み込み右の鮎を入れ葱を刻みて一緒に拌へるなり、又臓は鹽につけ置かば一夜にしてウルカとなる可し是も好きものなり

▲泥鰌汁

通常泥鰌汁の拵やうは先味噌をよき加減に摺り水或は湯にてのばし置き、扨て泥鰌は折々水をかへ充分泥を吐せ置きたるを笊に揚げ（若し死したるものあれば之を除くべし殊に夏季抔は生きたるものゝみを遣べし）水をきりて丼様の器に移し酒を少し入れて泥鰌を傷め（酒を入るゝ時は擂鉢或は鍋に入れて上より蓋を為して後酒を入るべし飛出るの患ひあれば注意すべし）或は鹽にて傷め、味噌汁の煮立ちたるときに此泥鰌を入れ鍋よく煮て食するなり、又玆に一種の法あり、其仕方は泥鰌を前の如く充分泥を吐かせたるを笊にあげ水をきり別の器に移し此に鶏卵を割りよくかきたてて入る（卵の量は泥鰌の多少に依り見計ふべしはれ）其卵を呑みて弱るとき汁に入れ煮るなり、さすれば泥鰌の腹中に卵入りて味ひ甚だ佳なり

▲薯蕷汁（一名とろゝじる）

薯蕷を生のまゝ擦り置き、別に味噌汁をよく煮立てゝ冷し置き、すりたるいもをこれにて展し遣ふなり青苔をもみて入るゝを風味とす

輕便野菜スープ　　香江

▲球菜スープ

玉菜（キチペチ）の程宜き處を取りて細かに刻み、他に玉葱の薄くはぎたるもの（若し求めらるゝならば芹を二三葉入れらるゝも面白し）と共に、水に十分容れなる鍋に鹽一匙ばかりを加へて煮、菜の色の透き通る様になりたらば、湯をこぼして水嚢に掛け、漉されたるものには更に牛乳五合（若し嫌なれば鶏卵五個）程加へ、パタ四匙温飩粉二匙と合せて、鶏肉ソップ交ぜ、必用の時入れ加減に分量して、更に鹽一匙と胡椒少許を加へて煮るべし。玉菜の味合とパタを混和して餘程結構なるスープとなる。若し只の玉菜に代るに赤キャベヂを

以てすればスープの色赤くなりて、美しきものなり。實には玉菜ならば矢張胡蘿蔔がよかるべく、赤キヤベチには、胡瓜など妙ならん。

▲胡蘿蔔スープ

中位の胡蘿蔔（西洋流に朝鮮胡蘿蔔を用へば一段妙なり）を細かに刻み、三葉、防風、少しと共に文火にて一時間程熟煮て、バタ二匙溫飩粉三匙を加へ、スリ鉢にて能く摺り、牛乳五合（鶏卵代用苦しからず）程加へ、再び火に掛けて少しどろ〳〵になる迄煮るべし。

▲三つ葉スープ

是も風味の能きスープなり、先づ三ツ葉の莖のみ切りて善く煮つめ、摺鉢にて摺り、絹篩に掛くる事、凡て前に同じく、漉しあげたるものは更に五合程の牛乳にて暖ため、バタ三匙溫飩粉四匙（溫飩粉は入るゝも入れざるもよし淡薄なるを望まんには入れざる方勝れり）を加へ、膳に上す時鹽と胡椒を適宜に加へて用ふべし、牛乳やバタが嫌ひと云ふ人々は、此れ等のものを一切抜きにし唯三葉のみのズープに、河魚の淡薄なるものを見繕ひ、鹽の代りに醤油・胡椒の代りに山椒粉をふり味淋を一寸たらして用いなば、上等の日本料理となり御客などに出して尤とも妙なるべし。

▲菠薐草スープ

料理の妙は單に口に善きのみならず、目にも亦美くしかるべきを要するものとすれば、菠薐草のスープの如きは其最上に位すべきものならん、色は青くして一種菠薐草の風味を存し、バタと牛乳を除けば、三葉と同じく日本料理として最上等なり、其調理方は先づ竹葉の無き菠薐草十二三本を取り、能く洗い細かに刻み、他に煮鍋を火に掛けて能く暖め置き、刻たる菠薐草は十分水を切りて此の鍋に入れ、嚴重に蓋をして五分間程蒸すべし、蒸し終らば蓋を取り水をしたみて、摺鉢に移し能く摺りて、牛乳五合（鶏卵代用苦しからず（程加へ、再び文火の上にかけて次でバタ二匙溫飩二匙程を入れ例の鶏肉ソップに割合せ玉葱か何かの粉かく刻たるを實として用ふべし。凡て西洋料理にては、スープの實と云ふ事は殆んど無き事なれども、日本人は箸もて吸

ふ事故何か箸にかゝるものなければ氣が濟まぬ樣な心地するものなり、然れば凡てのスープは其の時々何かあり合せたるものを見繕うてアッサリ浮ばするをよしとす。但し豆腐や南瓜、薩摩芋の類は論外の事と知るべし

▲馬鈴薯スープ

キメのよき芋三つ程取り、皮を剝ぎ薄く切りて一應湯かき、更に煮立てたる湯の中に入れ、三葉か芹其の他何にても一寸香味のあるものを合せ、薯の軟かくなるまで煮るべし。而して十分軟らかくなりたる時取り出して篩に掛け、若し芹三つ葉等の莖剛くして漉す能はざるものあらば、只其汁を絞るのみにても可なり、兎に角能く交せ合せ、牛乳四合を加へて、再び火に掛更にバタ二匙温飩粉二匙を加へ、能く煮へたる時を計り、食鹽を適宜に入れて用ふべし。但し此のスープは始めに湯がく時よく湯がゝざれば、スープがエゴくなることあり、縱令又エゴくならざるにせよ少しヒッコクして好かぬ人もあるべけれど、滋養分を含める事に於ては恐らくは第一ならん。

▲かぶらスープ

先づバタ一匙を鍋に布きて、薄く剝たる玉葱一つ同じく胡蘿蔔二ッ三ッを入れて、玉葱の黄色になる迄焼き、更に蕪又は大根の餘まり質の入り過ぎぬものを細く刻みて入れ、水は只其蕪、大根より出づるもののみにして能く炙るべし。斯くして稍廿分程も立ちし時牛乳二三合をれ入、暫らくして又バタ一匙程加へ、温飩粉も若し好まば二匙程入れて、十分煮詰め、後凡べてを擂鉢に移して能く擂るべし、而して擂りたるものをば例の如く絹篩にて漉し、鹽と胡椒を加へて食ふべく、黄菊（一寸湯をくゞらせしもの）を浮ばすれば尚面白からん

▲とまとうスープ

赤茄子は三杯酢にしてさへ、婦人小兒等は兎角厭やがるもの故、其のスープは或は如何かとも思はるれど、一度味を覺へたるものは、口が臭くなる程食はざれば止まざる程のもの故次手に一寸書き記すべし。乃ち赤茄子の能く熟せる物を四ッに水三合に割合にてつゝき潰

し、玉葱の薄くきりたるもの一二片三ッ葉か芹二三葉を交へ、バタ二匙程加へて煮立つまで火に掛け置き、煮立ちたれば絹篩にて漉して、鹽なり醤油なり適宜に加味し、程宜き實（馬鈴薯などよからん）を見繕いて用うべし。燒パンの菜には尤も適當なり。

錦魚の飼育法

TK生

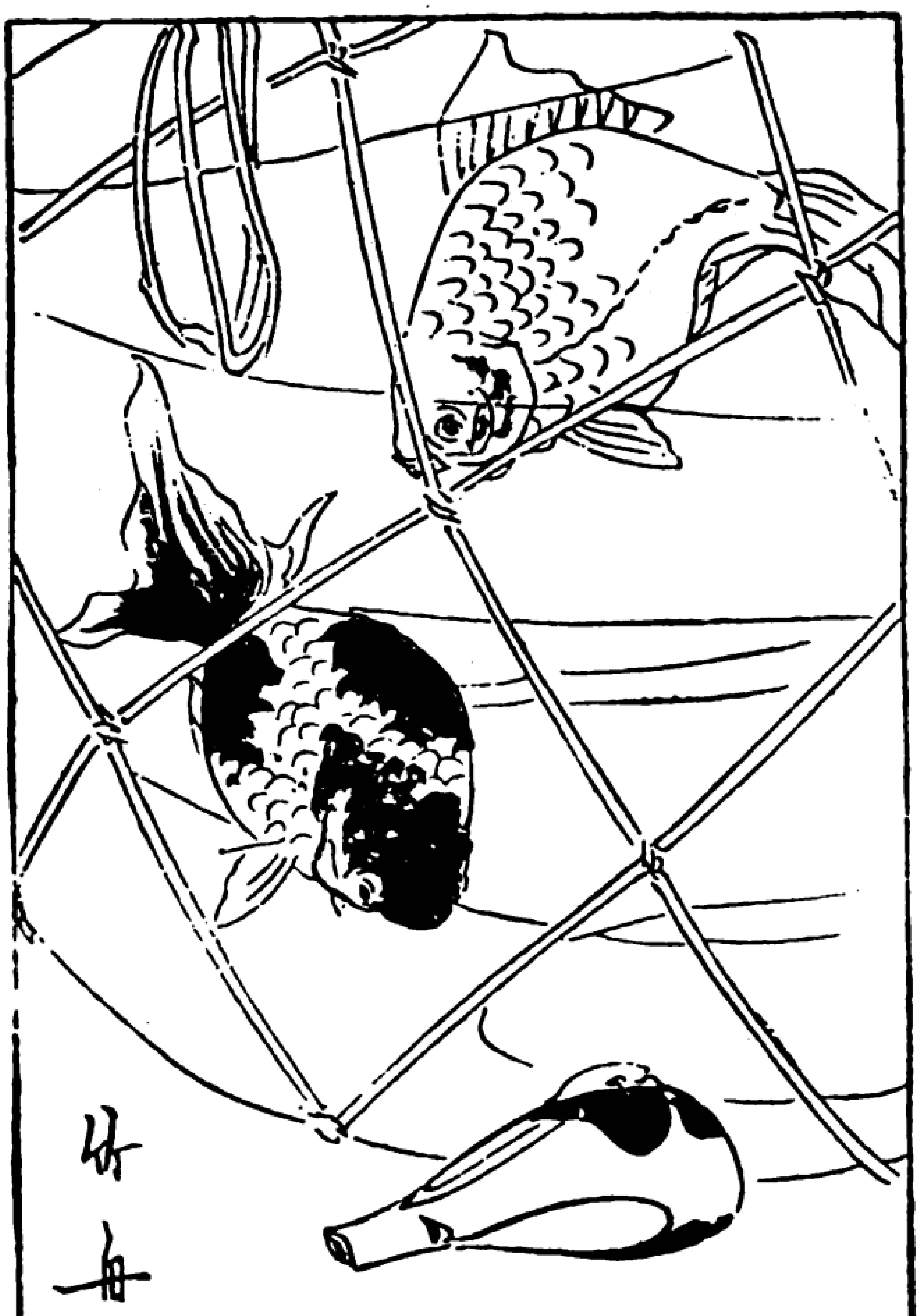
池の汀にあやめ燕子花のふぢ紫、それは田舎の庭の眺め、漆喰ひ塗の泉水、又は箱舟を椽端にしつらへて浮藻をくゝる紅の尾の潑剌たるを見るは都人士の賞翫、玻璃の器に溶金、流銀を放ちて風塵の眼をたのしましむるは、盆栽、盆景の奇巧なるにもまして風情のあるものなり。殊に紅塵萬丈の都門にありて半邊三尺の小天地浮世の塵を忘れしむるものはこの美術的細鱗の眺めにぞあるべし。これより炎暑の鬱氣さましとして茲に金魚の飼養法をものしぬ消夏の一端ともならば幸甚

▲錦魚の季節　春の小鳥飼、夏の錦魚、彼れは煩はしけれど、これは約やかなり。もとより錦魚は水物ゆゑ暑き時分に愛翫せらるゝはその筈なるが、季節をいへば初夏の候より秋までなり、されど走りを尊ぶ人情よりして毎年四五月頃ともなれば、いづれも此魚の出始めにて氷水屋の繁昌と其の軌を一にするの例なり。

まづ大要なる飼養法の一斑をいへば春の土用前より雌魚を分けて餌を十分に與へ日中には差し水、夕方は二割方の減水をなし八十八夜まで雨障子を覆ひ十分に精分を強くして將さに子を産まんとする際に他の泉水に移し、松藻を小石に結びつけて容れ、雌雄兩方を一所に入るなり、扨て子を產み終れば親は他の器にうつし泉水には雨覆をなし、夜は暖め、日中は之を除きて日光を導き入るやうにするなり、扨て一週間も經ば卵は孵化して少さき剃毛のやうなる子を發生するなり、次で四五日も經過せば鷄卵の黄味の煮たるを水に溶かして泉水中に打込みその翌日水換をなして又他の泉水を洗ひ雛子を松藻と共に移し斯くして又餌を與ふなり。この

如くする事前後及び五回にして稍〻魚の形を具ふるに至る。尤もこれは雛子仕立の本式にていづれも專門飼育者の取る手數なりと知るべし、かくて雛子の善惡を撰み拔き、良子は凡そ一疊敷ほどの泉水に三四十匹の割合にて水の深さ二三寸とし、日中に差水し、夕方に二割の鹹水をなすなり。又雛子の良否を撰拔くには嗽水茶椀に雛子を水共にすくひわけて小さき貝杓子にて一つゝすくひ出すなり

▲錦魚の容器　金魚の飼場所は四方に障害なく、特に日當りと風透しの好き東南に面したる場所を選ぶべし人家稠密にして庭樹の狹き場所にては物干の上など最も適當ならん、但し屋根又は塀などありて風透しと日當り共に惡しき場所にても一日六五時間づゝ日の當る處ろにあらはまづよし、但し木の下又は雨露のかゝる處は堅く忌むべし、特に注意すべきは日光の反射を避くることなり、反射は魚に害あるものなれば是れ最も注意すべし、扨又その容器は漆喰塗の泉水、又は箱舟をよしとす、但し瀬戸物は禁物たるべしその大小は一定せずと雖も深さは通例三尺四方の器にて四五寸ざし底を平坦にするを好しとす又これに放つべき魚の數は三四尺四方のものならば當歳子にて十尾以下、二歳子ならば六尾、三歳子にて四尾



位、容器の大小により大概この位の割合と知るべし。容器はなるべく青苔のつきたるを好しとすれば、新らしきものならば十日以上水を容れ置き後ちその水を取りかへて魚を入るべし、容器の掃除する時苔を落ゝさるやうざつと洗ふ位にすべし。

▲錦魚の種類　は蘭鑄、獅子頭、和金の三種を重なるものとしてその他出目錦、琉錦等の種あれども、要するに右の三種の變化したるものに外ならず、去乍ら各種とも躰に現はれたる斑、即ち模樣に至つては種々樣々と變化ありて、高尙なるもあり、又下品なるもあるが、蘭鑄は脊鰭を有せず、全身黄金色を帶び、姿頗る愛らしきものなり、獅子頭と稱するは頭部に透明なる瘤を冠り其樣恰も獅子頭を冠りたるが如し、其の躰は大きく尾は房のやうに垂れて、如何にも華麗なり。亦和金と稱するは普通い魚にて、本邦固有の産なるが金魚として美術的の價値なく、隨つて其品位も下等なれど。その販路は極めて廣し、さて如何なる種類にても錦魚は總じて上方の斑白となりて脊より下方に模樣のあるを貴ぶの例なるが、今尤も高尙なりといふ模樣の一例を擧げて見れば、口と目が紅にて鼻髭と兩の頰が奴の髭のやうに赤くなり、尾と六枚の鰭とが皆赤く其他の所が金色(尤もこれは蘭鑄に就ていふ若し和金ならば、白色なり)ならば金魚の模樣として本式のものなり、勿論此の如き注文通りの斑の出づるといふはまづ稀有なれどまづ以上の模樣を標準としていろ〳〵と美くしき斑の出づるに隨がひ等級を定むる故、千差萬別、同一の模樣の出づるは稀れなりと知るべし、之に反して頭部が赤く其他の部分が白斑ならば下品として鑑賞家の撰めには入らずといふ、又全身に模樣なく總躰白色なる魚は俗に之を白子と稱して鑑賞されざるなり。

▲水替法　錦魚を養ふには水替の手數と面倒を見ざるべからず、水はすべて井水よりも川水をよしとす、若し井水ならば半日以上汲み置きのものに限る、又容器の水替は晴天の日朝八時までに終るべく、雨天若しくは曇天の日は行ふべからず、又水替は四期によりてその度數に繁閑ある事大凡左の如し

四月　十日間一回
五六月　一週一回
七八月　一週二回
九、十、十一月　十日間一回
十二月より翌年三月までは水替の必要なし

但し冬季の候若し容器に水減じたる時は晴天の日に注水すべく三月に至れば下旬より冬圍ひを取除けたる時に一回行ふべし。但し飼養家によりては六月梅雨中は換水せざる向もありそれ錦魚は雨露を忌ふものなればなりされど夏日は水の腐敗を來し易き時なれば以上の例によりて行ふをよしとす

▲餌物　錦魚の餌物は年中毎日休みなく與ふるものなるが、四月より十一月までは成べく早朝より午前十一時頃までに食ひ盡すやうにし、若し殘りたる時は取捨つるなり。又十二月より春の彼岸までは正午十二時頃の溫暖なる時を見計らひて餌を與ふ、扨て其の餌物は「みじんこ」孑孑、絲みゝづを普通とす、尤も是等のものを與ふるは中々手數を要するのみならず、寒中にて容易に得難き時は、粉碎せる魚肉、削りたる鰹節、煮たる素麵、麥粉の湯出たるを與ふるもよし、但し此の場合には三四日間に水を代ふべし、餌の分量は當歳なれば其頭の大さ程、二歳以上は其頭の半分位を一日の試とすべし

▲産卵　金魚の産卵期は前にもいへる如く通例四月下旬より五月までの間なるが、産卵の二三日前より魚には容器の縁を追懸け廻るの常なれば此の時松藻を入れて遣るべし、産卵の時間は朝日の昇る頃より午後二時頃の間なればその後は親魚を他の容器に移し、二三日間餌を與ふべからず、扨又その卵は晴天ならば一週間位にして孵化すべく、更らに五六日を過ぎて後藻を取り除け湯出たる鷄卵の黄身を水にて解かし、三四日間毎日之を與ふべし、その後は「みじんこ」を與へ、發生後四十日間を過ぐれば孑孑、いと蚯蚓を與へてよし。

▲錦魚の直段　その模樣と發育の程度によりて直段に高下の定まるものなるが、まづ蘭鑄にて彩色模樣とも申分なきもの二歳子一尾二十五錢、三歳子にて四十錢

位なり、獅子頭は少し下りて十尾二圓より二圓五六十錢の相塲なり、されど緣日夜見世にて小供の翫具として賣るものはいづれも屑物にて百尾二三十錢か四五十錢内外のものなればその中に逸品はあるべき筈なし、和金又は琉金と稱するものゝ中には三歳子百尾にて三圓より十圓、四歳子ならば二十圓より三十圓位に及ぶものあれど是等はいづれも胴の搾せたるものにて翫賞の價なし、されば美術として賞翫せんとならば矢張り蘭鑄、獅子頭の中なるべし。

鴉片の害毒（口繪參照）

鴉片は支那社會上の一大患害なり。鴉片が衛生上、風教上、將た經濟上に及ぼす害毒の大なるは、玆に喋々を要せざるが、同品は元と印度の產物にして、數百年前支那へ輸入され、支那人は秘密に之を喫しつゝありしが、清朝の中世に至り禁令稍く弛みしが當時英人の手によりて輸入さるゝもの頗る多額に上りしかば當時の兩廣總督林則徐は國患の大なるものとなし、悉く是を燒却たるより英人怒ッて廣東に寇し遂に有名なる鴉片戰爭となり。清國は爲めに莫大なる償金を出して事濟となり爾來鴉片の輸入を公許するに至れり。

鴉片は罌粟の種子にして是を精製したるもの藥品として毒藥の一種なり。支那人は之を煙塊と稱し、アルコールに燃燒して之を喫す、勿論鴉片には精品、粗品の差等非常にしてその精良品に至つては頗る高價にして普通一般の人が妄りに費消する事能はず、それ故多くの喫するものは煙土と稱する粗製品を買求め、自分に之を精製して喫するなり、而してその製造方法は喫者に取りては一の樂とするものなり、彼の官吏などの宮中に出仕して事務多忙の際、悠々と喫する暇なき時、特に製せし煙塊を懐ろにして行き、之を食して一時の快を探るといふ。

北京若しくは天津の如き大都會に住留せし事ある人は必ず夜半すぎに至り、四隣寂として人聲の聞へざる頃ろ、ボウ〳〵と呼びわるく聲のあるを聽くべし、是

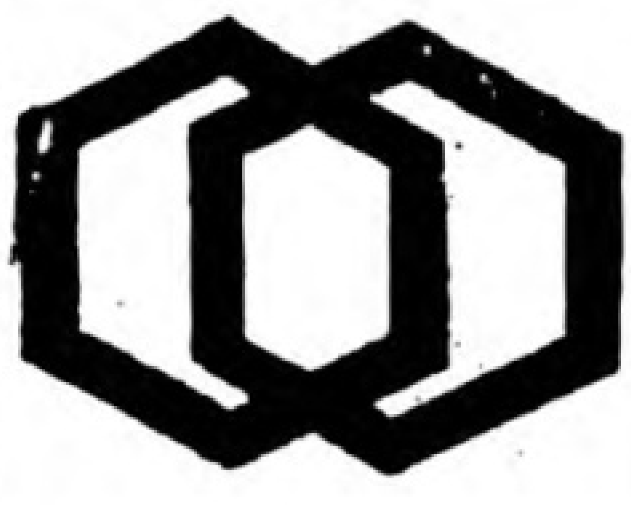
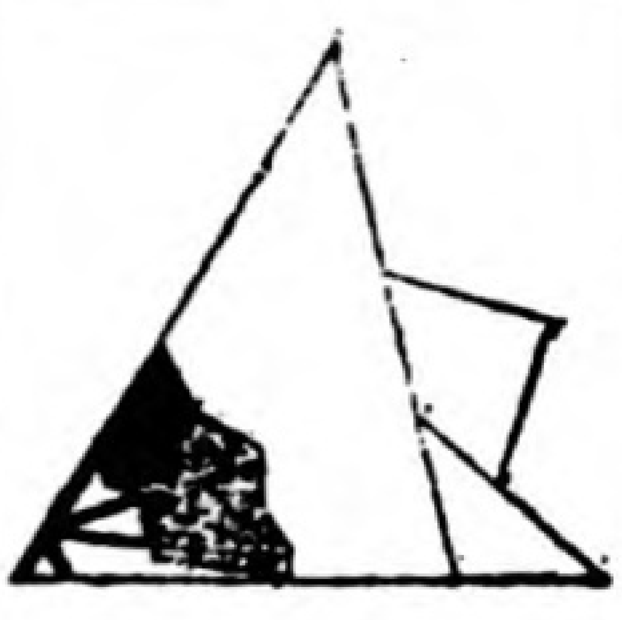
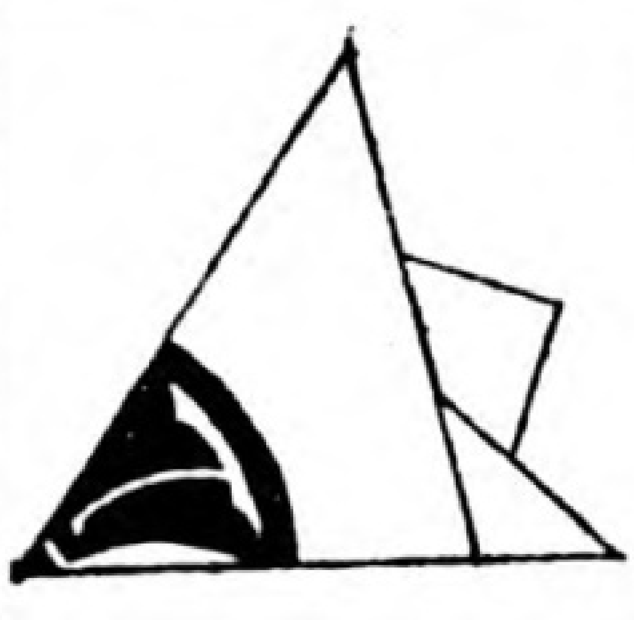
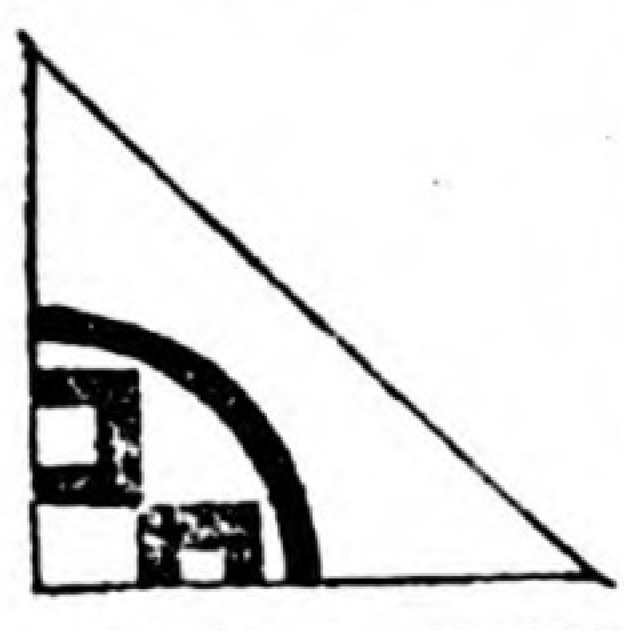
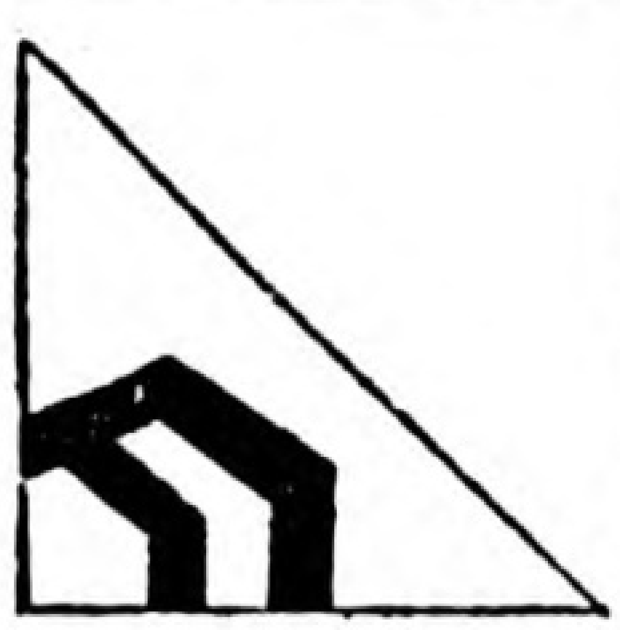
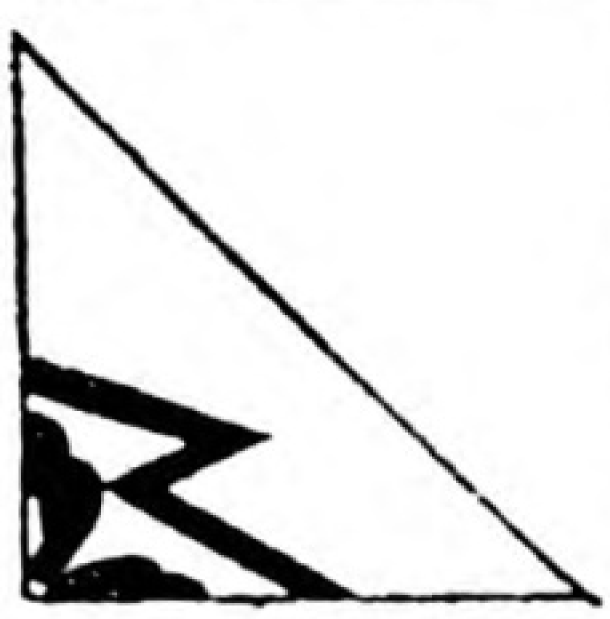
は北京人の好んで食ふ處ろの點心の一なり、何の爲めに斯く夜半過ぎまでこの點心を賣りあるくやといふに這は主として鴉片を喫する人の用に供するなりと。鴉片は一名を阿芙蓉といふ、俗に大煙と稱す、鴉片は元と男子の嗜好なれども稀れには女子も又之を喫す、殊に鴉片用の器具は內地至る處ろの市中にて之を販賣し、又家々にて來客ありし時などは之を馳走として恰も我國の煙草を薦むるごとくまづ一服といふ鹽梅にて之を喫せしむるなり而して處女が嫁入の際に阿片道具一式を其の嫁篋の中に納め置くの風習なりといふ。

且又北京にては煙館と稱して阿片を喫する爲めに設けられたる茶亭の如きところあり。そこは恰も我國の酒飲友達。碁打友達といふ如き有樣にて阿片喫煙者の仲間煙友を結び、相伴ふて煙館に出入するなりと。

阿片の害毒は一として足らずと雖も、まづ喫煙者が第一に犯さるゝ處ろは胃と腸となり故に之を盛んに喫するものは知らず識ずの間に食欲を減じ、來るなり、茲に於て彼等はなるべく美味にして且つ滋養分の多き食物を喫せざるを得ざるなり、是と同時に心身次第に倦怠を來し、何事を成すにも懶くなりて日常の業務手につかざるに至る、而かも一旦喫煙の習慣を生せし上は到底之を止むる事能はず遂には家產を蕩盡するに至る彼等の之を喫するは大抵夜の十時頃よりその準備にかゝり午前三時頃に至るまで之を繼續し、後寢に就く也。

この如く鴉片が一般に行はれてその爲め產を破るもの少からざる事なれば、世の道德書には戒煙の主旨を以て記述したるもの少からず、彼國にては墮胎藥の廣告の多きと同じく斷癮、戒煙丸など稱する藥劑は至る所ろの藥舖にて之を賣れり、この如く戒煙の主旨が支那人の良心の入るにも拘らず多年の習弊は容易に之を戒しむる能はざるのみならず今日にては鴉片が政府收入の重なる部分を占め居るの有樣なれば、國家の財政上よりするも容易に嚴禁は出來ざるならんといふ。

近き隣人は遠方にある兄弟に勝る

			
三つ扇	三ついてふ	丸に角木瓜	丸につなぎ四目
			
花びし	重ね亀甲	松川びし	けん花びし
			
三つ折 三つ扇	三つ折 いてふ	二つ折 木瓜	きり方 二つ折
			
二つ折 花びし	二つ折 亀甲	三つ折 松皮	けんびし 二つ折

才媛詞藻

懸賞披露

文學士　大町桂月先生選評

（天）旅行　備前片上　黒の江　すみれ

去年の冬いまはと見えし病の君と
海路はるかに神詣する

評、語淺くして、意長し。（桂月）

記者曰、住所姓名明記の上至急御通知あれ

（地）同　尾張國知多郡大野町　鈴木とみゑ

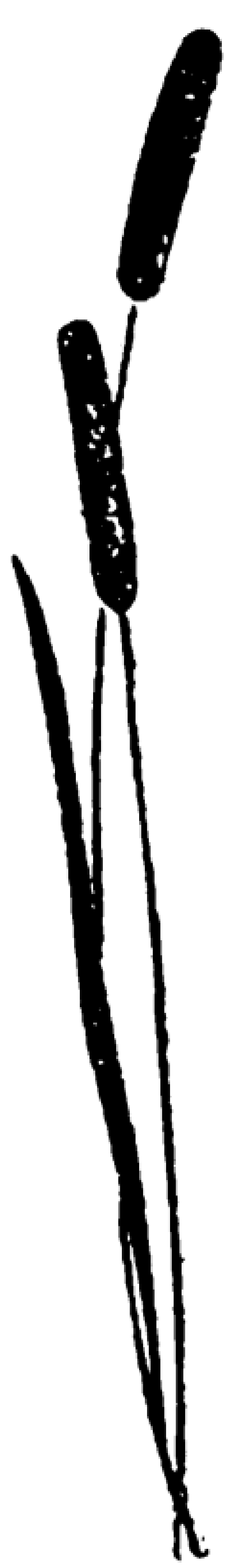
故里もかりのやどりとなりにけり
父母のみ聲のさながらにして

評、無量の感慨。（桂月）

（人）同　磐城國雙葉郡木戸村　内山房子

順禮の子とかたらへは國同じ
初秋風の白河のせき

評、多少の情味。（桂月）



（秀逸）

◉旅行、納涼、瀧

箭星みねの榊原に隠らひて那智の深山はたゞ瀧の音　横濱　長谷川さく子

評、爽涼の氣、言外にあふる。（桂月）

ゐすよりは旅せむものかたゞひとり戀しき母のひざをはなれて　和歌山　香川丕子

評、少女の情、掬すべし。（桂月）

はゝきつくる我手そゞろの別れ哉一夜やどりの家なつかしき　香川　有信露子

評、晩發の情、言ひ得て切也。（桂月）

ほの〳〵とうす紫にあけ初めぬ旅行く我子の門出さちあれ　岐阜　佐藤そふ子

評、穩雅、愛すべし。（桂月）

行暮れて椰子の木陰に宿かれば獅子月に吼ゆ亞弗利加の旅　大阪　藤井とみ子

評、材を採る、清新也。（桂月）

恥しくわが脊よ妹とよびあひて行手いそがぬ旅ぞたのしき　京都　加藤茨子

道すから乳母にかたれる秘め事の胸さわがすや杜の涼風　河内　伊藤久爾子

みだれとぶしぶきに給の貝うちときて友は晝にしぬ深山路の瀧　弘前　今ちか子

明けやすき夏の夜早もふけぬれどとざすは惜しき月のかげ哉

暫くは浮世を外のこゝちしぬつきしろき夜風きよき家　和歌山　北坂米子

渋團扇かたみにあふぐ破れ椽の柳の下の人むつましき　京都　四辻清子

涼しさに君の門まで來つる哉道一里半夏の夜の月　下總　三田よしゑ

漕ぎ出し海士か手ふねのかすみえて月影すゝしむ庫の海原　和歌山　宮井時子

物學ぶ我子のかざし扇をばながめならぞ暑さ忘るゝ　河内　三島ふく

糸竹のおとも澂せたるすゞみ舟棹さすかては汗にぬれつゝ　志木　三上常子

風かよふ木陰ばかりに長居して道はかどらぬ夏の初旅　備前　清水たか

みちすからすゞみの友と繪扇をくらべてみたり月のあかりに　埼玉　荒井信子

天そゝりたつ岩が根に五千丈地軸折れよと落つる大瀧　淺草　池田興英子

信州　小林つれ子

夕風に簾にかれて入りにけりすゞしさ餘る川そひの宿 尾張 岡瀬かつ

それしくもあひやどりする今宵哉風は兩袖に月はうてなに 長野 西澤とく子

かぜかをる池の中島わかいほは蓮の花さく池の中島 信濃 竹鼻たる子

筆とりて薄絹のへて年わかき繪師ほゝ笑めり瀧の下庵 河内 櫻井喜子

天つ神あま下ります道ならん雲よりおつる瀧の一すぢ 本郷 川添ひも子

うれしさはなかばみだれて今更にねむりかねたる初旅の宿 近江 眞島菱枝

母上のたまひし衣なつかしきふるさといでし長旅の空 房州 小野照一

いくそたびかみなる音とおもひけむ瀧のほとりのやどのねざめに 島根 まつなみ

夕月のかげをうつして結ぶ手の涼しさあかぬ山の井の水 伊勢 白井きの子



佳調

⦿納涼

はてしなき青田を渡る夕風に里川つゝみなつとしもなし 弘前 今ちか子

⦿同

夕月のつゆにほのめく芒原すゞしき風もたづれてそふく 羽前 横澤はな子

⦿同

あらひ髪かせに吹かせて高殿に夏の月みる夕涼しも 河内 大矢勇尼子

⦿同

あらひ髪 堺 河盛種子

思ひ出てけふも來にけり岡のへの楢の木かげの涼しかりしを 安藝 橋立まつ子

⦿同

さす棹のしづくにやどる月かげの散るも涼しき舟のうちかな 陸前 大友かろ子

⦿同

いとの音もひくゝ聞えて涼み船暗に流るゝ火影すゞしも 和歌山 前山すみ子

⦿同

すゞみする人は歸りて月更けて夜風身にしむ五條大橋 東京 熊谷ふさ子

⦿同

池の邊を三たびめぐりて月いてゝ歸らんとすれば水雞なくなり 上野 大西雄

⦿同

立ならぶ柳のひまに家見えて夕風すゞし川づらのさと 播摩 檜谷のぶ

⦿同

たのしさよ夕がほ棚の下涼みこよひ都の友もまじりて

◎同　伊豫　入江可曉
あつさをも流しはてにし川面の船にはつゆる夏なかりけり

◎同　大阪　矢寺はぎ子
松かげの岩間をぐるいさゝ川音をきくだに凉しかりけり

◎同　大阪　木下はつ子
母上をたすけまつりておもしろく清水くみてし夏もありけり

◎同　安藝　宮島紅葉
さすさほに月もながれてみなと江の舟のうちには夏なかりけり

◎同　堺　深水鶴子
氷賣る童の姿おぼろげに河ぎりこめて夕風ぞふく

◎同　越後　坪井わか子
釣床に文見て居れば何時しかに蟬の鳴くねも遠くなりゆく

◎同　神戸　今村竹子
かはる〳〵ひるのあつさをかたりつゝ凉むまとゐに月も入りけり

◎同　茨城　渡部宿子
夕凉み興なきはなしつきぬまに月を殘して夜は明けにけり

◎同　下總　三田はや
祖母君に肩まゐらせて夕月出てしばしやすらふ柳かげかな

◎同　東京　小池たまき
そよ風に飛び行く螢追ひ追ひて思はず今背戸を訪ふかな

◎同　南品　和田きん子
富士の根の雪見がてらにこぎいづる小船凉しき田子の浦風

◎同　本所　岡地行きく
雲井よりをちくる瀧のみなかみはあまの川瀬のながれなるらむ

◎同　神戸　杉田鶴子
蚊やり火の煙なびきて父も子も背戸に月まつ夕顔のやど

◎旅行　和泉　井上きよ子
清水湧く泉の石をとめつゝも夏の旅路のはかどらぬかな

◎旅行　千葉　青木糸子
日ごと〳〵登り行手のけしきにぞたび寐の憂さも忘られにける

◎瀧　千葉　兩津梅子
木がくれにきこえ初めたるたきの音のわけ入るまゝに近くなり行く

◎同　神戸　松岡喜悠子
山里は岩間おちくる瀧つせのおときくだにも凉しかりけり

◎同　大阪　矢寺はぎ子
天の川なかるゝ末やこゝならむくも間にかゝる瀧の白糸

◎旅行　神戸　今村竹子
小田も植ゑこかひもはてゝ親里にしばしたち行く旅ぞ樂しき

◎瀧　美作　池田芳子
湖をなかにへだてゝ青葉若葉しげれるひまに瀧の糸見ゆ

◎同　備後　平山成子
おちたぎつ瀧のしぶきに木の間よりもるゝ日の影虹のたつ見ゆ

◎旅行　信州　山崎春枝子
伴もよし月もよければ今しばし宿らで越へん伊賀の山路

◎瀧　安藝　宮島紅葉
名と共にひゞきは高く聞ゆなり衣手寒き布引の瀧

◎同　伊勢　西井とら
暑をさけてしばしやすらふ山かげに秋をさゝやく瀧つ瀬の音

◎納涼　下總　湖江あい
なつ川の堤つたひてふく風は音きくだにも凉しかりける

◎旅行

旅衣かさぬる度に思ふかなすゝみゆく世の恵みふかきを　近江　眞島義枝

◎納凉

はらからの征ぶれながす堀川にわれも凉しとうちまじりつゝ　近江　眞島義枝

◎同

夕もやにつゝまれてゆく川添の柳の下ぞ凉しかりける　對馬　吉川辰子

◎旅行

母を尋づれめぐる少女と宿り合ひ衣のほころび縫ひて與へぬ　陸前　大友かろ子

◎納凉

月きよく風もすゝしき川のべにすゝみする夜は夏なかりけり　京都　筠坡女

◎同

夫は留われれは小琴を引よせてすゝむはしゐに月ものぼれり　越後　平野ことぢ

◎同

今まてのあつさはいつち行きつらむ霧かき合す瀧つぼのもと　甲斐　小川初野

◎瀧

杉木立ち重なほくらき山奥のくもよりおつるたきのとゞろき　播磨　檜谷のぶ

◎同

誰が爲にさらす衣か夏なから寒さおぼゆる布引の瀧　熊本　津留菊子

◎旅行

西にしていとゞ故山をしのぶ数思ひになやむ初旅の空　但馬　尾知山静枝

◎同

旅にして日数はあまた積れども心とけてはねられざりけり　和歌山　平田秀子

◎納凉

大磯のはまべにいでゝ風多き夏のいく夜をすゝみする哉　群馬　堀口みな

◎同

松風も秋の聲する木の下に山川すゞし夏やなかるゝ　常州　渡邊ふさ子

◎納凉

三日月の檜の葉末の影ちりて風鈴の音のいとぞすゞしき　赤間關　熊谷ふさ子

◎同

孤峰人も團扇手にして加茂川に京の月待つ夕凉みかな　大阪　西島喜美子

◎瀧

あへぎ〳〵五里のぼりたる峠茶屋谷をへだてゝ瀧白く見ゆ　和歌山　前山迪子

◎同

養老のたきのひゞきはとこしへに孝子のほまれつたふるなりけり　新潟　吉田梅子

◎旅行

いかばかり都の空を忍ぶらん八重の汐路を越えて行く君　山口　島田歌子

◎納凉

なかれあり風あるまつの下影に琴の音凉し夏の夕くれ　岩手　大竹さん

◎瀧

岩の面にみだれて落つるいく筋の行方やいづこ白糸のたき　駿河　林すぎ子

◎納凉

すみ渡る月を宿しておくる夜を知らでたゝずむ川添の里　和歌山　靜子

◎瀧

岩はしる音すさましき瀧つせに夏もくだけし心地こそすれ　新潟　和山はつ子

◎納凉

蚊は居らでつどひたのしき葡萄棚の下に今宵もすゞみ取りつゝ　埼玉　林溪花

◎同

何となく立ち去りかねつ川ぞひのすゞかぜ通ふ松の下かげ　神戸　柳田のぶ子

◎瀧

くづれおつる瀧のしぶきを肩にうけていのる翁の鈴の音高し　和歌山　宮井よし子

◎旅行　安藝　松阪梅子

たらちれの母のともしてこのなつも舞子あたりに旅なしてまし

◎納涼　安藝　松阪梅子

秋青く水みとりなる山かけはかせふかぬ日もすゝしかりけり

◎瀧　長州　今藤きん子

おひずるを枕にかへて旅僧の何夢むらん瀧狐のほとり

◎納涼　和歌山　葉山千代子

月るえてはちすの露の清けしや心して吹けおはれ涼風

◎同　伯耆　皐月さなへ

夕すゝみ浴衣の袖に露ちりて萩の葉わたる月の清けさ

◎同　芝　秋山とみ

夏山のしげみか中に涼む日はまたるゝ秋もわすれけるかな

◎同　大阪　田中しゆん

こぞの夏友と涼みし柳かげいざや誘れて昔しのばむ

◎瀧　但馬　尾知山靜枝

雲の中に瀧うつ音はきこえつつ姿はみえず霧降の瀧

◎納涼　美作　横山雪枝

捕へたるほたるを風に放ちけり涼しき橋に友と別れて

◎瀧　和歌山　香川君子

こその今日この瀧かげにすずみしをあはれ姉上いまはいづこに

◎納涼　伊豫　柴田とらよ

河風も月も心にまかせつゝ秋凉しくすゝむ夏のよ

◎納涼　松山市　藤野正代

露しげき木の下かげの夕涼暑のあつさを風にながして

◎納涼　河内　中角欧江

波風に月の砕くるなつのよの涼しさあまる淀の川舟

◎納涼　下總　甲田眞子

さゝ波の寄せつ返しつ千々にくだく月影涼し隅田の川水

◎旅行　仙臺　佐藤ふみ子

草まくらはてしも知らぬみ山路に思はぬ清水掬びけるかな

◎瀧　磐城　内山房子

岩の上にぬれ〳〵咲ける山百合の香り流るゝ大瀧の水

◎同　水戸　山方とし子

山たかみ青葉をくらき木のまよりみだれておつる瀧のさやけさ

◎納涼　大阪　田中瑜槎子

けふもまた弟つれて涼せん松風清く山羊遊ふのに

◎螢　上總　眞行寺春溪

ものゝふの露ときえにし塚のあたり螢火青くてらすあはれさ

◎蟬　須藤れん子

夕立のはれゆく森の下つゆになくれすゞしき蟬の聲かな

◎萩　靜岡　永山千代子

ふみわけてま萩手折れる少女子のほつれし髮に秋風の吹く

◎鐵道　但馬　尾知山靜枝

汽車ゆきて工夫は行きて鐵道の長き思ひに日は暮れんとす

◎猿　神戸　中村誠子

村里のともし消ゆき山の端の月冴へ渡り猿のなく

◎萩　大阪　藤井登美子

家つとに手折り歸らむすべも哉月さす野邊の萩に虫なく

◎猿　靜岡　宮内榮子

猿の遠吠え聞えて山松に懸るも悽し片われの月

甲賞

つれ／＼草

大阪　たまその

○薔薇

きのふまでつぼみなりし鉢植の薔薇、今朝見れば白と薄紅なると二ッ咲きたり。かゝりし時の白薔の乾ぬ間にとて弟は彼方に持ち行きぬ。過ぐる卅三年に御慶事のありし時、新聞の附録として配布せし　皇太子殿下　同妃殿下の御尊影、額ぶちに入れ奉りて床の間の一段高き所へ置きたるが、その前にやさしき彼の花は並べられぬ。さても美はしの花の様や姿はしの花の様や、人の眼につきたる間にさきそめて先づ置き添ひたる露に、美はしき朝日の光をうけつ。世の塵といふもの知らざる頃はやし御尊影の御飾りとなる。しかも其の花彼の植木店などに人の棄もて大鉢に咲かせたるとは異なりて、小さけれどもいと愛らし。朝と夕とに水やるほかすべ知らぬ弟の手にさきたるなれば、これや誠に自然の様とやいふべからん。それさへあるにその白き方を　皇太子殿下の御前に、薄紅なる方を　妃殿下の御前に奉りたる、如何なる心にておきたるかは知られど、これも自然を離れぬわざといたくも弟に感じたりしか。薔薇の香といふものさまで高きや。美しく咲きたるをかざしにせしが漸くしほれたれば、さまではとて机の硯の傍に取りすてたるに、僅の間にしほれはてぬ。さるに忘られぬそのなつかしき香は久しうも残りて、机にむかふ毎にまづふくいくと身邊に漂ひ來る。さてもやさしきよと其の花薄黄色に、手にふるればもろくもほろ／＼とくづるゝ迄、捨てがたなの心に硯のほとり侍らせたりし。

○蛇

倉の家根に巣かまへたる雀の朝夕はやかましくさゝえずれど、晝中はとみに耳にも入らず、さるは門通る車のやかましきに、遮ぎられてにや。一年そのあまり耳には入らぬ雀の何時頃にやありけん。倉の屋根庭の樹の枝などにおびたゞしう集まりて、いとやかましくさえずるに、さて何事にやと二階の窓より見下せば、あな恐ろし大きなる蛇の石の鉢の金魚ねらひ居しなりけり。如何にせんなど騒ぎ騒ぐうち、下女竿な持ちきて遠くよりつゝきしに、あなたへ逃げ行きしが又もどりきて椽の下へ這いりぬ。いと氣味わろくも恐し、幸に金魚はとられざりき。

單衣の袖かろく風にひるがへる頃、まづやかましき雀のなき聲きゝつくれば、こわ／＼あたり見まわして蛇もや居るとうかゞふさま、人の見ば何とかいふらん。これも臆病なる天性のさて今更に如何にすべき。

○雀

涼風を先だてゝ一しきり降り來りし夕立に、今迄庭に餌をあさり居し三羽ばかりの雀おどろきて楓の樹に避けしが又同じ様に倉の窓の屋根へさけぬ。そこは上の屋根にておほはれたれば上より雨かゝる憂はなけれど、横ぶりの事とてはげしくそこへも降りかゝりけり。されば折角さけし雀等その甲斐もなう、常のやかましきにも似ずいと靜に、小首かたぶけて居りしがやうやうはげしく降るにつれて、屋根の水流れ落つるものから、その勢に押されてあやうく倒れんとしては、あわておどろきたる様にて、

とびのく間もあらせず又もや押されてつる〳〵と一寸許りひきづられたる、こなたの窓よりのぞき居ればをかしくも又あはれに、人は皆暑さ拂ひとよろこべと我等は如何にか思ふと、まさなき思ひにふけるうち雨いつしか晴れぬ。雀はと見ればあらず、それかあらぬか倉のあなたにてさえずる聲す。

評、全篇を通じて苦のなき書き振り、これをこそ老熟の文章と申すべきか、わけて文も想も女子に似づかはしきは悦ぶべし(日東)

歸郷後友の許へ

大阪　たまその

先日はわざ〳〵停車場まで御出まし下され有がたく存候其の節は混雜の中とてしみ〴〵御話も出來ず且は嬉しさのあまり先づ何より聞こえあげんかなどまどひて去りがたきを今日のみかは休暇中はいつにても逢ひまつらるゝものをまづ早や歸り給ひて父母の君に健やかなる御顔見させ給へとやさしう仰せられし御言葉にあまへ其のまゝ御別れまゐらせしが歸宅致してよりは旅のつかれといふにもあられど何とやら筆とる事もゝのうく思の外の御不沙汰に打過ぎ申候こと幾重にも御免し下され度候やう〳〵心おちゐ候につけて郷の話も語りつくし村の話も聞きつくしては別にこれと申す樂もなく好める書物上の話學問上の話なども其の人を得ねば迂かに語り出てゝ生意氣になりしなどゝ云はれてはとさし控へそのまゝに過し居る不快さあはれ御許様ならではかゝる御物語互にうちあけ候はんこと叶はず一時も早く御目にかゝりてと思へども昔の幼なじみの誰彼日毎にとひ來るに伺ひ參らすべき暇もなくこれのみぞいと口惜しう存じ候珍らしき話申くれなば如何に嬉しからんと思ふを我が束髪をながめ髪の結ひやうのめづらしきよ教へ給はん都の髪飾りさては折からの衣服の流行など聞かせ給はれなどくる人も〳〵同じやうなる事のみ申すにはあき〳〵致し候誰よりも慕ひまゐらする君には未だ御物語も承はらぬにと思へば誠に〳〵こひしうなつかしう存上候手前よりまづ伺ふべきが當然なるに右のやうの次第にてそれさへ叶はず思ふこと果たさで無理に押へつくる心苦しさあはれと思しやり給はゞ御隙の折御越し下されたく時候柄日中はあつく候まゝ朝はやくより御出かけ遊ばし夕方御歸りなされては如何にさらば久し振りにて共に筆とるべくなど今より樂しみ居候停車場にて御目もじいたし候せつさぞや黒きが上にも黒々となりたるにおぼえすほゝえませ給ひしなるべしさあれこの黒き中にこそ面白き紫草のこもりたるなれ先はあまりの御なつかしさに暑中御迷惑の段をも顧みず御願ひ申上候御うべなひ下され候はゞいとうれしく猶何日頃にとの御通知御わづらはしたく願ひ上候

かしこ

評、難かしき文字と、虚飾の文采とを避けて、書翰文に第一の用意たる平明達意を旨とせられ、而かも一篇を通じて些の苦もなき書き振りには、感賞の外無之候(奥南)

歸省

信州上水内郡柴村字住夏木四八一番　小林つね子

我の笈を負ひ=涙の露をかたみにとゞめ=て、住ふる郷をたち出てしは、實に去年の文月にてありき。門を出づる時慈愛深き母上は、始めて他郷に遊ぶ事とて何くれとなく心つけたまひ、厳格なる父上は何時にも無き温顔もて細々と諭したまひぬ。教え誡めらるゝ處一つとして我遊學のためならざるはなく、互に御物語なしつゝ身はいつしか長野停車場のフゥ

ツトホームに入れり。此處にて送り來給ひし父君母君さては可愛き弟等と袂を分ち、花の都に出てゝよりこのかたげにや月日に關守なく、早も二た年の星霜をけみしぬ。桑はしふ咲き匂ひたる櫻の花に無情の小雨そぼふる晨、あるは清う澄み渡れる月影に雁鳴きわたるの夕、我の一としほ思ひ慕ふものは、あゝ故郷の空なりけり。今年文月のはじめ頃、試驗も事なう終し果てければ、故郷にいます父母の君に、大學の登第のそれよりも待たせたまふ此印を見せまつりたらんには、あはれいかばかり喜びたまふらん、されば一日片時も早くかへらばやと旅の用意も急ぎ整へ、一瞬千里てふ急行列車に身を投じて、明くる日の午の刻、長野〳〵の呼聲は頻りに驛夫の口より繰返さるゝ所に着きけり、身より心の先に馳せゆく儘あはたゞしく車を降れば、忽ち眼に付くは以前通ひし學びの舍、ありし昔のその儘に高く威儀を示せば、そゞろに昔の我にかへりし心地して行手の山川の喜色を湛へて迎ふるなもこよなう嬉しく、早や我村の境に着きぬ。さて我村の境には流れゆるやかにしていと清き大川あり、こゝぞ我が曾て弟を伴ひて納涼せし所――おゝなつかしの處よと岸邊に佇みてしばし此所彼所を眺め居たるに、向所の人の子なりけん七ツ八ツばかりの男兒五六人釣を垂れて餘念もなげに見えたりき。またそよ〳〵と涼風の吹きて忽ち夏を忘るゝ心地しぬるに、

　かへりきて村の川べにたゝずめば、
　　まづなつかしき涼風ぞ吹く。

など口吟さみつゝ岸邊を辿り行く程に七歳ばかりの愛くるしき小兒、萃袋を脇にして勇ましく唱歌しつゝ驅け來りたるが、我を顧みていぶかしげに立止りぬ。これなん世に又なき我愛弟にして『アラ姉さんがお歸り?』の聲は如何に嬉しき情の籠りしよ。弟に導かれて我家に近くなりければ弟は父君母君にかくと告げまゐらせんの心にや、我に先立ちて家に走り入り、又笑みを含みて出迎ひけり。程しもあらず弟の告げたるにや戀しき父君母君は下婢もろともに出で迎ひ給ひたるぞ勿躰なくも又うれしく、涙もろき性の早や熱き泪は兩の瞼をもれ出づるに遮ぶる言の葉も後や前なるを、母君は遮ぎり給ひて先づ何より健やかにてよき事ぞと仰せられぬ父君にはさすがに學びのしるしは如何にと尋ねられぬ。其しるしは云はづもかな、都の珍らしき油繪、寫眞など父君のおん目にかけ又弟に與へなどして居たりしに、母君は思ひ付たる如く奥の方へ行き給ひしが暫くして赤く熟せし林檎をあまた盆の上へのせおきつゝのたまふやう、こはそなたのいとけなき折植えけるに、去年始めて實を結びぬ、そなたの實を結ぶも程遠くもあるまじと云へさしてほゝと打笑ませ給ふに父君も又よき實を結ぶと否とは汝が心がけ一つぞかしゆめ我家の名を汚しぞと戒め給ひぬ。無邪氣なる弟は餘念もなく油繪を見つめつゝ『姉さん都の物はほんとうに此通り美しいのですか』と他愛もなく問はるゝも罪なくて中々にいぢらしかりき。あゝ此夜の我は如何ばかり樂しかりけん。其の思、其の心、とてもつたなき筆に書き盡すべくもあらず。やがて夜もふけたれば打ち臥したるが、あくる日は以前我が同じ窓の友垣たりし君達二人三人の家を訪づれん者と、立ち出づれば逢ふ人は温顔を以て迎へ過ぎる人は笑みを泛べて去る。あはれ故郷の人々はいつもながらなつかしき者よと一人二人の友許をたづれつゝやがて我家に歸りて、靜に休ろふ事十日ばかりになりけるが歸京の期も早や迫りたれば名殘はいつ盡くべうもあられど、心强くも此たのしきホームを去らでは叶はぬこそ是非なけれ。父君母君も亦强ちに止むべうもあられば、つひに首途を勵まし給ひけり、さるを弟のみぞ只管に泣き悲しみつゝ『姉さん何時お歸りになるの?』と靜げなる眼にて見上げたるには實に千万無量の思ひぞこもれるなれ。されど泣かぬ人々の心こそ中々につらからむ。

されど〳〵月日の小車はめぐり〳〵てよどみなければ、いと戀しき父君母君、いと愛らしき弟、いと懷はしき故郷を跡に見つゝ、少なからぬ送り人に暇を告げ父こん年の歸省を約してこゝに惜しき袂を分ちぬ。

評　文に味なしといへどすら〳〵と書かれたるうちに眞情こもりてゆかし（嗣賢）

乙賞

涼しき夕

神奈川縣 木六七　保田ゆづる

涼しげなる風鈴の音先づ嬉しく軒端の小簾を弄ふ風是としもなき心地よさよと思ふほどもなくてさつと一しきりふる白雨の音勇ましくうなだれし木々の葉の眠りをやさますらん、おとろ〳〵しき鳴神は今し誘ふ雲の足早み何地いにけん音かすかにもきくよしなくて遠かられど庭の木立そよふく風になびきしたゝる桐の葉より葉にこぼるゝ露の白玉は名殘涼しき夕陽の影にかゞやきて今やゆくりなき天の御恵み謝するにも似たりけり實に心行く斗りのながめ哉さても夏しらぬ涼しさよ、湯あみすませ玉ひし父君は御浴衣の袖輕げに端居近く心地よげに庭前眺め給ふ御姿の尊さよ泉水のみかさ高まりて彼處此處集へる魚のあふれ出でん斗りなるを何處よりか求め來にけん短かゝらぬ竹もて戯むる弟があどけなさよ共にもまして嬉しきは希望遙けき東の都に物學ひせさせ給ひし兄上のこたび恙なく業卒へ玉ひかざし給ふ心の錦父君母上へのこよなき家つとにして今朝歸り給ひしさへあるを風に雨に思ひ煩らひ玉ひし母君の今や長き長き船旅に目させる濱の燈火みとめたらんやう漸くに安堵の思ひ御面はに現はれて心こめ玉ひし夕餉の膳運び玉ふ忝さよ實に心地よの今宵風は殊涼しく線は彌清し慈愛深き父君が御言葉耳新らしき兄上が御物語折々に思ひ設けぬ弟が滑稽にくつがへり玉ふ母上が御笑顔覺束なげに走る小妹が上の姿が手指のあやしくもふるへたりしよさはれ今宵斗り嬉しきしらへはあらざりきと今尚ほ獨りほゝえまれぬ

あゝ此樂しき團欒清き語らひ日頃金殿玉樓の裡山海の珍味にあきたら尚ほ夜に更に娯樂の場所と物なば求め玉ふあてなる都人よさかまにしきは郷野な心の中のまことの平和にこそ而も此のわが美はしき故郷の棕や祭ある詩人墨客が床しき背の樂にはた優しき文字にうつされつる風雅清幽の風景偏はれるにあらず世を厭ふ風流士か羨望して止まざる田家の光景とゝのへるにもあらざるを誰かしらずや

さても涼しきすが〳〵しき夕かなあゝ此のけがれなき美くしの平和の宿り長世に消えされな勢らじな今日を限りならぬ此團欒の嬉しさも徒に更行く夜半のいとおしくせめては及ばぬ迄も記してましと筆とれば爽々たる夏の夜の月は今し遙に雲間をはなれて進むが如きそが影や哀れ我行末を導き顔なるも嬉しくて

評、作者の文は、瑕疵少なきを勝れりとす、此文の如きも、涼しき夏の夜の風趣と快樂を描き得て妙、而かも筆力の之れに伴ふを見る（日記）

出産を祝ひて

静岡市東草深町二丁目十二永山方　宮内千代子

さいつる頃縁ありてさる御方に嫁ぎたまひし御前息ありし折はすぐさま

帰りいで御ことほぎ申上げ且つは悦らせたまひしみ髪のほどなどみ奉らまほしうおもひ居り候ひしにとや角打ち紛るゝ事どもはべりて久しう御おとづれもえせざりしにまたもや嬉しきふしを傳えさせたまひつるものかなあはれ黄金白金にもかへ難き寶のみ子をあげさせたまひし御二方様の御悦びはいかにおはすらむうまれいでたまひし若君はいかにさかしう生ひたゝせたまふらむ御家風いよ〳〵吹きおこりぬべき迹を得させられ誠に行末頼もしう存じあげ候かゝる御祝に數ならぬおのれ等さしいでんは事つゝましく候へどもさすがにもだし難く此の産衣一襲調じてまゐらせ候を御うけ納めたまはれたくまづは御よろこびまでかしこ

評　詞づかひ流暢にして、能く其意を達するものと可申候(九阿)

をり〳〵くさ

しまはまつ濤

○をかしうおぼえしもの

あらがねの土さへさくてふ暑さのあまりにはげしくて何せん業も心うきまゝに人々いぎたなくもひるいの夢なむさぼりて木がくれに鳴く蟬のこゑのみいたづらにしげきてる日のさかり針のはこびもたど〳〵しう物ぬひつるにあまりの靜けさにうかれ來にけん一羽の小雀のあやしげなる音してあゆみ來てよし戸のかげより餌もやあるとさしうかゞふ様のをかしくも亦愛らしくておもはずもほゝえまれつ「臺所にすゞめの來る午睡かな」など打ずしぬるもをかし

すが〳〵しう覺えしもの

すさましうそゝぎし夕立の名殘りなうはれわたりてやゝわかれ行く雲ひくし。汀の若あしさや〳〵と打そよぎて青葉のしづくはら〳〵とこぼれつ奥ふかき築山のとうろの光またゝきて影うつす池の面にさゞなみ起ちてほかげ動きぬ軒の風鈴風にゆらぎて涼しき音たつるすが〳〵しき夜の夕よ。げにうちはも捨てぬべうぞおもはるゝ

評　文情優麗(開窓)

丙賞

久しく音信なき友の許に

埼玉縣岩槻町　大亦たか子

白菊かをるこその秋、澁谷の里よりの御玉章、拜しまつりしよりこのかた、打絶えてみけしきも承はらず、御懐しさの念ひ、小さき胸に溢るれど、おどろかし参らせん由も、なきものから、密かに御恨みも申侍りき、さるは、きのふも小止なき雨の徒然に、例の寫眞帖とうでゝ、樂しかりつるかの夜、其折の御物語りなど、思ひいて、其後の御身の上の、さがやいかになど、とかう思ひつゞけし折から、ふと雅なる松葉の君より、珍らしき音信ありて、ゆかしき君の御住居も知り得つるうれしさのみ心の程もはかり難けれど默してやまむに堪へかねて、筆とり候、よしや一片の御返りごとはなくとも、すぎし昔、同窓三年の好み、思しいで給ふ折もあらば、その夜、わらはが夢のうれしかるべきか。

さて何はともあれ、御祝詞申さむ、こも松葉の君より承はりつ、兼てゆかしがらせ給ひつる君様と、めでたく八千代の御契、とりかはせ給ひて、御装のさまも、品ようあらため給ひしとか、誠に御めでたさ限りも侍らず、御名にちなめる鶴の齡の、千代かけて、いよゝ榮へさせ給へと、こ

とほぎ參らす。

郡近う生立ち給ひし君の、名にのみきゝし猪苗代湖の、ほとりの御住居、磐梯の山嵐、なれぬ御身に障らせ給ふ事もおはさずや、さあれ、かれての御望のごと、趣味ある田舍の自然の境裡に、温かき理想のホームを、形成し玉ひつる御事、いかに樂しうおはすらん、いとゞ御ゆかしうこそ、わらはゝ、例により少しの變化もなく、平凡なる生活を、つづけ居り候、只一ツ御耳に入れたきは、こぞの暮、愛らしき弟ひとり生れ候て、こゝに始めて、姉とよばるゝ趣味を解しつる事に候、星のやうなる其眼ざし、美くしき其微笑よ其口許、げにちさき天使とばかり、吾家庭に光りをはなち居り候、はらからほしやと、かこちては、君を困じさせまつりし昔も、今は只夢のやうに、おもはれ候、

さて別封小包に、いたし候もの、新刊の小說二卷は、徒然の友とも遊されたく、又御帶留の一品は、わざと御祝ひのしるしとして、御目にかけ候、粗末なる品ながら、千代結びてふ名にめでゝ、御うけ遊されたく候、

よろづつぎ／＼にきこえあぐべく、御左右御伺ひまで、かしこ

評、文調巧麗、讀んで味あるを覺ひ申候(奥南)

桐の花

淺草區松葉町四十一中村方　池田與美子

花を樂しと眺めしはまこと夢の間にはありけり。霞と共にうかれ立ちし人や、いつしか歸れはてゝ、山吹と躑躅に殘んの春を惜み、杜若の朝風に薫る時、蓮波の夕烟を含む時、來む夏を思ふも果敢なしや。なべて昨日今日なにとにはあられど物思ひまさるに、心かけず目に留りしは、軒端の梧桐の花にぞありける。暖き春日の惠みをうけて、一日々々と其葉の大きう擴りゆくがまゝに、心もかけざりしをけふみればげに花さへ咲きぬ。あはれその花

想ひ出すは十八年の昔、おのれ未だ母君の胎内にありし時の事や、祖父母の君たちは、おのれはじめての子なれは初孫のけしきたのもしとひたすらまち設けたまひ、神佛かけて母君の安産をいのりたまひ、うまれいでしが女なれば行末は嫁具の手筐もつくらるべう又男の子なればしかじかなどいひて手づから、若木を植えたまひしは、あはれ軒端の桐よ、なれなりき、おのれは生れいでぬ、女なりき

かくておのれ八歲の夏、日々汝か陸に紫の花を仰ぎてゐみたりき、その頃かりそめの病にて祖父母の君病床につきたまひぬ、されど桐の事のみ思ひ暮したり、さるに秋風汝か頭を撫づる頃より、みけしきとみにあらたまりもてゆき、遂ひには立居も常ならずなりたまひたるに、家の人ども驚く事一方ならず、神よ佛よ醫師よとひろよる心をつくしゝかひもなく、日々衰へもてゆき玉ひて、あはれいふも涙の種なれど、きり／＼すのなく夕、二人とも後前なう果敢く露ときえうせ玉ひぬ、おのれは稚心にも世の中のまゝならぬ事を嘆きて夜な／＼燈火の許にこし方を忍びあるは深きみ惠の程を思ひて袂を絞り、野邊の送りの夕の路びしさ、さては新奥城に手向したる折の悲しさなど絕えず胸の程をゆきかひてあはれさやる方なきに、汝はそれをも知らずてか、己か淋しき机の許に、夜な／＼窓に喚ぶ桁の聲を送るなど一入心を挫きけり

己れ一日母君に向ひて、軒端の桐の今日此頃殊にあはれなれは、伐りすつへくいひいてぬ、否とよそは亡き方々の遺愛の樹なれはといひてなきたまひぬ

昨日とくれ今日と過ぎ、十年あまりは夢の世や、己をおふし立てゝし人は苔の下の土となりて、梧桐の花のみいやおいでぬ、孫夏愛たて休うつ

らふとも回りゆく命に比ぶれば、人の命運はまことに果敢なかりけり

評　文章流麗にして、結末悲愴の意を寓す（日東）

暑中休暇

小山松枝

隙行く駒のあゆみ早く、今年もなかば過ぎて、あらかねの土もさくてふこのごろ、學校も暑中休暇となりたれば、歸省して、かれて待ちわび給へりし、なつかしきたらちねのみ顔久々にて拜するうれしさよ。春は花、秋は月と數も數あれど、雲井はるかにへだゝる都に、物學びする身は、何につけても、故郷のしのばれて、父母戀しく、はらからしたはしき時も、書のたよりのほか思ふにまかせねば、この夏季休業ばかり、たのもしくよろこばしきはあらじかし。中には、なほとゞまりて、勉學なす人もあり。あるは海水浴いでゆと身體をやしなひつゝ、詩卷を繙かんとするもあるべし。

わらはゝ、この休暇を利用して、家事一班の實習をなさばやと、母に隨ひて、洗濯裁縫割烹のことなどたすけ、夕顔棚の下涼には、一家團欒して、既往將來をかたり、弟妹には、學理を說き聞かせ、ある時は、手を携へて山に登り、綠したゝる木蔭にさまよひ、あるときは、川風に袂ふかせて、すゞみするなど、一として愉快ならざるはなし。又ふりわけ髮くらべこし友を、とひつ、とはれつ、別れてより後のことども、語りあひ居れば、夏の暑さもわすれて暮しけり。ことに同窓の友より彼地の出來ごと、家庭のたのしみなど、いひおこせたるに、こなたよりも、山の有さま、さては、日課などしらせまほしくて、こまごまとしたゝむるもをかし。げに、たのしみといふ端は、このごろのわが家庭にあつまりたらん心地ぞする。さても、母君はのたまへり、こむ年汝業をへて歸らば、今一しほ家庭の趣味を高め、快樂を增して、世の模範たらしめよと。あはれ、わらはゝ父母のあつき御情によりて、明らけき大御代の教育をうけし身の、鴻恩に報ゆるなどとはをこがましけれど、世人のそしりを招かざるやう注意せでやは

今や朝夕淸凉なる空氣を吸收して、心身ともにすがすがしくなりぬ。學校のはじまるもすでにほど遠からじ、其折よ、各地より上りつどひし、學びの友のめづらしきこと、をかしきことなど、互にかたりあひて、いかにたのしからむ

評、老練の筆意敬服々々（蘭雲）

文殼

いほ子

よの常ながらうつろひし　人のこゝろぞうらめしき
手ばこにあまる文からも　今はさめにし夢のあと
昨日に今日とかはりゆく　はかなき色の紫陽花の
それにも似たる情とは　あらでゆるしゝ悔しさよ
悔と煩悶の子となりて　ひるはひねもす物思ひ
夜はよもすがらいねもせず　かくても我はあり經にき
燒きてすてむかきりとても　昔の事やわするべき
ひめておかむかなかなかに　ありにし事ぞ忍ばるゝ
つれなき人に何にまた　わりなく心ひかるらむ
たえよ玉の緒そのなりぞ　つきぬ思ひはきえぬべき

女學世界懸賞和歌兼題

殘暑
離別
虫

（〆切八月十五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸十種に呈す

女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）
▲韻文（二十句限）
▲抒情文（二十四字詰四十行限）
▲叙事文（仝上）

◎〆切　八月二十日
◎披露　九月五日
◎賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規定

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして丁寧鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

秀逸

菊の宴に人を招く

高知市菜園場町　竹村よ志子

いにしへ九月九日は重陽の宴といふ事侍りしとかや、そなたさまにはあらねど、わらはは日頃好みろくせとして、去年よりせんさいにつちかひし菊のいろ／＼咲揃ひ侍りぬるを獨ながめ暮さんもいと惜う思ひ侍りしに、明日は九月九日にもあたり侍れば思ふどち打集ひいさゝかうたげの席を開き、千歳かはらぬ御代の秋、うつろはぬ菊のさかづきをめぐらさば、花もさこそはかひある事に思ふならめと、おしはかられて侍るに、あはれ御心のおはしまさば、君ものぞみてまとゐに光をそへ給はん事を、せちに願ひ參らするになんかしこ

評　簡短なれど、洗錬を經たる文詞也、世人に、妄りに冗長の文字をならべて、浮華を衒ふが如きものよりは、寧ろ此の文の如きものを悦び申候（日東）

嫁げる姉の許に初茄子を贈るとて

神戸市下山手通二丁目　青木京子

暑さは例年のことながらなほ口癖のやうになりてさまでならぬ日もいと堪へがたき心地致し候先程新助どの御使に行かるゝ由にて通りかゝらば

使を引止めて御様子承り候處まづ〳〵御機嫌よく御揃ひ遊ばし御芽出度存上候こなたも皆々無事に暮し居り候わきて御祖父様は毎日此の御手入れに餘念なく御顔も手足もくろうなられ候へどもいよ〳〵御健かにいらせられ候まゝ御心にかけさせ給ふまじく候さて此茄子一籠些かながら新助どの歸りがけに立寄らるゝ様申置候まゝまゐられなば御願ひせむとて殊更きりたるに御座候此色の美しく形の細く優しげなるが御祖父様の御自慢に候へども此方には未だ一度もつかひ申さず候まゝいさゝか心もとなく候たゞ初物といふ斗りなると且はそなたの御隠居様に手際の程を御覧に入れたき御祖父様の御心に御座候されぱこそ實物にては珍らしからねどこなたの手作りの由皆々様へもれぬやう御吹聴をと傍より仰も候ひつれ漬物ともなりて明日の御膳に上らば茄子の面目よりも御主の喜推量られまゐらせ候先は右まで かしこ

評　婦人の書翰としては、まづ躰を得たるものと可申候(日東)

歸省後姉の許へ

伊勢國宇治中之切町　河原芳子

新橋でお別れしてからは只もう夢の様な心持の、名古屋で夜の明けたのも、龜山で乘替えたも確と覺えて居ないでしたが、山田驛に着てお母様との花子とのお迎ひにあつた時、妾は眞個に嬉しくつて〳〵人目もかまわず雀躍しました、して花子が紅葉の様な兩手を差出して、『姉さん抱ッこしてよ』、と纏りついた可愛さには、思はずほろりとして豐かな薔薇色の頰へ接吻しました、其の内俥の用意も出來ましたから、花子を抱いたまゝ夫れに乘つて急ぎましたが、家へ近づいた瞬間の感念といふものは、丁度ある一種の電氣に打たれたやう、何ともたとへやうのない愉快さてありました。

そこへ、伯母様もゐらッしやるし、君子様もお尋れ下さるし、立ち替り入り替りお訪れ下さるお人が多くつて御挨拶も寛くり出來ないのですもの、姉様のお傳言を果たす處か、思ひに思つてたお父様のお墓參もしられなくなつてよ、其の日は全然汗塗れになつて、夜の更ける迄いろんなお話を續けて居ましたが、皆様のお壯健なお姿を嬉しう思ふと同時に、お父様が御在世なさつたら、と直ぐ其の事に氣を遣れました。

今朝は早々樣子を拵つてお墓へ參り、學校の樣子やら、姉様の御親切やらを涙ながらにお話し致し、かわつたお姿を今更らしうお悔み申しました。夫れから姉様の御名代だと申して、猛夫様のお宅へも參りました。歸ると直ぐ行李を解いてお土產を出して居ると、花子は千鳥足で駈て來て、無邪氣な笑顏で待受けて居ましたが、與ると直ぐお辭儀をして、『お母ちやん姉ちやんにこのちれいなもの貰たわ』、と倒ける程喜びました。まだ〳〵申上たい事は山々ですけど、今日はこれ丈にして、後から緩くりお話し致します故、どうか其のお積りで……、民三郎様によろしく。

評、言文一致躰の書翰文としては、此の文の如きは、まづ平易にして趣味のある方かと被存候(日東)

くさぐ

東京本郷通り四丁目　堀口まつ

○ほゝづき

今年八つなるが妹の、隣りより乞ひ貰ひしほゝづきを母きみは、大きなるを五つ六つ土塀の下に植え給ひぬ。わすかに半坪に過ぎれど皆一尺あ

まり倫ひて五瓣の形したる白き花やう〳〵開きさしたるを妹の影、花壇を去らず夕な〳〵に花をかぞへつゝ水を撒くさま愛らし餘りの水をはら〳〵と敷石の上にこぼしゆく、見るから清く涼しげなり、この小き花の實となりて紅うなりて、妹の唇に含まれむは、いつにやあらむ、待遠なるぞ一入たのしき。

○蟬

蟬ばかり面白きはあらじ。暑さきびしき晝間になくをきゝては、也有が

　蟬あつし松きらばやと思ふ迄

と詠め出でたりし昔の葉も思ひ出でられ、あるは雨ふりたらで名殘の日影たへられぬに、俄にかまびすしきいとうらみあり。されど清水ながるゝ松の下蔭、さては夕立の名殘涼しき庭の榎になく聲などはまたなく涼し。かゝる時こそ、

　夏ふかくしげる木蔭に鳴く蟬の
　　こゑも涼しき庭の夕風

の故歌思ひ出でられて嬉しけれ。そもこの虫は、遠く聞きたらんにはゆかしく、集ひてなくものは、かまびすしきのみにてうれしからず

○蓮

はちすは紅なるよりも白きが、池一面に咲き滿ちたるよりも、二三本ばかり疎なるに活けたるが、いと雅なり。新き桶にあふるゝばかり清水を汲み入れて、明日こそは寺へとて、かりに挿したる白蓮の、まだ全く開かざるもよけれど、庭の木に鉄の長鉢につきて、水際より折れたるやうに見ゆるいと涼し。佛に供へたる蓮の御燈の小暗き中に、ほろ〳〵とほの白うこぼるゝに、經よむ聲はたとやみたる、いと物さびし。

評　文は淺けれど、趣は雅し(日東)

遠つみおやの御靈を祭る

倉持菊子

今は昔世には村くも立さわぎて筑紫の海は波高く聞ゆるものは火砲のひゞき矢さけびの聲見るものはとりての火影荒野の尸のみにて人々生らん心地だにせざりきとかや。

今思ひ出づるだにすさまじきが我遠つ祖の利戈とり太刀佩きて大御いくさに從ひ給ひ雨霰ふりしきる中を事ともせず野に山に戰ひ給ふ事あまたたびにて雲霧晴れ渡りて天の下平ぎける折しも身にあまる司位給はりにきとぞげに千歳にかくれなく今も尚ものゝ文などに傳へて殘りたるを見てもいさゝか其頃の有様見るが如くなり其れより尚も公に身をゆだね内つゝまやかにして外貧しきを恥み給ひし德にやここに幾度の春秋をへて御祭今に絶へず數ならぬ身も大御代の御惠にもれずいとやすらかに樂しくあかしくらすは嬉しきことの限りにこそ今や天下大に治まりて五日の風も十日の雨も時に從ひ家々たらひ人々よろこび賤山がつまでも草の林にわけ入りて硯の海になり立ちて詩楽の玉を拾ふなる豊けき御代となりぬるも大御代の御惠によるは云ふも更なれど遠つ祖の基さだめられつるにもよらでやはあるべき

いでや垂れ給ひつる御教を守り身を修め德をみがきて其の御惠の萬一にも報い奉らんあはれともみそなはし導かせ給へや今日は此家にうからやから打ち集ひて兼てたしなみ給ひしにきと聞きつるもの御酒に御食をはしめ其外なにくれと珍らしきかぎり取り供へて御靈祭り仕へ奉るを哀れと黄泉の下にもきこめしみそなはしてよと思ふ心の一節をかくなむ

評　平凡ながら較々垢脱けたり(日東)

緑蔭

大阪府泉北郡北上神村井上徹方　藤井登美子

わが門を出でゝ數十步、鬱々たる神廟の傍、そこには神代より生い立ちけむ三株の花樹蓋の如く茂りて、そが蔭に十枚のむしろは優に敷かるべく、ある時は旅人の雨避くる所となり、あるはまゝ事する子らの樂しきホームともなれるなり。

夏の日長く、妾は書見にうみてこゝに來る。涼しき風枝葉を拂ふて梢木のかほり高く、仰ふげば新葉天を掩ひて緑滴らんとす。この樹蔭に踞して蟬の音を聽き神を拜み奉り、或はわが悲詩をも誦するなり。或は數へ子を集めて、遊戲嬉々。或は科學を說き、文學の趣味を語り、緑陰少しく暗を帶ぶる頃散ずるを常とす。

妾は懷疑の念に堪えざる夜、ひそかに庭を出でゝ此樹下に來る。緑蔭はまさに夜の闇黑をとざしつゝ、あたりは人の氣色もなく、冷露地に落ちて微かなる音を發す。かくて妾は步を止めて、恍として明滅せる常夜燈の影にそみ神前にぬかつけば、心澄みてさきの念いつしか解けたる心地するなり。

げに緑蔭は瞑想の處なり、靜思の所なり、而して大美術や大文學を生みたる場所なり、かのローレルの香高く橄欖樹天を蔽ふところ、ダンテの神曲は生れぬ。アークシャイヤの森蔭長く地上に引けるところ、沙翁戲曲は生れぬ。伊太利の深林や古羅馬の森蔭を彷徨ひしバイロン、漫遊記の大作あり。湖畔の緑蔭水を止めて靜かに暮れ行く落日に限りなき思ひをよせしウオーヅオース、湖畔詩人の名今に至りて文の林に香り高し。スコツトランドは稱道緑蔭、バーンスこゝに出でゝ名あり。

願くは花の下にて我死なんとうたひし詩人我國にあれば、願くは聖き降誕日に緑り滴る林の蔭にて死なんと呼びし歌びと西の國にあり。詩人緑蔭を生するか、緑蔭詩人を生めるか、詩人と緑蔭二にして一なる也。あゝこの敬愛なる緑蔭！

妾は緑蔭の壯大なる崇嚴なる念に打たれて、この天然の神を崇拜しつゝあるなり、緑蔭の前にぬかづきつゝあるなり。あゝ詩神のゐ給ふこの緑蔭！

評　緑蔭に對して我が心をのぶるにあまり人名など擧げずもがなとおもふ。

日記の一節

松江　松乃子

六月三十日。朝のうち少し雨ふる。かきくもりたる此頃のそらのいぶせさ、そゞろ氣も消えぬべうこそ。

なつかしのとく子の君より御玉章あり。うちたえたるうれしさに、くりかへし〳〵いく度もとうてゝはながめいりたる、われながらそゞろをかしう。

今宵は六月つごもりなれば例のごと人形と云へるに、おのも〳〵年など書きて、身を清め、行末やすらかに幸あれかしとぞいのりておさむ。

夜ふかう、ひとり孤燈のもとに文ひもときぬるに、さてもすぎにしこの思ひ出多きよ。そよ、今年もはやなかばをくらしつ、いかでとしのうちにと思ひ定めしことのかたはしだにえせずしこ　さばれゆきにしことはいかにくりかへすとてせむなからむ。いさ〳〵これよりいそしみつとめて、こむ半年中に於て、今迄のおこたりをとりかへすべく

はけまなむ、など思ふに、今更のごとく螢火かきあけられて、よみさしの書ぞうちまもらるゝ。

七月二日。めづらしくそらはれたり。昨日までうつとうし、いぶせし、とく晴れよかしなど、つぶやかれつるに、今日ひる頃よりはまた、あつさたへがたしなどうちかこたるゝ人の心ぞ、さてもはかりがたなき。夕つ方甚子の狀より、榮ちやんにとて、ろうたき螢あまためぐませ給ふ。うすきものはりたる器に入れ。水はたる草などあたへて、庭の楓の小枝につるし置きしに、弟妹のよろこびかぎりなく。はては、「あら天にも螢が澤山、はよ、取つて」と、うちさわぎしこそ、いともこうじはてたりしか。

評　なかなかに飾り離き筆意、たゞ聊か氣取りたる所あるは讀みづらし

太宰府詣て

福岡市荒戸町　脇山わか子

必ず雨ならむと思ひし今日はうれしくも晴れたりされど雨雲さまよへるはいと心もとなし九時といふに博多より汽車にのる見るかぎり青葉深くして又昨日の花の面かけなし雜所もいつしか過ぎ早二日市にとつきぬ宰府詣ての人々例の如くいと多し幼き子を伴へるやさし妻を伴へる背限りなき夫婦のみてる人々ならむかし名も知らぬ山々みどり深くたちならび進みは漸く近きは遠なり行き行きて宰府にとつきぬ足の障やゝおやし直に神前にぬかづくあしたすゞしき神風に御前の鈴のおのづからなるも折からいと尊し

三時より都府樓に向ふ町はなれてよりは冷やかなる風えならぬかをりを吹きおくりていと心地よく早苗とる賤の歌もまちかくひゞきわたる先づ觀世音寺に到る物さびたるけしき何となう古へぞしのばるゝ赤欄のかげ若葉深うしてむなしく昔の面影を忍ばせつ直に都府樓に向ふ例のなつかしき畑の中道なりかゝる所に住ひなばなど思ふうちにはや到りつく古への礎のみ殘りたる轉た懷舊の情にたへず觀世音寺の鐘聲聞くによしなく都府樓の瓦色見るによしなしたゞこの礎によりて千とせの昔を忍ばむか日はやうやう暮れかゝりて暮色は身に迫らんとせり去るに忍びざる都府樓の故趾又いつの日かこゝに立ちて懷舊の情に泣かむ我が都府樓に來りしはこれぞ最始にして又最終ならむさらば礎よとこしなへに殘りて涙多き詩人に古へを忍ばしめよさらば歸らむ心をこゝにとゞめて

遠き里よりは煙細く立ち昇り天拜山のほとり漸うくらうなり行きつそれよ心もとなの空の樣やすび色の雲のいとひくゝて

さゝやかなる小川のあやしき橋も渡りおへ畑の中みち進み漸く新道に出て直に停車場にと急ぎ辛うじて乘りぬ七番列車に

山も畑も蒼然たる暮色の中に包まれ立ち昇る炊煙のみほの白く見えわたりつ限りなき悲愁のかげ身に迫るを覺ゆ今日の我友なりし山々も今か別れんとす明日は又誰が友となるらん峯の青葉も谷の若葉もゆかしく捉けれさらば

博多に着きしはいとおそかりき電氣の光りひやゝかにてらしつ夜色暗然として面を打つ雨二ツ三ツ

評　實狀によりて事を叙す文質實にして讀むに飽かず

胸の時雨

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

夕燒の雲赤々と高く聳ゆる筑波の峯の彼方に落ちんとして、やゝ朧になり行く曠野が原、そよ吹く夕風おだやかに、いと靜けくぞ暮れて行く。

妾は妹と共に連立て櫻川の堤傳ひに、この野邊近うさまよひ來ぬ。木々の梢に喧しかりし蟬の聲は薄れ行く日と共に消へて、朧になり行く山下の里、霞み流れるあなたの丘、新緑の色を含みし一帶の森は遠く彼方に連りて、恰も是れ綺麗の夏景一幅。空には入る日の名殘を惜しみ顏に、群々飛び過ぐる諸鳥、下を流るゝ川水は靜に夕暮の化粧をさゝやきて、遙かの森より出てゝ遠き野末に入る樣は、宛然一尾の長蛇。東の方をふりさけ見れば、雨後の空とて美しき虹の七彩、とり〳〵なる色はあざやかに描き出されて、筑波の方より靉靆の空に濃なる見事さ、妾は陶然として自然の美に醉ひぬ。

「まア好い景色よ」

と思はず獨言ちて、ヘツと見詰むる妹の顏、

「姉さん、そんなにいゝの、私も見たいわ！」

と細き手に頭髮かき上げつゝ、頻に瞑める眼を怪訝に連瞬き〳〵、やがてほろりと落す一滴。

妾の胸は張り裂けんばかりなり。

「見へない〳〵、姉さん見せてゝおくれ、見へないよ」

と胸のあたりをかきむしりて、いよゝむづかる哀れさよ、完全なる眼にしあらば、共に愛で共に賞し共に眺めて、樂しと見む嬉しと語らむ、おかしと笑はむものを、憐や如何なる惡神のねたみにか、星の如き眼はしいて、玉のごと清き眸は流れけむ、物のあいろも得わかで、常闇の中に沈默し、せめてもの心の慰藉も、やさしき父母のみ情ぞ。燒野の雉子夜るの鶴、子故に迷ふ親心、況してよろず至らぬ妹に對する御兩親のみ心づかひは如何ならん。

お子の身に幸福を下し給ひてよと、あゝ近からぬ山上の鎭守の社に、巴そ雷ふる眞夜中も、篠つくばかり雨繁き暗の夜も、恐しとせず、辛らしとせず、只一意あな可憐の念にかられし母上は、そも幾回の上へ登り給へしぞ。

あゝ神よ、妹の病を癒えしめ給ひ、とても癒えべきものならずはせめて我身と替らせ給へや、死して甲斐あるものならば我は死なだもいとはじと、寒風肌へをつんざく冬の夜に、たぐるつるべの綱もたゆみ、氷の水を身に浴びて、妾の希願こめしも幾度か。

さるに〳〵そは仇にてありけるよ、清き眼はとはに〳〵開かずして。何らの悲嘆ぞ、何らの怨恨ぞ、蝶よ花よと世の人の浮立つ春と、勝てかげまだ小草なる哀れの妹は、暖かき日の光も身に受けず、既に匂ふ諸花の色香も知らで、梅の梢になく鶯の音にそれと悟りて憂き身なかこち。霞に閉づる雲雀の歌の、狭き胸の小琴に觸れては彼を笑み、泉水の清き影は知るよしなけれど、棹鹿の鳴く音に秋の哀れをかこつ心根をおしはかりては、父たり母たり姉たりの身の、いかで斷腸の思ひなからんや。萬感交々胸にみなぎりて、廣野に佇む妾は覺えず涙千行に下りぬ。折しもさら〳〵と葉摺れに響ある風の音は、おなじ歎きのさゝやきか。折柄土橋を渡る馬の鈴ちやらん〳〵と響かせながら、いかにも呑氣らしう、煙草くゆらしつゝ手綱とりくる馬子や、草籠背にしていそ〳〵と歸りくる賤の男賤の女、いつれもその面には滿足希望の色のみちみちたる羨しさ、妾は深く首垂れぬ。

「姉さん、何考へているの」

と悟早き妹は早やそれと悟りしか。

「いゝえ何も考へてゐないの、花ちやん、鳥の聲が聞えるから、彼庭へいつて見ませうね」

とやさしう手をとりて雜木のむら立に休らひば、爽快なる風は若葉を揺りぬけて二人の襟元を洗ひぬ。

「姉さん可愛いゝ鳥の聲がしますよ」

と常になき笑顏を見る嬉しさに、慰藉の神よ、永く永く永く妹の心を慰めよと、妾はてとそなたを見上げつ。

「ヤアーイ、あまんがいた、めくらヤアーイ」

と濁ごゑ一聲、鳥ははた〳〵と空高く飛び去りぬ。

「ヤアーイ、あんきヤアーイ」

と憎さげなる物のいひ振よ、女子の身にしあらずは取ひしぎやらんずものと、屹と立上がれば惡童の姿は遠き彼方に隱れて、只見る野邊は黄昏の影も見へて、靜に渡る夕の風。

「最う歸りませうね」

と徐に歩を返せば、花やかなりし日の光はいつか消へて、四邊は寂として音なく、日の涙か、花の涙か、はら〳〵と袖にちりくる二三點。

懸賞家庭小説

乙賞

落椿

京都府　橋本紫明女史

日曇尋常小學校と[illegible]の肉太に記した建築の横手側が二百坪ばかりの運動場。

今しがた鈴々の響を傳へて、廊下傳ひに整々と一連の珠數のやうに押出した男女の生徒百二三十人、切揃えたやうな丈並は藥師の觀世音菩薩の像も恐らく斯く迄にはと思はれる。が、誰も彼も腕白盛の地藏尊、ベロリ舌を吐出して目を剝く男生も有れば、眞正面に反返つて歩みながらも瞞と後人に相手買ふものもある。女生は女生で、編みかけの毛絲の縺を自烈太さうに袖口で解いて居るのやら、先刻拾つた椿の花を碎かじと始終袂の中を氣にして居るのやら……。

「別れ」の號令の有るか無きかに關を作つて海嘯の如く動搖めき、さては蜘網の如く散つた男輩の、那方に一團、這方に一群。やがては後馳のものと打亂れて、鬼事、目隱、旗取、切合と走り驅廻り喧き號び狂ふ。此方の大松の影には女生の群、「中の中の小佛は」と一人を取圍むで打繞る側に、「開いたり凋むだり」と一齊に口唱むて、手を列ねて朝顏花形に蜒蜒つて居る。打見た所亂暴な一幅の活畵、興樂の限をつくして居るので、丁度お隣の坊樣と孃樣とが一緒に玩具箱を轉覆したものゝやう。

戯群を離れて一人の兒童の服裝は敢て他に劣れりとも見えぬが、取付く島も無いのか羨ましさうに昵と眺めて居る。何處となく長せた、落着いた、更に云はゞ沈靜むだ風て、眼元が些と險に過ぎて見えるのは餘り人懐い所以では無からう。

西側の籔際の咲誇つた椿の花影には同じ年格好の女生が三人、三四間づゝ離れて何をか索つて居る樣子。

「絢ちやん這方へ來つしやいな、澤山あつてよ。」

竹垣に寄縋つた居た一人が、自分の帶が解けて地に曳

いて居るとも心注かず。椿の花を手に重ねて、小腰を屈めたまゝ仰向きながら斯う呼掛けた。

「あいよ、這方にも澤山在つてよ。」

チラと彼方を見て冴え／＼しい聲で斯う應へたのは、牡丹模樣の派手な友禪の綿入に、チヨキンと締め上げた桃色の帶も似つかはしう、愛くるしい稚兒髷の絢ちやんである。絢ちやんは此村一番の豪農の娘で、圓顏の、色白の、二重瞼のパッチリと鈴を張つたやうな甚麼にも無邪氣い、それは最う何處一つ點の打處の無い容貌好であるのだ。て、駄菓子店の老婆が例の疎な薄黒い齒を現はして、「眞實に葛城さんの孃ちやんときたら丸でお雛樣だ。奧樣があの御美貌で、また孃ちやんがあの通り、甚麼しても鳶の子は鳥じや無い。」と非常く感服したのも、滿更お店繁盛と祈つて彈いた二一天作ノ五のそればかりの故では無い。

縫針を付けた絲に、赤と白と七分三分に染分けられた落椿花を幾個となく刺列ねて、又其上に拾つた花を一つ一つ眞中から通して行く。いつしか增えに增える花笠の搭を眺めては、あゝ奇麗と計り絢ちやんの小さい胸は絕えず波立つので、堪へ切れず

「妾の、最う這麼に成つてよ。」と叫ぶに彼方も劣らず、

「妾のもよ。」「妾のもよ。」と聲々。

途端にパタ／＼と音がしてパタリと絕えた。其處には以前の一人子然の兒童が來て居るので。

一人の娘は目敏く見付けて、

「お新平民の音が來てよ！」と消魂しう。「まあいやだよあの子！」と又一人。絢ちやんも同じく振向いたが、其鈴のやうな眼を細くして同情深い調子で、

「那麼に云つちや不可いのよ。先生は同じ人間だつて仰つたわ。」

「だつて新平民……新平民やなんか嫌だわ。妾の母樣は穢ないて云つたもの。」「然うよ穢なくつてよ、それが新平民だもの。」理屈て來いと云ふ風で、

「絢ちやん新平民好きなの。え何故？」

「好きじあないわ。」

「じあ何故新平民と云つちや不可いて云つたの？」

「だつて可愛想だもの……。」と絢ちやんは困り切つて居る。立聞きして居る音吉の眼は輝いた。

「あ、絢ちやん可怪いのね。」と高く「然う乾度然うよ。」と何事か耳語いて二人はドッと一緒に笑つた。

折曲謝鏤の音が聞えたので、二人は顏色を變へて「まあ」と云ひさま駈出した。絢ちんもつゞいて。

音と呼棄にされ、新平民と嘲けられ、穢いと輕蔑された音吉は後に只一人、孑然と寂しさうに影を殘して居る。丁度颯と春風が吹いて椿の花が一輪二輪……。俄に垣根に馳寄つた音吉は今し散立の花を拾ひ初めた。

教場を骨休の床と決込んでか、吐息肩息ズラリと列つた級々の生徒が、廊下傳に入崩らうとするときベタベタと駈付けたのは音吉である。例の險相な眼付で見廻して居たが、突と列に進寄つたと思ふと言をも云はず、驚き含羞む絢ちやんの袂へ一握の花……。

「彼、運座に遲くなつては不可い。」と先生の一喝。

絢ちやんは氣毒さうに音吉の後姿を見送つて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

菜の花の末に蝶々を迷廻して蹴いで菫の花を碎いた、長閑にうら暖い春の日も暮れて、世は葉月の中間過ぎにもなつた。野には艶々と黄ばみたる麥の穂が伸々と延びて居るが、此處には少男女の影消えて、今は最う白糸の濱に、汗を拂ふ汐風に身を曝す影法師のみが蹣跚いて居る。昨日一日降續けた雨の名殘でカラリと霽れ渡つた今日の空、九時頃から熱し初めて正午前には最うヂリヂリと肉も焦げさう。太陽が少し西に寄つた二時頃は最う暑氣の頂上。容赦も無く照付けられた屋根の鬼瓦の吐く氣は毒焰かとばかり、單衣一枚のそれで熱く、滲出る汗の乾しも無く、皮をも削いて了ひたいやう。半日の疲勞を今茲にと野蹄の何職が襦袢一着、大字形に寢轉んでは苦し紛れにまた轉り、夢にもあらず現とも無く悶き惱むで居る程の事である。

人々の寢息を窺つて窃と家を出た絢ちやんは、軒蔭に待ちあぐむで居た二人の小娘と顏を合せて莞然。密と濱邊に走つてかねて約束の貝拾ひ、夏帽一つを被として、白妙の丘、小石の廣場、浪打つ渚を北へ北へと奔つて行く。

船小屋の影に鳥渡暑氣を避けてはさゞめき、稻木立の下をくゞつては打笑ひ、石投の競爭に一尺計沖に渦卷くを見ては誇る。揃ひも揃つた快活な三人連、大谷山の

嶺から吹下す涼風に艶々しい黒髮を撫きつゝ然も心地よさゝう、あれ船が烏かと我を忘れて石に躓き、遊面作つて我慢するのも自分の所作なればこそ。四五丁餘り磯邊を辿つて村端まで來ると、其處には欝蒼と茂つた孤獨れた妙見山の神鎭座まします雜木森が一つ。云合した如く、椎の木蔭に駈入つた三人は疲勞れた足をベタリ地に投出して靑草の褥の上に轉り、滲出る汗を拭ひ〳〵、取々に列べた貝を數へて多きに誇り、大小を爭論つて後は笑に碎けて了ふ。

「絢ちやん泳がなくつて?」不意に一人が發議した。

「妾いやよ母ちやんに叱られるから。」

「だつて誰も見ていやしないわ。些の間よ。」

「あ、妾も泳いでよ。絢ちやん厭?」

云ひさま二人は帶を解いた。悄し悄然と見て居た絢樣もやがて獨り點頭いて、突と夏衣を椎の木に。

「おゝ寒冷い。」と一人が肩まで身を沈める後から又一人、碧の浪の中に白首が二つ。やがて冲方へ泳ぎ出んとしては寄せ來る浪に泡を喰つて引返す。又向つては又浪を被つてドッと一緒に笑ふのである。絢ちやんも負けぬ氣で磯の巖に確乎と抱付いて、是のみ浮むで居る兩足で婆娑々々。て浪の滴が玉になつて那方這方に散る花の、波の中、巖の上、處かまはず、絢ちやんの稚兒輪にも濕然と露が浮いた。

俄に風向が變つて、西谷山の山巓邊には薄黑い雲が頻に立迷つて、いつの間にか海面も翳れてきた。

「這脛に淺くてよ。」と一人が冲で丈を立てると、「妾まだ冲だつて立てるわ。」と今一人が泳いで出て、一間計り冲で「御覽よ。」と云ひさま兩手を頭上にさし翳して沈む。やがて浮いて出たと見ると、振と顏の水氣を拂つて「まあ深い!」と驚いたやう。すると一人が「絢ちやん來つしやいな。」と呼掛けたが、絢ちやんが磯邊に婆娑々々と跳ねて居るのを見て、

「絢ちやん、あゝ可怪い、巖に着いて踊つてるよ、アハゝゝ。」と揶らなさゝう。絢ちやんは不滿さうな顏で磯に衝立つて冲方を眺めて居たが、思ひ切つとた云ふ風で、

「妾だつて行つてよ。」と冲へ向ふ。

「然う大丈夫よ來て御覽。」

西空の雲が漸々擴がつて谷間々々を窺き込むで居る。

一陣颯と吹下した風が、妙見森の雜木を掠めてザッザッと烈しい音と共に靑海原を吹渡る。途端に椎の木に懸けられた絢ちやんの夏衣が翩翻と散つた。

先刻から此森の端の磯馴松の下に衝立つて、呪と此方を見凝て居たのは新平民の音吉である。今し絢樣の衣服が風に散つたの見ると、密と行つて拾ひ上げて本の如く枝に懸け、また引返して松が根に踞むだ。

と、動もすると浮びさうな足を踏締め踏締め、絢ちやんは恐る〳〵沖へと出て行つたが、最う乳の下あたりまで波が寄せてくる。我慢してまた一足々々。浪は乳を越して喉を浸す。アッと思つて居る時に浪がペタリ、聊か汐水を呑むで、顏色を變へつゝも聲立てず引返さうと勉める。すると泳ぎ慣れぬ足が片足づゝ悶くに從ひ浮上るので、身は却て沖へ沖へと連れられる。驚いて聲立てんとするとき、生憎に大きい浪が一蜿蜒頭に被つた。

そして引返す浪に足を捉へられてブル〳〵と沈む。

初の程は笑ひ、中程は阿氣に取られ、後には阿哉と騷ぎ出した二人の娘は、此有樣に心惑ひ、自ら救はんとするにも力足らず、眞靑になつて陸へ驅上り聲を限に救助を求めるのであつた。

一度浮出た絢ちやんの姿が復見えなくなつた。

途端に全裸になつて電光の如く駈け付けたのは音吉である。衝と身を海に投じ、急遽しく波浪を推切つて瞬く間に二三間。やがて浮びもせず沈みもやらぬ絢ちやんに捉付いて、其左手を旋ると靜しく身をかはして背を向けた。絢ちやんは覺えず確乎と其肩に縋着いたのである。が其間にも身は沖へ沖へと漂ふので、音吉は滿身の力を罩めて手足を悶き浪を切らうとするのであるが、未だ多く練熟せぬ兒童の働作ては、人一人背負つて泳切るには甚が遠いのである。て絢ちやんが顏を擡げんとすると、音吉の體は其重量で沈んで了ふ。健氣にも音吉は一生懸命で身を浮べたが、ドッと打寄せた大浪を被つて過多潮水を呑むだ。

唯見る間に二人の影は海面を沒した。

陸上の娘は聲々に救助を呼びながら泣き出した。

村端の事とて人家は少なく、時は丁度晝餉時の、それさへあるに、西の方半空を掩ふた黑雲は、物凄くも此世を呑まんとするものゝ如く、雨氣雜の西風は、妙見森の梢頭を靡かして歇間なく颯々と響き渡るので、泣き號ぶ娘の聲も、與謝海を超えへとぎれ〳〵。

（完）

女學世界定期増刊
（發行九月十五日）

懸賞文募集

はつもみぢ

投書〆切八月廿日

オ媛詞藻
秋の巻

歌は心の花なり、文章は思想の錦なりうるはしかるべき婦人にして其の心に花のかざりなく、思想に錦のよそほひなかりせば、如何ばかりもの足らぬ心地さるべき、昭代教育の發展に伴ふて、女子の文藝は著るしく其歩を進めぬ、茲に女學世界のオ媛詞藻は來るべき秋凉の好季節を以て又更に其の定期増刊を發刊せんとす「初もみぢ」即ち是なり、さればうるはしき心の花の一ひら、いみじき思想の錦の一片を寄せて我がオ媛詞藻を飾られん事を

文種

▲小説（文體隨意）
▲二十行二十四字詰ニテ ▲紙數十枚マデ

▲和歌（題 [illegible] 選）
端書ニ一題一首ノ事

▲新體詩（題隨意）
▲二十句限

▲抒情文（題隨意）
十行二十四字詰ニテ ▲紙數二枚限リ

▲叙事文（題隨意）
二十行二十四字詰ニテ ▲紙數二枚限リ

▲消息文（候文言文隨意）
二十行二十四字詰ニテ ▲紙數一枚限リ

賞品

特賞
金拾圓 壹名
金五圓 壹名

甲賞 金參圓（圖書切符） 五名
乙賞 金貳圓 仝 六名
丙賞 金壹圓 仝 拾名
秀逸 金五十錢 仝 二十名

注意

▲特賞は小説の優等者に限る
▲和歌の高點は乙賞以下にて別に相當の賞品を呈す
▲小説原稿は紙捻にて綴る事
▲各種規定の紙數に超過するものは一切採用せず
▲封筒には必ず「はつもみぢ」と附記すべし

訃報

●西郷元帥の薨去

維新の元老として、政界の調和者として無かるべからざる西郷侯は、薩長の勢力衰へ藩閥の時代去らんとするの今日、尙ほ諸元老中比較的に多くの民望を繋ぎつゝありしに、今や不幸にも病魔の爲めに長逝せられたるは、實に惜むべきなり。

▲侯の官歷　侯爵西郷從道君は故南洲の令弟にして、天保十四年五月を以て鹿兒島に生る、明治三年兵部權大丞となり、翌年陸軍少將に任じ、爾後諸官を經て、明治十四年農商務卿となり、又た陸海軍卿、開拓長官に擧げらる、十七年勳功に依り特に伯爵を授けられ華族に列し、十八年以來海軍大臣の顯職に在る數年、二十三年内務大臣より、海軍大臣となり、二十七八年の戰功を以て侯爵を授けられ、三十一年一月元帥の稱號を顯はる、次で山縣内閣の内務大臣となり、其内閣を去りて以來は正二位勳一等元帥海軍大將、議定官、貴族院議員として、薩長間の連鎖として内外に敬重せられ居たり、

▲侯の逝去　又た侯は嘗て身を政黨に投じ、故品川子爵と共に國民協會を統理し全國を遊說す、又た板垣伯等と共に同氣俱樂部を創立し、風俗改良論を鼓吹す、其朝野の各方面に渉り侯の盡力したるもの決して尠からざるなり、數月前重症に罹りて、一たび其經過の佳良を傳ふるや、山縣大山二侯と共に大勳位に叙せられ、其後又た一時は病狀頗る宜しく、靜かに目黑の別邸に療養中なりしが、去月十七日午後六時より病勢頓に革りて人事不省となり、遂に翌十八日午後二時を以て溘として逝かれ玉ふ、享年五十有九、尙ほ葬儀は同月二十二日午後一時目黑郊外松背山なる同侯爵家の墓地に埋葬せられたるが、當日は侯が海軍大將元帥の資格に對して海軍葬禮式を用ゐられ儀仗兵として横須賀より海軍水兵二個大隊及野砲八門第一師團よりは歩兵一個聯隊を附せられ、又た青山及品川灣にて吊砲を發して吊意を表せり、又た朝野の貴顯紳士及び一般會葬者の送る者其數を知らず盛壯にして而かも嚴肅なる葬式なりし

▲侯の人物　侯は天性沈黙寡言にして、而かも洒々落々たる心情を有す、されば、愚迂たるが如くして却て聰慧に、小事には殆んと關せざるが如きも、一旦大事に臨しては其裁斷處置を誤らず、而して他人に對して極めて寛仁大度なれば、政友間は勿論社交上何人にも好かれ且尊ばれつゝありしを見る、故に侯の如きは、先天的に人に長たるの大器にして、而かも又た圓滿なる社交的性格を具へたる好人物なりといふべし、侯は夙に所謂愛嬌多き人物として世に知られ、從て逸事逸談の如きもの多けれど、中に就き家庭及平常の逸話の一つ二つを左に示さむ

▲侯の性質　温厚謙讓なるは獨り社交上に於ける應接對談に止まらずして實に其家人奴婢馬丁に至るまで皆然りとなす例へば僕婢を呼んで事を命ずるにも「何々さん何を持て來て下さい」とか「何々して下さい」とか云ふ以て其一斑を卜すべし

▲侯の家庭　家庭團欒は洋々として常に春の如く兒童と共に嬉々談笑せられ芝居相撲など見物の時の如きも必ず夫人令孃と馬車を共にし共に歸へらるゝが常なりしとぞ

▲板垣伯曰　侯と私との關係は近年の交際ではあるが、誠に大體の明らかな人であッて如

何にも品の好い人でコセ〳〵しない、誰[illegible][illegible]寛仁大度の所があッた、元來摘を嗜まれたり謡ふを歌を謡はれたり何かするので、風俗改良同盟の如きものには如何やと思ふ人もあッたかも知ぬが、今日内外の形勢に徴し我風俗を改良しなければ外國との交際にも影響し、又體育にも經濟にも關係すると云ふとは好く[illegible]に容れられて居ッた

▲侯の雅量　其故私と一緒になッて各地を遊說したとも私は頻りに饒舌るが侯は默して居らるゝ、私は同じ事を繰返して云ふのを侯は喜んで聞いて居らるゝ、私が地位を換へて侯の身になッて見ると却々耐へられるもので ない、然るに侯は熱心に聞いて居る其から又同氣俱樂部なども今日の時世に尤も必要なりとして進んで、創立者となり總裁に仰がれた、彼云ふ極く寛和な人であるから種々毛色の違ッた人が入會しても萬事都合が好く、役人もあれば又在野の人もあッて至極平民的に組織されて居る、時に風波不平の聲も起ッたともあッたが侯の圓滿なる雅量で直ぐ打消されて仕舞ッた、

●淳宮殿下の御守護刀

第二皇孫淳宮殿下へ　陛下より賜はりたる御守護刀は、本郷區駒込の御用鍛冶工宮本包則翁の、本年三月命を奉じて謹製に取掛り程經て、竣功の上去四月十五日に上納せるものなり。造りは八寸五分の平作りにて白鞘なるが、其鍛材は之を伯耆國[illegible]郡[illegible]波山の產に取り、鍛冶中は日々沐浴潔齋して神護を祈り、朝五時より午後二時頃までを一日の業と定め、斯て五振を鍛治の上こゝに始めて精巧なる一振を得たるなりとぞ。翁は本年七十三才の高齢にて、維新の前は能登守と稱し、伯耆國東伯郡竹田村字大垣の酒商の出なり。慶應二年命を奉じて孝明天皇の御守護刀をうちしが、是れ翁の刀鍛冶を以て天下に名聲を得たる始にて、續いて明治元年今上天皇の御守護刀を鍛へ奉り、同廿年には靖國神社にて伊勢神宮の御寶劍をうちたる折、皇太子殿下の御覽ありて殿下へ一振を獻上し、昨春二月の下旬迪宮殿下の御守護刀を鍛へ、今また重なる名譽を仰付られたる次第なりといふ。

●新來の清國女學生

清國女學生八名去十三日を以て東京へ到着し内四名は永田町下田歌子女史の門に入り追て華族女學校に入學の筈にて他の四名は小石川指ヶ谷清國人吳稚暉氏の寓に在り、中小學より漸次女子師範學校に入學せしむる筈なりとの事なるが、其氏名は左の如し

曹麗雲　年二十四歳、上海人、前に上海の女學堂及び同地二馬路中西女學堂に學び今回永田町下田歌子の門に入る、父は直隷の知州にして兄曹汝田氏は現に東京外國語學校に在り、夫爵子杉氏は東京弘文學院に在り

陳彦安　年二十二歳、蘇州の人、前に蘇州中西小學堂上海二馬路中西女學堂等に在り、今回來て下田歌子の門に入る、兄は[illegible]にして夫章宗祥氏は東京法科大學に在り

華桂芳　年十九歳、無錫人、前に無錫の胡氏女學塾上海中西女學堂等に學び今回下田氏方に入る下記胡の嫂なり

胡彬夏　年十五歳、同じく無錫の人、無錫胡氏女學塾上海中西女學堂に學び今回下田氏の門に入る、華の姑に當る父は淮安府の教授たり

周佩珍　年十三歲、無錫人、向に無錫の三等公學堂に在り今小石川吳氏の許に在り父は秀才たり

鄒文婉　年九歲、父は知縣なり、生地殷縣前に同し

馮元贊　年十三歲、父は五品官、他前に同じ

吳　英　年十四、常州の人、向きに無錫三等公學堂上海三馬路中西女學堂等に學ぶ、實に吳稚暉氏の少女

今回來遊に至りたる因由を聞けば此七名は孰れも皆吳氏が友人の子女にして故國人士の頑冥を惜り熱心冀學の餘白然を以て來遊せるものにて、吳氏は元天津北洋學堂に在て漢文の教習と爲り昨年我邦に來りて高等師範學校に入學し十一月廣東總督の聘に應じて一度歸國し教育の任に當れる人にして本國友人の囑を受けて其子女を同伴し來りたるものなり、

●當季の流行品

▲反物類中形　吳服の種類にては透當り中形物が時候向きにもあり第一手輕なれば財物に適するならん總て近頃は白地に藍にて模樣を出したるが流行し鼠色又は諸入のものは婦人稀なり模樣は其年齡に依りて大小好みくなれど一般に細かき方が需用多く今その二三を擧ぐれば變織は三圓前後、千代田織は同上、絽縮二圓四五十錢、縞一圓三十錢より一圓八十錢位、紅梅織二圓二十錢より二圓五十錢位瓦斯織一圓八十錢位、濱岡一圓より一圓二三十錢位、麻三圓前後等

▲縞物　縞は堅物又は格子の好み多く稀に縞筋物も川ひらる地色は多く白にて紺又は鼠は廢れたり縞セル六圓五十錢より七圓位、繻子セル四圓五六十錢、秩父織二圓二十錢、有功セル三圓前後、紫織一圓九十錢位、縞瓦斯明石二圓五六十錢位、羽衣上布一圓六十錢位、白縞瓦斯絽一圓六十錢位千代田縮二圓三十錢より二圓五十錢位、白縞瓦斯絽縮二圓位、白縞瓦斯上布一圓五六十錢齊梅縞二圓三十錢より三圓位、縞瓦斯縮七八十錢位、本場結城一圓八十錢より二圓五六十錢位、岩國縮七八十錢位、縞入瓦斯一圓五十錢より二圓五十錢位、亂岡縞五六十錢位、白縞木綿縮七八十錢より一圓位等

▲飛白物　飛白物は大概紺地にて取分け久留米絣の需用多し薩摩紺絣三圓より八九圓位、同白絣二圓五十錢より四圓位、久留米絣二圓より三圓五十錢、御所紺絣一圓二三十錢より一圓五十錢位

▲羽織用白地　中元等の贈物に値頃のものを選めば絽七圓より十五圓、絽縮緬十圓より十五圓、紗六圓より七圓位、雙上布五圓五十錢より八圓位、雙紗六圓五十錢より七圓位、透紗四圓五十錢より五圓五十錢等

▲兵兒帶地　縮緬大巾物八圓より十三圓位、同中幅五圓五十錢より九圓、絹縮大巾五圓五十錢位、同中巾四圓前後、絽縮緬中巾六圓五十錢より十圓、大巾絽十圓より十五圓位、旭織四五圓位、絹紬一圓二三十錢より一圓五六十錢、白メリンス一圓三十錢位

▲帶上げ　は重に絽縮、絹縮、紋絹縮にて縮緬之に次ぐ地色は白にて絞り模樣を藍にて染出したるもの模樣は引絞りて用ゐるものなれば大形のものを好めり代價は一圓五十錢より二圓位まで品々あり

▲半襟　絽縮緬又は絹地が向多し模樣は婦人の年齡によりて種々なれど總體より云へば地染のものに白模樣を抜き又は所々に繡をあしらひたるもの流行せり從來の白地に染模樣あるものは目下一寸二番手に廻り需用少なし只白の無地も時好に投じ年若き人にても一般に之を用ひ居れり代價は大概六十錢[illegible]三十錢位まで品々あり

◎海水浴の注意　追ひ〳〵海水浴の時候とも爲りしゆへ陸軍々醫監足立氏の注意談を左の如し

▲避くべき患者　海浴の効用は皮膚肉筋を强壯にして、身体諸部の物質代謝の機を催進するものであるが、胃病の甚しい者とか、心臓病とか精神病とかに罹つて居る患者には、決して適當と云ふ事は云へません、て、また虛無の小兒や老人は、海浴を避けた方が至當であります。が、斯う云ふ人々でも、海濱の氣候は大いに體質の弊を根治にする事が出來る上、人体の諸機能を振起せしめる効力は確かにあるのですから、朝夕濱に沿ひつゝ逍遙散歩すると云ふやうな事は、極めて良好な事でありますが、或は之れに一歩を進めて、試みに最初は極めて微温い海水で身体を拭ひ、それから海水法若しくは浴法を行つて、漸く身体の慣れるに及んで、海浴を行ふのは、決して悪い事ではありません。

▲海浴の原則　海浴に就て有名のホウベル氏は、左に列記する如き原則を設けました。

一　腺病或は經久腺潰に因て衰弱する者、肺結核病、皮膚殆綏蒼白にして胃寒し易き者、神經痛、偏頭痛、及び諸病の回復期に當す。

二　神經過敏性の者、及び婦女子にして急に冷却する時に痙攣、眩暈等を起し易き者は海浴を禁ず、宜しく温海水浴を用ゆべし。

三　姙婦は海浴を禁ず、動もすれば墮胎するの畏れあり、但し經閉の者には、之れを催起するの効あり。

四　慢性子宮炎、子宮脫、子宮痛ある者には海浴を禁ず、必ず温海水浴を用ゆべし。

五　僂麻質斯、痛風、肝臓病、結核病には温海水浴を良とす、又僂麻質斯には海濱に於て砂浴法を行ふを良とす。

▲時間と温度　それから時間の事ですが、温海水浴に浴する時間は、大人二十分から四十五分位小兒は十分から二十分位の處が適常て、又温度は普通の浴よりは、低いのを可とします、度數で云へば攝氏の三十四五度か極適當な處ですが、僂麻質斯には少し温く、即ち三十七八度が丁ど良い處です。

海浴の方は、十分間乃至十五分間が適度て、一日に朝夕二回に行ふのが最も良いのですが、空腹の時とか、喫過ぎた時や、酒を飲んだ後抔には、決して直に浴してはなりません、又身体に熱の有る時抔も、全然浴する事を禁ぜねばならんのです。要緊事てすから、空腹の時には先づ少許の食物を喫してから入り、身体が熱して居る時には徐々に海濱を歩いて身体の表部が冷却するのを待て、始て水中に入るやうに爲なくてはならないのです。

◎巡査と英國皇帝　英國皇帝陛下先頃ノーフオルクに滯在中、或日自動車運動を試み居玉ひたるに一巡査は其皇帝なるを知らず、自動車の速力過急なる旨を告げて之を制止したるにぞ、陛下は少しく怒氣を帶び、お前は余が何人なるを知らざるや、余は英國皇帝なりと告げ玉ひたるに、巡査はナニ馬鹿を云ふものでない、英國皇帝と稱する者今朝から是で四人なるぞと答へながら、其の制止を遵奉するや否やを確かめん爲め少しの間同乘せんとて皇帝の自働車に飛び乘りたるが、軈て車は疾風の勢を以て、英皇の行在所たるサンドリンカムに向け馳込みしにぞ、巡査は玆に至り初めて其眞の英國皇帝なりしを知り、見る〳〵顔色蒼白となり、恐懼措く所を知らざりしと

◎正誤　前號才媛小說「花束」の署名阿佐野みよ子とありしは信濃しからみ女史の誤に付謹て是に正誤す

女學世界第貳卷第十一號記事豫告

（八月五日發行）

其他、講義、學藝、史傳、裁縫等每月連載の有益なる記事材料豐富

每月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
郵税　一册　二錢
内（定回數……十二册
　增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

廣告料

二十四字詰一行、半頁二十二行、一頁四十四行

特等	……	割引	三十三圓
一等	四十三錢 十二圓七十六錢	割引	二十七圓
二等	三十五錢 十一圓二十一錢	割引	二十二圓
三等	三十錢 九圓六十錢	割引	十八圓

▲等級の位置〆切日等總て當館の都合次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は總て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添へ申込あれ。

不許複製

明治卅五年八月五日發行（第貳卷第十號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　[illegible]

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

（綴付の[illegible]）

博文館編輯局校訂	●源平盛衰記	（十四版）	全一冊脊皮上中一三一〇頁	正價六十錢郵稅十六錢
江見水蔭君著	●避暑の友	（四版）	全一冊紙皮上小三八七頁	正價卅五錢郵稅六錢
幸田露伴君著	●ひげ男	（四版）	全一冊洋並大二四三頁	正價三十錢郵稅六錢
若松賤子君著	●小公子	（六版）	全一冊洋並大三四二頁	正價卅五錢郵稅八錢
博文館編輯局校訂	●朝夷巡島記	（再版）	全一冊脊皮上中一一七二	正價六十錢郵稅十六錢
巖谷小波君著	●笑	（五版）	全一冊紙皮上小五三八頁	正價卅五錢郵稅六錢
江見水蔭君著	●戀	（七版）	全一冊紙皮上小三八二頁	正價三十錢郵稅四錢
博文館編輯局校訂	●里見八犬傳 上	（十三版）	全一冊脊皮上中	正價六十錢郵稅十六錢
博文館編輯局校訂	●膝栗毛	（十三版）	全一冊脊皮上中一一九〇	正價六十錢郵稅十六錢
佐々木信綱君著	●增補詠歌自在	（九版）	全一冊洋上布中七八〇頁	正價一圓郵稅十二錢
佐々木信綱君著	●校註伊勢物語	（九版）	全一冊洋並大一〇六頁	正價十二錢郵稅四錢
博文館編輯局編纂	●祝辭演說法	（十一版）	全一冊洋並大二五〇頁	正價廿五錢郵稅六錢
內藤耻叟先生講義	●四書講義 上	（十九版）	全一冊洋並中四二七頁	正價廿五錢郵稅八錢
根本文學博士講述	●老子講義	（再版）	全一冊和上大三九六頁	正價五十錢郵稅八錢
佐々木信綱君校註	●校註竹取物語	（九版）	全一冊洋並大七六頁	正價十二錢郵稅四錢

- 大和田建樹君著 ●散文韻文 **雪月花**（十一版） 全一冊紙皮上小六二五頁 正價卅五錢郵稅六錢
- 大和田建樹君著 ●**日本大辭典**（十版） 全一冊總皮上大一八〇〇頁 正價二圓廿五錢小包四〇匁
- 大和田建樹君著 ●**日本小辭典**（四版） 全一冊洋皮上小一八八〇頁 正價七十五錢郵稅八錢
- 大和田建樹君著 ●**謠曲通解** 合本（七版） 全一冊總皮上大一七八六頁 正價一圓八十錢小包五〇匁
- 老鼠堂永機宗匠 阿心菴雪人匠宗 校訂 ●**其角全集**（再版） 全一冊洋並大二八〇頁 正價三十錢郵稅八錢
- 內藤耻叟先生講義 ●**小學孝經忠經講義**（九版） 全一冊洋並中四七〇頁 正價廿五錢郵稅八錢
- 石川鴻齋先生講義 ●**正文章軌範講義**（十三版） 全一冊洋並中四七〇頁 正價廿五錢郵稅八錢
- 石川鴻齋先生講義 ●**續文章軌範講義**（六版） 全一冊洋並中四七〇頁 正價廿五錢郵稅六錢
- 文學士久保天隨君著 ●四書新釋 **大學**（四版） 全一冊和並大一三〇頁 正價十五錢郵稅四錢
- 堀江秀雄君著 ●**作文資料**（十三版） 全一冊洋並中二一五頁 正價十五錢郵稅四錢
- 大和田建樹君著 ●**新體詩學**（五版） 全一冊洋並小二二四頁 正價十五錢郵稅四錢
- 西村眞次君著 ●作文良材 **美辭寶典**（再版） 全一冊洋並中四一二頁 正價卅五錢郵稅六錢
- 大和田建樹君著 ●袖珍 **作文寶典**（十版） 全一冊洋布上小一〇二〇頁 正價六十五錢郵稅六錢
- 宮澤春文君著 ●**作歌自在**（六版） 全一冊洋並大二四〇頁 正價廿五錢郵稅六錢
- 宮田修君著 ●**通俗言語學**（再版） 全一冊洋並大三五〇頁 正價廿五錢郵稅八錢

著者	書名	版	體裁	定價
坪谷善四郎君著	●日本女禮式大全 合本	（十一版）	並七十五錢郵税六錢	函入一圓 小包四百匁
華族女學校學監 下田歌子女史著	●家事要訣	（四版）	全一冊和並大二八二頁	正價卅五錢郵税八錢
華族女學校學監 下田歌子女史著	●女子手藝要訣	（三版）	全一冊和並大二六〇頁	正價卅五錢郵税八錢
竹貫直次君著	●造家と築庭	（三版）	全一冊洋並大二五〇頁	正價廿五錢郵税六錢
巖谷小波君著	●魔法博士	（五版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢
巖谷小波君著	●小人國	（四版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢
巖谷小波君著	●狐の裁判 下	（三版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢
巖谷小波君著	●奇體の洋燈	（再版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢
華族女學校學監 下田歌子女史著	●家政學 下	（九版）	全一冊和並大四二九頁	正價三十錢郵税六錢
博文館編輯局編纂	●明治節用大全	（八版）	全一冊總皮上大一二三二	正價一圓六十錢小包六百匁
博文館編輯局編纂	●茶の湯と生花	（十八版）	全一冊洋並大二五七頁	正價廿五錢郵税六錢
佐々木孝君著	●西洋料理法	（十版）	全一冊洋並大二五四頁	正價廿五錢郵税六錢
巖谷小波君著	●桃太郎	（十九版）	全一冊菊判大六五頁	正價五錢郵税二錢
巖谷小波君著	●世界の始	（七版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢
巖谷小波君著	●法螺先生	（五版）	全一冊菊判大七〇頁	正價七錢郵税二錢

（送付の四）

巖谷小波君著 ●猿智惠小僧（三版） 全一冊菊判大七〇頁 正價七錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●無人島大王（五版） 全一冊菊判大七〇頁 正價七錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●果樹草花盆栽庭造園藝全書（再版） 全一冊洋並大四五二頁 正價六十錢郵稅八錢

華族女學校學監 下田歌子女史著 ●女子書翰文（十四版） 全一冊和並大二二八頁 正價卅五錢郵稅八錢

華族女學校學監 下田歌子女史著 ●母親の心得（五版） 全一冊和並大二三六頁 正價卅五錢郵稅六錢

石井研堂君著 ●汐干狩（再版） 全一冊菊判洋並六八〇頁 正價十錢郵稅四錢

巖谷小波君著 ●二人王子（四版） 全一冊菊判洋並六七〇頁 正價七錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●小人島（五版） 全一冊菊判洋並六七〇頁 正價七錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●王城乘取（三版） 全一冊菊判洋並大六七〇 正價七錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●松山鏡（十七版） 全一冊菊判洋並大六五頁 正價五錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●白虎隊（十二版） 全一冊菊判洋並五六八〇 正價六錢郵稅二錢

大和田建樹君著 ●七本鎗（七版） 全一冊菊判洋並大一〇〇 正價八錢郵稅四錢

大和田建樹君著 ●平壤（五版） 全一冊菊判洋並大一〇〇 正價八錢郵稅四錢

巖谷小波君著 ●舌切雀（廿版） 全一冊菊判洋並大六五頁 正價五錢郵稅二錢

巖谷小波君著 ●かちかち山（十六版） 全一冊菊判洋並大六五頁 正價五錢郵稅二錢

著者	書名	版	體裁	定價
巖谷小波君著	●瘤取	（十四版）	全一冊菊判洋並大六五頁	正價五錢郵稅二錢
巖谷小波君著	●羅生門	（十四版）	全一冊菊判洋並大六五頁	正價五錢郵稅二錢
巖谷小波君著	●金太郎	（十三版）	全一冊菊判洋並大六五頁	正價五錢郵稅二錢
巖谷小波君著	●雲雀山	（十五版）	全一冊菊判洋並大六五頁	正價五錢郵稅二錢
鈴木光次郎君著	●明治豪傑譚	（十四版）	全一冊紙皮上小三八五頁	正價三十錢郵稅六錢
坂崎柴瀾君著	●坂本龍馬	（再版）	全一冊洋並大一九六頁	正價十三錢郵稅四錢
巖谷小波君校	●玄武門	（十版）	全一冊菊判洋並大八〇頁	正價六錢郵稅二錢
國府犀東君著	●鎭西八郎	（十版）	全一冊菊判洋大一三一頁	正價十五錢郵稅四錢
櫻井鷗村君著	●航海少年	（再版）	全一冊洋五一四四頁	正價三十錢郵稅六錢
鳥谷部春汀君著	●續明治人物評論	（再版）	全一冊紙皮上小四四八頁	正價三十錢郵稅六錢
中邨秋香君著	●白河樂翁公	（四版）	全一冊並大六一五〇頁	正價十三錢郵稅四錢
岸上質軒君著	●春日局	（三版）	全一冊洋並大一五〇頁	正價十三錢郵稅四錢
春山育次郎君著	●桐野利秋	（再版）	全一冊洋並大一八四頁	正價十三錢郵稅四錢
法學士桐生悠々君著	●錢屋五兵衛	（三版）	全一冊洋並大一二八頁	正價十三錢郵稅四錢
川崎紫山君著	●西郷隆盛	（五版）	全一冊洋並大一四八頁	正價十三錢郵稅四錢

著者	書名	版	體裁	定價
大和田建樹君著	皆我兄第	（九版）	全一冊菊判洋並大一〇〇頁	正價八錢郵稅四錢
高山文學博士著	平相國	（再版）	全一冊菊判洋並大一四〇頁	正價十五錢郵稅四錢
大和田建樹君著	藤田東湖	（再版）	全一冊菊判洋並大一一四頁	正價十三錢郵稅四錢
慶應義塾教授 菅緑蔭君著	カーネギー	（三版）	全一冊洋並中一五四頁	正價廿五錢郵稅四錢
石原笠堂君著	貝原益軒	（再版）	全一冊菊判洋並中一四六頁	正價十三錢郵稅四錢
饗庭篁村君著	曲亭馬琴	（再版）	全一冊菊判洋並中一一四頁	正價十三錢郵稅四錢
藤本藤蔭君著	烈女お菊	（再版）	全一冊菊判洋並大一二四頁	正價十三錢郵稅四錢
大橋乙羽君編	紀行文集	（再版）	全一冊脊皮上中一〇〇六頁	正價六十錢郵稅十六錢
上村左川君著	新撰日本地理問答	（再版）	全一冊紙皮上小二三八頁	正價二十錢郵稅四錢
文學士大町桂月君著	一簑一笠	（再版）	全一冊紙皮上小三七六頁	正價三十錢郵稅六錢
野崎左文君著	日本名勝地誌 二	（十三版）	全一冊洋並中六二五頁	正價三十錢郵稅八錢
志賀重昂君著	地理學講義	（十三版）	全一冊洋並中一六二頁	正價廿五錢郵稅四錢
志賀重昂君著	日本風景論	（十四版）	全一冊洋並大二五八頁	正價五十錢郵稅十錢
足立栗園君著	通俗日本歷史	（七版）	全一冊洋並大三三四頁	正價廿五錢郵稅八錢
萩野文學博士著	中等教育日本歷史要綱	（六版）	全一冊洋本上中四二四頁	正價五十錢郵稅六錢

(笠原製本)

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第拾號
(明治參拾五年八月五日發行)
(明治參拾參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)

(定價金貳拾錢)

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑬
明治35年7月（第2巻第9号）、8月（第2巻第10号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2959-6　C3321